

下  
郷  
古  
墳  
群

# 下郷古墳群

(都)3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合  
交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(都)3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合  
交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一四

群馬県中之条土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2014

群馬県中之条土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 下郷古墳群

(都)3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合  
交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県中之条土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



掘立柱建物と柱穴列全景（上が北東）



中空円面碗（2区7号住居出土）

## 序

原町駅南口線は吾妻川南岸にある東吾妻町川戸地区と、北岸にあるJR吾妻線群馬原町駅南口とをつなぐために計画された道路で、事業地内に下郷古墳群と呼ばれる遺跡が存在することから、工事に先だって発掘調査が行われることになりました。

発掘調査は当事業団が担当し、平成24年度に実施いたしました。調査した範囲内からは、古墳は見つかりませんでしたが、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物を多数調査することができました。複雑に重複する竪穴住居の中には、礎石をもつものなど、構造的に珍しいものが含まれています。掘立柱建物は、大型のものや塀とそれに取り付く門と思われる建物もあることから、吾妻郡家か豪族の居宅などに関連する施設の可能性について、特に注目されます。本遺跡の周辺は、東約1kmのところにて7世紀後半に創建された金井廃寺があることから分かるように、古代吾妻郡の中心地のひとつでした。そのような歴史的環境に位置する本遺跡は、古代の吾妻郡を研究する上できわめて重要な意味をもつ遺跡であると思われます。

最後になりましたが、群馬県中之条土木事務所、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成26年8月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 吉野 勉





## 例 言

- 1 本書は、(都) 3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査による、下郷古墳群の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 吾妻郡東吾妻町大字/川戸160、169-2、185-1・2・3、194、195-1、196-1・2・3・4・6・8・9・10、197-2
- 3 事業主体 群馬県中之条土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 履行期間 平成24年10月1日～平成25年2月28日  
調査期間 平成24年11月1日～平成24年12月31日
- 6 調査面積 2,180㎡
- 7 発掘調査体制は次の通りである。

発掘調査担当	調査統括	友廣哲也	主任調査研究員	山中 豊
遺跡掘削請負工事	株式会社	測研		
委託 地上測量	株式会社	測研		
	空中写真撮影	株式会社	測研	
- 8 整理事業の期間と体制は次の通りである。

履行期間	平成25年7月1日～平成26年3月31日、平成26年6月1日～平成26年8月31日			
整理期間	平成25年7月1日～平成26年3月31日			
整理担当	席調査研究員	高井佳弘		
遺物写真撮影	補佐(総括)	佐藤元彦	資料統括	岩崎泰一
保存処理	補佐(総括)	関 邦一		
- 9 本書作成の担当者は次の通りである。

編集	席調査研究員	高井佳弘		
執筆	遺物観察表(古墳時代・古代の土器)	資料統括	徳江秀夫	
	遺物観察表(石器・石製品)	資料統括	岩崎泰一	
	遺物観察表(縄文土器)	席専門員	谷藤保彦	
	遺物観察表(弥生土器)	事業局長	大木紳一郎	席専門員 谷藤保彦
	遺物観察表(鉄器・鉄製品)	補佐(統括)	関 邦一	
	前記以外	席調査研究員	高井佳弘	
- 10 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 11 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会、石井榮一(世田谷区教育委員会)
------------------------------------

## 凡 例

- 本文中に使用した座標・方位は、すべて世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、調査区中央付近の $X=63,400$ 、 $Y=-89,990$ で東偏 $0^{\circ}35'56.49''$ である。
- 遺構平面図等高線や断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

遺構 竪穴住居 1:60 竈 1:30

掘立柱建物・ピット・土坑・溝など 1:40 畚 1:100

遺物 石製品(大型の砥石など) 1:6

須恵器(大型の甕)・石製品(台石など) 1:4

土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器・石器(磨石・叢石など)・石製品(砥石など) 1:3

石製品(小型の砥石)・鉄製品 1:2

石鏃・勾玉 1:1

- 本書の図版に使用したトーンは、次のことを示している。

遺構図  焼土  炭化物  攪乱

遺物図  赤色塗彩  灰釉

- 遺構の主軸方位・走向は、竈のある竪穴住居の場合は竈のある方向を主軸方位とし、北から東西 $180^{\circ}$ 以内を、竈のない住居とそれ以外の遺構の場合は、原則として長軸方向で北から東西 $90^{\circ}$ 以内を主軸方位とした。原則から外れる場合はその都度注記した。表記は北を基準とし、東に傾いた場合は $N-0^{\circ}-E$ 、西に傾いた場合は $N-0^{\circ}-W$ というように表記した。
- 竪穴住居の規模は、主軸方向の長さ×もう一方の長さで表し、なるべく中央付近で計測した。床面積は周溝を含めた面積であり、その計測にはプランメーターを用い、3回計測してその平均値を採用した。
- 竪穴住居掘方平面図に記入してある $-\bigcirc-$ という数字は、床面からの深さを表している。単位はcmである。
- 土層注記中の色調の標記は『新版標準土色帖2005年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。
- 遺物観察表の凡例は遺物観察表の前(126ページ)に掲載した。
- 本書で使用した火山降下物の略号は以下の通りである。

As-B 浅間山B軽石(天仁元年=1108年) As-Kk 浅間山船川テフラ(大治3年=1128年)

Hr-FA 榛名山二ツ岳渋川テフラ(6世紀初頭)

- 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000「中之条」(平成21年3月1日発行)、「群馬原町」(平成9年9月1日発行)、

「上野中山」(平成21年12月1日発行)、「金井」(平成21年3月1日発行)

国土地理院 地形図 1:50,000「中之条」(平成10年8月1日発行)

国土地理院 地勢図 1:200,000「長野」(平成24年5月1日発行)

東吾妻町 1:2,500吾妻都市計画図(平成24年2月測図)

# 目次

カラー口絵

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真目次

第1章 調査に至る経緯・方法・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
1 調査の方法	3
2 調査の経過	3
第3節 整理作業の概要	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 基本土層	12
第3章 調査の成果	14
第1節 成果の概要	14
第2節 竪穴住居	15
第3節 掘立柱建物・柱穴列	87
第4節 ビット	100
第5節 土坑・陥し穴	104
第6節 溝	108
第7節 畚	109
第8節 その他の遺構	112
第9節 縄文時代・弥生時代の遺物	115
第10節 遺構外出土の遺物	119
第11節 旧石器時代の調査	120
第4章 総括	121
遺物観察表凡例	126
遺物観察表	127

写真図版

抄録

付図

# 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第58図	2区18号住居出土遺物(2)	67
第2図	調査区位置図	2	第59図	2区19号住居平面図	68
第3図	グリッド設定図	4	第60図	2区20号住居平面図、電平断面図、出土遺物	69
第4図	周辺地形分割図	7	第61図	2区21号住居平面図	70
第5図	周辺の道跡	8	第62図	2区21号住居掘方平面図、電平断面図、出土遺物(1)	71
第6図	基本土層	13	第63図	2区21号住居出土遺物(2)	72
第7図	1区1号住居平面図、出土遺物	16	第64図	2区22号住居平面図	73
第8図	1区2号住居平面図、出土遺物	17	第65図	2区22号住居出土遺物	74
第9図	1区3号住居平面図	18	第66図	2区23号住居平面図	75
第10図	1区3号住居電平断面図、出土遺物	19	第67図	2区23号住居断面図、掘方平面図	76
第11図	1区4号住居平面図、出土遺物	20	第68図	2区23号住居電平断面図、柱穴断面図、出土遺物(1)	77
第12図	1区5号住居平面図	21	第69図	2区23号住居出土遺物(2)	78
第13図	1区5号住居電平断面図、出土遺物	22	第70図	2区24号住居平面図、出土遺物	79
第14図	1区6号住居平面図	22	第71図	2区24号住居電平断面図	80
第15図	1区7号住居平面図	23	第72図	2区26号住居平面図、出土遺物(1)	81
第16図	1区7号住居掘方平面図	24	第73図	2区26号住居出土遺物(2)	82
第17図	1区8号住居平面図、出土遺物	25	第74図	2区30号住居平面図	82
第18図	1区9号住居平面図、出土遺物	26	第75図	2区32号住居平面図	83
第19図	1区10号住居平面図、出土遺物(1)	27	第76図	2区32号住居掘方平面図、貯蔵穴付近遺物 出土状況図、伊平断面図	84
第20図	1区10号住居出土遺物(2)	28	第77図	2区32号住居出土遺物(1)	85
第21図	2区1号住居平面図	29	第78図	2区32号住居出土遺物(2)	86
第22図	2区1号住居電平断面図、出土遺物(1)	30	第79図	2区1号竪立柱建物平面図	88
第23図	2区1号住居出土遺物(2)	31	第80図	2区1号竪立柱建物断面図(1)	89
第24図	2区2号住居平面図、電平断面図	32	第81図	2区1号竪立柱建物断面図(2)、出土遺物	90
第25図	2区2号住居出土遺物	33	第82図	2区2号竪立柱建物平面図	91
第26図	2区3号住居平面図	34	第83図	2区2号竪立柱建物断面図、出土遺物	92
第27図	2区4号住居平面図	35	第84図	2区3号竪立柱建物平面図	94
第28図	2区4号住居掘方平面図、電平断面図	36	第85図	2区3号竪立柱建物断面図	95
第29図	2区4号住居出土遺物	37	第86図	2区4号竪立柱建物平面図	96
第30図	2区6号住居平面図、電平断面図、出土遺物	38	第87図	2区4号竪立柱建物断面図	97
第31図	2区7号住居平面図	39	第88図	2区1号柱穴列出土遺物	98
第32図	2区7号住居掘方平面図、電平断面図	40	第89図	2区1号柱穴列断面図	99
第33図	2区7号住居出土遺物(1)	41	第90図	ビット平面図(1)、出土遺物	101
第34図	2区7号住居出土遺物(2)	42	第91図	ビット平面図(2)	102
第35図	2区7号住居出土遺物(3)	43	第92図	ビット平面図(3)	103
第36図	2区8号住居平面図、出土遺物	44	第93図	土坑平面図(1)	106
第37図	2区9号住居平面図、出土遺物	45	第94図	土坑平面図(2)、出土遺物	107
第38図	2区10号住居平面図	46	第95図	土坑平面図(3)、隔し穴平面図	108
第39図	2区10号住居掘方平面図、電平断面図	47	第96図	溝平面図、出土遺物	109
第40図	2区11号住居平面図	48	第97図	2区1号島北半部平面図	110
第41図	2区11号住居掘方平面図、出土遺物	49	第98図	2区1号島南半部平面図	111
第42図	2区12号住居平面図、出土遺物	50	第99図	2区1号島出土遺物	112
第43図	2区13号住居平面図、出土遺物	51	第100図	1区1号石列平面図	112
第44図	2区14号住居平面図	52	第101図	3区平面図	113
第45図	2区14号住居掘方平面図、電平断面図、出土遺物(1)	53	第102図	3区1号焼土平面図	114
第46図	2区14号住居出土遺物(2)	54	第103図	3区1号土器跡まり出土遺物	114
第47図	2区15号住居平面図	55	第104図	出土した縄文土器(1)	115
第48図	2区15号住居電平断面図、出土遺物(1)	56	第105図	出土した縄文土器(2)	116
第49図	2区15号住居出土遺物(2)	57	第106図	出土した縄文土器(3)	117
第50図	2区16号住居平面図	58	第107図	出土した弥生土器	117
第51図	2区16号住居掘方平面図、電平断面図	59	第108図	出土した縄文時代・弥生時代の石器・石製品	118
第52図	2区16号住居出土遺物(1)	60	第109図	遺構外出土の遺物(古墳時代以降)	119
第53図	2区16号住居出土遺物(2)	61	第110図	旧石器時代調査坑配置図	120
第54図	2区16号住居出土遺物(3)	62	第111図	竪立柱建物・柱穴列配置図	122
第55図	2区16号住居出土遺物(4)	63	第112図	金井庵寺の位置と周辺地形	124
第56図	2区17号住居平面図	65	第113図	掘内出土の中空間内視	125
第57図	2区18号住居平面図、電平断面図、出土遺物(1)	66			

# 表 目 次

第1表	遺構名称の改訂	5	第13表	出土遺物観察表(3)	129
第2表	周辺の道跡一覧表(1)	9	第14表	出土遺物観察表(4)	130
第3表	周辺の道跡一覧表(2)	10	第15表	出土遺物観察表(5)	131
第4表	2区1号掘立柱建物柱穴一覧表	88	第16表	出土遺物観察表(6)	132
第5表	2区2号掘立柱建物柱穴一覧表	92	第17表	出土遺物観察表(7)	133
第6表	2区3号掘立柱建物柱穴一覧表	93	第18表	出土遺物観察表(8)	134
第7表	2区4号掘立柱建物柱穴一覧表	98	第19表	出土遺物観察表(9)	135
第8表	2区1号柱穴列柱穴一覧表	98	第20表	出土遺物観察表(10)	136
第9表	ピット一覧表	100	第21表	出土遺物観察表(11)	137
第10表	土坑・陥し穴一覧表	105	第22表	出土遺物観察表(12)	138
第11表	出土遺物観察表(1)	127	第23表	出土遺物観察表(13)	139
第12表	出土遺物観察表(2)	128	第24表	出土遺物観察表(14)	140

# 写真目次

PL. 1	1	調査区と北側の地形(南東から)	6	2区8号住居全景(北西から)		
	2	1・2区全景(上空から・上が北東)	7	2区9号住居全景(北西から)		
PL. 2	1	1・2区全景(南東から)	PL. 9	1	2区10号住居全景(北西から)	
	2	1区1号住居全景(南東から)		2	2区10号住居掘方全景(北西から)	
	3	1区1号住居掘方全景(南東から)		3	2区10号住居掘方全景(北西から)	
PL. 3	1	1区1号住居全景(北東から)		4	2区11号住居全景(北西から)	
	2	1区2号住居全景(南東から)		5	2区11号住居掘方全景(南西から)	
	3	1区2号住居遺物№3出土状態(南東から)		6	2区12号住居全景(北西から)	
	4	1区3号住居全景(北西から)		7	2区12号住居掘方全景(北西から)	
	5	1区3号住居掘方全景(北西から)		8	2区13号住居掘方全景(南西から)	
	6	1区3号住居遺物全景(北西から)	PL. 10	1	2区14号住居掘方全景(北西から)	
	7	1区4号住居全景(北西から)		2	2区14号住居掘方全景(北西から)	
	8	1区4号住居掘方全景(北西から)		3	2区15号住居全景(西から)	
PL. 4	1	1区5号住居全景(北西から)		4	2区15号住居掘方全景(西から)	
	2	1区5号住居遺物№4出土状態(北から)		5	2区15号住居遺物全景(西から)	
	3	1区6号住居全景(西から)		6	2区15号住居掘方全景(西から)	
	4	1区6号住居掘方全景(西から)		7	2区16号住居遺物出土状態(西から)	
	5	1区7号住居全景(北西から)		8	2区16号住居遺物全景(西から)	
	6	1区7号住居掘方全景(北西から)	PL. 11	1	2区16号住居全景(西から)	
	7	1区8号住居全景(西から)		2	2区16号住居掘方全景(西から)	
	8	1区8号住居掘方全景(西から)		3	2区16号住居遺物№2出土状態(北から)	
PL. 5	1	1区9号住居全景(西から)		4	2区16号住居遺物№14出土状態(西から)	
	2	1区9号住居掘方全景(西から)		5	2区16号住居礎石1(北西から)	
	3	1区9号住居礎土(東から)	PL. 12	1	2区16号住居礎石2(東から)	
	4	1区10号住居全景(西から)		2	2区16号住居礎石3(南東から)	
	5	1区10号住居掘方全景(西から)		3	2区16号住居礎石4(東から)	
	6	1区10号住居遺物№3出土状態(南から)		4	2区16号住居礎石5(南東から)	
	7	2区1号住居全景(北西から)		5	2区17号住居全景(北西から)	
	8	2区1号住居遺物出土状態(東から)		6	2区18号住居全景(北西から)	
PL. 6	1	2区2号住居掘方全景(北西から)		7	2区18号住居遺物全景(北西から)	
	2	2区2号住居竈輪出土状態(南東から)		8	2区20号住居全景(北西から)	
	3	2区2号住居遺物全景(南西から)		PL. 13	1	2区20号住居遺物全景(北西から)
	4	2区2号住居遺物№2・3出土状態(南東から)		2	2区21号住居掘方全景(西から)	
	5	2区2号住居掘方全景(北西から)		3	2区21号住居遺物全景(西から)	
	6	2区3号住居全景(東から)		4	2区21号住居遺物全景(西から)	
	7	2区3号住居掘方全景(南東から)		5	2区21号住居遺物掘方全景(西から)	
PL. 7	1	2区4号住居全景(西から)	PL. 14	1	2区22号住居全景(西から)	
	2	2区4号住居掘方全景(北西から)		2	2区23号住居掘方全景(北西から)	
	3	2区4号住居遺物全景(西から)		3	2区23号住居遺物全景(南東から)	
	4	2区4号住居礎石3(南から)		4	2区23号住居遺物掘方全景(南東から)	
	5	2区4号住居礎石4(南から)		5	2区24号住居遺物掘方全景(南東から)	
PL. 8	1	2区6号住居掘方全景(北西から)	PL. 15	1	2区24号住居遺物掘方全景(西から)	
	2	2区6号住居遺物掘方全景(西から)		2	2区24号住居遺物掘方全景(西から)	
	3	2区7号住居遺物掘方全景(北西から)		3	2区24号住居遺物掘方全景(西から)	
	4	2区7号住居掘方全景(北西から)		4	2区24号住居遺物掘方全景(西から)	
	5	2区7号住居遺物掘方全景(北西から)		5	2区26号住居遺物掘方全景(北西から)	

	6	2区30号住居全景(北西から)	2	1区1号土坑全景(北東から)	
	7	2区32号住居全景(北西から)	3	1区3号土坑全景(南から)	
	8	2区32号住居跡方全景(北西から)	4	2区1号土坑全景(南から)	
PL.16	1	2区32号住居貯蔵穴遺物出土状態(北東から)	5	2区2号土坑全景(南から)	
	2	2区32号住居貯蔵穴遺物出土状態(南西から)	6	2区3号土坑全景(南から)	
	3	2区32号住居貯蔵穴遺物№11・15出土状態(東から)	7	2区5号土坑全景(南東から)	
	4	2区32号住居貯蔵穴全景(北東から)	8	2区6号土坑全景(南東から)	
	5	2区32号住居跡方全景(北西から)	PL.29	1	2区7号土坑全景(北から)
PL.17	1	2区1号掘立柱建物全景(上空から・上が東)	2	2区8号土坑全景(南東から)	
	2	2区1号掘立柱建物全景(西から)	3	2区23号土坑全景(北東から)	
PL.18	1	2区1号掘立柱建物全景(東から)	4	2区1号掘立柱全景(北東から)	
	2	2区1号掘立柱建物P1～3全景(西から)	5	1区1号溝全景(西から)	
	3	2区1号掘立柱建物P5～7全景(東から)	6	2区1号竪穴全景(南から)	
PL.19	1	2区1号掘立柱建物P1全景(北から)	7	2区1号竪穴全景(北から)	
	2	2区1号掘立柱建物P2全景(北から)	8	1区1号石列全景(南西から)	
	3	2区1号掘立柱建物P3全景(北から)	PL.30	1	基本土層(3区北東部・南から)
	4	2区1号掘立柱建物P4全景(西から)	2	旧石器2号調査坑全景(東から)	
	5	2区1号掘立柱建物P5全景(北から)	3	旧石器1号調査坑北の深掘り断面(北から)	
	6	2区1号掘立柱建物P6全景(北から)	PL.31	1	1区1・2・5・9・10・2区1・2号住居出土遺物、2区4号住居出土遺物(1)
	7	2区1号掘立柱建物P7全景(北から)	PL.32	2	2区4号住居出土遺物(2)、2区7号住居出土遺物(1)
	8	2区1号掘立柱建物P8全景(西から)	PL.33	2	2区7号住居出土遺物(2)、2区9・13～15号住居出土遺物、2区6号住居出土遺物(1)
PL.20	1	2区2号掘立柱建物全景(上空から・上が東)	PL.34	2	2区16号住居出土遺物(2)、2区18・20号住居出土遺物
	2	2区2号掘立柱建物全景(南から)	PL.35	2	2区21～24・26号住居出土遺物
PL.21	1	2区2号掘立柱建物全景(西から)	PL.36	2	2区32号住居出土遺物(1)
	2	2区2号掘立柱建物P1全景(南から)	PL.37	2	2区32号住居出土遺物(2)、縄文土器(1)
	3	2区2号掘立柱建物P2全景(南西から)	PL.38	縄文土器(2)、弥生土器、縄文時代・弥生時代①石器・石製品(1)	
	4	2区2号掘立柱建物P3全景(東から)	PL.39	縄文時代・弥生時代①石器・石製品(2)、遺構外出土①遺物	
	5	2区2号掘立柱建物P4全景(西から)			
PL.22	1	2区3・4号掘立柱建物、1号柱穴列全景(上空から・上が北)			
	2	2区3号掘立柱建物全景(上空から・上が東)			
PL.23	1	2区3号掘立柱建物全景(東から)			
	2	2区3号掘立柱建物全景(南から)			
PL.24	1	2区3号掘立柱建物P1全景(東から)			
	2	2区3号掘立柱建物P2全景(東から)			
	3	2区3号掘立柱建物P3全景(東から)			
	4	2区3号掘立柱建物P4全景(北東から)			
	5	2区3号掘立柱建物P5全景(北東から)			
	6	2区3号掘立柱建物P6全景(東から)			
	7	2区3号掘立柱建物P7全景(東から)			
	8	2区3号掘立柱建物P8全景(東から)			
PL.25	1	2区3号掘立柱建物P9全景(東から)			
	2	2区3号掘立柱建物P10全景(北から)			
	3	2区4号掘立柱建物全景(上空から・上が北)			
	4	2区4号掘立柱建物P1、13号土坑全景(南から)			
	5	2区4号掘立柱建物P2、14号土坑全景(東から)			
PL.26	1	2区4号掘立柱建物全景(西から)			
	2	2区4号掘立柱建物P3全景(東から)			
	3	2区4号掘立柱建物P4、22号土坑全景(南から)			
	4	2区1号柱穴P1全景(南から)			
	5	2区1号柱穴P2全景(南から)			
PL.27	1	2区1号柱穴P3全景(南から)			
	2	2区1号柱穴P5全景(西から)			
	3	1区1号ピット全景(南東から)			
	4	1区2号ピット全景(南東から)			
	5	1区3号ピット全景(南から)			
	6	1区4号ピット全景(南東から)			
	7	1区6号ピット全景(南から)			
	8	1区10号ピット全景(西から)			
	9	1区11号ピット全景(南東から)			
	10	1区14号ピット全景(南東から)			
	11	2区1号ピット全景(南から)			
	12	2区2号ピット全景(南から)			
	13	2区6号ピット全景(東から)			
	14	2区9号ピット全景(南から)			
	15	2区26号ピット全景(南から)			
PL.28	1	2区12・13号ピット全景(南東から)			

## 第1章 調査に至る経緯・方法・経過

### 第1節 調査に至る経緯

原町駅南口線は吾妻川を挟んで対岸にある東吾妻町川戸地区とJR吾妻線群馬原町駅とを結ぶために計画された道路である。川戸地区には工業団地があり、この道路の建設によって住民の利便性向上と地域経済活動の活性化が図れるものと期待されている。

その建設工事に先立ち、吾妻川右岸の川戸地区における建設予定地内の埋蔵文化財について、平成23年度に中之条土木事務所から県教育委員会文化財保護課に照会があった。文化財保護課は、予定地は周知の遺跡である「下郷古墳群」を通過することから遺構が存在する可能性

あるものと判断し、平成23年12月26・27日に試掘調査を実施した。試掘調査では対象地全域に8本のトレンチを設置し、バックホーを用いて掘削して、遺構の有無、遺物の出土の有無などを調査した。その結果、北側の5本のトレンチで古代の住居跡、土坑等の遺構を確認し、一部ではその上面に平安時代の火山灰に埋もれた畚跡が存在することも確認した。このため、遺構の確認されなかった対象地の南側を除いて、本調査が必要と判断された。調査の必要な面積は合計2,180㎡であった。この結果を受けて県教育委員会文化財保護課が調整を行い、発掘調査については当事業団が受託して実施することとなり、現地における調査は翌平成24年11月から12月までの2ヶ月間に実施された。



第1図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「長野」(平成24年5月1日発行)使用)





第2図 調査区位置図(東京豊町役場発行2,500分の1 吾妻都市計画図87-3・4(平成24年2月測図)使用)

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

今回の発掘調査の調査範囲は第2図のような位置にある。現道によって3ヶ所に分断されているため、3区の調査区にわけ、北から1、2、3区と名付けた。しかし、2区の北・中央を通過する道路は調査時に掘削してきたため、結果的には1区と2区とは一連の調査区になることになった。

調査対象地のうち、2区についてはAs-BないしAs-Kkと推定される火山灰層が良好に残り、試掘調査でその下層に島の存在が確認されていたことから、その部分では2面調査となった。

調査に用いたグリッドは5m×5mを基本とし、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標区系)を用いて第3図のように設定した(第3図では10m毎のグリッドのみを表記した)。各グリッドを呼称する名称は、本遺跡特有のものを設定することはせず、各グリッド東南隅の座標の下3桁を用いて表すことにした(例: X=63400、Y=-8990の場合、400-990と表す)。地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた場合もある(例: 5mグリッドにこだわらず、1m単位で402-991と表す場合がある。特に竈やピット、土坑等の小さい遺構の平面図にそれが多い)。

調査方法に特殊なものではなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いた。表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は竪穴住居のほか掘立柱建物、ピット、土坑、溝、島などであり、それぞれに適した方法を用いた。

遺構名は調査区ごとの続き番号で表した。そのため、調査区が異なると同じ遺構種の中に同じ番号の遺構が存在することになる。本書では誤解の恐れがあるので、遺構名の前に区名を付けて、「〇区〇号住居」というように呼び分けるようにしている。ただし、誤解の恐れがなく、逆に煩雑になる場合は、区名を除いて記述してある場合もある。

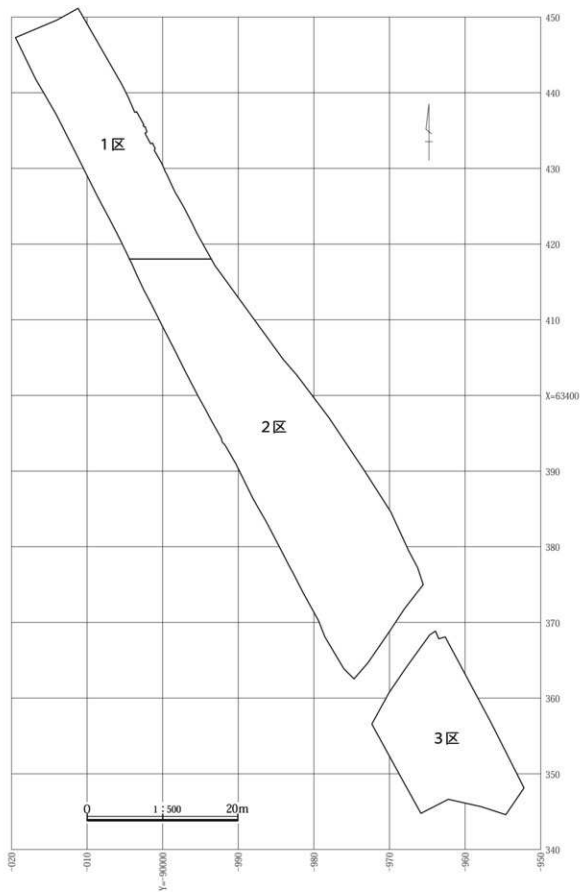
遺構の測量は測量業者に委託し、平面図・断面図ともデータをデジタル化してその後の整理作業の便を図っている。縮尺は基本的には1/20であるが、竈や遺物出土図などは1/10、島や3区の全体図などは1/40と、遺構の性格によって縮尺を変更した。写真撮影はデジタル一眼カメラを主とし、ごく一部ブローニー版の白黒フィルムも使用して撮影した。遺構の調査がある程度終了した時点では、業者に委託してラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

1区、2区では状態は良好ではないと思われるものの、ローム層の堆積が認められたため、遺構の調査が終了した部分について旧石器時代の調査を行った。調査は2×4mか2×2mの調査坑を設けて行ったが、全域で遺構・遺物とも見つからなかった。

### 2 調査の経過

現地における発掘調査は11月1日より開始した。予想を上回る数量の遺構が存在したため、時間的にはかなり急いだ調査となった。

重機による表土掘削作業は11月1日より1・2区で開始した。まず2区北側では1面目の島面の掘削から行い、それが残っていない場所については2面目まで掘削した。遺構の精査作業は2日から開始したが、以後多くの遺構が重複して見つかったため、多数の遺構を同時並行して調査することとなった。1面目の島面の調査が終了したところでは同時に2面目の掘り下げを開始し、平面の精査に続いて各遺構の調査に入った。3区は遅れて表土掘削作業を行い、14日から平面精査を行った。その結果1面の島は存在しないことが確認されたため、2面相当層まで掘り下げて遺構確認を続けた。この区は遺構が少なく、土器溜まりや自然流路が見つかったのみであり、それらの調査終了後埋め戻した。1・2区では遺構の調査を続行したが、9日には2区4号住居が礎石をもつ珍しい構造であることが確認された。また、その掘方調査では下層に掘立柱建物の柱穴が見つかり、その底面に礎板石があることが確認された。このため以後の調査では掘立柱建物が住居の下層に存在することを念頭に置いて調査することにした。結果として礎石をもつ竪穴住居はさらに1軒(2区16号住居)、掘立柱建物はさらに3棟が確認できた。竪穴住居をはじめとした遺構は複雑に重複



第3図 グリッド設定図

していたため調査は難航したが、12月11日からはそれらの遺構の調査が終了した部分から旧石器時代の確認調査を開始し、同時に土坑、ピットと残りの竪穴住居の調査を並行して行った。遺構の調査がほぼ終了した20日にはラジコンヘリによって調査区の全景を上空から撮影し、また、掘立柱建物などの主要遺構については個別に全景写真を撮影した。翌21日には旧石器時代調査坑の個別写真を撮影し、3・4号掘立柱建物の礎板石を取り上げるなどの補足調査を行い、現地における発掘調査を終了した。その後埋め戻し、撤収作業を行い、12月28日にはすべての作業を終了した。

### 第3節 整理作業の概要

整理作業は平成25年7月1日より平成26年3月31日まで実施し、報告書の刊行は平成26年度に行った。

遺構図面は点検・修正・編集を行い、掲載図面をデジタルデータとして作成した。遺物については接合・復元、写真撮影、実測、トレースののち、実測図をスキャニングしてデジタルデータとした。同時に遺物観察を行い、遺物観察表を作成した。写真は遺構・遺物ともデジタル写真から編集を行った。以上の作業と並行して本文の執筆、土層注記や各種一覧表などを作成し、それらを併せてレイアウトを作成したのちデジタル編集し、報告書原稿を作成した。

なお、いくつかの遺構については、整理作業の過程で特徴などを検討した結果、調査時の名称を改訂する必要が生じた。また、当初遺構として番号を付したのものの中にも、その後の調査・整理作業のなかで、遺構とは判断できないとして調査・報告の対象から除いたものがある。それらについては、その後の混乱を避けるために遺構番号を付け替えるなどの措置をとることは控え、欠番のままとした。このようにして生じた名称の改訂、欠番については第1表にまとめて掲げた通りである。

第1表 遺構名称の改訂

調査時の名称	改訂した名称
2区5号住居	欠番
2区25号住居	欠番
2区27号住居	欠番
2区28号住居	欠番
2区29号住居	欠番
2区31号住居	欠番
2区5号掘立柱建物	欠番
1区8号ピット	1区4号土坑
1区9号ピット	欠番
2区3号ピット	2区1号柱穴列P1
2区4号ピット	2区1号柱穴列P2
2区5号ピット	2区1号柱穴列P3
2区10号ピット	欠番
2区12号ピット	2区3号掘立柱建物P10
2区13号ピット	欠番
2区17号ピット	欠番
2区20号ピット	欠番
1区2号土坑	欠番
2区9号土坑	欠番
2区10号土坑	2区35号ピット
2区11号土坑	欠番
2区12号土坑	欠番
2区15号土坑	2区4号掘立柱建物P2
2区16号土坑	2区4号掘立柱建物P3
2区17号土坑	欠番
2区18号土坑	欠番
2区19号土坑	欠番
2区20号土坑	欠番
2区柱痕A	2区23号土坑
2区柱痕B	2区24号土坑
2区柱痕C	2区36号ピット
2区柱痕D	2区25号土坑

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本遺跡は吾妻郡東吾妻町大字川戸にある。東吾妻町はいわゆる平成の大合併により、平成18年3月27日吾妻町と東村が合併して誕生した町である。町は群馬県北西の山間部に位置し、東は渋川市、西は長野原町、南は高崎市、北は中之条町の四つの市町と境を接している。町内の地形は山間部特有の複雑なもので、南東に榛名山、南西に浅間隠山などの山々が聳え、北に吾妻川、南西にはそれに合流する温川が流れ、川沿いに河岸段丘の平地が広がっている。

遺跡のある川戸地区は町の北側中央部に位置し、榛名山北麓の末端、吾妻川の形成した狭い河岸段丘上にあり、すぐ北西側を吾妻川が流れている。川の対岸には東吾妻町の中心市街地がのる段丘があり、さらにその北西側は岩櫃山に続く山地が迫っている。

遺跡の北を流れる吾妻川は、長野県境の鳥居峠付近に源をもち、渋川市で利根川と合流する全長約76kmの河川である。東吾妻町付近では、長野原町から続く狭い山間部を流れ下り、遺跡のやや上流で温川と合流したあと、遺跡のある川戸、原町付近で中之条盆地に入る。中之条盆地は吾妻川流域では最大の平地で、吾妻川とここで合流する四万川とによって形成された河岸段丘が広がり、そこには中之条町の市街地が形成されて、多くの人々が住んでいる。

この付近の段丘は、『土地分類基本調査・中之条』（群馬県、2003）によれば、ローム層の被覆関係により以下のように分けられる。

上位段丘 下部～上部ロームが堆積

中位段丘 中部～上部ロームが堆積

下位段丘 上部ロームが堆積

最下位段丘 ロームが堆積していない。

本遺跡はこれらのうち下位段丘面上にあることになる。この段丘は中之条面とも呼ばれ、同書によれば「郷原より下流の吾妻川両岸に、非対称に発達している。中之条市街地付近や吾妻町小泉、岩井、植栗地域では、段

丘礫層上に、厚さ数mの前橋泥流(応桑泥流)堆積物が重なり、その上位を上部ローム層が覆っている」とのことである。このような層序は本遺跡の旧石器時代の調査によっても確認されている。遺跡周辺の段丘面は吾妻川に沿って細長く伸びているが、南の榛名山から流れ下る谷によって細かく分断されている。第2図に見るように、付近の段丘面は南から北に徐々に下がる地形であり、遺跡のすぐ北側で吾妻川へと落ち込んでいる。図の右下に見えているように南側250mにはもう榛名山北麓の末端が迫っており、この付近の段丘面はきわめて狭いことが分かる。

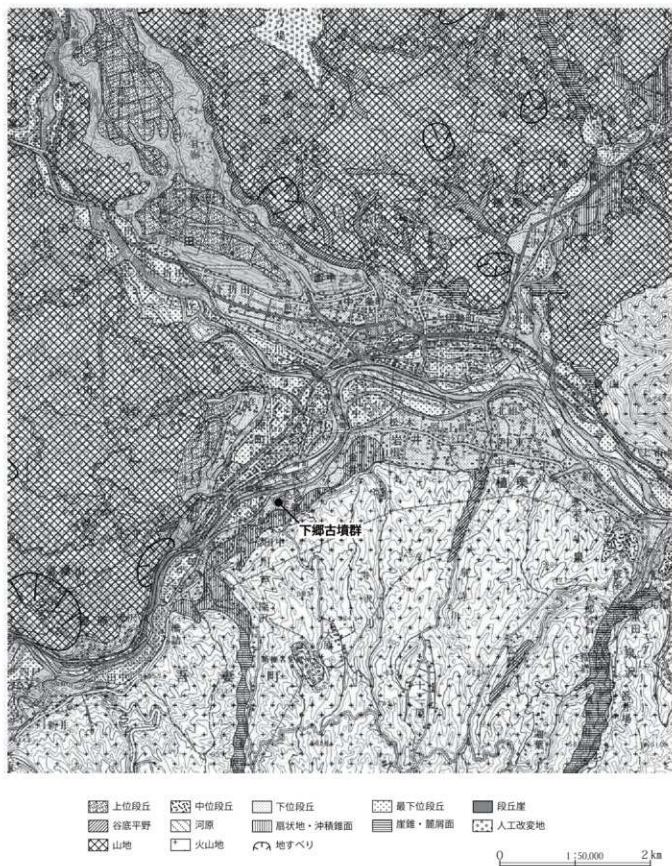
調査地の周囲は工場建設などで自然地形がかなり改変されてしまっているが、その他は民家、水田、畑として利用されている。今回の調査対象地も調査前は水田であったが、段々に造成されているため、場所によっては地表面はかなり深くまで削平を受けている可能性がある。なお、遺跡付近の地表面の標高は、第2図にみるように、2区と3区の境付近で376.3mである。

### 第2節 歴史的環境

中之条盆地とその周辺の、東吾妻町・中之条町の範囲は、埋蔵文化財の豊富な地域である。以下、本遺跡との関わりに留意しながら周辺地域の遺跡を時代別にまとめることにする。なお、本節で取り上げる遺跡の名称、第5図における遺跡の範囲は、群馬県教育委員会がインターネット上に公開している遺跡分布図に従った(マッピングぐま遺跡・文化財 <http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp?dtp=86&pl=3>)。また、以下の記述においては、煩雑になるのを避けるため、東吾妻町にある遺跡は町名を略して記している。

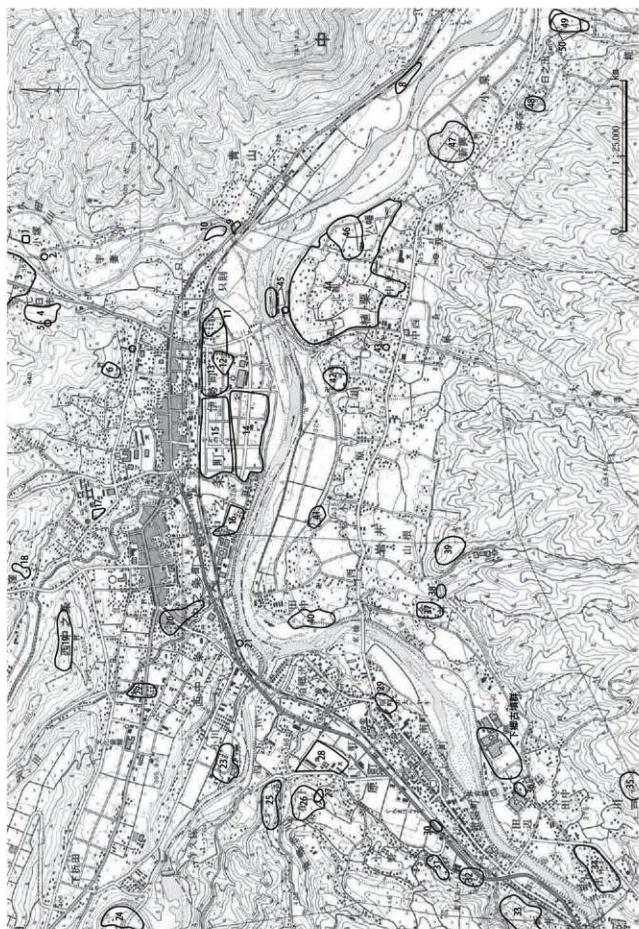
#### 縄文時代

前期の遺跡は吾妻川対岸の東上野遺跡(26、○内の番号は第5図・第2・3表に記す番号と一致する。以下同じ)があるほか、今回の調査区の北東約500mで「下郷古墳群」として調査された範囲(文献20)でも、同時期の竪穴住居が調査されている。中期の集落跡は小泉宮戸遺跡(47)の



第4図 周辺地形分類図

(地形分類は群馬県「土地分類基本調査・中之条」(2003)による。  
 国土地理院5万分の1地形図「中之条」(平成10年8月1日発行)使用)



第2図 周辺の遺跡(国土院版2万5千分の1地図回中)中之集:1(平成21年3月1日発行)、「上野中山」(平成21年12月1日発行)、「金井」(平成21年3月1日発行)使用。



第2表 周辺の道跡一覧表(1)

番号	道跡名	時代						道跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安		
	下郷古墳群		○	○	○	○		本書で報告。「綜覧」大田村62～69号墳が含まれる。文献20は本書の北東に位置し、縄文時代前期・弥生時代後期の壱六住居などを調査。	本書、20
1	小塚道跡				○			Br-Fa直下の水田跡を調査。	6
2	小塚古墳				○			中之条町指定史跡。径12mの円墳。乱石積みの横穴式石室をもつ。「綜覧」名久田村16号墳。	10、24、26
3	七日市道跡				○	○		古墳時代と平安時代の集落。壱六住居、掘立柱建物、Br-Fa直下の水田跡などを調査。	4、5
4	桃瀬道跡				○	○		古墳時代～平安時代の集落。壱六住居、欄外などを調査。	6、7
5	真田水守道跡					○		中之条町指定史跡。沼田藤真田氏の時代のものと伝える。	10
6	和利宮城址					○		15世紀中頃の塩谷氏の居館と伝える。遺構は見られない。	23、28
7	天代瓦室道跡					○		金井廃寺に瓦を供給。8世紀代の窟跡2基を調査。	2
8	市城亀石古墳群				○			「綜覧」中之条町4～9号墳。	24、26、29
9	西浦道跡					○		8世紀代の壱六住居、天明記流下の堀・道・石列を調査。	1
10	伊勢町只岡古墳群							「綜覧」中之条町13～15号墳。	24、26、29
11	古城(小城)址						○	16世紀後半か。堀、石塁、戸口、腰郭。	23、28
12	伊勢城址						○	館跡か。土居。	23、28
13	上原道跡				○	○		古墳時代～平安時代の集落。壱六住居、掘立柱建物などを調査。	3
14	川端道跡				○	○		弥生時代～平安時代の集落。壱六住居、弥生時代の畜積草、古墳時代の埴輪跡、古墳時代後期～古代の石垣遺構などを調査。	3
15	天神道跡				○	○		弥生時代～平安時代の集落。壱六住居、古墳時代水田などを調査。古代には多くの掘立柱建物があり、奈良三彩や銅印が出土することなどから豪族居宅・官舎が存在した可能性が指摘されている。	3
16	長岡道跡			○	○	○		弥生時代～平安時代の集落。壱六住居、掘立柱建物などを調査。	8、9
17	法蔵寺土師道跡				○			散布地。	22、29
18	法蔵寺道跡			○				散布地。	22、29
19	城家城址						○	中之条町指定史跡。16世紀。堀切、土居、腰郭、戸口などが良好な状態で残る。	10、23、28
20	中条城(吾妻城)址						○	16世紀。堀切、腰郭。文献23は東南部と西北部は別城と推定し、東南部は朝持氏の居城。北西部は岩瀬城の出城とする。	23、28
21	石ノ塔古墳				○			中之条町指定史跡。板石を用いた壱六状石塚。直刀、刀子、鉄鏝、鉄斧、人骨出土。5世紀末か。	10、21、22、26、29
22	永田原道跡				○			散布地。古墳(「綜覧」中之条町38号墳)も存在。	22、24、29
23	小川古墳群				○			中之条町指定史跡。「綜覧」中之条町25～28・31～34号墳。円墳4基現存。	10、24、26、29
24	山田勝負瀬古墳群				○			「綜覧」澤田村1～4号墳。箱塚古墳(町指定史跡。澤田村1号墳)を含む。	24、26、29
25	稲荷城跡						○	文献23は戦国中期以後と推定。堀、土居、戸口、壱六。	23、28
26	東上野道跡		○	○	○	○		散布地。	29
27	大宮道跡				○			散布地。	22、29
28	中学校裏道跡				○			散布地。	22、29
29	原町下之町古墳群					○		「綜覧」原町1～16号墳。	24、25、29
30	原町駅道跡					○		散布地。	29
31	諏訪前道跡		○	○	○	○		弥生時代後期～奈良・平安時代集落。壱六住居2軒や後期古墳、平安前期前古跡も調査。丸郭・円面礎出土。中近世の掘立柱建物3棟などもある。	14
32	善導寺前道跡				○	○		かつて弥生土器が出土。As-B下水田。中世の掘立柱建物調査。	13
33	岩瀬城址						○	東吾妻町指定史跡。岩瀬山東麓の中腹に築かれている。戦国時代の大規模な山城。斉藤氏が数代居城。永祿8年落城して真田氏の支配下になり、江戸初期に破却。	12、23、28
34	内出城跡						○	堀、土居。	23、28
35	城家城跡						○	堀、土居、腰郭。	23
36	下郷入道跡		○	○				散布地。	29
37	金井廃寺跡					○		町指定史跡。7世紀後半創建の寺院。多数の礎石が残存。創建は伊勢崎市上植木廃寺と同范。	11、25
38	岩井寺沢古墳							「綜覧」大田村17号墳。	24、29
39	丸陣峠の岩跡						○	壱六。	23
40	岩井西古墳群				○			「綜覧」大田村1～14号墳。	24、29
41	山神社道跡		○	○	○			「綜覧」大田村21号墳。縄文・弥生の土器も散布(文献22)。	22、24、29
42	榎栗舞台道跡				○	○		弥生時代後期～奈良・平安時代集落。	29
43	諏訪塚古墳							径30mの円墳。横穴式石室。「綜覧」大田村22号墳。	11、24、29
44	榎栗中原道跡				○	○		古墳時代～奈良・平安時代の集落。「綜覧」大田村23号墳。	17、24、29



## 第2章 遺跡の位置と環境

第3表 周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	時代						遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中・近		
45	竜ヶ鼻遺跡			○	○			散布地。弥生土器が出土(文献22)。	22, 29
46	植葉城跡						○	16世紀。榊栗氏。堀切、石垣、井。	23, 28
47	小泉宮戸遺跡		○	○	○	○	○	縄文時代～中近世の多くの遺構を調査。終末期古墳(「総覧」大田村25号墳)、飛鳥～平安時代の多数の竪穴建物・竪立柱建物。平安中期～後期の製鉄関連遺構など。円面礫出土。	15, 24
48	小泉中沢遺跡				○	○		散布地。	29
49	小泉天神遺跡				○	○	○	古墳時代～奈良時代の竪穴住居・竪立柱建物、中近世の竪立柱建物などを調査。地内には「総覧」大田村27号墳がある。	16, 24, 29
50	新巻膝附遺跡		○	○	○	○	○	小泉天神遺跡の南北に所在。古墳時代～奈良・平安時代の集落。	19

### 文献一覧

- 群馬県教育委員会事務局文化財保護課 2012 『群馬県内公共開発に伴う平成22年度県内遺跡発掘調査報告書』
- 中之条町教育委員会 1982 『天代瓦葺遺跡』
- 中之条町教育委員会・中之条町歴史民俗資料館 1993 『出土品にみる古代の文化 伊勢町地区遺跡群蔵文化財展』
- 中之条町教育委員会 1994 『横尾地区遺跡群Ⅰ』
- 中之条町教育委員会 1995 『横尾地区遺跡群Ⅱ』
- 中之条町教育委員会 1996 『横尾地区遺跡群Ⅲ』
- 中之条町教育委員会 1997 『横尾地区遺跡群Ⅳ』
- 中之条町教育委員会 1996 『長岡Ⅰ遺跡』
- 中之条町教育委員会 1996 『長岡Ⅱ遺跡』
- 中之条町教育委員会 2003 『中之条町の文化財』
- 吾妻町教育委員会 1979 『金井塚寺遺跡』
- 吾妻町教育委員会社会教育課 1992 『吾妻町指定史跡岩棚峠保存整備計画策定報告書』
- 吾妻町教育委員会社会教育課 1996 『善導寺前遺跡』
- 吾妻町教育委員会 2003 『諏訪前遺跡Ⅰ』
- 吾妻町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅰ 小泉宮戸遺跡』
- 吾妻町教育委員会 2004 『町内遺跡Ⅱ 小泉天神遺跡』
- 吾妻町教育委員会 2006 『町内遺跡Ⅲ』
- 東吾妻町教育委員会 2008 『町内遺跡Ⅴ』
- 東村教育委員会 2004 『村内遺跡Ⅰ 新巻膝附遺跡』
- 山下工業株式会社 2011 『東吾妻町 下郷古墳群遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『群馬遺跡大事典』上毛新聞社
- 群馬県教育委員会 1972 『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』
- 群馬県教育委員会 1989 『群馬県の中世城跡群』
- 群馬県 1938 『上毛古墳総覧』
- 群馬県吾妻郡吾妻町 1960 『原町誌』
- 中之条町役場 1976 『中之条町誌第1巻』
- 群馬県 1981 『群馬県史 資料編3』
- 山崎一 1972 『群馬県古墳城址の研究 下巻』 群馬県文化事業振興会
- マッピングぐんま 遺跡・文化財(2014年2月のデータを使用)

調査例があるほか、新巻膝附遺跡(50)、郷原遺跡(第5図の範囲外)が見られる。後期の遺跡は数が増え、敷石住居も確認されているが、いずれも第5図の範囲には入らない。郷原遺跡では有名なハート形土偶(重要文化財)の出土が知られており、この時期の文化の充実ぶりを示している。晩期の遺跡は第5図の範囲では白山神社遺跡(41)が知られている。

本遺跡の今回の調査では前期・中期の土器片と石器・石製品が出土している。中期はその数がやや多いが、遺構は確認されていない。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡は多く、この地域の一つの特徴である。中期の遺跡としては岩棚鷹の巣遺跡(第5図の範囲外)の再葬墓が著名で、中期前半の土器である「岩棚山式土器」の標式遺跡としても知られている。標高802mの岩棚山山頂近くの岩陰を利用した弥生時代の墓地であり、1939年に杉原荘らによって発掘調査された、学史上でも重要な遺跡である。この他、中之条町、東吾妻町の範囲には前知遺跡など、再葬墓と思われる遺跡があるが、いず

れもやや山間部にあるため第5図の範囲外となる。集落の調査例は少なく、諏訪前遺跡(31)や小泉宮戸遺跡(47)でも土器は出土しているものの、数は少ないという。

後期になると遺跡数は飛躍的に増える。中之条町川端遺跡(14)、中之条町天神遺跡(15)、中学校裏遺跡(28)、諏訪前遺跡(31)、善導寺前遺跡(32)、植葉舞台遺跡(42)、小泉宮戸遺跡(47)などが知られている。特に中之条町伊勢町にある川端遺跡と天神遺跡では大規模な集落が調査され、鉄製品やガラス玉、人面土器などの特殊な遺物も出土している。その規模の大きさからこの地域の拠点的な集落と考えられている。本遺跡では、やはり今回の調査区の北東で後期の竪穴住居が調査されている(文献20)が、今回の調査区内には遺構は確認されておらず、中期～後期の土器片が少数出土しているだけである。

### 古墳時代

前期～中期の集落遺跡は、中之条町川端遺跡(14)、中之条町天神遺跡(15)、諏訪前遺跡(31)、植葉舞台遺跡(42)、小泉宮戸遺跡(47)など、弥生時代から継続するものがほとんどだが、規模は小さなものになる。後期は中

之条町川端遺跡(14)、東上野遺跡(26)、小泉宮戸遺跡(47)、小泉天神遺跡(49)などで集落が調査されている。川端遺跡では石垣をもつ方形区画が確認され、規模が大きいことから豪族居館ではないかと指摘されており注目される。本遺跡では前期～後期の竪穴住居が調査されている。

古墳は、この地域では後期から造営が開始される。現在までのところ吾妻郡内に前方後円墳は確認されており、全て円墳である。この地域で最古の古墳と考えられているのは中之条町石ノ塔古墳(21)と生原1号墳(第5図の範囲外)、諏訪前遺跡1号墳(31)などであり、5世紀末の造営と考えられている。その後6世紀以降には各地に小規模ながら古墳群が成立する。文献16によればこの時期の古墳群としては吾妻川右岸に植栗・岩井・下郷・川戸・四戸古墳群があり、左岸に小川、市城、下之町古墳群がある。それらの古墳のうちの多くは戦後の開発によって消滅してしまっただけでなく、終末期古墳としては小泉天神1号墳(49)や小泉宮戸3号墳(47)などがあり、各地に散在している。本遺跡はそれらの古墳群のひとつに相当し、『上毛古墳総覧』川戸村62～69号墳が含まれるとされるが、調査区内では明確な古墳は見つかっていない。古墳群としては密集度の低いものと言えるであろう。

水田跡の調査例としては、中之条町の小塚遺跡(1)、七日市遺跡(3)、天神遺跡(15)などがあり、Hr-FAなどで埋もれた水田が調査されている。

#### 奈良・平安時代

7世紀後半になると、本地域には注目すべき遺跡が出現する。本遺跡の東1kmのところにある金井廃寺である。発掘調査が行われていないので詳細は不明であるが、遺跡地内には円形の柱座を造り出した礎石が複数見られ、瓦が多数出土することからかなりの規模をもった寺院であったと考えられている。創建期の軒先瓦は伊勢崎市上植木廃寺と同范である。その時期は7世紀後半でも末に近い頃のものと考えられ、とすれば、県内でも初期に創建された寺院の一つであることになる。有力な古墳が存在しない吾妻郡域に、平野部と遜色のない古代寺院がいち早く造営されたことについてはこれまでいろいろな議論があるが、7世紀後半という時期に吾妻郡内の地域社会が大きく変貌し、寺院を造営できるだけの力をつけたことは確かであろう。そのような動向を物語る

とされる遺跡としては、金井廃寺の3～4km東にある小泉宮戸遺跡(47)、小泉天神遺跡(49)、新巻膝附遺跡(50)があげられている。小泉宮戸遺跡では多数の掘立柱建物が調査されて有力者の居宅の可能性が指摘され、小泉天神遺跡・新巻膝附遺跡では四面庇の建物や大型の竪穴住居が調査されており、吾妻郡(評)の設置と密接に関わる遺跡群と評価されている(文献15など)。また、吾妻川の対岸、中之条町天神遺跡(15)では多数の掘立柱建物が調査され、奈良三彩や銅印などの特殊遺物も出土することから、豪族の居宅か官衙が存在した可能性が指摘されており、『上野国交替実録帳』に記される郡家別院である「伊参院」の可能性も考えられている。このような官衙的な遺跡、有力者の存在を示すような遺跡が複数見られるようになることがこの時期の特徴だといえよう。郡の役所である郡家(郡衙)の所在地については、まだ確定的な遺跡が見つかっておらず明らかではない。かつては吾妻川左岸の原町中学校付近と推定されていたが、近年は小泉地区に推定する意見もある(文献14)。本遺跡でも7世紀後半から竪穴住居が増加し、7世紀末以降の一時期には、一般の集落のものとは思えない掘立柱建物群が建設されている。その建物群の役割がどのようなものであるのかは、以上の遺跡の動向の中で考えるべきであろう。なお、金井廃寺に瓦を供給した瓦窯としては、中之条町天代瓦窯(7)が調査され、2基の窯跡が見つかっている。つまり金井廃寺が吾妻川右岸にあるのに、その瓦の生産地は対岸にあるわけであり、寺院を作った勢力の力の及ぶ範囲は川を挟んだ両岸に及んでいたことになる。この点はこの時期の地域社会の様相を考える上で重要な点であろう。

さらにこの時期を特徴付ける遺跡としてあげられているものに、製鉄遺跡と牧がある。製鉄遺跡は諏訪前遺跡(31)で平安時代前期の鍛冶跡、小泉宮戸遺跡(47)で平安時代中期～後期の製鉄関連遺構が調査されるなど、遺跡が多い。吾妻川流域の鉄生産遺跡としては下流の渋川市金井製鉄遺跡も有名であるが、鉄が吾妻郡の主要生産物になっていたのではないかという意見もある。また、馬の生産地としての牧は、『延喜式』に記載がある「市代牧」が第5図の右端下のJ R市城駅付近に比定されている。大規模な水田耕作に向かない山間部のこの地域が、それなりの経済力をつけていく源泉として、これら鉄・馬の

生産が考えられているわけである。ただし、「市代」「市城」と、地名の読みは一致するものの、その付近には広い平坦地がないため、牧の立地としてはやや疑問がある。本場に「市代牧」がここにあったかどうかは今後の考古学的調査も含めて、さらに検討が必要であると思われる。

この時期の集落遺跡は数多く、前掲の多くの遺跡で竪穴住居が調査されており、本遺跡の竪穴住居の多くもこの時期に属している。水田、畠などの調査例は少ないが、善導寺前遺跡(32)ではAs-Bとされる軽石の下から水田跡が見つかった。本遺跡ではAs-BないしAs-Kkと思われる軽石に埋もれた畠が調査できた。

### 中世

中世の遺跡としては城館跡が多い。この地域は信州から北関東の平野部に抜ける回廊のような場所であり、戦国期には武田、上杉両勢力による争奪の舞台になり、末期には真田氏が領するようになった。そのため、多くの城や砦が築かれたのである。本遺跡の周辺で最も有名な城は岩櫃城(33)であるが、その他第5図の範囲に限っても、和利宮城址(6)、古城址(11)、伊参城址(12)、城峯城址(19)、中条城址(20)、稲荷城跡(25)、内出城跡(34)、城峯城跡(35)、先陣峠の砦跡(39)、植栗城跡(46)などがある。中近世の掘立柱建物が見ついている遺跡には、諏訪前遺跡(31)、善導寺前遺跡(32)、小泉宮戸遺跡(47)、小泉天神遺跡(49)、新巻峠附遺跡(50)などがあり、館ないしは屋敷の存在を示すものであろう。また、この地域にいくつか存在する水半跡は、真田氏の支配下のものと伝えられており、その例として中之条町真田水半遺跡(5)がある。

### 近世

この地域の近世の遺跡として注目されるものには、浅間山天明大噴火に伴う泥流被害遺跡があり、吾妻川流域ではハットダム建設関連の発掘調査によって調査例が増している。しかし現在までのところ、本遺跡の周辺では調査例が少なく、中之条町西浦遺跡(9)で泥流下の畑、道、石列などが見ついている程度である。

本遺跡の今回の調査区では中近世に属する遺構は見つかっておらず、遺物もごくわずかに出土しているに過ぎない。

## 第3節 基本土層

基本土層は3区の北東の調査区壁(A地点)で観察し、実測した。その土層は第6図にあげたとおりである。

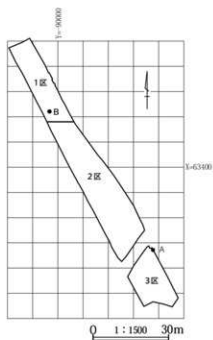
基本土層(A地点=3区北東壁)

- 1 表土 現耕作土。圃場整備時の盛土と考えられる。調査区内に厚く存在するところがある。
- 2 褐灰色土(7.5YR5/1) As-BかAs-Kkと思われる軽石を含む。白色軽石も含む。
- 3 褐色土(7.5YR4/6) As-BかAs-Kkと思われる軽石を大量に含む。この地点には見られないが、2区にはAs-BかAs-Kkと思われる軽石の純層が堆積しており、その面を第1面として調査した。
- 4 褐灰色土(7.5YR4/1) 白色・橙色軽石を含む。この下面が1・2区の第2層に相当すると思われる。
- 5 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム漸移層。ローム粒・ロームブロックを含む。
- 6 ローム層。

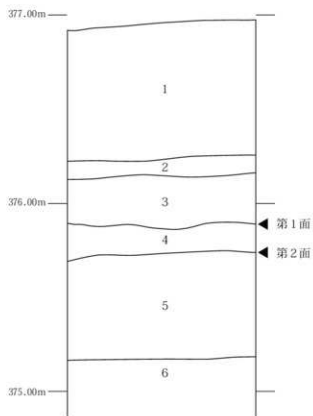
ローム層については旧石器時代の確認調査の際、1・2区の1号調査坑の北側(B地点)で深掘りを入れて土層を観察し実測した。その土層は第6図にあげたとおりである。ローム層の状態は良好とは言えず、層中に明瞭な軽石の層などは見られなかった。

ローム層(B地点=旧石器1号調査坑北深掘り)

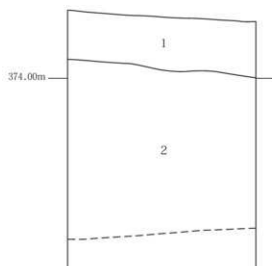
- 1 黄褐色ローム(10YR7/8)
- 2 明黄褐色土(10YR6/8) 前橋泥流(応桑泥流)相当層と思われる。下層に行くに従い垂角礫が多くなるので、旧石器時代の調査はこの垂角礫が大量に現れる高さで終了とした。



A・B地点の位置



A・3区北東



B・旧石器1号調査坑北深掘り

第6図 基本土層

## 第3章 調査の成果

### 第1節 成果の概要

今回本遺跡で調査し報告する遺構は、竪穴住居36軒、掘立柱建物4棟、柱穴列1条、ビット40基、土坑18基、陥し穴1基、溝2条、畠1面、石列1条、焼土1カ所、土器溜まり1カ所、自然流路1条である。今回の調査区の南北両端では遺構が少なく、これらの遺構の内の大部分は1・2区にある。なお、本遺跡の名称は「下郷古墳群」であるが、今回の調査区では明確な古墳は確認されず、調査の際に古墳の主体部の一部かと推定した石列が1条見られるだけである。この古墳群の古墳の分布はかなり散漫であるらしい。

2区では、平安時代末に降下したAs-BあるいはAs-Kkと思われる軽石が堆積している部分があり、その下に畠が確認されたことから、この面を第1面として調査した。畠は畝間に軽石が詰まる状態で確認され、畝は削平されていた。この畠面を調査した後、下層を掘り下げて第2面の調査を行った。畠以外の遺構は全てこの第2面で調査されたものである。このように、第1面で調査したのは畠だけであるので、以後の記述では第1面、第2面という区別はほとんどしておらず、面も呼び分けていないが、畠とそれ以外の遺構は層位的に時期が異なるので注意していただきたい。

竪穴住居は1区南部から2区北・中部にかけて集中している。重複が非常に激しいので、残りが悪いものも多い。それらの時期は、4世紀末～5世紀初め頃と考えられるものを最古とし、以後10世紀第1四半期までのものが見られる。古墳時代に属する住居は少なく、7世紀末以降のものが29軒と大部分を占めるので、律令制の時代が本集落の最盛期と言えるであろう。中には礎石をもつものが2軒、石組み竈をもつものが1軒あるなど、構造的にも注目されるものが含まれている。

掘立柱建物4棟は2区の全域に散在し、相互にかなり距離を置いている。1棟を除いて柱穴に重複は見られず、それぞれ単時期のものであると思われる、全体に存続期間が短いと考えられる。全部でわずか4棟しかないにも関

わらず、礎板石をもつもの、布掘の柱穴をもつもの、間仕切かと思われる柱配置をもつものなど、構造はバラエティに富み、規模も含めて異なる形態の建物である。それらが建物の役割の違いを反映しているのか、注目されるところである。各建物の用途を明確に把握することは難しいが、そのうちの1棟は、柱穴列と組み合わせさせて門になる可能性があり、また、最も北側の1棟はかなり大型の建物になる可能性が高い。このような建物群は、一般の集落のものとは考えにくいので、何らかの特別な施設、たとえば役所などの公的な施設や有力者の居宅などである可能性を考えるべきであろう。この点については第4章で詳説したい。

このように掘立柱建物が見つまっているため、ビットの検出には力を入れた。その結果40基のビットが見つかることができた。中には柱痕をもつものがあり、それらは建物の一部をなす可能性が考えられたが、組み合わせるべき柱穴を周囲に見つけることができず、4棟以上の建物を把握することはできなかった。

出土遺物には特別なものは少ないが、中空円面硯が出土している(2区7号住居)ことが注目される。硯の出土は「識字層」の存在を示すものであり、この遺跡の評価に関わってくるからである。その他転用硯も1点確認されているが、墨書土器などの文字資料は出土しておらず、その方面から遺跡の性格を知ることができなかったのは残念である。

縄文・弥生時代については土器と石器・石製品が出土しているのみであり、遺構は見られなかった。

## 第2節 竪穴住居

今回調査・報告する竪穴住居は合計36軒である。現地における発掘調査の際は、1区で10軒、2区で32軒の合計42軒を竪穴住居として調査したが、整理事業の過程において平面図・断面図や写真、出土遺物などを精査した結果、6軒は遺構として認定することが困難であると判断したため、それらは報告対象から除くこととした。ただし今後の混乱を避けるため、住居番号の付け替えなどは行わないこととし、それらの住居番号については欠番とした。

これらの竪穴住居は1区から2区にかけて濃密に分布している。特に1区南端から2区北半にかけては重複が激しく、それぞれの覆土がよく似ていることもあって遺構確認においてそれぞれの住居の形状を把握するのは非常に困難であった。結果として欠番となってしまった住居が複数存在するのはそのためである。

時期別の内訳は、4～7世紀の古墳時代のものが11軒、8世紀代の奈良時代のものが11軒、その後10世紀第1四半期までの平安時代のものが14軒(8世紀末～9世紀前半の1軒を含む)である。この時期別の分布を見ると比較的長期間に亘って存続した集落のように見えるが、古墳時代のものにはその最末期の7世紀末(第4四半期)のものを4軒含むので、7世紀末～10世紀第1四半期のなかに29軒があることになる。いわゆる律令制の時代が本遺跡の集落の中心となる時期だと言えることができ、それは本遺跡の性格を考える上で重要な点である。

竪穴住居の残存度は、重複が激しいこともあり、全体によくない。中には壁の一部が残るだけで、形状を把握したいものもある。残っている壁の高さから見て上面がかなり削平されていると考えられる住居もあるが、2区2号住居のように竈の天井石と考えられる石が残っていて、ほとんど削平を受けていないと思われる住居もあり、削平の度合いは場所によって違いがあるようである。

竪穴住居の中には、柱を礎石で支えるものが2軒あり注目される。また、2区2号住居の竈は煙道部が石を組んで作られ、天井部には1個だけだが石がのせられたような状態で残っていた。同様な形態の竈は周辺の遺跡でも複数見つかり、その性格が注目される。

特徴的な遺物としては2区7号住居から出土した中空円面硯と転用硯がある。中空円面硯は出土例の少ない遺物だが、特にこの硯は形態が珍しい。硯が出土することは「識字層」の存在を示すもので、遺跡の性格にも関わることであり、注意すべき遺物であると言える。

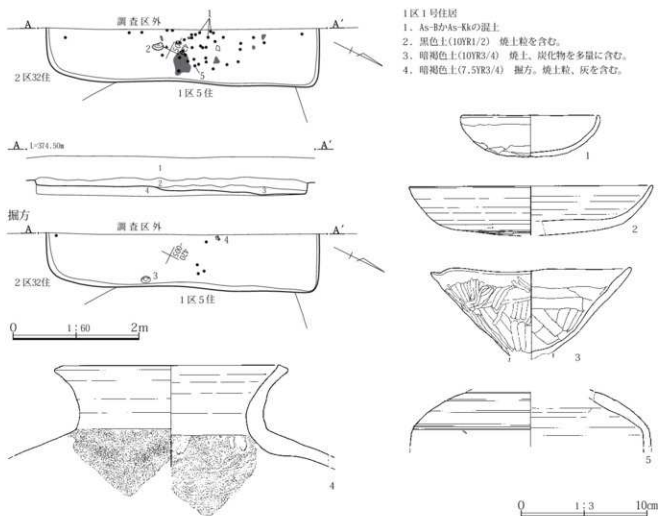
### 1区1号住居(第7図、第11表、Pl. 2-2・3、3-1, 31)

1区南端にあり、南西の大部分が調査区外となる住居である。わずかな面積が調査区にかかるだけであるが、住居の方向が調査区の方向と近かったために北東壁の全体が調査でき、規模の一端が判明した。

**位置** X=63418～423、Y=-90003～007。 **重複遺構**

1区5号住居、2区32号住居と重複する。本住居はそのいずれよりも新しい。 **形状** 一部分の調査なので不明だが、北東壁は直線であり、その両端の住居隅部は直角に曲がっているため、全体としては方形であると思われる。 **主軸方位** 北東壁に平行する方向を主軸と仮定して計測するとN-25°Wである。 **規模** 主軸と仮定した方位の長さは4.36mである。それに直交する方向は不明で、調査区内に入るのは北端部で0.93mである。 **床面積** 調査区内の部分で計測すると3.39m<sup>2</sup>である。主軸方向の床面の長さは4.27mなので、住居の形状が正方形と仮定して床面積を単純計算すると約18.2m<sup>2</sup>である。 **壁高** 調査区内では3～9cmと浅いが、調査区壁(A-A'セクション)では覆土が最も厚い部分で24cm残っている。 **覆土** 焼土や炭化物を含む黒色土、暗褐色土で埋没している。 **床面** 細かい凹凸は少なく全体に平坦ではあるが、北側に向かって緩やかに下がり、特に北半部は一段低くなる。南端と北端との床面の標高差は16cmに達する。 **柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 調査区内では確認できなかった。 **掘方** 掘方底面は全体に平坦で、それを焼土粒や灰を含む暗褐色土で0～15cm埋め戻し、床面としている。掘方の覆土内からも遺物が出土している。 **遺物** 調査範囲の中央付近を中心として出土したが、細かい破片となっているものが多く、報告できるのは5点のみである。土師器杯、同高杯、須恵器盤、同壺、同壺が各1点ずつある。このうち3の高杯と4の壺が掘方出土であり、1の杯、5の壺は床面、2の盤は床面から8cm浮いた高さから出土している。その他小破片として土師器杯・碗類33点、同壺・壺類30点、須恵器

### 第3章 調査の成果



第7図 1区1号住居断面図、出土遺物

杯・椀類4点、同蓋類10点、同甕・壺類6点が出土している。**時期・所見** 出土遺物から8世紀第2四半期と考えられる。一部の調査にとどまったので、詳細は不明である。

#### 1区2号住居(第8図、第11表、PL. 3-2・3, 31)

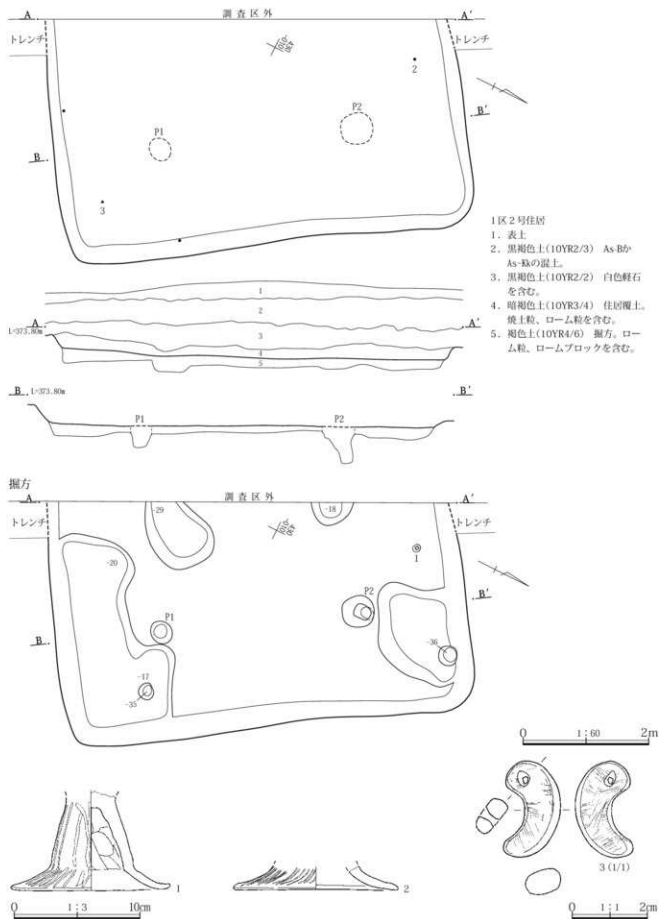
1区中央西側にある。1号住居同様、南西のほぼ半分が調査区外となるため、不明な点が多い。

**位置** X=63426~434, Y=-90005~012。 **重複遺構** なし。 **形状** 南西部が調査区外となるため不明であるが、北東壁の両端の隅はほぼ直角に曲がっており、整った方形になると思われる。 **主軸方位** 北東壁と平行の方位を主軸と仮定して計測するとN-32°-Wである。 **規模** 主軸と仮定した方位の長さは6.59mである。それに直交する方向の長さは不明で、調査区に入るのは3.91mである。 **床面積** 調査区内の部分で計測すると

20.62㎡。主軸方向の床面の長さは6.16mなので、正方形と仮定して床面積を単純計算すると約37.9㎡。 **壁高** 9~33cm。 **覆土** 焼土粒を含む暗褐色土で埋没している。 **床面** 細かい凹凸は少なくほぼ平坦であるが、南から北に向かって緩やかに下がっている。南端と北端の床面の標高差は19cmである。 **柱穴** 床面では確認できなかったが、掘方調査の際に見つかった2基のビット(P1・2)が、その位置からみて柱穴であると考えられる。それぞれの大きさは下記の通りであるが、長径と短径は掘方底面で計測した値であり、深さは床面から計測した値を示した(長径×短径×深さ、cm)。

P1 38×33×35      P2 52×52×59

**炉** 遺物の時期からみて竈ではなく炉があったものと考えられるが、調査区内では確認できなかった。 **貯蔵穴・周溝** 調査区内では確認できなかった。 **掘方** 床面からは5~25cm深い。一部やや深く掘られているところ



第8図 1区2号住居平面断面図、出土遺物



### 第3章 調査の成果

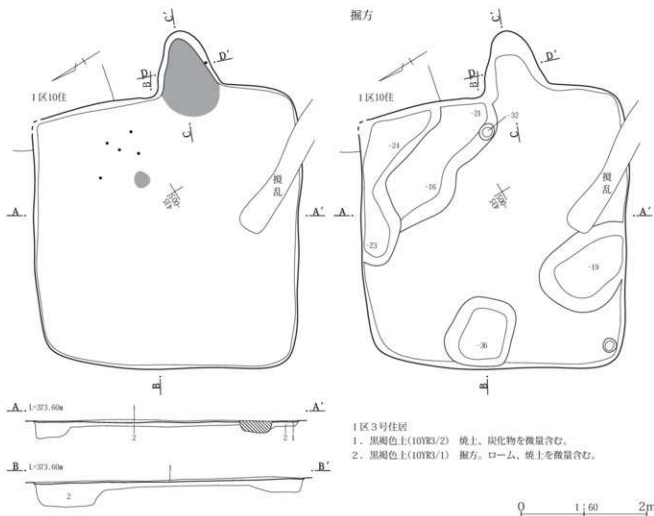
があるが、全体に凹凸は少ない。ローム粒・ブロックを含む褐色土で埋め戻し床面としている。遺物 土器は小破片がほとんどで数は少ない。掲載したのは2点の土師器高杯脚部破片である。1は掘方から、2は床面から出土しているが、いずれも北西壁近くのほぼ同一地点から出土している。3は石製の勾玉である。東隅部の床面から10cm浮いた高さから出土した。その他小破片として土師器高杯類3点、同襷・壺類28点と、混入と考えられる須恵器襷・壺類1点が出土している。時期・所見 時期は出土遺物から5世紀代と考えられる。半分程度の調査にとどまり、詳細は不明な点が多い。

#### 1区3号住居(第9・10図、第11表、PL. 3-4~6)

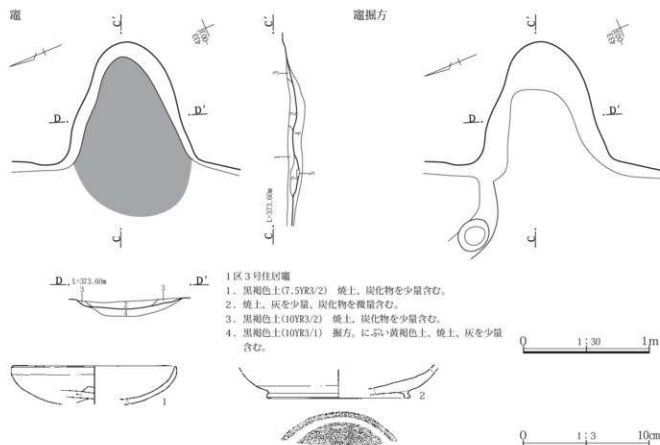
1区中央やや北寄りにある。全体を調査できたが、上面を大きく削平されているため残りは悪く、壁はわずかな高さしか残っていないかった。

**位置** X=63432~438、Y=-90002~009。重複遺構 東隅に1区10号住居が重複している。本住居が新しい。形状 ほぼ正方形に近い方形だが、竈のある南東壁だけ方向が異なっているため、南西壁に比べて北東壁が短くなっており、全体としてはやや台形状になっている。主軸方位 北東壁と南西壁とに平行する方向を主軸方位として計測すると、 $N-120^{\circ}-E$ である。

**規模** 中央付近で計測して、 $4.33 \times 4.23$ m。床面積 17.60㎡。壁高 1~5cmとごく浅く、上部が大きく削平されていることは確実である。覆土 覆土の最下部のみが残存しているものと考えられる。焼土と炭化物を微量含む黒褐色土である。床面 凹凸が少なく平坦である。南から北に向かってごくわずかに低くなっている。南端と北端との標高の差は5cmである。柱穴 床面・掘方底面のいずれでも確認できなかった。竈 南東壁の中央やや南寄りにある。袖はみられず、燃焼部が



第9図 1区3号住居平面断面図



1区3号住居圖

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土、炭化物を少量含む。
2. 焼土、灰を少量、炭化物を微量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土、炭化物を少量含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1) 掘方。にぶい黄褐色土、焼土、灰を少量含む。

第10図 1区3号住居竪断面図、出土遺物

壁の外に張り出す形態である。壁面で幅を計測すると95cm、壁から外側への張り出しは95cmである。竪の向きは南東壁にほぼ直交しているため住居の主軸方向と異なり、 $N-110^{\circ}-E$ となっている。燃烧部の底面は焼けて焼土化しており、よく使用されていたらしい。貯蔵穴・周溝 確認できなかった。掘方 床面より全体的に4~13cm深く、さらに東隅付近や南西壁・北西壁中央は土坑状にやや深く掘られている。それらをローム、焼土粒をわずかに含む黒褐色土を用いて埋め戻し、床面としている。遺物 土器はいずれも小破片になっており、数も多くない。掲載したのは土師器杯と須志器杯が1点ずつである。1は掘方、2は覆土から出土している。その他小破片のため未掲載の土器には、土師器杯・椀類8点、同裏・壺類29点、須志器杯・椀類3点、同蓋類10点、同裏・壺類9点がある。時期 わずかに出土している土器から判断して、住居の時期は8世紀前半と思われる。

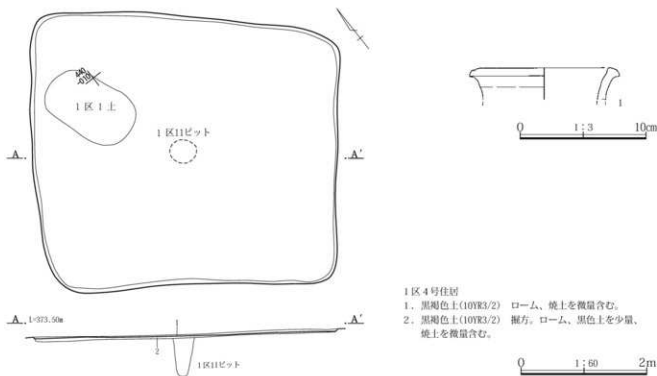
## 1区4号住居(第11図、第11表、PL. 3-7・8)

1区中央北寄りにあり、今回調査した竪穴住居の中では最北端となる。調査区の中央にあるため全体を調査できたが、1区3号住居同様大きく削平を受けているようで、きわめて浅くなっており、四周の壁はわずかな高さしか残っていなかった。

位置  $X=63435 \sim 442$ 、 $Y=-90006 \sim 013$ 。重複遺構 1区1号土坑と1区11号ピットと重複する。1号土坑が新しい。11号ピットは掘方調査の際に見つかったもので、より古い時期のものかと判断したが、本住居の中央に位置するため、関連するものとも考えることもできる。

形状 台形に近い長方形。主軸方位  $N-52^{\circ}-W$ 。

規模 中央付近で計測して4.89×4.29m。床面積 19.63㎡。壁高 全体に浅く、1~3cmしかない。覆土 覆土の底部のみが残り、ローム、焼土粒をわずかに含む黒褐色土である。床面 ほぼ平坦であるが、南から北に向かってごく緩やかに下がっており、その標高差は最も大きいところで18cmである。柱穴 床面では



第11図 1区4号住居平面断面図、出土遺物

確認できなかった。掘方調査では住居のほぼ中央から1区11号ピットが見つかった。このピットは掘方底面で計測すると長径44cm、短径37cmのほぼ円形で、深さ58cmのしっかりしたピットである。住居中央に位置することからも、この住居に関わるものである可能性が考えられる。しかし、他に同様なピットは見つかっておらず、ただ1基のみなので、明確な関連は不明である。

**竈・炉・貯蔵穴・周溝** 住居内部にこれらの施設は確認できなかった。**掘方** 全体にごく浅く存在する。床面から掘方底面までは0～3cmで、一部でごくわずかに深くなっている程度である。**遺物** 出土した遺物は少ない。掲載したのは須恵器の瓶と思われるものの口縁部小破片であり、掘方から出土している。その他小破片で掲載できなかったものは、土師器杯・椀類4点、同裏・壺類19点、須恵器杯・椀類1点、同蓋類2点、同裏・壺類1点である。**時期・所見** 住居の時期は遺物からみると8世紀第1四半期と考えられるが、数が少なく小破片ばかりなので確実性に乏しい。住居形状が長方形で竈・炉がなく、柱穴や貯蔵穴も確認できないので、住居として使用されていないことも考えられ、それが正しければ本来「竈穴状遺構」として扱うべきものと思われる。

**1区5号住居**(第12・13図、第11表、PL. 4-1・2, 31)

1区南端にある大型の住居である。やはり上部が大きく削平され、ごく浅くしか残っていない。重機による表土掘削の際に南隅周辺を掘り過ぎてしまったため、この部分については推定で復元した。

**位置** X=63417～425、Y=-89997～006。**重複遺構** 本住居は竈穴住居密集部分の北端に位置しているため、重複している住居は北側を除いて多い。東隅付近は1区7号住居と、竈付近は2区26号住居と、南隅付近は2区32号住居と、西隅付近は1区1号住居と重複している。本住居は1区1号住居より古く、1区7号、2区26号、2区32号住居より新しい。**形状** 全体として方形ではあるが、北西壁と南西壁の方向が歪んでいるため、やや台形に近い長方形になっている。**主軸方位** N-133°-E。

**規模** 中央付近で計測して6.28×5.60m。**床面積** 南隅付近を復元して計測すると31.45㎡。**壁高** 全体に浅く、1～13cm。特に北半部が浅くなっている。**覆土** 覆土の底部のみが残り、ローム、焼土粒、灰、炭化物を含む暗褐色土である。**床面** 中央付近に細かい凹凸が部分的にみられるが、全体に平坦である。**柱穴** 確認できなかった。**竈** 南東壁中央やや北寄りにある。袖はみられず、燃焼部が壁の外に張り出

す形態である。壁面で幅を計測すると65cm、壁から外側への張り出しは70cmである。竈の向きは住居の主軸方向とやや異なり、N-124°-Eとなっている。燃烧部に堆積した覆土には焼土を多量に含むが、燃烧部の底面はあまり焼けていない。貯蔵穴 確認できなかった。

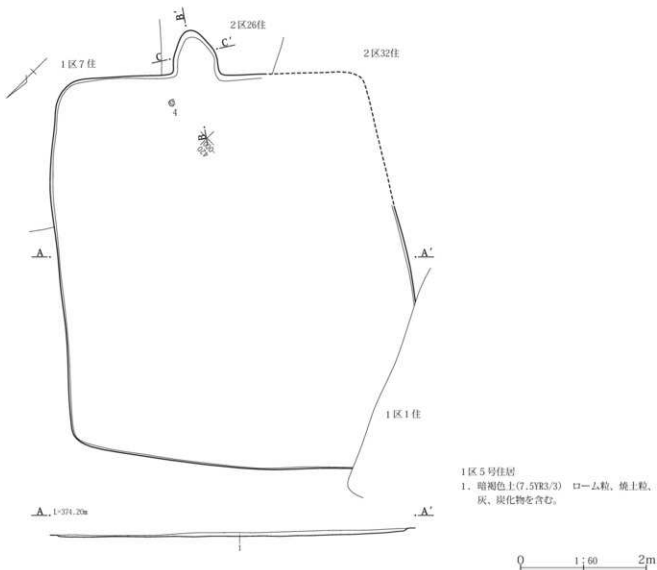
周溝 確認できなかったが、写真(PL.4-1)にみるように北東壁際には周溝状の凹みがわずかにあったので、ごく細い周溝は存在した可能性がある。遺物 覆土が浅いにも関わらず比較的多くの土器片が出土した。掲載したのは、土師器杯2点、須惠器蓋3点、同盤1点である。それらうち、土師器杯(1・2)と須惠器蓋(3)、同盤(6)の計4点は竈内から出土した。須惠器蓋(4)は竈近くの床面から7cm浮いた高さから出土している。その他、小破片のため掲載できなかったものは、土師器杯・椀類

21点、同高杯類1点、同糞・壺類55点、須惠器杯・椀類5点、同蓋類7点、同糞・壺類14点である。時期・所見 住居の時期は、出土遺物から7世紀第4四半期と考えられる。本遺跡の中では大型の住居であるが、上面が削平されて残りが悪く、柱穴・貯蔵穴も確認できないなど、詳細は不明な点が多い。

#### 1区6号住居(第14図、PL.4-3・4)

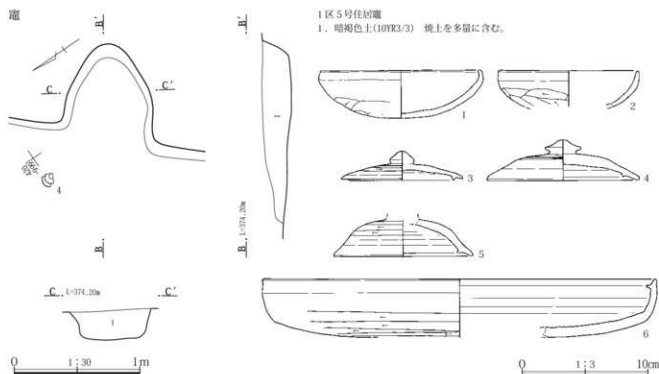
1区南東端にある。大部分が調査区外となる住居であり、調査区内には西隅付近のわずかな部分が掛かっているに過ぎない。東側は調査区境の攪乱により破壊されている。

位置 X=63418～421、Y=-89993～997。重複遺構 1区7号住居、2区26号住居、2区2号掘立柱建物

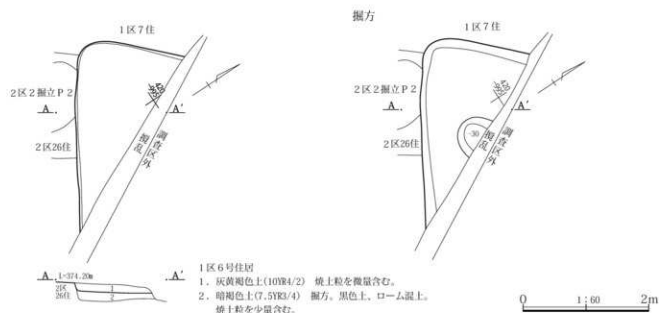


第12図 1区5号住居平面断面図

### 第3章 調査の成果



第13図 1区5号住居竈平断面図、出土遺物



第14図 1区6号住居平断面図

P2と重複する。本住居はそのいずれよりも新しい。形状 住居の西隅とその付近が見えるだけなので詳細は不明であるが、各辺は直線的であり、全体としては方形になると思われる。ただし、西隅の角度は直角ではなくやや鋭角になっているため、台形に近い形状になると推定される。主軸方位 南西壁に平行する方向を主軸として計測すると、 $N-54^{\circ}-W$ である。規模 調査区に

掛かっているのは最大で $3.04 \times 1.50m$ である。床面積 調査区内の部分は $2.46m^2$ である。壁高  $7 \sim 20cm$ 。覆土 焼土粒をわずかに含む灰黄褐色土で埋没している。壁際にはローム小ブロックを多く含んでいる。人為的埋没かどうかは不明である。床面 凹凸が少なく、ほぼ平坦である。柱穴・竈・貯蔵穴・周溝 いずれも調査区内では確認できなかった。掘方 床面よりも全

体に9～23cm深く、一部土坑状に掘られている。そこを焼土粒を少量含む暗褐色土(黒色土とロームとの混土)で埋め戻して床面とする。遺物 出土した遺物はごく少なく、小破片ばかりなので掲載できるものはない。それらの内訳は土師器・壺類4点、須恵器・壺類3点である。時期・所見 住居の時期は遺物からみると8世紀後半と思われるが、覆土内から出土している小破片からの判断なので確実性には乏しい。一部の調査にとどまったので詳細は不明である。

### 1区7号住居(第15・16図、PL. 4-5・6)

1区南東端近くにあり、一部が調査区外となる住居である。上部を削平されごく浅くしか残っていない。

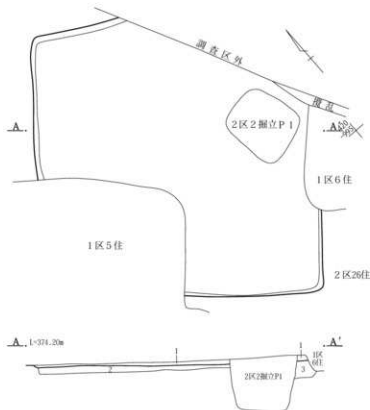
位置 X=63418～425、Y=-89995～90000。重複

遺構 1区5号住居、1区6号住居、2区26号住居、2区2号掘立柱建物P1と重複する。本住居は1区5号、6号住居、2区2号掘立柱建物より古く、2区26号住居より新しい。形状 方形であるが、わずかに見えている北東壁の方向がかなり歪んでいるので、台形に近い形状になると思われる。主軸方位 竈が1区6号住居に破壊されていると考えられるため、この南東-北西方向

を主軸と想定して計測するとN-128°-Eである。

規模 主軸方向は、1区6号住居で壊されている部分を復元して中央付近で計測すると4.55mである。それと直交する方向は、北東壁を延長して中央付近で計測すると、4.60m前後になるものと思われる。床面積 北東壁がかなり歪んでいるので調査区外となる部分の復元は困難であり、全体の床面積は不明であるが、前項で推定復元した規模から単純計算すると、4.55m×4.60mで20.93㎡となる。壁高 全体に削平され3～13cmと浅い。

覆土 覆土の底部がわずかに残る程度であり、黒褐色土である。床面 全体に平坦であるが、南から北に向かって緩やかに下がっている。南隅と北隅との標高差は21cmに達する。柱穴 確認できなかった。竈 調査区内では確認できなかったが、本遺跡の他の多くの住居と同じように南東壁中央付近にあった可能性が高く、とすれば1区6号住居によって破壊されてしまったものと考えられる。貯蔵穴 床面の調査では確認できなかったが、掘方調査で南隅から見つかった小土坑は貯蔵穴である可能性がある。この土坑は掘方底面で54×46cmの楕円形で、深さは床面から計測すると27cmである。内部からは何も出土していない。周溝 確認できなかった。

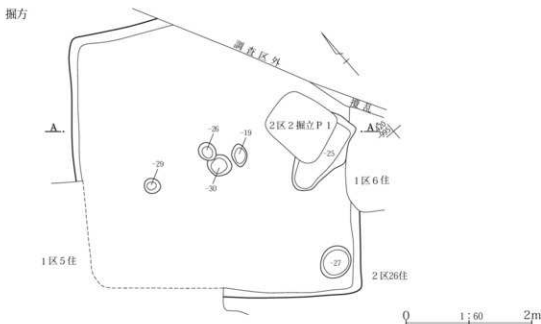


第15図 1区7号住居平面断面図

#### 1区7号住居

1. 黒褐色土(7.5YR3/1) 鉄分の酸化による褐色の変色が多くみられローム粒を少量、焼土、白色軽石を微量含む。
2. 黒褐色土(5YR3/1) 掘方。ロームを多量、白色軽石を少量、焼土を微量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 掘方。ロームを少量、焼土を微量含む。

0 1:60 2m



第16図 1区7号住居掘方平面図

**掘方** ビット状の部分を除いて、床面より8～18cm深く掘られている。中央付近はやや高くなる傾向がある。それをローム、焼土を含む黒褐色土で埋め戻し床面を作っている。**遺物** 遺物は土師器・壺類の破片が6点のみでありごく少ない。しかも小破片ばかりで掲載できるものはない。**時期・所見** わずかな数の土器片からの推定なので不確実であるが、時期は7世紀代と考えられる。ただし、本住居よりも新しい1区5号住居、古い2区26号住居がともに7世紀第4四半期と考えられるので、この互いに重複関係にある3軒は、きわめて短い期間に相次いで建てられたものであるらしい。

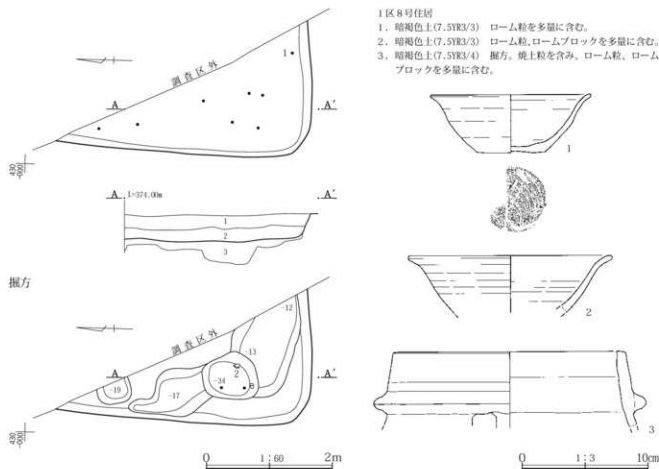
#### 1区8号住居(第17図、第11表、PL. 4-7・8)

1区南東側にある。大部分が調査区外となり、南西のごく一部が調査区内に掛かるに過ぎない。今回の調査の中では最も新しい時期の竪穴住居のひとつである。

**位置** X=63425～430、Y=-89997～90000。**重複遺構** なし。**形状** 調査区内には南西隅付近しか掛かっていないので不明であるが、各辺は直線的に伸びており方形と推定される。ただし、隅部の角度は直角よりもわずかに鋭角になっているので、やや台形に近い形状であると考えられる。**主軸方位** 調査区内に竈がないので確定できないが、調査区内により長くみえている西壁の方向を主軸と考えて計測すると、 $N-3^{\circ}-E$ であ

る。ただし、後述のように本住居と同時期と考えられる2軒の竪穴住居はいずれも東壁に竈を持っており、本住居も同様だとすれば、主軸方位はそれと直交する $N-93^{\circ}-E$ に近いものとなるだろう。**規模** 半分以上が調査区外となるので不明であるが、調査区内にかかっている部分を計測すると、最大で $4.06 \times 2.24m$ である。

**床面積** 調査区内の部分は $3.85m^2$ である。**壁高** 比較的残りがよく、 $31 \sim 40cm$ ある。**覆土** ロームを多く含む暗褐色土で埋没している。ほぼ同一の層であり、人為的な埋没である可能性が考えられる。**床面** 全体にごくゆるやかな凹凸がみられる。**柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 調査区内では確認できなかった。そのうち竈は、本住居と同時期と考えられる2区16号住居、2区18号住居で東壁にあることが確認されており、本住居でも同様に東壁にあった可能性が高い。**掘方** 凹凸が大きく、土坑状に掘り込まれている部分もある。特に南西隅近くには、掘方底面で計測して長さ $95cm$ 、幅 $76cm$ のやや方形に近い不整形の土坑が掘られている。深さは床面から計測すると $34cm$ である。その性格は不明であるが、内部からは2の須恵器杯をはじめとした土器片が出土している。**遺物** 調査できた面積が狭いにも関わらず、比較的多くの遺物が出土した。掲載したのはいずれも須恵器で杯2点、羽釜1点である。1の杯は南壁際の床面から $13cm$ 浮いた高さから、2の杯は掘方の土坑状の凹みから



第17図 1区8号住居平面断面図、出土遺物

出土した。その他小破片で掲載できなかったものは、土師器杯・椀類23点、同裏・壺類78点、須恵器杯・椀類56点、同蓋類5点、同裏・壺類22点である。時期・所見住居の時期は出土遺物から10世紀第1四半期と考えられる。同時期の住居は今回の調査の中で最も新しい一群となる。小面積の調査なので詳細は不明である。

#### 1区9号住居(第18図、第11・12表、PL. 5-1~3, 31)

1区の中央部にある。住居として調査したが、張り出し部のある特徴的な形態で、竈がないので、通常の住居とは考えられない。床面には炭化物を含む焼土の塊がみられた。

**位置** X=63428~432, Y=-90001~005。 **重複遺構** 北側に1区1号溝が重複する。本住居が新しい。

**形状** ほぼ正方形に近い方形の一辺に、辺の半分幅の張り出しが付く形である。 **主軸方位** 竈がないのでどの方向を主軸方位とするかは決めがたいが、後述する2基のピット(P1・P2)が柱穴の可能性が高いので、そ

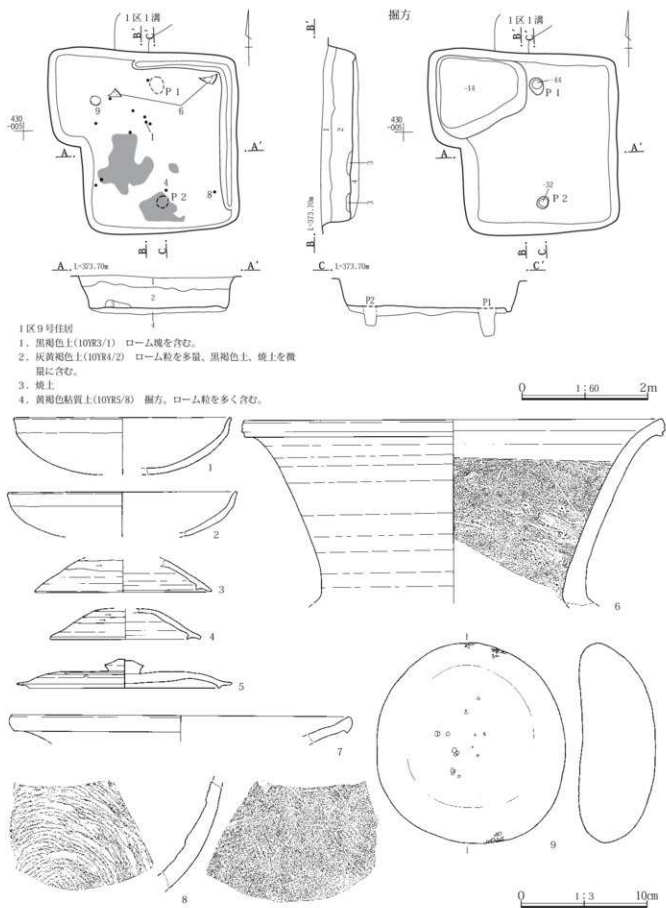
れを結ぶ線を主軸方位として計測すると $N-3^{\circ}-W$ である。 **規模** 張り出し部を除いて中央付近で計測すると南北2.39m、東西2.50mである。張り出し部分を計測すると東西3.05mなので、張り出し部の長さは0.55mであり、幅は1.58mである。 **床面積** 6.51㎡。 **壁高** 全体に残りがよく、42~50cmある。 **覆土** 黒褐色ないし灰黄褐色土で埋没しているが、2層間にあまり違いはなく、人為的に一気に埋められた可能性がある。 **床面** 細かい凹凸が多く、平坦ではない。南半部の床面上には炭化物を含む焼土の大きな塊がみられる。 **柱穴** 床面の調査では確認できなかったが、掘方調査で南北両辺の中央付近から2本のピットが見つっている。それらはほぼ対称的な位置にあるので、本住居の柱穴と考えられる。各柱穴の規模は下記の通りである(長径×短径×深さ、cm)。なお、長径と短径は掘方底面で計測したが、深さは床面から計測した。

P 1 28×21×44      P 2 20×18×32

**竈・貯蔵穴** なし。 **周溝** 東壁の南隅から北壁の中央



第3章 調査の成果



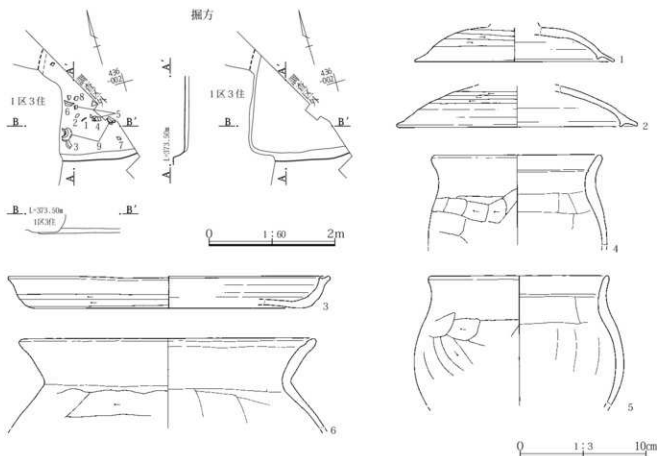
第18図 1区9号住居平面図、出土遺物

にかけて存在する。幅12～22cm、深さ4～6cmだが、一部不明瞭となっている。掘方 全体に床面より4～15cm深いが、張り出し部は周辺よりもさらに5cm程度深く掘っている。それをローム粒を多く含む黄褐色粘質土で埋め戻し、床面としている。遺物 比較的多く出土しているが、やや大きい破片は全体に散在している。掲載したのは土師器杯2点、須恵器蓋3点、同甕3点、台石1点である。その他小破片に掲載できなかったものは、土師器杯・椀類13点、同甕・壺類36点、須恵器杯・椀類21点、同蓋類30点、同甕・壺類21点である。時期・所見 出土遺物からみて、この遺構の時期は7世紀第4四半期と思われる。住居とすればかなり小型であるが、張り出しをもつこと、竪がないこと、柱穴が2本と考えられることなど、やや特異な形態をもつので、通常の住居と考えることはできない。床面に大きな焼土塊が残されているため、何らかの作業場である可能性もあるが、台石と思われる平石が出土している以外にはその作業内容を考える根拠に乏しく、本遺構の性格を推定するのは困難である。

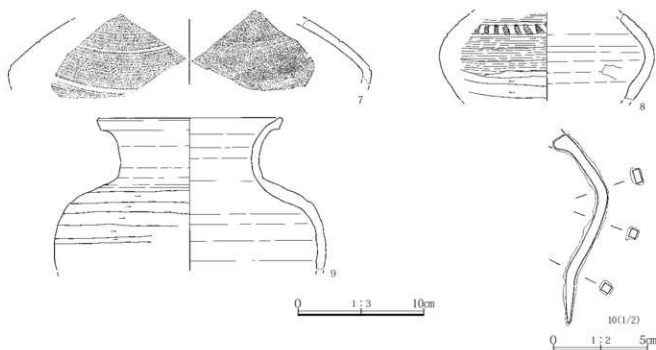
## 1区10号住居(第19・20図、第12表、PL. 5-4～6, 31)

1区中央東側にある。大部分が調査区外であり、調査区内にかかるのは西隅付近のわずかな部分である。

位置 X=63434～437、Y=-90002～004。重複遺構 1区3号住居と重複。本住居が古い。形状 西隅付近のわずかな部分しか調査できていないので不明であるが、隅部はやや鋭角に交っており、全形は台形に近いと思われる。主軸方位 周囲の他の住居と同様に竪が南東壁にあると仮定して、南西壁に平行の方向を計測するとN-102°-Eである。規模 調査区にかかるのは、最大で1.67×1.78mである。床面積 調査区内で計測すると、1.36㎡である。壁高 南西壁の1区3号住居と重複していない部分では、12～19cm残っていた。床面 ほぼ平坦である。柱穴・竪・貯蔵穴・周溝 調査区内では確認できなかった。掘方 床面よりも全体に2～10cm深い。細かい凹凸はあるが、ほぼ平坦に掘られている。遺物 小面積の調査にも関わらず、比較的多くの遺物が出土した。掲載したのは土師器小型甕2点、同甕1点、須恵器蓋2点、同盤1点、同壺2点、



第19図 1区10号住居断面図、出土遺物(1)



第20図 1区10号住居出土遺物(2)

同壘1点、鉄釘1点である。これらは調査区内に散在していた。床面からやや浮いた高さから出土したものが多いが、6の土師器壘、9の須恵器壘は床面から出土している。その他小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類17点、同壘・壺類58点、須恵器杯・椀類8点、同蓋類8点、同高杯・小型壺類2点、同壘・壺類10点がある。 **時期・所見** 出土遺物から時期は7世紀第4四半期と考えられる。西隅付近のわずかな面積の調査にとどまったので詳細は不明である。

**2区1号住居** (第21・22・23図、第12・13表、PL. 5-7・8, 31)

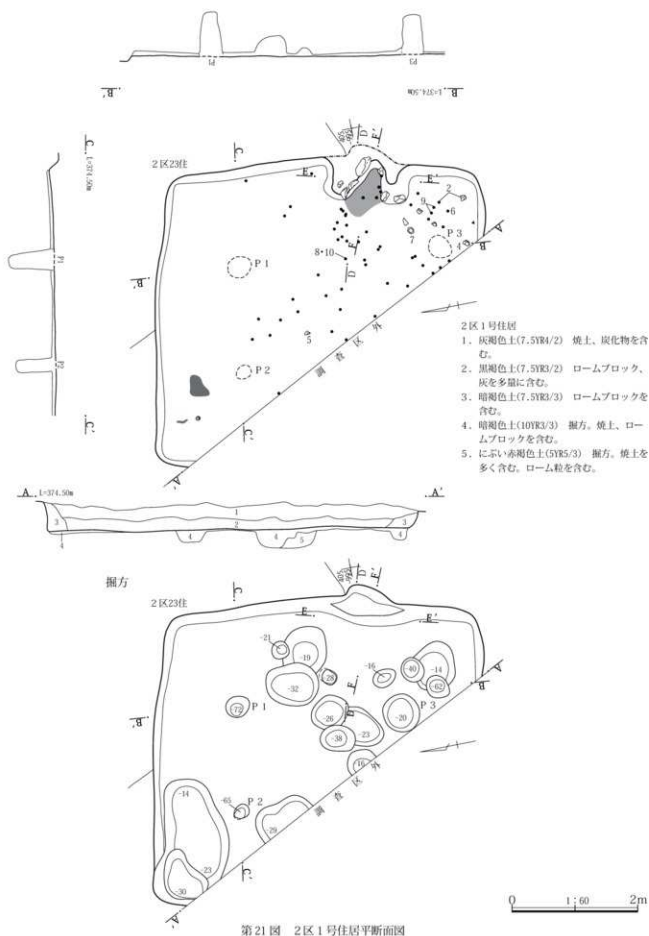
2区北半部西側にある。西側1/3程度が調査区外となるが、3つの隅が調査できたため、全体の形状を推定することができる。

**位置** X=63403~410, Y=-89995~90000。 **重複**

**遺構** 東側に2区23号住居が重複する。本住居が新しいことは平面で確認した。 **形状** 調査区外となる部分があるが、調査区内には3つの隅が入っており、方形であることは明らかである。ただし主軸方向がやや短いので、全体としては横長の長方形になる。 **主軸方位** 北辺の方位を計測するとN-103°-Eである。 **規模** それぞれ調査区内になっている部分を計測すると、主軸方向が4.65m、それと直交する方向が5.10mである。 **床面**

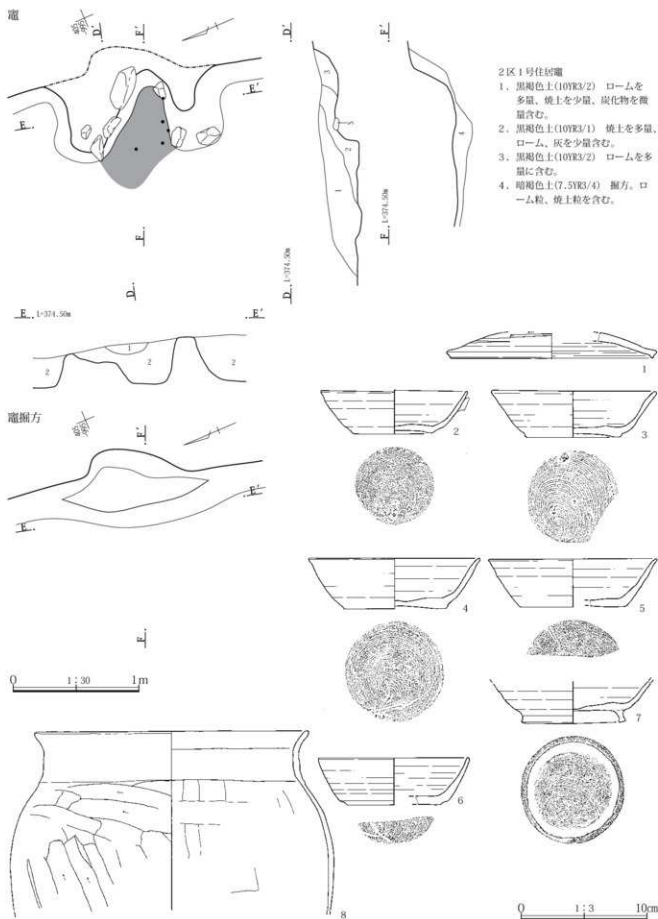
**積** 調査できた部分のみを計測すると14.75㎡である。床面の長さ・幅は、住居規模を計測したところと同じ箇所計測すると主軸方向が4.44m、それと直交する方向が4.92mなので、それから全体の床面積を単純計算すると21.84㎡となる。 **壁高** 11~48cmである。南端部付近がよく残り、逆に北側は上部を削平されているらしい。

**覆土** 大部分は灰褐色土、黒褐色土で埋没しているが、そのうち黒褐色土(2層)に灰を多量に含んでいるのは注意すべき点である。後述するように、床面には量は少ないものの炭化材がみられ、焼土が散っている部分もあるので、それらを併せ考えると住居廃絶後に上屋を燃やした可能性が考えられるからである。ただし、炭化材の出土は多くないので断定はできない。 **床面** 緩やかな起伏はあるがほぼ平坦である。北西隅の床面には炭化材がみられたが、形状を保つものはなかった。南半部には部分的に焼土が散っていた。 **柱穴** 床面では確認できなかったが、掘方調査の際、柱穴と思われるピットが3基見つっている。位置からみてこれらが主柱穴になるものと考えられ、本来床面から掘られていたものであろう。P3は南壁に近すぎるようにみえるが、これは竈が南寄りにあることが影響した配置ではなかろうか。3基とも深く、しっかりとした柱穴である。各ピットの計測値は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)である。長径と短径

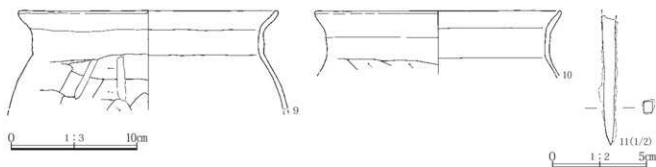


第21図 2区1号住居平面断面図

第3章 調査の成果



第22図 2区1号住居窟平面図、出土遺物(1)



第23図 2区1号住居出土遺物(2)

は掘方底面で計測しているが、深さは床面から計測した数値である。

P 1 39×34×72 P 2 26×20×65

P 3 40×35×62

各ピット間の長さは、ピットの心一線で計測してP 1—P 2が1.68m、P 1—P 3が3.20mであり、その配置はかなり極端な長方形となる。竈 東壁の南寄りにある。ほぼ全体が住居内にあり、煙道の住居外への張り出しはごく少ない。規模は全長67cm、幅135cm、焚き口部幅60cmである。竈の軸方向は住居に対してやや斜めになっており、計測するとN-115°-Eである。袖の先端から燃焼部にかけては、竈の壁に沿って磔が置かれていた。磔の間隔は開いており、石組みというほどではない。竈の袖を構築する際に壁の補強として置かれたものと考えられる。竈内部の土には焼土を多く含み、燃焼部にも焼土が顕著にみられたので、よく使用されていたものと思われる。貯蔵穴 床面では確認できなかった。掘方でも土坑状の凹みは多く見られたが、貯蔵穴と特定できるようなものはなかった。周溝 確認できなかった。

掘方 竈前から中央部付近と、北西隅付近に土坑状の凹みが多数みられる以外は、全体に0~7cm、ほぼ平坦に掘られている。土坑状の凹みは床面からの深さが14~38cmあり、壁は急傾斜に掘られているので、粗掘りの際に無意識にできたものではなく、何らかの意図をもって掘られたものと思われる。しかし、A-A'セクションにかかるもののように、埋土の下部に多量の焼土を含んでいて注意を引くものもあるが、用途を特定できるような痕跡はみられなかった。遺物 竈前から中央部付近にかけて、多数の遺物が出土している。ほとんどは小破片となっていたが、ある程度大きな破片は、竈右側にあたる住居南東隅に多い傾向がある。掲載したのは須恵器

杯5点、同椀1点、同蓋1点、土師器甕3点、鉄釘1点である。これらのうち、6の須恵器杯、8と10の土師器甕は床面から、3の須恵器杯は掘方から出土した。その他に小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類22点、同高杯類1点、同甕・壺類525点、須恵器杯・椀類50点、同蓋類10点、同甕・壺類10点がある。時期・所見 住居の時期は出土遺物から9世紀第2四半期と考えられる。主軸方位や規模、竈の位置などには他に類似した住居が多く見られるので、その点では本遺跡で調査された竪穴住居のなかでは典型的なものといえることができる。

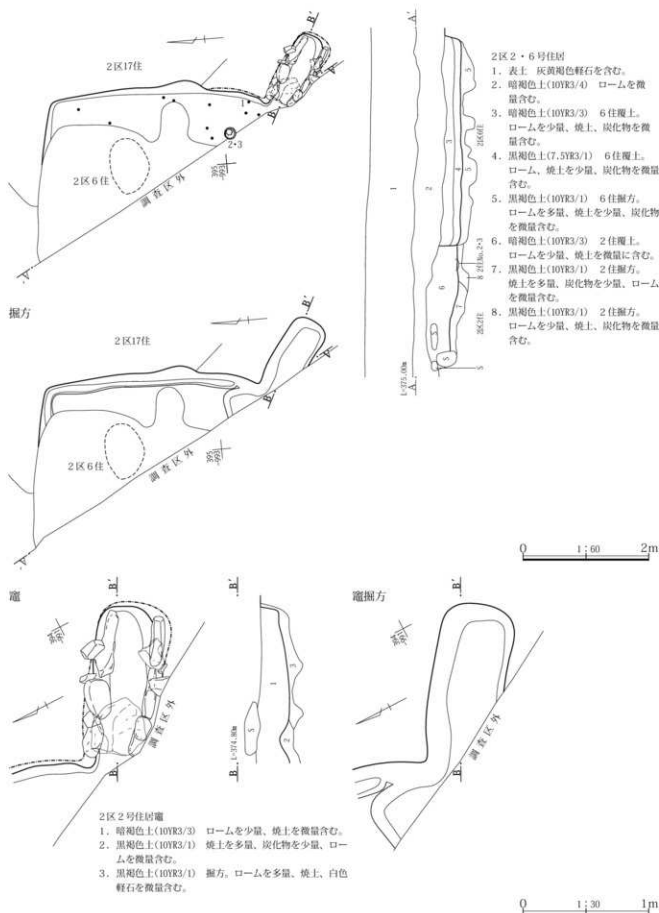
#### 2区2号住居(第24・25図、第13表、PL. 6-1~5.31)

2区中央西側にあり、大部分が調査区外となる。内側に2区6号住居が重複しているが、調査当初にはその事実気づかず同時に発掘してしまったため、一部遺物が混在してしまった。

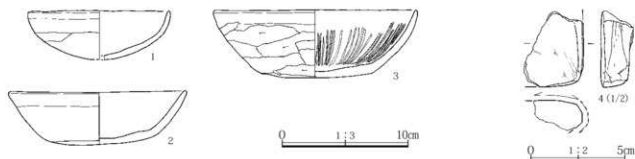
位置 X=63393~399、Y=-89991~89995。重複

遺構 内側に2区6号住居がすっぽり入り込む形で重複している。断面(A-A'セクション)に明らかのように、本住居が古い。また、北東部は2区17号住居と重複している。本住居が新しいことは平面で確認した。竈の先端には2区1号溝が重複するが、本住居が新しい。形状

大部分が調査区外となるが、東壁と北壁がほぼ直線的にのび、北東隅も直角に近い角度で交わっていることから、全体の形状は方形であると思われる。竈は調査した範囲の南端にあるが、この竈が住居全体のどの位置になるのかははっきりしない。竈の向きが住居とかなり異なり、また、その付近の壁が内側に曲がっていることからみると、ここが住居の南東隅である可能性が考えられるが、後述するピットが柱穴だとすると、その柱穴の位置



第24図 2区2号住居平断面図、竪断面図



第25図 2区2号住居出土遺物

と比べて南壁が近すぎることになり、とすれば東南隅はさらに南側にあることになる。そのため、全体の形は方形と推定されるものの、竈の位置を含めた全形・大きさは不明とせざるを得ない。**主軸方位** わずかな部分からの推測であるが、竈が東向きについているので、主軸方位は東西方向と思われる。そのため、東壁と直交する方向を計測するとN-93°-Eである。**規模** 調査区にかかっている部分を計測すると、主軸方向の長さは最大で2.96m、それと直交する方向は同じく3.85mである。

**床面積** 調査区にかかっている部分のみで計測すると、2区6号住居で破壊されている部分を復元して5.00㎡である。**壁高** 16～28cmと残りがいいが、調査区境の土層断面(A-A'セクション)をみると、竈付近の覆土は最大51cmの深さがあるので、本来の壁高はそれ以上あったことになる。**覆土** 焼土を微量含む暗褐色土で埋没している。覆土はこの1層のみなので、短期間に人為的に埋められた可能性が考えられる。**床面** 調査区内においても、大部分を2区6号住居に壊されているため、床面は周辺部のわずかな面積しか残っていない。床の表面はほぼ平坦である。**柱穴** 床面の調査では確認できなかったが、2区6号住居の掘方調査の際に見つかったピットは本住居の柱穴である可能性がある。このピットは6号住居掘方底面で計測して長径88cm、短径62cmの大きさの不整な楕円形で、深さは本住居の床面から約80cmである。**竈** 東壁にあり、調査範囲の南端にかかっている。袖がみられず、煙道が長く住居外にのびる独特の形態で、煙道の長さは134cm、幅は中央付近で50cmである。この煙道の向きはN-117°-Eであり、住居の方向とは大きく異なる。両側面の壁面には礫が貼り付けられたように並んでいる。礫は長さ20～55cmの円礫・角礫で、北側に3個、南側に4個置かれ、一部2

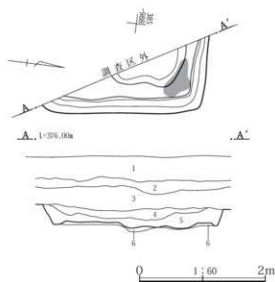
段になり、平坦面を内側に向けている。確認面では笠のような形状の石(長径56cm、短径40cm、厚さ12cm)がのせられた状態で出土した(PL. 6-2)が、これが原位置を保っているとすれば、天井部も石で覆われ、底面を除く三方が石で囲まれていた可能性が考えられる。しかし、天井部に残っていた石は1個だけであり、煙道のすべてを覆っていたかどうかは不明とせざるを得ない。また、この石が天井部にのせられていたのだとすると、竈本体は住居内にあったことになるが、明確な袖は確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。**周溝** 床面では確認できなかったが、掘方の調査で東壁・北壁にめぐっていることが確認できた。調査できた範囲にはすべてみられるので、周溝は本来全周していたものと思われる。幅は掘方底面で計測すると10～16cmであり、深さは床面から7～12cmなので、かなりしっかりとした周溝である。**掘方** 北東隅近くはほとんど掘方がなく地山をそのまま床面としている部分もあるが、その他の部分は5～18cm掘られ、特に竈の前面は土坑状に10～20cm深く掘られている。**遺物** 比較的多く出土した。掲載したのは土師器杯3点と砥石1点である。1の杯は竈左脇の床面から出土し、2・3の杯は竈左前の床面から重なった状態で出土した(PL. 6-4)。そのほか小破片で掲載できなかったものには土師器杯・椀類22点、同糞・壺類182点、須恵器杯・椀類9点、同蓋類1点、同糞・壺類2点があるが、前述の通り6号住居を同時に発掘してしまったため遺物が混在しているはずである。**時期・所見** 出土遺物から8世紀第1四半期の住居である。大部分が調査区外となるため詳細は不明であるが、竈の形態が目玉される住居である。



## 2区3号住居(第26図、Pl. 6-6・7)

2区南部にある。住居西側の大部分が調査区外となり、調査区にはごくわずかな部分がかかっているに過ぎない。

**位置** X=63383-387, Y=-89986-988。 **重複遺構** なし。 **形状** 方形と推定される。南端部の壁は内側に曲がっているように見えるので、この付近が南東隅になる可能性がある。 **主軸方位** 東壁の向きを計測するとN-7°-Wである。 **規模** 調査区内の部分では、南北の長さは2.57m、東西は1.30mである。 **床面積** 調査区内の部分の計測すると1.35㎡である。 **壁高** 16~26cm。 **覆土** 黒褐色土で埋没している。 **床面** 中央から北側にかけて浅く凹むなど、床面としては不明瞭である。北東隅付近には焼土が散っていた。 **柱穴・炉・竈・貯蔵穴** 確認できなかった。 **周溝** 調査できた範囲には全周する。幅12~18cm、深さ4~11cmである。 **掘方** 全体にごく薄く存在する。 **遺物** 土師器・甕類の小破片が1点出土しているだけであり、掲載できる遺物はない。 **時期・所見** 1点だけ出土している土師器は5~6世紀のものであるが、小面積の調査にとどまったので、住居の時期は確定できない。



2区3号住居

1. 表土 耕作土。As-8埋土。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色火山灰を含む。
3. 黒色土(10YR2/1)
4. 黒褐色土(10YR2/2) 住居覆土。黄褐色軽石を含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 住居覆土。ロームブロック、焼土を含む。
6. 暗褐色土(7.5YR3/4) 掘方。焼土、灰を含む。

第26図 2区3号住居断面図

## 2区4号住居(第27~29図、第13表、Pl. 7.31・32)

2区南端近くにあり、今回調査した竪穴住居では最も南に位置する。南西隅の一部を除いてほぼ全体が調査できた。柱が礎石建ちである点で注目される住居である。

**位置** X=63373-381, Y=-89977-983。 **重複遺構** 2区3号掘立柱建物と重複する。本住居が新しい。

**形状** それぞれの壁の方向はわずかに歪んでいるが、南北にやや細長い長方形である。 **主軸方位** N-96°-E。 **規模** 中央付近で計測して5.20×6.37mである。 **床面積** わずかに調査区外となる部分も復元して29.56㎡である。 **壁高** 上面が削平されているようで全体に浅く、7~20cmである。 **覆土** 焼土・炭化物・灰を含む暗褐色土1層で埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。北壁際、西壁際には炭化材の出土がみられるが、床面からはやや浮いた高さから出土しているため、住居が埋まり始めた頃に落ち込んだものである。 **礎石** 主柱と思われる位置に3個の平石が残り、これを礎石とする構造だと思われる。南西隅の柱の位置だけ石がなかったが、石が置かれていた痕跡と思われる凹みが見られることから、本来は4本とも礎石をもっていたものと思われる。礎石は平たい円礫であり、それぞれの大きさは次の通りである(長径×短径×厚さ、cm)。

礎石1 48×35×15 礎石3 33×28×14

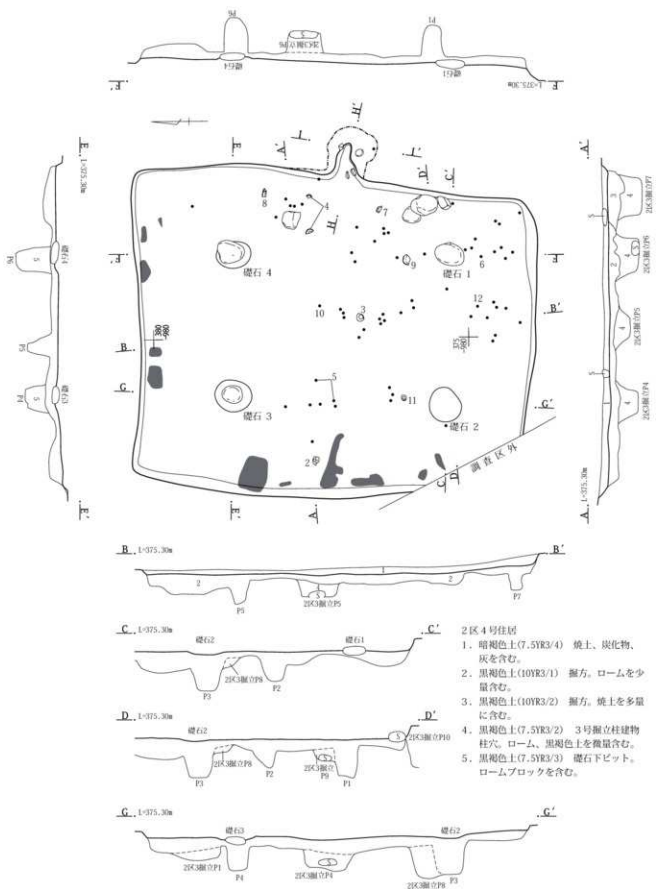
礎石4 44×36×12

礎石1と礎石3は上面が平らになるように据えられているが、礎石4は西側が下がり斜めになってしまっている。礎石の上面中央の標高は礎石1が375.09m、礎石3が374.98m、礎石4が374.96mであり、緻密には揃えられていない。礎石2の位置には径50~55cmの浅い凹みがあり、ここに石が置かれていたのであろう。柱間は礎石の心一線で計測して1と4の間が3.53m、3と4の間が2.26mであり、かなり長方形の配置となる。 **柱穴** 床面の調査では確認できなかったが、掘方の調査で礎石の下も含めて9基のピットが見つかった。それぞれの大きさ・深さは以下の通りである(長径×短径×深さ、cm)。長径、短径は掘方底面で計測し、深さは床面からの深さを計測した。

P 1 40×38×63 P 2 46×41×46

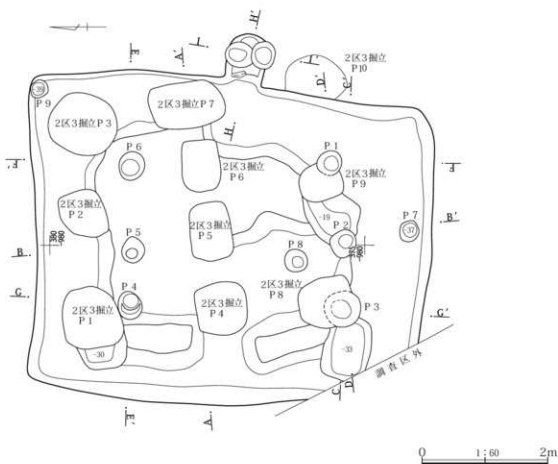
P 3 (58)×58×64 ( )内は推定長

P 4 45×38×55 P 5 43×36×49

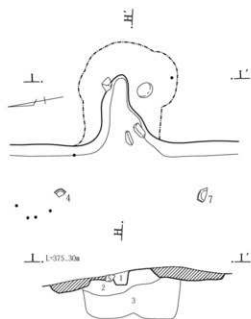


第27図 2区4号住居平面図

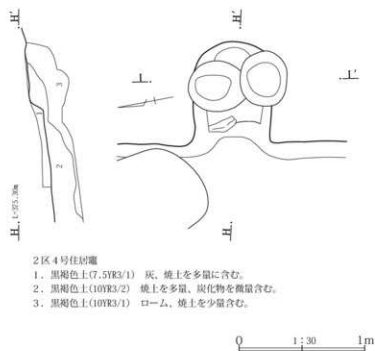
掘方



竈



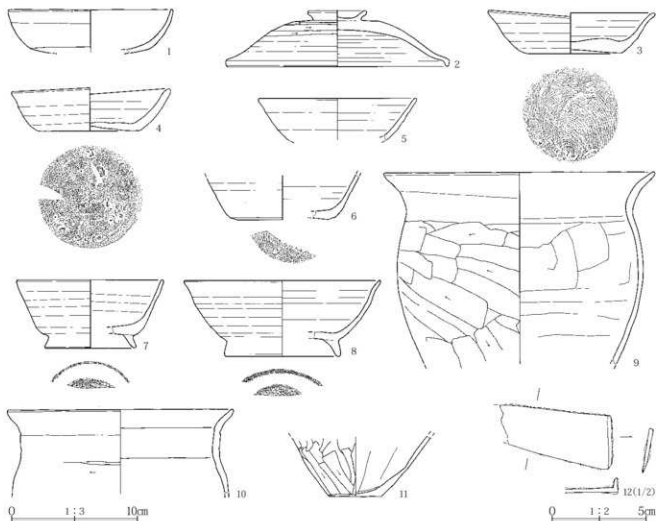
竈掘方



2区4号住居竈

1. 黒褐色土(7.5YR3/1) 灰、焼土を多量に含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土を多量、炭化物を微量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 口一ム、焼土を少量含む。

第28図 2区4号住居掘方平面図、竈断面図



第29図 2区4号住居出土遺物

P 6 45×41×68

P 7 35×30×37

P 8 38×36×55

P 9 30×25×39

これらのうち、P 1～6が主柱穴と思われる。P 1、P 3、P 4、P 6の4基は礎石の真下に掘られているので、それを測る時期のものであることが明らかであり、つまりこの住居では礎石による4本柱の時期の前に、掘立柱による6本柱の時期があったことになる。P 2、P 5はそれぞれP 1～P 3、P 4～P 6の中間にあるが、中央よりもやや西側にあり、各柱間は、心一心で計測してP 1～P 2が1.26m、P 2～P 3が1.10m、同様にP 5～P 6が1.25m、P 4～P 5が1.08mである。また、P 2はP 1とP 3を結ぶ線よりもやや南側に掘られており、柱筋は揃っていない。P 7～9の役割は不明で、本住居に伴わないことも考えられるが、P 7は南壁のほぼ中央、P 9は北東隅にあるので、住居の何らかの施設に関わるものではなかろうか。竈 東壁のほぼ中央にある。周

辺に攪乱が入り、残りが悪い。現状では袖は見られず、全体が壁外に張り出す形態になっている。全長62cm、焚き口部の幅は54cmである。覆土や掘方には焼土を多く含むので、よく使用されていたものと思われる。貯蔵穴・周溝 確認できなかった。掘方 掘方底面は独特の形状である。壁と主柱穴との間の幅1～1.2mを深く掘り、中央部をやや高く残すほか、西壁に沿って南北に2ヶ所四角く掘り残している。この四角い掘り残しは長さ120～140cm、幅90cm程度で、さらに、それぞれ南北の外側に当たる部分に四角い土坑を掘っている。なぜこのように掘っているのか、その意図は明らかにはしがたい。遺物 出土した遺物が多い。特に竈周辺から住居中央、南東部にかけて散らばるように出土している。掲載したのは土師器杯1点、須恵器蓋1点、同杯4点、同碗2点、土師器甕3点、鉄鎌1点である。その他小破片で掲載できなかったものには、土師器杯・碗類28点、同高杯類1点、

同表・壺類607点、須恵器杯類65点、同蓋類3点、同表・壺類15点がある。 **時期・所見** 時期は遺物から9世紀第1四半期と考えられる。主柱を掘立柱式から礎石式に変更して建て替えている点で注目される住居である。

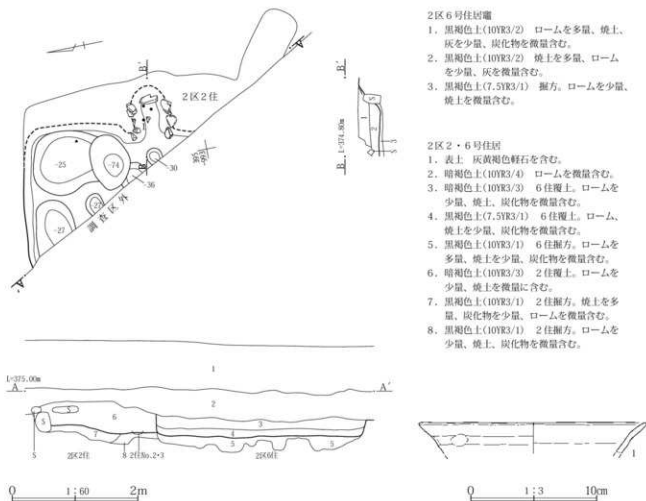
**2区6号住居**(第30図、第13表、PL. 8-1・2)

2区中央西側にあり、半分以上が調査区外となる。2区2号住居の内側にはまり込む形で重複しているが、調査時には重複に気がつかず、同時に発掘してしまったため、壁や床面の状態が一部不明確となり、遺物も混乱してしまった。

**位置** X=63395~399, Y=-89991~995。 **重複遺構** 2区2号住居の内側にはまり込む形で重複している。断面図に見るように、本住居が新しい。 **形状** 隅部は北東隅しか調査区内に入らないが、その形状から方形と推定される。 **主軸方位** N-101°-E。 **規模** 調査区にかかっている部分では2.26×2.73mである。

**床面積** 調査区内の部分で計測すると2.61㎡である。

**壁高** 調査区境で計測した断面図を見ると、東壁の竈南側の位置で35cmの高さがある。 **柱穴** 調査区内では確認できなかった。掘方底面で竈の北前から見つかったピットは、先述の通り、2区2号住居の柱穴である可能性がある。 **竈** 東壁にある。調査時には掘りすぎてしまったが、焼土と礫の存在から竈と判断した。礫の位置と断面図から形状を復元して計測すると、全長96cm、焚き口幅48cmの規模だと思われる。煙道の奥に28×28cmの平石を置き、袖から燃燒部にかけては長さ10~20cmの礫を芯として作っているらしい。袖は短く、燃燒部の大部分は壁外に張り出す形である。 **貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** 本住居の掘方は2区2号住居よりも深かったため、これによって住居の外形を大体つかむことができた。土坑状の凹みも含めて凹凸が激しい。それをロームを多量に含む黒褐色土で埋め戻して床面とする。 **遺物** 遺物の出土は少ないが、小破片は2区2



第30図 2区6号住居平面断面図、竈断面図、出土遺物

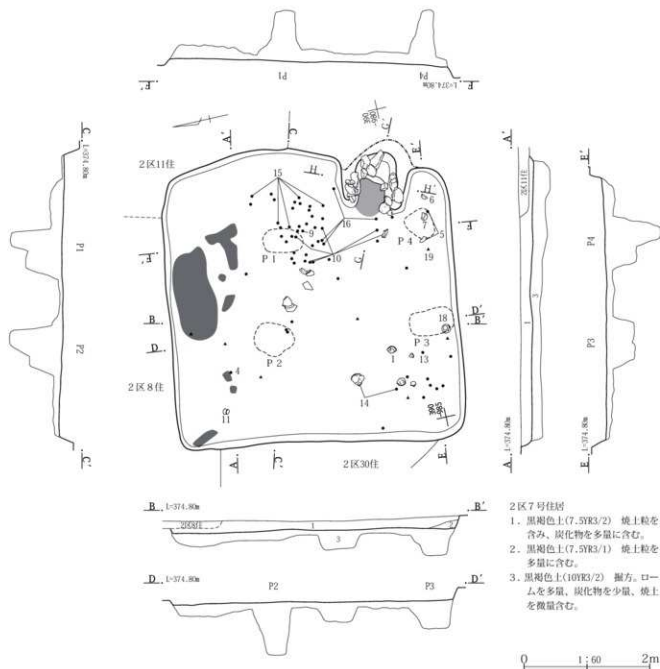
号住居のものに混入してしまったと思われる。掲載したのは竈内から出土した土師器甕1点である。その他小破片で掲載できなかったものに土師器杯・椀類2点、同表・甕類10点がある。 **時期** 遺物から9世紀後半と考えられる。

### 2区7号住居(第31～35図、第13・14表、PL. 8-3～5, 32・33)

2区中央南側にある。調査区の中央にあるため、全体を調査することができた。出土遺物に大きな破片が多く、

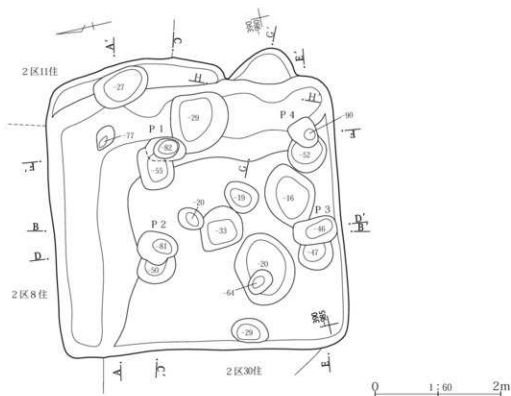
その中には中空円面硯や転用硯のような注目すべきものも含まれている。

**位置** X=63389～395, Y=-89980～986。 **重複遺構** 北側に2区8号・11号・30号住居が重複する。本住居は8号・11号よりも古く、30号よりも新しい。 **形状** 東壁が湾曲しているなど歪みが目立つが、正方形に近い方形である。ただし、後述するように、東壁の北半部は拡張された可能性がある。 **主軸方位** N-100°-E。 **規模** 中央付近で計測して4.65×4.64mである。 **床面積** 19.06㎡。 **壁高** 他の遺構との重複がない

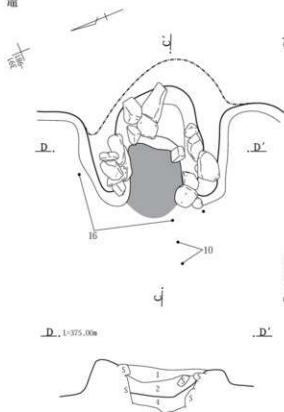


第31図 2区7号住居平面図

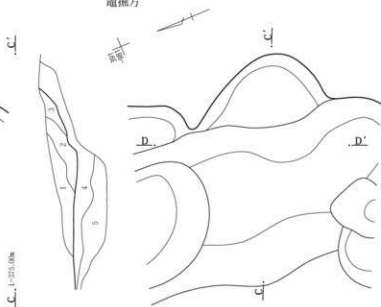
掘方



竈



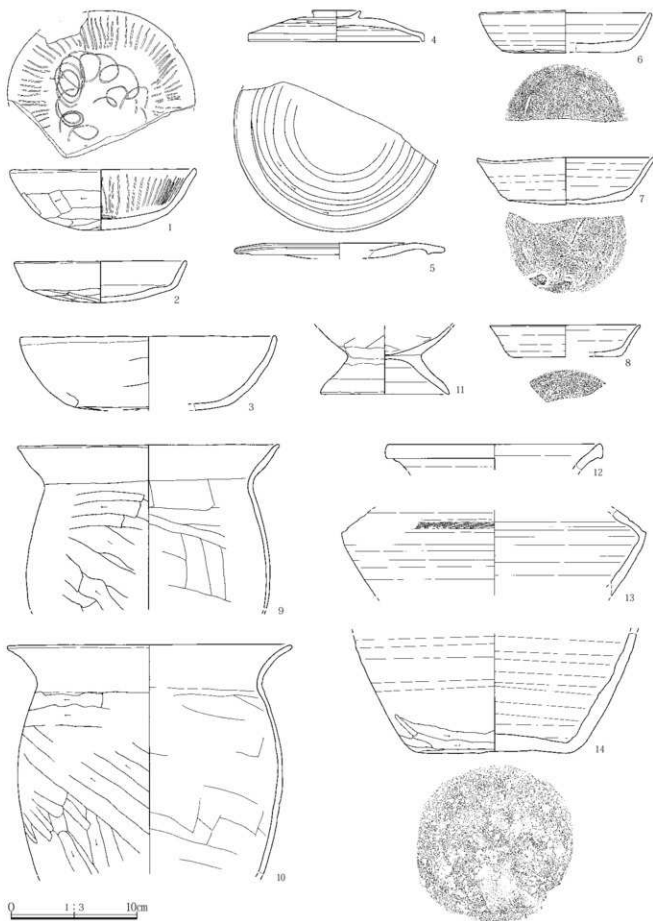
竈掘方



2区7号住居竈

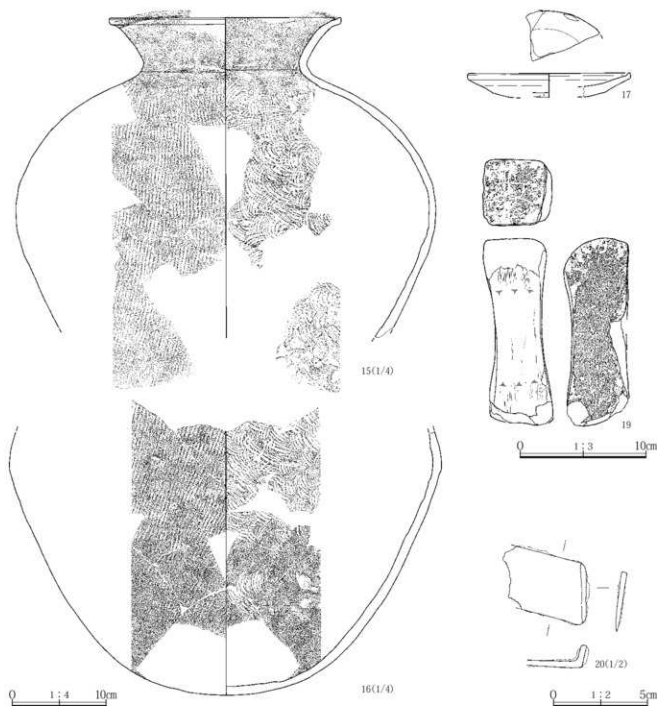
1. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土、灰を少量、炭化物を微量含む。
2. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土を多量、灰を少量、炭化物を微量含む。
3. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土を少量、灰、炭化物を微量含む。
4. 暗褐色土(7.5YR3/3) 掘方、焼土粒、炭化物を含む。
5. 黄褐色土(10YR5/8) 掘方、焼土粒、ローム粒を含む。

第32図 2区7号住居掘方平面図、竈平断面図



第33图 2区7号住居出土遗物(1)





第34図 2区7号住居出土遺物(2)

南側で計測すると、17～22cm。覆土 焼土と多量の炭化物を含む黒褐色土で埋没している。床面 ほぼ平坦である。北側には炭化材が広い範囲に散っていた。

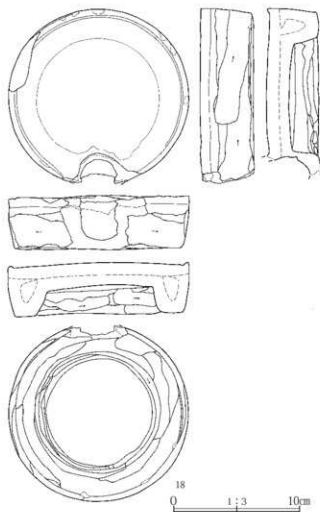
柱穴 床面では確認できなかったが、掘方の調査では深いピットが4基見つかっている。各ピットの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。長径と短径は掘方底面計測し、深さは床面から計測している。

P 1 (64)×(38)×80 ( )内は推定長

P 2 64×52×84 P 3 71×40×46

P 4 47×42×89

これらは本住居のものとするやや南側に寄りすぎているが、長方形に配置されていることからみても住居の主柱穴であると思われる。竈 東壁の南端近くにある。両袖が残り、煙道は住居外にわずかにのびる。全長96cm、幅118cm、焚き口幅は36cmである。竈の内側には長さ10～30cmの礫が多く見られるので、本来は石組み



第35図 2区7号住居出土遺物(3)

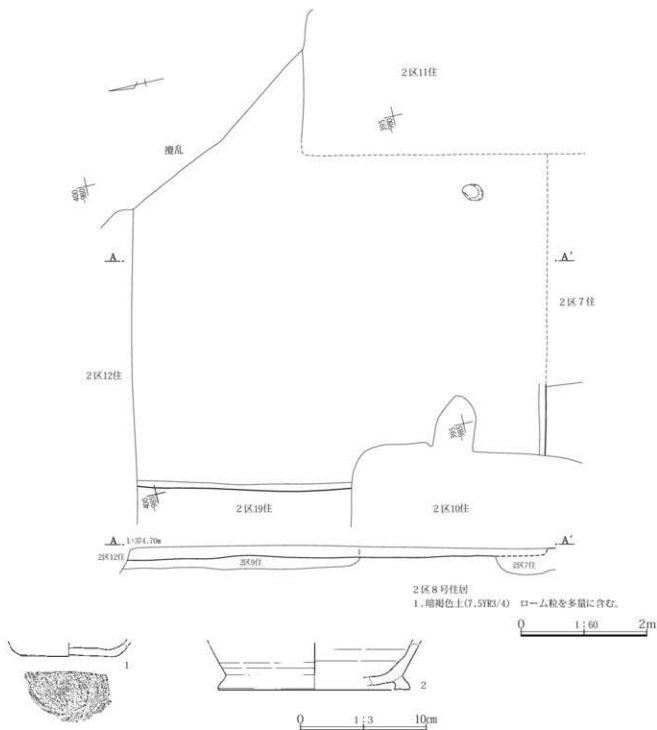
であった可能性がある。**貯蔵穴** 明瞭な貯蔵穴は確認できなかった。**周溝** 確認できなかった。**掘方** 全体に床面よりも5～17cm深い。東壁と北壁に沿っては幅約1mの範囲でさらに10cm前後深く掘っている。また、東壁の北半部には壁の内側に顕著な段差が見られる。この段差の位置・方向を他の辺と併せて見ると、外側の壁のラインよりも整った住居の形となり、さらに段差の方向がP1とP4を結んだ線とほぼ平行になる。そのため本来はここが住居の壁であり、その後東側に40～50cm拡張した可能性が強いものと思われる。**遺物** 出土遺物は比較的多い。掲載したのは土師器杯3点、同甕2点、同台付甕1点、須恵器蓋2点、同杯3点、同壺3点、同甕2点、同転用甕(蓋)1点、同円面甕1点、砥石1点、鉄鎌1点である。床面出土のものは少なく、大部分は床からやや浮いた高さから出土している。このうち、竪前と中央～東部に散布する破片は、土師器甕(9・10)と須

恵器甕(15・16)である。遺物の時期には、1・3・5～7・13のように8世紀第1四半期と思われるものと、2・4・8～11・14・17のように8世紀第4四半期と思われるものが混在しているが、前者は混入であろう。注目される遺物としては2点の甕がある。17は須恵器の蓋を利用した転用甕であり、18は中空円面甕である(カラー口絵)。中空円面甕は口の部分を欠いているが、その他の部分は完存している。径14.3cmの正円形であり、甕面は中央部がわずかに膨らみ、周囲をごく細い断面三角形の縁で囲っている。陸と海との顕著な区別はなく、縁の高さもきわめて低いので、甕面に水分を留めておくような構造になっていない。そのため溜められる墨汁はごくわずかであると考えられ、多量の文字の筆記には向かないと思われる。甕面の表面は摩耗して平滑になっており、墨痕もわずかに確認することができるので、実際に使用されていたものである。この甕面は厚さ7mm程度の粘土板で作られているが、注目されるのはその裏の構造である。粘土板の裏側にはドーナツ状の台が付けられ、その台が中空になっているのである。前述の通り口の部分は欠損しているため、その部分の形状は不明であるが、本来はここに小椀のようなものが付き、中空の部分に水を溜めていたものと考えられる。出土位置は南壁中央の壁際、P3の位置であるが、床面からは8cmほど浮いた高さからの出土であり、この住居に伴うものとは断定できない。その他小破片のため掲載できなかったものは、土師器杯・椀類23点、同高杯類8点、同甕・壺類156点、須恵器杯・椀類6点、同蓋類1点、同甕・壺類50点である。**時期・所見** 出土遺物には古いものも混在しているが、住居の時期は8世紀第4四半期と考えられる。北東部の一部を拡張していると思われるが、それを含めても柱穴の位置が南に寄りすぎているので、北側、西側への拡張も考えるべきかもしれない。

## 2区8号住居(第36図、第14表、PL. 8～6)

2区中央南側にある。多くの住居が重複する部分に位置するため壁のほとんどが破壊されて残りが悪く、全体の規模等は不明である。

**位置** X=63393～401、Y=-89978～986。**重複遺構** 2区7号、9号、10号、11号、12号、19号、30号住居、2区1号掘立柱建物と重複する。本住居は7号、9



第36図 2区8号住居平面断面図、出土遺物

号、19号、30号住居、2区1号掘立柱建物よりも新しく、10号、11号、12号住居よりも古い。調査の際には7号、9号住居との新旧を逆転して調査してしまい、その部分については本住居の壁・床面が失われてしまった。平面図はそれらを復元した状態である。形状 把握できた壁は南壁西半部の一部と、西壁中央の一部だけであるが、それらはほぼ直線的にのびているので、住居の全体の形

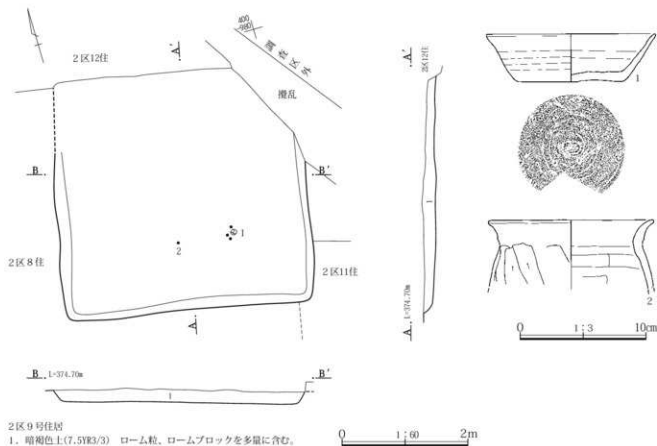
状は方形と考えられる。軸方位 竈等の位置が分からないので明確ではないが、西壁の方向を計測するとN-14°-Eである。規模 残存部分を計測すると、6.61×5.30mであり、各々それ以上の長さがあったはずである。床面積 不明であるが、上記の規模から単純計算すると少なくとも35㎡以上はある。壁高 前述の通り残っていた壁は南壁と西壁の一部であるが、ここでは8

～11cmの高さがある。**覆土** 覆土の最下層と思われる1層しか残っていない。ローム粒を多量に含む暗褐色土である。**床面** ほぼ平坦である。調査できた部分の南東部からは、26×35cmの平たい丸石が置かれたような状態で出土した。**柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。**掘方** 部分的に見られるが、大部分は地山を直接床にしていた。**遺物** 遺物はごく少なく、掲載できるのは須恵器杯1点、同壺の底部1点であり、前者は覆土から、後者は掘方から出土した。その他には小破片として土師器甕・壺類18点、須恵器甕・壺類2点が出土しているのみである。**時期・所見** 少ない遺物からみると、8世紀第4四半期～9世紀前半の住居と考えられる。重複が激しい場所にあるため、一部の壁と床面だけが調査できたのみであり、詳細は不明である。

### 2区9号住居(第37図、第14表、Pl. 8-7, 33)

2区中央にある。多くの住居が重複する部分に位置し、北側を新しい住居によって破壊されているほか、北東部は掘乱により破壊されている。

**位置** X=63395～400、Y=-89979～985。**重複遺構** 2区8号、11号、12号住居と重複する。本住居はそのいずれよりも古い。8号と11号は本住居よりも浅かったが、12号は深かったため、北側が大きく破壊されている。**形状** 北壁が2区12号住居に、北東部が掘乱に破壊されるが、残る部分の形状から見て全体に方形だったと思われる。**主軸方位** 竈が確認できないので主軸方位は確定できないが、北竈を想定して計測するとN-11°-Eである。**規模** 南北は3.78m以上、東西は4.03mである。**床面積** 残存部分を計測すると13.1㎡である。**壁高** 重複する住居に削られたところが多いが、11～39cmの高さで残っている。**覆土** ロームブロック、ローム粒を多く含む暗褐色土1層で埋没しており、人為的な埋没であると思われる。**床面** ほぼ平坦である。**柱穴** 確認できなかった。**竈** 確認できなかった。北壁にあったとすれば2区12号住居に破壊されたことになるが、本遺跡では北に竈をもつ住居は少ないのでその点でやや疑問がある。もともと存在しなかった可能性も考慮すべきであろう。**貯蔵穴・周溝** 確認できな



第37図 2区9号住居平面図、出土遺物

かった。遺物 遺物は少なく、掲載したのは須恵器杯、土師器甕が各1点の2点のみである。1の須恵器杯は住居南東部から、2の土師器甕は南部から、いずれも床面からやや浮いた高さから出土している。その他小破片で掲載できないものには、土師器杯・椀類3点、同甕・壺類46点、須恵器杯・椀類5点、同蓋類1点、同甕・壺類10点がある。時期・所見 時期は出土遺物から8世紀前半と思われる。竈や柱穴をはじめとした、住居に関わる施設が一切確認できなかったため、通常の住居として使用されていたものなのか、疑問が残る遺構である。

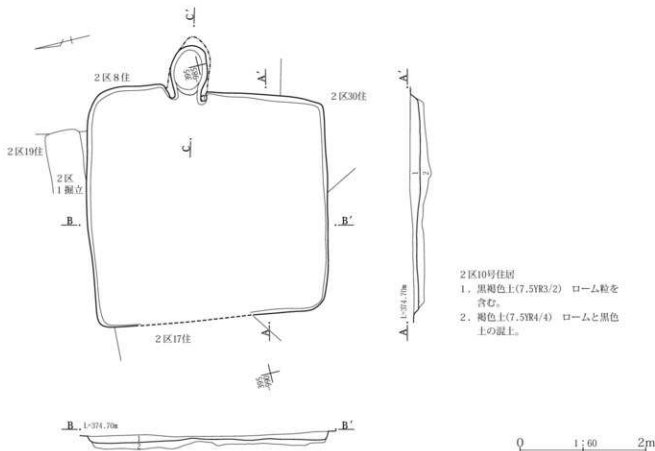
2区10号住居(第38・39図、PL. 9-1~3)

2区の中央付近にあり、多くの遺構と重複している。

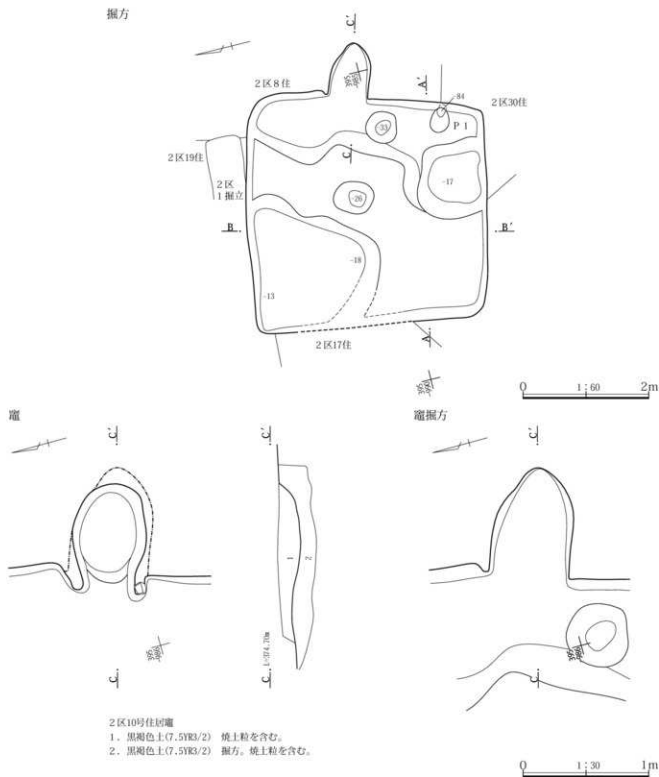
位置 X=63393~398, Y=-89984~990。重複遺構 2区8号、17号、24号、30号住居、1号掘立柱建物と重複している。本住居はそのいずれよりも新しいが、17号住居とは新旧を誤認して調査してしまった。平面図等は修正したものを掲載してある。形状 やや歪みがある方形である。主軸方位 N-102°-E。規模

中央付近で計測して3.60×3.84mである。床面積 12.81㎡。壁高 6~19cm。覆土 最下部のみが残る状態である。ローム粒を含む黒褐色土で埋没している。

床面 緩やかな起伏は見られるものの、ほぼ平坦である。柱穴 床面では確認できなかった。掘方の調査の際には、東壁の南側でピット(P1)が1基見つかっている。大きさは掘方底面で計測して長径40cm、短径29cm、深さは床面から計測して84cmである。穴は垂直ではなく住居外に向かって斜めに掘られている。深さがありしっかりとしたピットであるが、南東隅に近いという位置からみて本住居の柱穴とは思えない。本住居と関わるとすれば柱穴として使用されたものではなく、何らかの施設を支えるものであろう。竈 東壁中央やや北寄りにある。両袖が小さく、燃焼部は住居外に張り出している。大きさは長さ90cm、幅70cmである。袖は長さ20~28cm、幅16~22cm程度しかない。右側の袖の先端には径8cm程度の礫が残っていたが、芯材としてはやや小さすぎると思われる。竈の覆土は焼土を含んでいるもののその量は少なく、内部もあまり焼けていなかった。貯蔵穴・



第38図 2区10号住居平面図



第39図 2区10号住居掘方平面図、竪断面図

**周溝** 確認できなかった。**掘方** 全体的に凹凸があるほか、竪のある東壁沿いと北西隅付近をやや深く掘っている。それをロームと黒色土の混合土で埋め戻し床面とする。**遺物** 遺物は非常に少なく、掲載できるものはない。出土しているものはごく小さな破片ばかりであり、

土師器甕・壺類5点があるに過ぎない。**時期・所見** 出土遺物がごく少ないので時期を確定することはできない。8世紀第4前半期～9世紀前半と考えられる2区8号住居よりも新しいので、少なくともそれ以降のものである。

2区11号住居(第40・41図、第14表、Pl. 9-4・5)

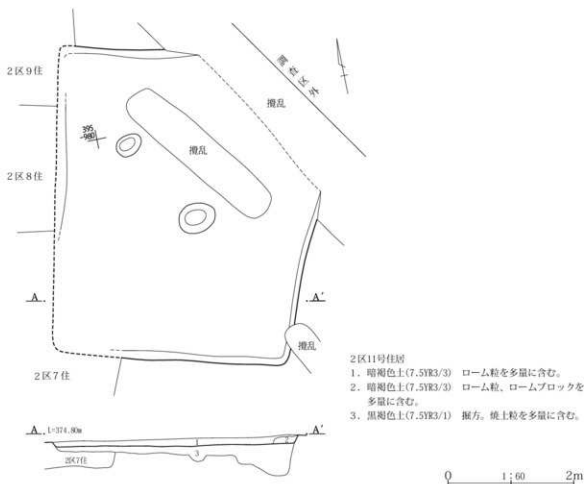
2区中央東寄りにあり、北東部が調査区外となる。西側に別の住居が重複するが、新旧を誤認して調査してしまい、その周辺の詳細が不明となってしまった。

**位置** X=63390~397、Y=-89976~982。**重複遺構**

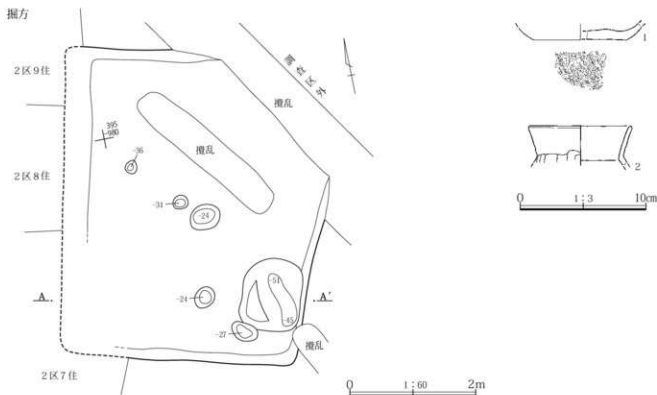
西側に2区7号、8号、9号の3軒の住居が重複する。本住居はそのいずれよりも新しいが、調査の際は新旧を誤ってこれらの住居を先に調査してしまった。平面図等は修正したものを呈示した。**形状** 東壁がやや歪んでいるが、南北にやや長い長方形になるものと思われる。

**主軸方位** 竈の位置が分からないので確定できないが、東壁にあると推定して計測するとN-103°-Eである。**規模** 上記の通り東西方向を主軸として計測すると、西壁を壊してしまっただため推定となるが、中央付近で計測して4.20mであり、それと直交する方向は4.94mである。**床面積** 西壁の部分を復元すると16.53㎡だが、東壁が歪んでいるので北東部を復元するのは難しい。規模を計測した位置で床の長さ・幅を計測するとそ

れぞれ4.00m、4.65mなので、単純計算すると18.60㎡となる。**壁高** 西壁は不明であるが、それ以外の部分では13~26cmである。**覆土** ローム粒を含む暗褐色土で埋没している。**床面** ほぼ平坦であるが、北東方向に向かってわずかに下がっている。南西隅と北東部との標高差は11cmである。床面には細長い攪乱が見られるほかに、中央付近に径40~60cmの凹みが見られるが、これらも上層からの攪乱であると思われる。**柱穴** 確認できなかった。**竈** 確認できなかった。2区10号住居と同様に東壁やや北側にあるとすれば調査区外となり、攪乱で削平されていることになる。**貯蔵穴** 確認できなかった。掘方底面では南東隅近くに土坑状の凹みが見られたため、この付近に存在した可能性は残る。ただし、この凹みは貯蔵穴と推定できるほど整った形状のものではない。**周溝** 確認できなかった。**掘方** 全体に床面から10cm以上深く掘られている。特に南東隅付近は1.15×0.95mの大きさで土坑状に掘られ、そこは床面から最大で50cmの深さがある。これらを焼土粒を多く



第40図 2区11号住居平面断面図



第41図 2区11号住居掘方平面図、出土遺物

含む黒褐色土で埋め戻し、床面としている。遺物 出土遺物はきわめて少なく小破片ばかりである。掲載したのは土師器甕1点、須恵器杯1点である。そのほかは土師器甕・壺類の小破片が15点出土しているにすぎない。

時期・所見 出土遺物からみて9世紀中頃以降のものと思われる。竈をはじめとした施設が確認できなかったため、詳細は不明である。

#### 2区12号住居(第42図、第14表、PL. 9-6・7)

2区中央東側にある。調査区内にかかるのは南西隅とその周辺だけであり、大部分が調査区外となるほか、北側が新しい住居で壊されている。

位置  $X=63399 \sim 404$ ,  $Y=-89980 \sim 986$ 。重複遺構 北側に2区13号住居、南西隅から南側にかけて2区8号、9号、19号住居、1号掘立柱建物と重複する。本住居は2区13号住居よりも古く、その他の遺構より新しい。形状 一部分の調査なので不明ではあるが、南西隅はほぼ直角であり、南・西壁は直線的にのびるので、全体の形は方形と推定される。主軸方位 竈の位置が分からないので不明であるが、東側にあると考えて東西方向を主軸と推定し、南壁の方位を計測するとN-

$102^{\circ}-E$ である。規模 残存している部分を計測すると、主軸方向は5.45m、それと直交する方向は3.60mであり、各々それ以上の長さがある。床面積 残存部分を計測すると11.11 $m^2$ である。壁高 10～32cmである。南壁は残りがよく、26～32cmある。覆土 ロームを含む黒褐色土と褐色土で埋没する。床面 緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦である。柱穴 床面では確認できなかったが、掘方底面では3基のピットを確認している。P1とP2が南西隅の主柱穴である可能性がある。各ピットの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。長径・短径は掘方底面で計測し、深さは床面から計測している。

P 1 76×42×43      P 2 35×34×47

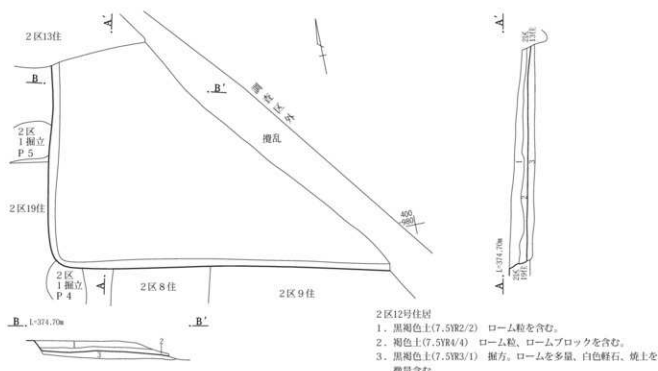
P 3 31×30×31

竈 調査区内では確認できなかった。ほかの住居と同様東壁にある可能性が高いと思われるが、断定はできない。

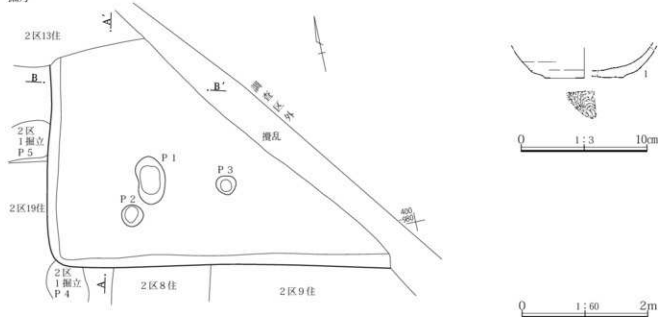
貯蔵穴・周溝 確認できなかった。掘方 床面よりも全体に4～17cm深く、底面には細かい凹凸がある。それをロームを多量に含む黒褐色土で埋め戻して床面とする。遺物 遺物は少なく、小破片ばかりである。掲載したのは須恵器杯1点のみである。その他小破片のた



### 第3章 調査の成果



掘方



第42図 2区12号住居平面断面図、出土遺物

めに掲載できないものには、土師器杯・椀類2点、同裏・壺類13点、須恵器杯・椀類20点、同裏・壺類1点がある。

**時期・所見** 出土遺物が少ないが、時期は9世紀後半と考えられる。南壁の長さから見てかなり大型の住居であると思われるものの、一部の調査にとどまったので詳細は不明である。

**2区13号住居**(第43図、第15表、PL. 9-8, 33)

2区中央東側にある。12号住居同様、調査区内にかかるのは南西隅とその周辺のみであり、全体のごく一部の調査にとどまった。

**位置** X=63403~407, Y=-89983~987。 **重複遺構** 南側に2区12号住居が重複する。本住居が新しい。

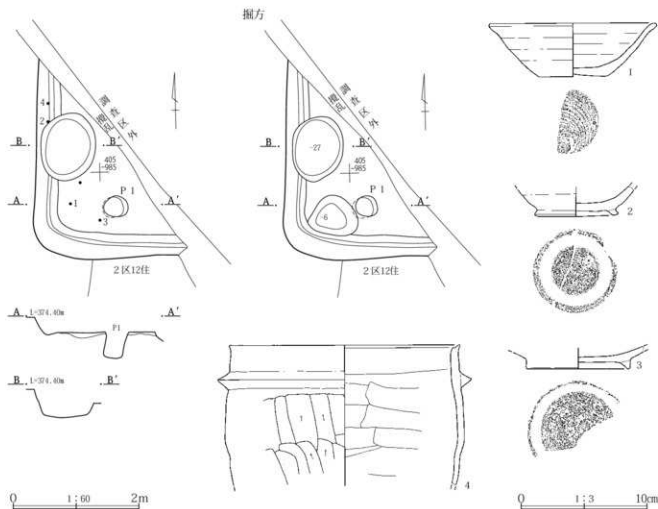
**形状** 南西隅だけの調査であるが、南壁、西壁ともほぼ直線的で、それがほぼ直角に交わるため、全体の形状は方形であると思われる。 **主軸方位** わずかな面積の

調査なので不明であるが、ほかの住居と同様竈が東壁にあると考えて、東西方向が主軸と考えられる。正確な方位を計測するのは難しいが、西壁に直交する方位を計測すると $N-93^{\circ}-E$ である。**規模** 調査区内の部分を計測すると、東西方向は2.47m、南北方向は3.16mである。**床面積** 調査区内の部分を計測すると3.16 $m^2$ である。**壁高** 24～31cmであり、比較的残りがよい。**床面** ほぼ平坦である。西壁際にある土坑は長径110cm、短径88cmの楕円形で、深さは27cmである。底面は平坦で整った形状であるが、位置からみて貯蔵穴とは考えられず、その性格は不明である。**柱穴** ピットは南東隅で1基が見つかっている。やや斜めに掘られていることと位置が東側に寄っていることが疑問であるが、これが支柱穴である可能性は高いものと思われる。その大きさは以下の通りである(長径×短径×深さ、cm)。

P 1 38×34×40

**竈** 確認できなかった。**貯蔵穴** 確認できなかった。

先述のように、西壁際で見つかった土坑は貯蔵穴ではないと思われる。**周溝** 床面では確認できなかったが、掘方の調査では壁際に溝がめぐっているのが見つかったので、本来全周していたものと思われる。この溝の幅は掘方底面で計測して20～25cm、深さは床面から計測して1～5cmである。**掘方** 全体に5～10cm掘られているのみであるが、凹凸が目立つ。南西隅は床面から6～10cm深く土坑状に掘られている。**遺物** 遺物は多くないが、4点を掲載できた。須恵器杯1点、同椀1点、同羽釜1点、黒色土器椀1点である。3の黒色土器椀は床面から、その他の遺物はやや浮いた高さから出土している。その他小破片で掲載できないものには、土師器杯・椀類2点、同壺・壺類9点、須恵器杯・椀類6点、同壺・壺類4点、灰陶陶器杯・椀類4点、同壺・壺類1点がある。**時期・所見** 小面積の調査にとどまったので詳細は不明であるが、時期は出土遺物から10世紀第1四半期と考えられる。本遺跡の中では最も新



第43図 2区13号住居断面図、出土遺物

しい時代の住居のひとつである。

**2区14号住居**(第44～46図、第15表、PL10-1・2,33)

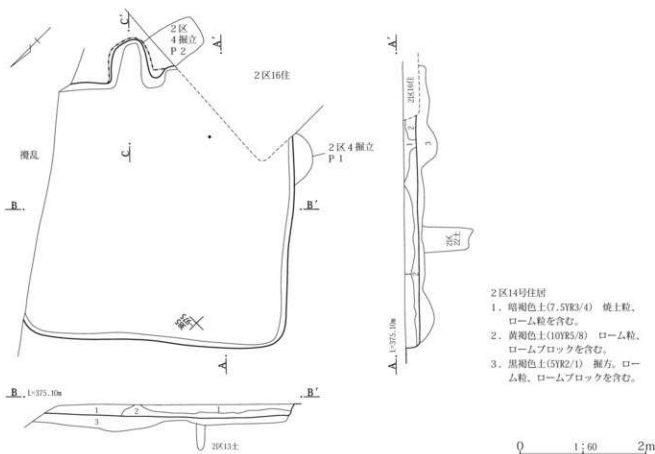
2区南部の東側にある。北東壁が調査区域に沿った攪乱によって破壊されているが、その他の大部分は調査することができた。

**位置** X=63381～387、Y=-89970～977。 **重複遺構**

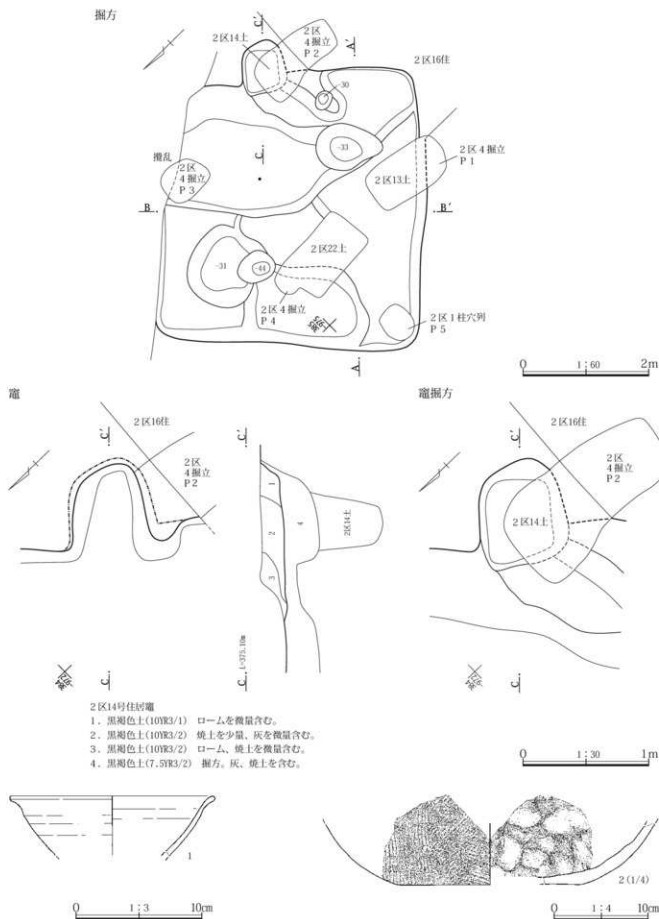
2区16号住居、4号掘立柱建物、1号柱穴列、13・14・22号土坑と重複する。本住居は16号住居よりも古い。他の遺構は掘方埋土の下から見つかっていることから、本住居の方が新しい。なお、調査時には16号住居との新旧関係を誤認してしまったが、平面図などは修正したものを掲載した。この16号住居は本住居の床面よりも深い。 **形状** やや歪みがあるが正方形に近い方形である。 **主軸方位** N-135°-Eである。 **規模** 主軸方向は中央付近で計測して4.42mである。それと直交する方向は北東壁が攪乱で削平されているが、床面や掘方の範囲からみて4.25mと推定される。 **床面積** 攪乱によって削平された北東壁沿

いの部分と、2区16号住居に破壊された部分を推定復元して計測すると16.81㎡である。 **壁高** 11～23cmである。 **覆土** 暗褐色土と黄褐色土で埋没しているが、下層の黄褐色土がブロック状になるなど不自然な堆積状態の部分が見られ、人為的埋没の可能性が強いのではないかとと思われる。 **床面** 部分的に緩やかな起伏はあるもののほぼ平坦である。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈**

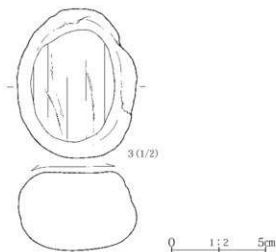
南東壁中央のやや北東寄りにある。南側に袖の基部と思われる部分がわずかにあるが、北側にはそのような痕跡が見られず、燃烧部のほぼ全体が住居外に張り出す形態だと思われる。全長77cm、焚き口幅は56cmである。竈の内部は黒褐色土で埋没しているが、含まれている焼土や灰は少なく、床面の焼土化も見られないので、使用頻度が高かったようには見えない。 **貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** 凹凸が顕著である。南西壁近くと中央部は床面から1～10cm程度の深さで浅いが、その他の部分は17～33cmの深さがある。それをロームを含む黒褐色土で埋め戻し床面としている。本住居と重複する掘立柱建物の柱穴や土坑は掘方調査の際に同時に掘



第44図 2区14号住居平面図



第45図 2区14号住居掘方平面図、竪断面図、出土遺物(1)



第46図 2区14号住居出土遺物(2)

り下げてしまったが、その際この黒褐色土の下に掘られていることを確認している。遺物 遺物の出土は少ない。掲載したのは須恵器杯1点、同裏1点、砥石1点のみである。そのほか、小破片で掲載できないものには土師器杯・椀類2点、同裏・壺類37点、須恵器杯・椀類12点、同裏・壺類7点がある。時期・所見 出土遺物は少ないが、時期は9世紀後半と考えられる。北東壁を攪乱で破壊されている以外は調査できたが、竈以外の住居に関わる施設が確認できず、出土遺物も少ないため、不明な点が多い住居である。掘方の下層で4号掘立柱建物が見つかっており、層位的に掘立柱建物の年代の下限をつかむことができた点で重要である。

**2区15号住居**(第47～49図、第15・16表、PL.10-3～6,33)

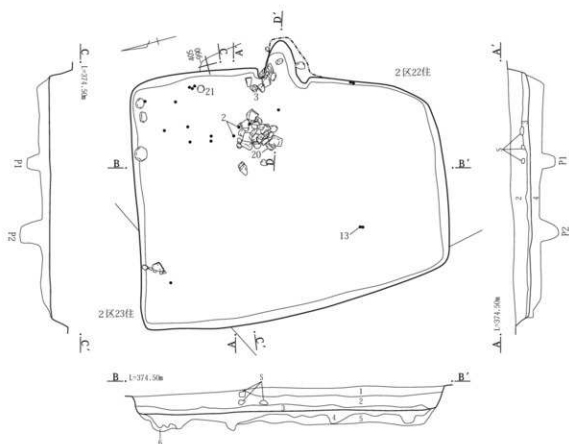
2区中央北寄りにある。調査区の中央にあるため全体を調査できた。

**位置** X=63401～407、Y=-89990～995。 **重複遺構** 南東側に2区22号住居、北側に23号住居が重複する。本住居はそのいずれよりも新しい。 **形状** 全体として台形状の形状となる。後述のように、このような形状となったのは拡張後である可能性がある。 **主軸方位** 北壁と南壁はほぼ平行するので、それらの方向を計測するとN-102°-Eである。 **規模** 住居の中央付近で計測して主軸方向が4.06m、それと直交する方向が4.95mであるが、南壁と北壁の長さはかなり異なり、南壁が2.60mであるのに対して、北壁は3.80mである。 **床面積**

16.40㎡である。 **壁高** 壁は比較的残りがよく、21～44cmである。 **覆土** 暗褐色土と褐色土で埋没している。中層から下層にかけて、部分的に礫を含んでいる。特に集中しているところは、平面図に示したように、竈とその前面にかけてであるので、これらは石組みの竈が崩れたものである可能性が考えられる。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴** 床面では確認できなかったが、掘方の調査では2基のピットが見つっている。それらは位置からみて北側の主柱2本である可能性が考えられるが、南側に対応する柱穴が見つかっていないため、断定することはできない。それぞれの規模は以下の通りである(長径×短径×深さ、cm)。長径と短径は掘方底面で計測し、深さは床面からの深さを計測している。

P1 46×28×34 P2 51×30×43

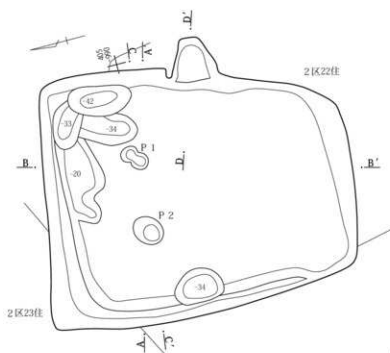
P1は瓢箪形をしているので、2時期のピットが重複したものと考えられる。竈 東壁のほぼ中央にある。袖の基部と思われるものがわずかに見えるが、燃焼部の大部分が住居外に張り出す形態である。長さは68cm、幅は袖の外側を計測して90cmである。前述の通り、竈内部から前面にかけて多くの礫が見られることから、本来は石組みであった可能性が考えられる。竈の埋土には多くの焼土を含み、焚き口付近の床面も焼土化していることから、かなりよく使われていたものと考えられる。 **貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** 全体に床面より7～26cm深い。北西隅は床面より18～42cmとさらに深く掘っている。それを明褐色土や黒褐色土、灰黄褐色土を用いて埋め戻し、床面を作っている。また、北壁と西壁には内側に段がめぐっていることが判明した。この段のラインをつなげると壁のラインよりも住居の形が長方形に近くなり、住居の形状としては整うので、この部分についてはある時期に拡張が行われた可能性が考えられる。ただし、断面などには拡張の痕跡は認められなかった。 **遺物** 遺物は比較的多く出土したが、そのほとんどは小破片であり、出土位置まで記録できた遺物はあまり多くない。掲載したのは土師器杯1点、同裏1点、須恵器杯10点、同皿1点、同椀1点、同裏2点、土製の円板1点、鉄鎌1点、砥石1点、敲石1点、磨石1点である。これらのうち2・3の須恵器杯と20の敲石は竈前から、13の須恵器杯は南西部から、21の敲石は北東壁際から、それぞれ床面から4～13cm浮いた高さから出土し



## 2区15号住居

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色・褐色軽石を含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒、ローム粒を含む。
3. 褐色土(7.5YR4/6) ローム粒、ロームブロック、焼土粒を含む。
4. 明褐色土(7.5YR5/8) 掘方。ローム粒、ロームブロック、焼土粒を含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 掘方。焼土、炭化物、ロームを少量含む。
6. 灰黄褐色土(10YR5/2) 掘方。ローム、黒褐色土、焼土を少量含む。

## 掘方

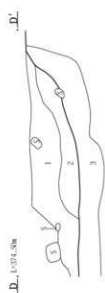
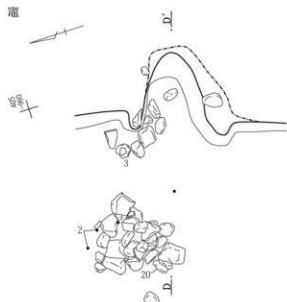


0 1:60 2m

第47図 2区15号住居平面断面図

第3章 調査の成果

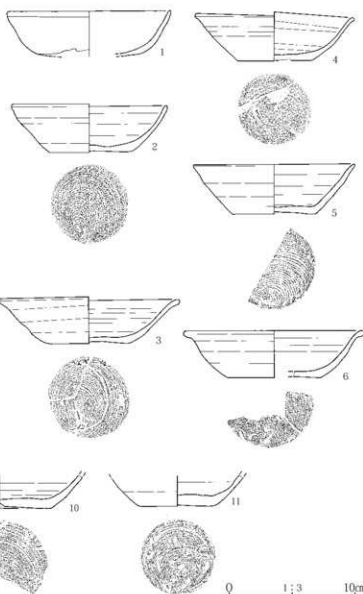
竈



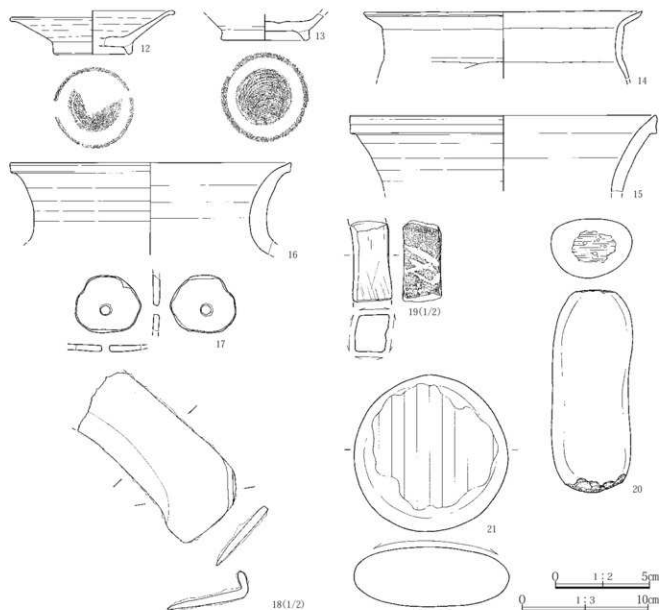
2区15号住居竈

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土粒、炭化物、ローム粒を多量に含む。
3. 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒、ロームブロックを多量に含む。

竈四方



第48図 2区15号住居竈平面断面図、出土遺物(1)



第49図 2区15号住居出土遺物(2)

ている。この他小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類64点、同高杯類1点、同甕・壺類728点、須恵器杯・椀類160点、同蓋類13点、同甕・壺類59点、灰釉陶器杯・椀類1点である。**時期・所見** 住居の時期は遺物から9世紀第3四半期と考えられる。現状では台形を呈するが、北側、西側はある時期に拡張された可能性があり、本来の形状は長方形に近かったことが考えられる。竈の周囲に石が多く見られることから、竈は石組みであった可能性がある。

**2区16号住居**(第50～55図、第16～18表、PL.10-7・8, 11, 12-1～4, 33・34)

2区の南東隅近くにある。北東隅が攪乱によって削平されている。礎石をもつ特徴的な住居である。

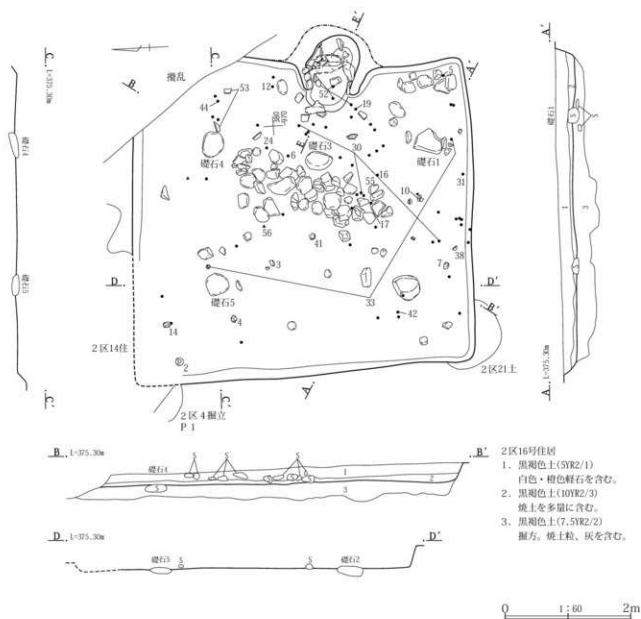
**位置** X=63376～383、Y=-89968～974。**重複遺構** 北西部に2区14号住居、2区4号掘立柱建物が重複するほか、南西隅に2区21号土坑が重複する。本住居はそれらのいずれよりも新しいが、14号住居とは新旧関係を誤認して調査してしまったので平面図等は修正したものを掲載した。**形状** 東壁の北半部が外側に曲がっているが、全体としては正方形に近い方形である。**主軸方位** N-93°-E。**規模** 中央付近で計測して5.04×5.29mである。**床面積** 攪乱で破壊された北東隅部と、2区14号住居と重複する北西隅部とを推定復元して



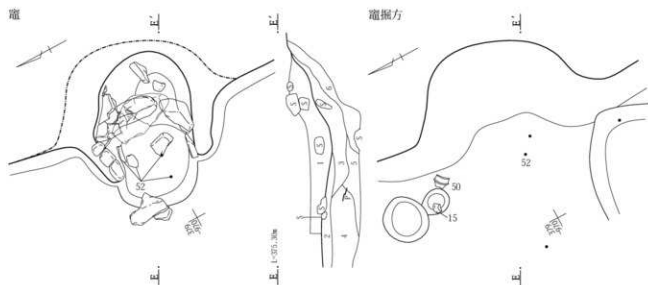
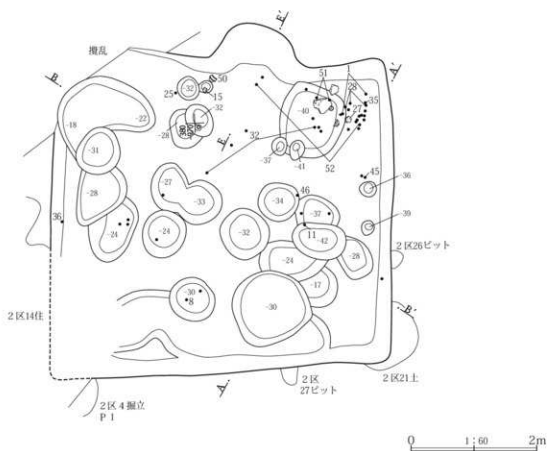
### 第3章 調査の成果

計測すると24.84㎡である。壁高 7～34cmであり、東壁と南西隅付近の残りがよかった。覆土 黒褐色土で埋没している。下層に多量の焼土を含んでいるので、焼失家屋ではないかとの疑いがあるが、顕著な炭化材・炭化物は見られなかった。床面 表面はほぼ平坦である。竈周辺や住居中央部には大量の礫が集まっていたほか、全体に数多くの礫が散布していた。礫の大きさは8～45cmで、中央部には20cm以上の大きなものも多く、その一部は床面にめり込んでいる。竈内にも多くの礫が見られるので、竈は石組みであった可能性が考えられる。しかしその他の礫は大きく数も多いため、その全てを竈

の石組みが崩れたものと考え難く、本来の位置・用途は不明であると言わざるを得ない。礎石 床面には5個の平石があり、礎石と考えられる(PL.11-1・5、12-1～4)。これらの石は上面が平らになるようにして、床面に埋め込まれる形で設置されていた(断面図C-C'、D-D'参照)。それぞれの礎石を結んでみると、その配置は正確な方形にはならず、住居の外形に対してややいびつとなる。特に礎石1と3の位置のズレが大きい。礎石1がやや南に寄るのは貯蔵穴を避けるためであり、礎石3がやや西に寄るのは竈を避けたためであると思われるので、これらは原位置を保っているも



第50図 2区16号住居平面断面図



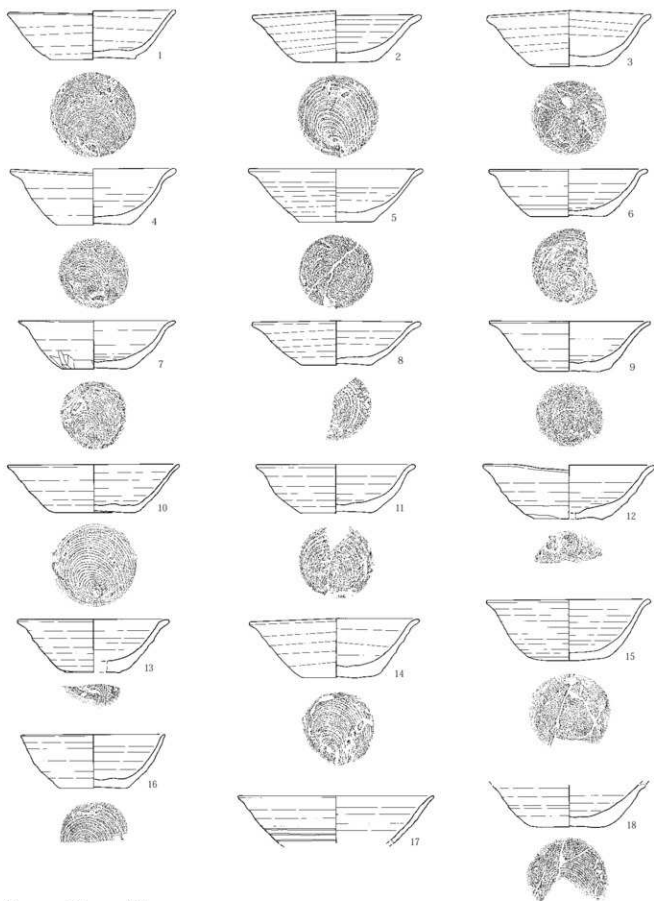
## 2区16号住居竪

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 以下掘方。焼土、白色軽石を微量含む。
3. 灰褐色土(7.5YR4/2) 焼土を多量、にぶい黄褐色炭化物を微量含む。
4. 褐色土(7.5YR4/3) 黒色粘土質土層、にぶい黄褐色土層、焼土あるいは鉄分の酸化した土層が多量している。
5. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 明褐色土を多量、黒褐色土を少量含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土を微量含む。

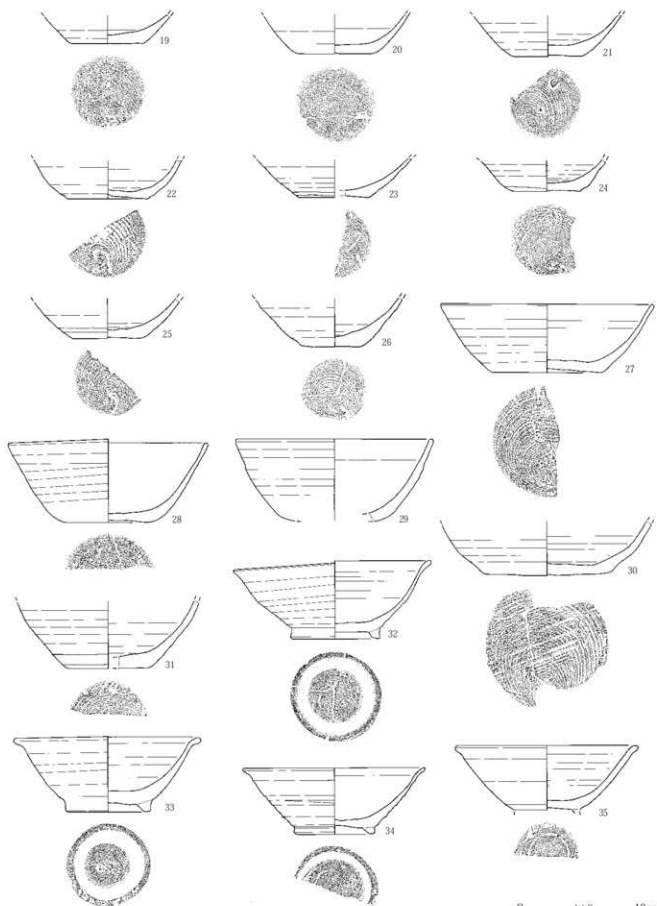
0 1:30 1m

第51図 2区16号住居掘方平面図、竪断面図

第3章 調査の成果

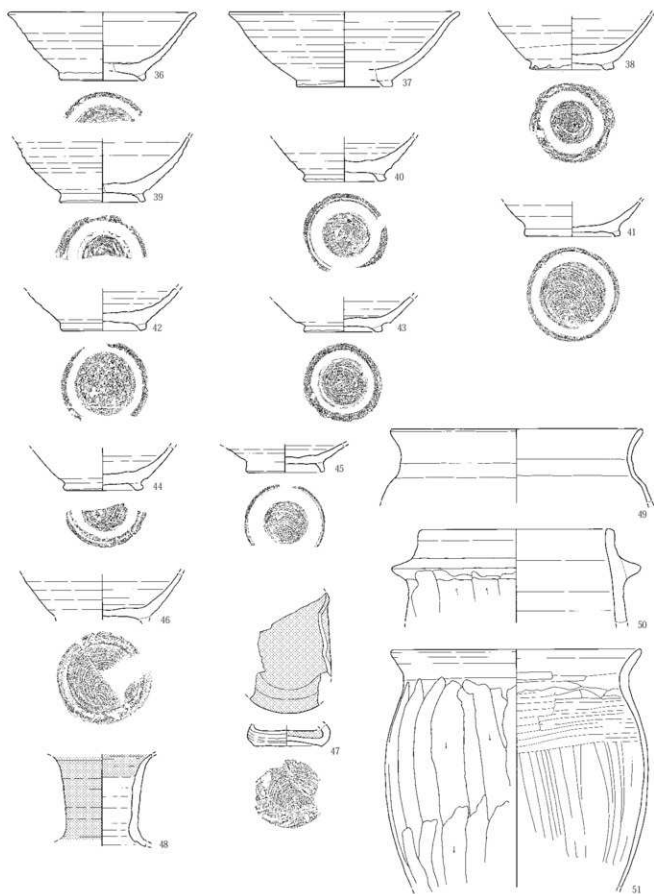


第52図 2区16号住居出土遺物(1)

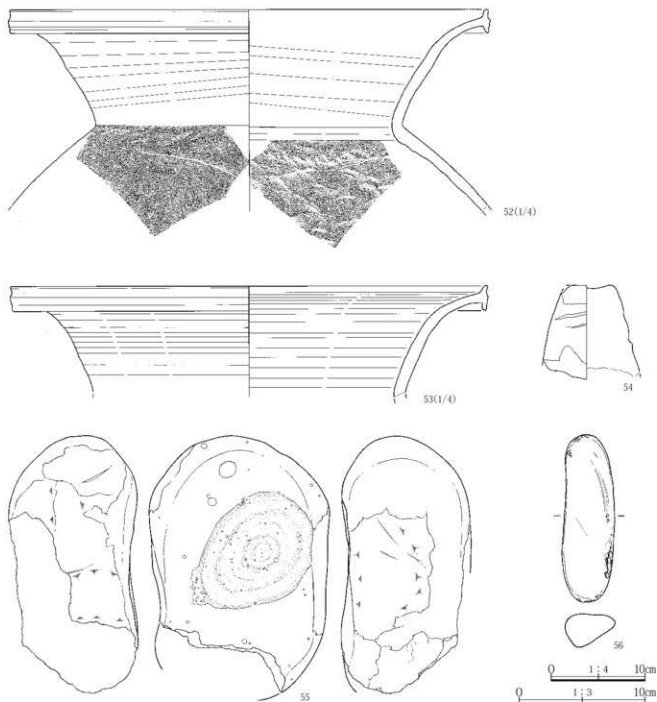


第53图 2区16号住居出土遗物(2)

第3章 調査の成果



第54図 2区16号住居出土遺物(3)



第55図 2区16号住居出土遺物(4)

のとおることができる。礎石2と5の間には、礎石3に対応する石は存在しなかったため、礎石は合計5基であったと思われる。同じく礎石をもつ2区4号住居では、礎石の下に柱穴が見つかり、柱が掘立柱式から礎石式へと変わったことが判明したが、本住居では礎石の下に柱穴は見つからなかったため、建設当初から礎石を用いていたものと思われる。各礎石の大きさは下記の通りである(長さ×幅×厚さ、cm)。

礎石1	45×36×20	礎石2	46×40×16
礎石3	43×29×11	礎石4	42×34×12
礎石5	38×36×12		

石の特徴には2種類あり、礎石1と2はやや角のある石を用いているのに対して、3～5は角のない丸い石を用いている。竈 東壁中央やや南側にある。内部から多くの礫が出土したことから、本来石組みであったと思われるが、北側の一部以外には組んだような状態が見られ

ないので、石組みだったとすれば現状はかなり壊された状態であると思われる。燃烧部と煙道の境付近の天井部には大きな平石が割れた状態のっていたので、天井部まで石を組んでいた可能性がある。両袖が残り、燃烧部の大部分は住居内となる構造である。長さは96cm、幅は122cmであり、住居外へは50cm張り出す。竈内の土には焼土はあまり多くなく、内部の焼土化も弱い。貯蔵穴 床面では見つからなかったが、掘方底面で竈の南側に見つかった土坑状の凹みが貯蔵穴であると思われる。長方形に近い形状で、大きさは掘方底面で計測して長さ118cm、幅103cm、深さは床面から計測して40cmである。内部からは32の須恵器椀と51の須恵器甕が出土した。前述のように礎石1はこの貯蔵穴を避けた位置に置かれており、それが逆にこの凹みが貯蔵穴であり、住居使用時にも存在したものであると考えた根拠となっている。

**周溝** 確認できなかった。**掘方** 掘方は全体に深く、床面から15～30cmある。底面には多くの土坑状の凹みが見られ、それらはさらに10cm程度深いので、全体に凹凸が顕著である。**遺物** 多くの遺物が出土している。掲載したのは土師器甕1点、須恵器杯31点、同椀15点、同羽釜1点、同甕3点、灰軸陶器耳皿1点、同長頸壺1点、竈支脚1点、砥石1点、敲石1点である。床面やそれに近い高さから出土した遺物は住居全体に散在している。掘方埋土では竈周辺、住居南東側に遺物の集中が見られる。特に南東側の集中は顕著で、貯蔵穴周辺を何らかの目的で掘り直していた可能性が考えられよう。そのほか小破片のために掲載できないものには、土師器杯・椀類17点、同甕・壺類1,149点、須恵器杯・椀類821点、同甕・壺類56点、灰軸陶器杯・椀類13点がある。**時期・所見** 住居の時期は出土遺物から10世紀第1四半期と思われる。本遺跡では最も新しい住居のひとつである。5本の柱を礎石で支える特徴的な構造をもっている点で注目される住居である。本住居と同様に礎石をもつ住居にはほかに2区4号住居があるが、それは遺物をみる限り9世紀第1四半期のものであり時期が大きく異なる。竈は大きく壊れているものの本来石組みであったと思われる、天井部にも石を組んでいた可能性がある。

#### 2区17号住居(第56図、PL.12-5)

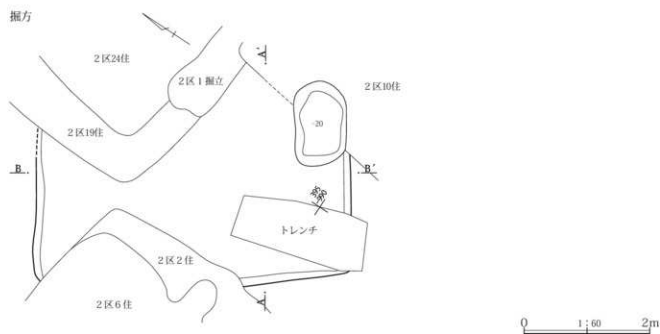
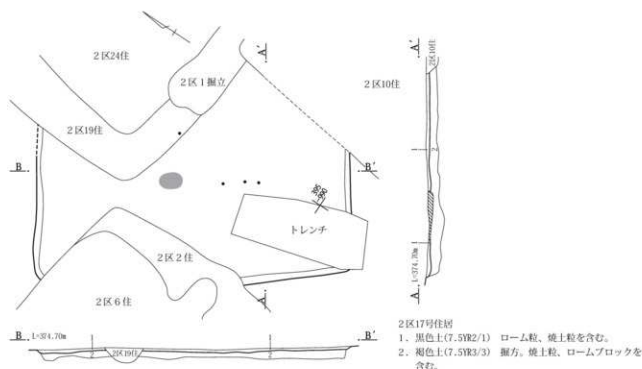
2区中央西寄りにある。多くの住居と重複しているほ

か、試掘トレンチにも破壊されて残りが悪く、壁は北西、南西、南東の3辺の一部分しか把握できなかった。

**位置** X=63394～400、Y=89988～994。 **重複遺構**

2区2号、6号、10号、19号、24号住居、2区1号掘立柱建物と重複する。本住居はそれらのいずれよりも古い。10号住居とは新旧を誤認して調査してしまった。平面図等は修正したものを掲載してある。**形状** 把握できた3辺の壁からみると、やや歪みのある方形であると考えられるが、北東側にどれだけ長さがあるかは不明である。**主軸方位** 外形が分からないので確定できないが、北西-南東方向を主軸方向として計測するとN-37°-Wである。**規模** 主軸方向と推定した北西-南東方向は、壁が残っているところで計測すると4.99mである。それと直交する方向は北東壁が残っていないので不明であるが、南西壁から、2区10号住居と2区1号掘立柱建物に重複するところまでの長さを計測すると3.56mになり、本来の長さはそれ以上になる。**床面積** 壁の一部しか判明していないので計測不能である。

**壁高** 2～8cmしか残っていない。**覆土** 最下部のごくわずかしかなかった。 **柱** 確認できなかった。 **炉** 炉と思われる焼土が、調査できた範囲の中央付近の床面で見ついている。焼土の範囲は長さ38cm、幅27cmの楕円形であり、焼土以外の顕著な施設は見つからないが、住居の時期や位置からみて炉である可能性が強いと思われる。**貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。**掘方** 全体に床面から8～23cm深い。底面は細かい凹凸がある程度で比較的平坦である。調査できた範囲の南東部には長さ136cm、幅80cmの土坑状の凹みがあり、そこは床面から20cmの深さがある。**遺物** 出土遺物は少数の土器小破片が出土するのみで、掲載できるものはない。掲載できなかったものには、土師器甕・壺類30点、須恵器杯・椀類2点がある。**時期・所見** 住居の時期は遺物から見ても5、6世紀と考えられるが、小破片のみの出土なのでそれ以上の特定は難しい。ただし、床面に見られる焼土が炉だとすれば、その中でも古い時期のものと考えられることができる。調査では炉以外の施設が見つかっておらず、不明な点が多い住居である。



第56図 2区17号住居平断面図

**2区18号住居**(第57・58図、第18表、PL.12-6・7,34)

2区の中央付近にある。この付近は多くの遺構が重複している上、それぞれの覆土が非常に似ていたので各遺構間の区別は困難であった。本住居については、竈のある辺は確認できたものの、それ以外の3辺は把握できなかった。そのため、掘り広げた後に遺物の分布範囲などから壁の位置を推定し、平面図を作成した。ただし、全

景写真(PL.12-6)は掘り広げた時点で撮影したため、より広い範囲が1軒の住居として写っている。

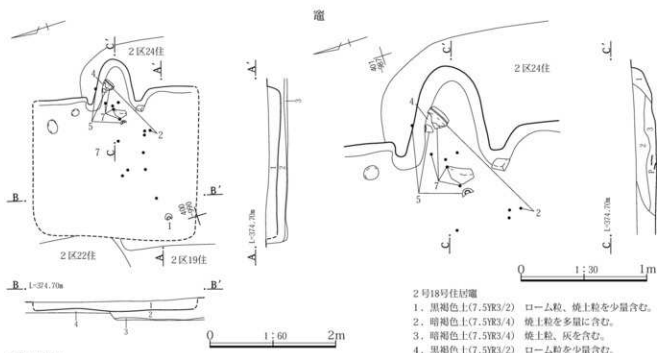
**位置** X=63399～403、Y=-89987～991。 **重複遺構** 2区19号、22号、24号住居と重複している。本住居はそのいずれよりも新しい。 **形状** 確実な壁は竈のある東壁しか把握できなかったので不明であるが、遺物の分布範囲と2区24号住居の形から平面図のような形状と



推定した。 **主軸方位** 竈のある東壁と直交する方向を計測して、N-102°-Eである。 **規模** 推定した平面図により住居中央付近で規模を計測すると2.30×2.60mである。 **床面積** 推定した平面図から計測すると5.40㎡である。 **壁高** 東壁は10～21cmであり、南ほど残りがよかった。 **覆土** 焼土粒を含む黒褐色土で埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴** 確認できなかった。小規模な住居であると推定されるので、本来なかった可能性が高い。 **竈** 東壁にある。推定される住居規模に比して大きな竈であり、長さ82cm、幅96cmである。袖は短く、燃焼部の大部分は住居外に張り出す形態である。竈内の覆土には多くの焼土を含むので、よ

く使用されていたらしい。竈内とその前からは、7の羽釜をはじめとした比較的大きな土器片が出土している。

**貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** 明確な掘方は確認できなかった。 **遺物** 遺物の数は多くないが、竈付近を中心としてやや大きな土器片が出土している。掲載したのは須恵器杯4点、同碗2点、同羽釜1点、砥石1点である。2～7の須恵器杯、碗、羽釜は竈内から竈前にかけて出土した。そのほか小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯類2点、同甕・壺類64点、須恵器杯類31点、同甕・壺類25点がある。 **時期・所見** 住居の時期は出土遺物から10世紀第1四半期と考えられ、本遺跡の中では最も新しい住居のひとつである。

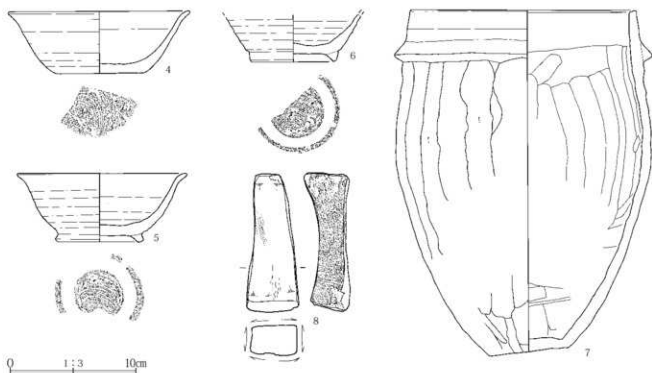


2区18号住居

1. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒を含む。
2. 暗褐色土(10YR2/3) ロームブロックを多量に含む。2区24住居覆土。
3. 黄褐色土(10YR5/8) ローム主体。2区24住居掘方。
4. 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土粒、ローム粒を含む。2区19住居掘方。



第57図 2区18号住居平面図、竈平面図、出土遺物(1)



第58図 2区18号住居出土遺物(2)

**2区19号住居(第59図)**

2区の中央付近にあり、多くの住居が重複する部分に位置する。2区24号住居の外側に竪穴住居の南西隅部分と思われる部分が確認されたことから住居と判断したものである。床面と思われる平坦面は24号住居の東側、北側に広がるが、その方向に壁を確認することはできず、住居の範囲を確定することはできなかった。

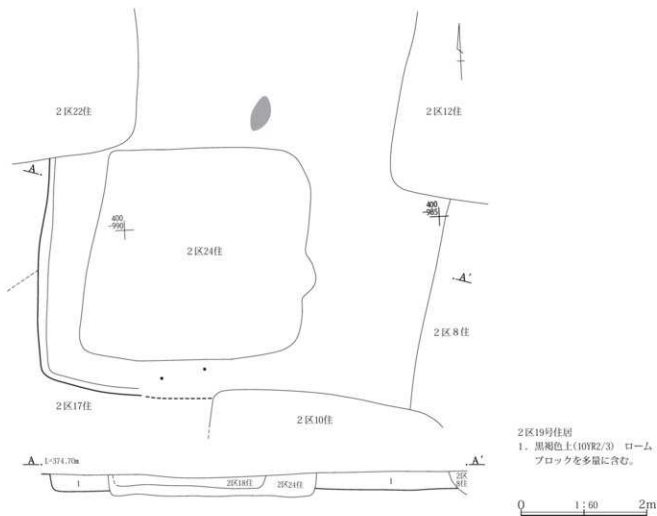
**位置** X=63397～403、Y=89984～992。 **重複構造**

2区8号、10号、12号、17号、18号、22号、24号住居、2区1号掘立柱建物と重複する。本住居は8号、10号、12号、18号、22号、24号住居の6軒よりも古い、17号住居、1号掘立柱建物よりは新しい。 **形状** 壁が確認できたのが南西隅とその周辺に限られるので確定はできないが、確認できた部分から見て方形であると思われる。

**主軸方位** 竈の位置が分からないので確定することはできないが、西壁の方位を計測するとN-6°-Eである。 **規模** 北と東の壁が確認できないので不明である。西壁から8号住居までは6.40mあるので、少なくともそれ以上の規模であると思われる。 **床面積** 不明。 **壁高** 西・南壁は8～22cmである。 **覆土** ロームブロックを多量に含む黒褐色土1層で埋没しており、人為的に一気に埋められた可能性がある。 **床面** ほぼ平坦であ

る。北側には焼土が見られるが、後述の遺物の時期から見て炉ではないと考えられる。 **柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **掘方** 確認できず、全体に地山を床面としている。 **遺物** 出土遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片で掲載できないものには土師器杯・椀類2点、同高杯類1点、同糞・壺類11点、須臾器杯・椀類2点、同糞・壺類1点があるのみである。

**時期・所見** 出土遺物は小破片だけだが、それらの時期は8世紀代と思われる。ただし、8世紀第2四半期と思われる24号住居よりも古いので、それを測る時期であることは確実であり、8世紀第1四半期を中心とした時期のものである。住居の隅と思われる部分や床面の広がりから竪穴住居と判断したものはあるが、柱穴や竈、貯蔵穴など住居に関わる施設が一切見つからなかったので不明な点が多く、竪穴住居ではない可能性も考慮する必要があると思われる。



第59図 2区19号住居平面図

**2区20号住居**(第60図、第18表、PL.12- 8.13- 1,34)

2区北端近くにある。調査区の幅の中央にあるため、全体を調査することができた。

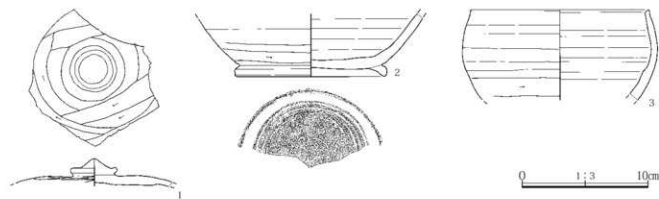
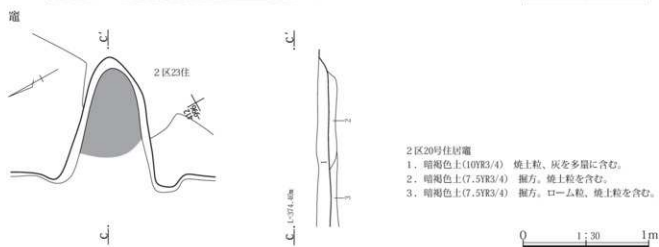
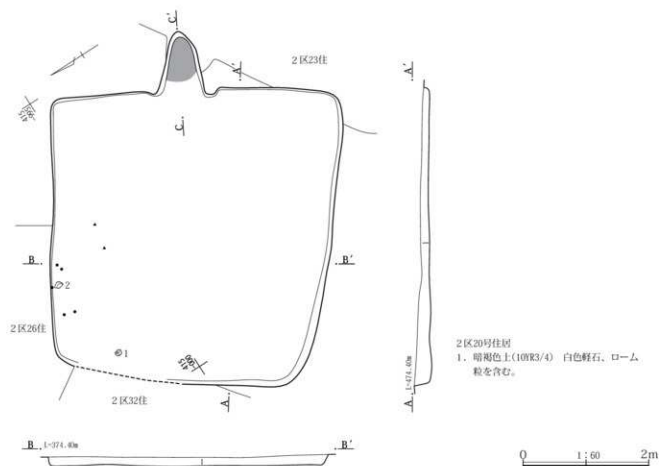
**位置** X=63410～417、Y=-89995～90001。 **重複**

**遺構** 2区23号、26号、32号と重複する。本住居はそのいずれよりも新しい。 **形状** 南東壁よりも北西壁が短いので、やや台形に近い方形になる。 **主軸方位** N-127°-E。 **規模** 中央付近で計測して4.74×4.45m。

**床面積** 19.21㎡。 **壁高** 8～28cmである。竈付近は残りが悪く、西隅付近は残りがよい。 **覆土** 暗褐色土で埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈** 南東壁のほぼ中央にある。この付近は上部からの削平によって残りがよくない。両袖はごく短く、燃焼部の大部分が住居外に張り出す形態である。長さは103cm、幅は袖の外側を計測すると114cmである。竈内の覆土には焼土粒、灰を多量に含み、燃焼部

の底面も焼土化しているので、よく使用されていたらしい。

**貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **遺物** 出土遺物は小破片が多く、やや大きな破片は住居北隅付近に見られた。掲載したのは須恵器蓋1点、同壺1点、同鉢1点である。そのうち、1の須恵器蓋、2の須恵器壺が北隅付近から出土した遺物であるが、床面からはそれぞれ3cm、12cm浮いた高さがあった。そのほか小破片のために掲載できなかったものには、土師器杯・椀類43点、同甕・壺類76点、須恵器杯・椀類11点、同蓋類8点、同甕・壺類6点がある。 **時期・所見** 時期は遺物からみて8世紀代である。全体を調査できたものの、柱穴や貯蔵穴など、竈以外の施設が確認できず、不明な点が多い住居である。



第60図 2区20号住居平面断面図、竪断面図、出土遺物

2区21号住居(第61～63図、第18・19表、PL.13-2～5.35)

2区北半部の東側にあり、北東隅部が調査区境の攪乱で破壊されている。

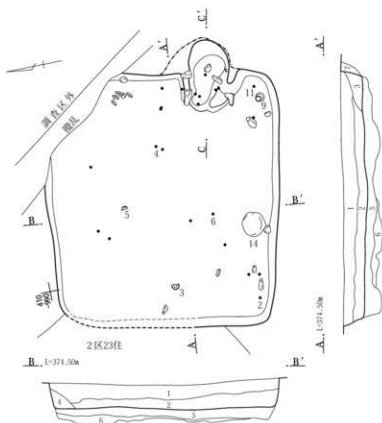
**位置** X=63405～410、Y=-89986～992。 **重複遺構** 西側に2区23号住居が重複する。本住居が新しい。

**形状** 東西にやや長い方形である。 **主軸方位** N-102°-E。 **規模** 主軸方向は竈の南側付近で計測して4.09m。それに直交する方向は中央付近で計測して3.73mである。 **床面積** 攪乱で破壊されている北東隅付近を推定復元して13.0㎡である。 **壁高** 全体に残りがよく、36～47cmの高さがある。 **覆土** 暗褐色土と褐色土とで埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。

**柱穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁の南端近くにある。長さは114cm、幅は106cm、焚き口幅は35cmであり、住居外には51cm張り出している。両袖が良好に残り、燃焼部を囲むように内側に湾曲している。袖の先端付近や燃焼部の内側には数個の礫が見られるので、これらの礫を芯として構築していた部分があるものと思われる。礫の数

から見て全体が石組みであった可能性は低い。燃焼部の底面は住居床面よりも低くなっている。竈内の覆土には焼土粒、灰を多量に含み、燃焼部や袖の内側も焼土化しているの、よく使用されていたらしい。 **貯蔵穴** 床面では確認できなかった。掘方の調査でも顕著な土坑は見つからなかったが、掘方底面では竈の北側に浅い凹みがあり、これは床面から27cmの深さがあるので、貯蔵穴の底部の痕跡であることが考えられる。この凹みは掘方底面では長さ76cm、幅45cmの楕円形である。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 全体に凹凸が多いほか、西壁を除いた3辺に沿って深く掘っている。特に北東部は深く、最も深いところでは床面から30cmある。それらは黄褐色土、黒褐色土を用いて埋め戻し床面としている。

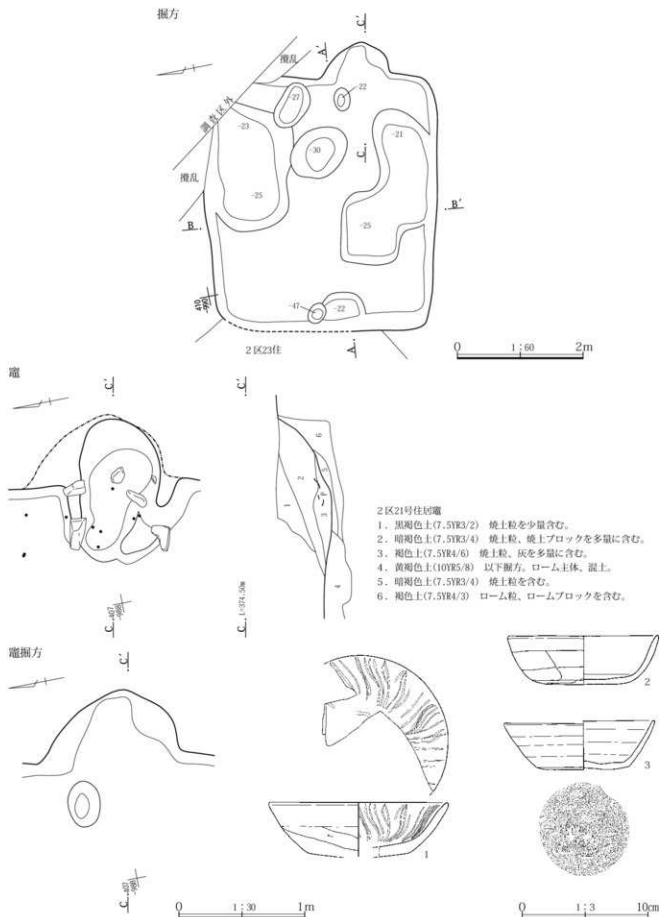
**遺物** 出土遺物は比較的多い。特に集中箇所はなく、全体に散在している。掲載したのは土師器杯2点、同甕1点、同小型甕1点、須恵器杯6点、同椀1点、砥石1点、砥石と思われる丸い平石1点、用途不明の石製品1点である。これらのうち床面から出土しているのは、9の須恵器椀と11の土師器小型甕、14の砥石と思われる平石で



2区21号住居

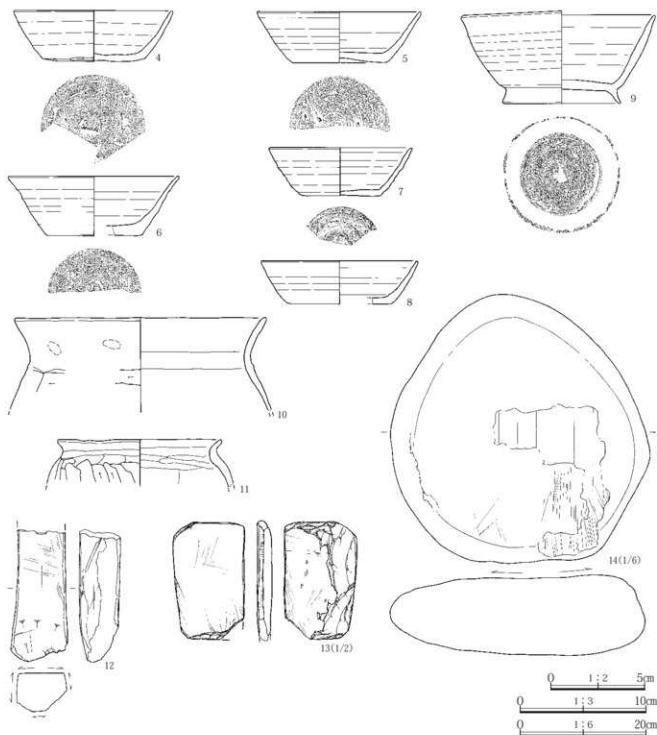
1. 暗褐色土(7.5YR3/3) 白色、橙色軽石を多量に含む。
2. 褐色土(7.5YR4/3) ローム粒、ロームブロック、焼土を含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色軽石を少量含む。
4. 褐色土(7.5YR4/6) ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 掘方。ロームブロックを多量に含む。
6. 黄褐色土(10YR5/8) 掘方。ローム主体。炭土。
7. 褐色土(7.5YR4/3) 竈構築土。ローム粒、ロームブロックを含む。

第61図 2区21号住居平面図



第62図 2区21号住居掘方平面図、竈平面図、出土遺物(1)

第3章 調査の成果



第63図 2区21号住居出土遺物(2)

あり、9・11は南東隅から、14は南壁際の中央付近から出土している。それ以外の遺物は床面からやや浮いた高さからの出土であり、出土位置も散在している。その他小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類28点、同高杯類3点、同甕・壺類508点、須恵器杯・椀類51点、同蓋類4点、同甕・壺類15点がある。なお、龍北側の東壁際や南西隅、西壁際中央付近の床面から、

長細い碟が出土している。径3～7cm、長さ8～18cmの大きさで、角は丸くなっている。これらはいわゆる筒編み石であると思われ、特に龍北側の東壁際では7点が集中して出土した。 **時期・所見** 時期は出土遺物から8世紀第1四半期と思われる。深く残りがよい住居ではあるが、柱穴、貯蔵穴、周溝といった、住居に関わる施設は見つかっていない。

## 2区22号住居(第64・65図、第19表、PL.14-1,35)

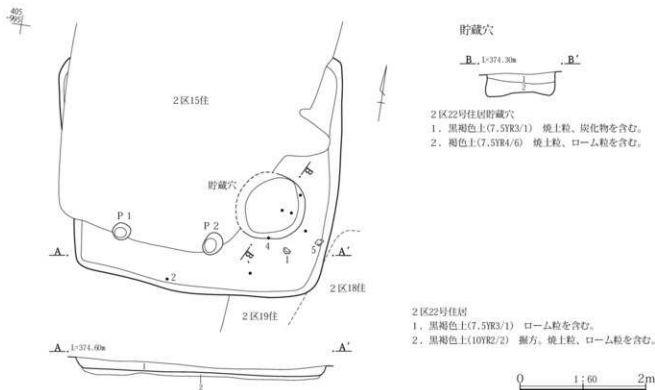
2区中央北寄りにある。2区15号住居と大きく重複しているため、東側と南側のわずかな部分しか残っていないが、四隅が把握できたのでかろうじて全形を知ることができた。

**位置** X=63401～406、Y=-89989～995。 **重複遺構** 2区15号、18号、19号住居と重複する。特に15号住居とは大きく重複し、本住居の大部分が破壊されている。本住居は15号、18号住居よりも古く、19号住居よりも新しい。 **形状** 2区15号住居に北壁と西壁を破壊されているので不明ではあるが、四隅の位置から判断して、東西方向に長いやや歪んだ長方形と考えられる。 **主軸方位** 竈が東、南、西に見られないので北側にあると考え、東壁と西壁との中間の方位を計測するとN-8°-Wである。 **規模** 四隅の位置から北壁と西壁を復元して中央付近で計測すると、主軸方向である南北が3.75m、東西方向が4.39mである。 **床面積** 西壁と南壁を復元して計測すると13.92mである。 **壁高** 9～17cm。 **覆土** 最下層が残っているものと考えられ、ローム粒を含む黒褐色土1層で埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴** 明瞭に確認できなかったが、2区15号住居の南壁と重複する部分で2基のピットが見つかり

る。そのうちのP1は位置からみて南西隅の支柱穴である可能性もあるが、P2はかなり西側に寄っており、本住居に関わるものか疑問がある。2基のピットの規模は以下の通り(長径×短径×深さ、cm)。なお、長径と短径は掲載した平面図で計測しているが、15号住居の南壁にかかっているため、本来の床面の計測値よりもかなり小さな数字となっているはずである。

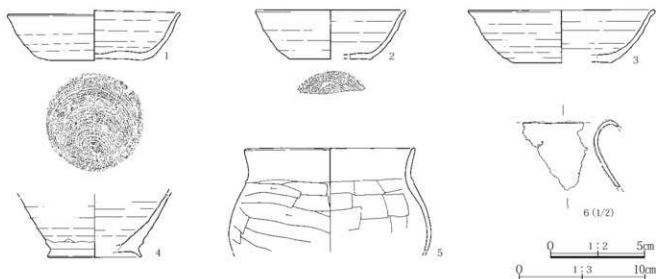
P1 29×26×81 P2 37×28×57

**竈** 確認できなかった。全体が残っていた東壁と南壁に竈がないことは確実であるが、西壁も全く痕跡が見られないのでこちらにもないものと思われる。とすれば北壁に設置されていた可能性が考えられるが、本遺跡内で北側に竈があるのは2区23号住居のみであり、珍しい例となる。 **貯蔵穴** 調査所見では南東隅近くにある円形の土坑が貯蔵穴と考えられている。長径114cm、短径は推定110cmのほぼ円形で、深さは45cmである。ただし、これが貯蔵穴だとすると、北壁に想定される竈からはやや離れた位置となる。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 全体に床面から5～10cm程度深く、ほぼ平坦に掘られている。それを焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土で埋め戻して床面としている。 **遺物** 遺物は貯蔵穴の周辺を中心として散在している。掲載したのは土師器小型甕



第64図 2区22号住居平面図





第65図 2区22号住居出土遺物

1点、須恵器杯3点、同椀1点、用途不明の鉄製品1点である。その他小破片のために掲載できないものには、土師器杯・椀類5点、同高杯類1点、同甕・甕類98点、須恵器杯・椀類25点、同甕・甕類3点がある。 **時期・所見** 時期は出土遺物から9世紀第1四半期と考えられる。新しい住居に大きく破壊されているために詳細は不明だが、北壁に竈をもつ可能性があり、とすれば本遺跡では珍しい例となる。

**2区23号住居**(第66～69図、第19表、PL.14-2～5,35)

2区の北半部にあり、調査区幅の中央にあるので、全体を調査することができた。本遺跡では最も規模の大きい住居である。

**位置** X=63405～414。Y=-89990～999。 **重複遺構**

2区1号、15号、20号、21号住居、2区23号、24号土坑と重複する。本住居は住居よりも古く、土坑よりも新しい。 **形状** 正方形に近い方形である。 **主軸方位**

N-29°-W。 **規模** なるべく中央付近で計測して6.63×6.91mである。 **床面積** ほかの住居と重複して破壊されている部分を推定復元して計測すると42.71㎡である。 **壁高** 比較的残りがよく31～43cmある。

**覆土** 暗褐色土で埋没している。 **床面** 緩やかな凹凸はあるがほぼ平坦に見える。東壁際の北隅近くには焼土が2ヶ所見られるが、この性格は不明である。 **柱穴**

各隅付近に4本の主柱穴が見つっている。南東のP3には新しいピット(P5)が重複する。このP5には柱痕

が明確に確認できるので、ここに柱が立っていたことは明らかであるが、柱痕の太さがP3に比べてずっと細いので、柱の付け替えではなく、何らかの支え柱なのではないだろうか。各柱穴の規模は以下の通りである(長さ×短径×深さ、cm)。

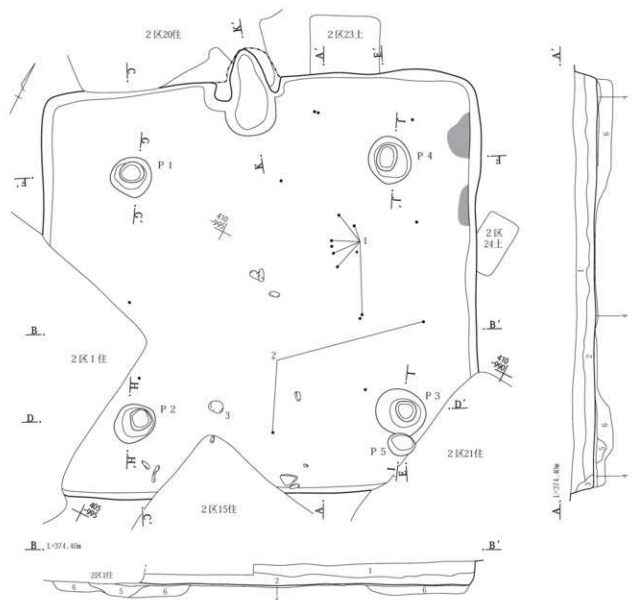
- |     |          |     |          |
|-----|----------|-----|----------|
| P 1 | 67×63×58 | P 2 | 69×58×52 |
| P 3 | 82×70×57 | P 4 | 75×66×73 |
| P 5 | 44×36×46 |     |          |

**竈** 北西壁のほぼ中央にある。袖がわずかな長さしか残っていないが、住居外への張り出しも短いので、本来は燃焼部の大部分が住居内に作られていたものと思われる。竈内の底面は浅く掘り窪められているので、これを竈の範囲と考えると全長は137cm、幅は袖の外側を計測して127cmである。住居外へは50cm張り出している。竈内の覆土には焼土を多く含み、袖の内側にも焼土化した部分があるので、よく使われていたらしい。北側に竈をもつ住居は本遺跡ではこれが唯一である。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **間仕切り溝** 床面では見つからなかったが、掘方の調査で東辺側に2本、西辺側に1本、中央北東部に1本の短い溝が見つかっていて間仕切りなのではないかと考えられる。それぞれの溝の規模は以下の通りである(長さ×幅×深さ、cm)。長さ×幅の計測は掘方底面で行い、深さは最も深い部分の深さを床面から計測している。

- |     |           |     |          |
|-----|-----------|-----|----------|
| M 1 | 119×29×29 | M 2 | 99×23×23 |
| M 3 | 137×25×11 | M 4 | 95×38×26 |

西辺には東辺の2本に対して1本しかないが、西辺北側の掘方はかなり深く掘られているので、掘方底面では確認できなかった可能性もあり、本来は東辺と同様の配置であったかも知れない。ただし、その位置には長さ60cm、幅34cmの弧形状のピットがあり、これが間仕切り溝の代わりである可能性もある。このピットは2本のピットが重複しているような形態であり、深さは床面から計測して東側が35cm、西側が31cmである。周溝 確

認できなかった。掘方 中央は方形が高く掘り残し、その周囲を壁際まで深く掘り下げている。中央部の深さが1~5cm程度であるに対し、周囲は10~36cmであり、特に竈付近と南東部付近が深くなっている。これらを主に黒褐色土で埋め戻し、さらに大部分の場所には黄褐色ローム土を薄く敷いて(2~5cm)貼床としている。遺物 遺物は住居東側に散布しているが、小破片が多い。掲載したのは土師器甕2点、台石1点である。1の土師

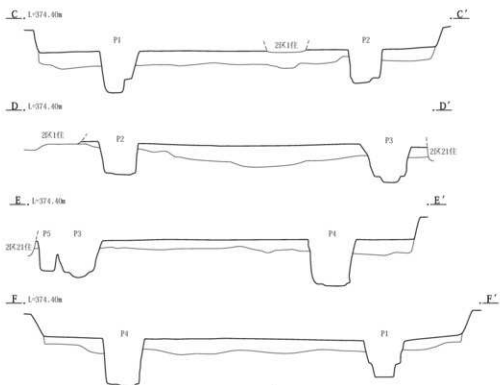


## 2区23号住居

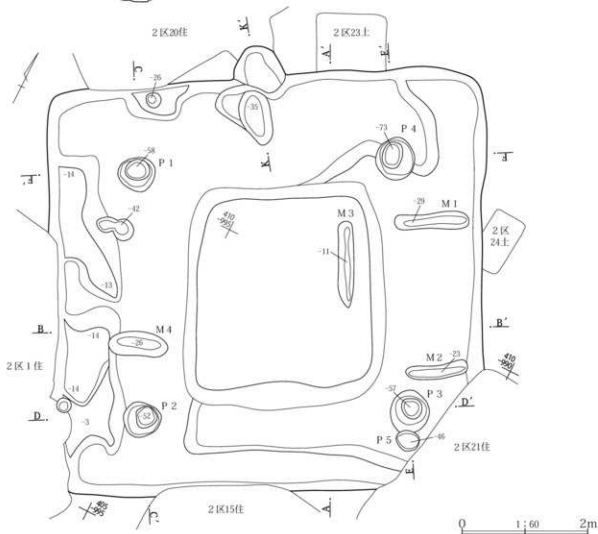
1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒、ロームブロック、埴土粒を含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
4. 貼床。黄褐色ローム主体の混土。
5. 掘方。ローム主体。黒褐色土混じる。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 掘方。ローム混土で床を貼っている。

第66図 2区23号住居平面断面図

第3章 調査の成果

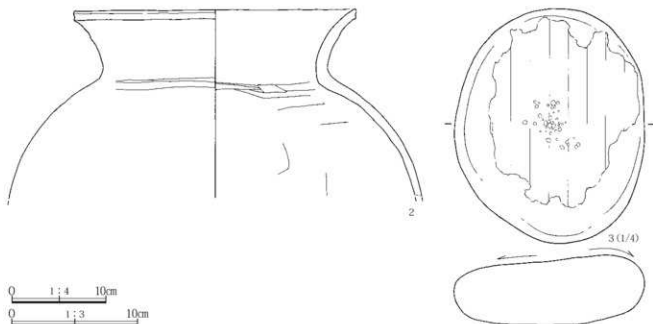


掘方



第67図 2区23号住居断面図、掘方平面図





第69図 2区23号住居出土遺物(2)

器裏は中央の東側に散らばり、そのうちの4点は床面から出土した。3の台石は南側の床面から出土している。そのほか小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類3点、同高杯類1点、同甕・壺類103点がある。なお、住居の中央から南壁際にかけて、薔薇石と思われる細長い礫が散在していた。**時期・所見** 出土遺物が少ないので時期の特定は難しいが、6、7世紀の住居だと考えられる。規模が確定できない2区8号住居とともに、本遺跡では最も大きな住居のひとつである。北西壁に竈があるが、北側に竈があるのは本遺跡では唯一である。

#### 2区24号住居(第70・71図、第19表、PL.15-1~4,35)

2区中央付近にあり、多くの住居が重複するところにあるが、やや深かったために残りは比較的良好、ほぼ全体を調査することができた。

**位置** X=63397~402, Y=-89987~991。

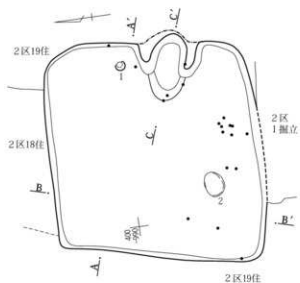
**重複遺構** 2区18号、19号住居、2区1号掘立柱建物と重複し、19号住居の中にはまり込む形になっている。本住居は18号住居より古く、19号住居、1号掘立柱建物よりも新しい。**形状** やや歪んだ方形である。各隅が直角にならず、平行四辺形に近い。**主軸方位** 歪んでいるが、南北両辺の中間の方位を計測するとN-92°-Eである。

**規模** 3.33×3.38m。 **床面積** 10.22㎡。 **壁高**

2区18号住居との重複によって削られている部分を除くと14~30cmの高さがある。 **覆土** ロームブロックを多量に含む黒褐色土で埋没している。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁の中央やや南にある。燃焼部が住居内にある形態であり、煙道部の先端だけがわずかに住居外へ延びている。燃焼部の底面は床面よりも6cm掘り下げられ、その凹みを竈の範囲として考えると長さ108cmであり、幅は袖の外側を計測して110cmである。袖は比較的良好残り、右袖は56cm、左袖は49cm住居内に延びている。竈内の覆土には焼土を多く含み、袖の内面や燃焼部の底面も焼土化している部分があるのでよく使用されていたらしい。 **貯蔵穴** 床面では確認できなかった。掘方調査では土坑状の凹みを確認しているが、そのうち貯蔵穴の可能性のあるのは南東隅に見られるものである。ただし、掘方底面における長さは142cm、幅は48cmと細長く、その点で疑問がある。深さは床面から計測して14cmである。 **周溝** 確認できなかった。 **掘方** 全体に浅く、床面からは1~4cm程度しかない。竈前面には浅い凹みが2ヶ所掘られている。それをローム主体の黄褐色土で埋め戻し床面としている。なお、平面図で南西側に見られる丸い凹みは、遺物2の砥石と思われる平石が置かれていたところである。 **遺物** 出土した遺物は少ない。平面図では住居南側に多く分布しているように見えるが、いずれも小破片であ

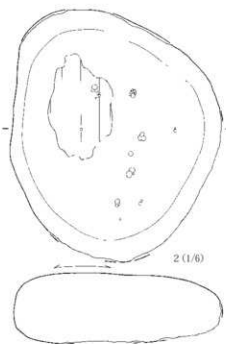
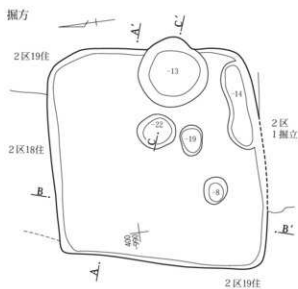
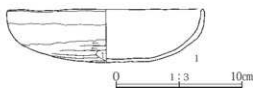
る。掲載したのは土師器杯1点と砥石と思われる丸い平石1点のあわせて2点のみであり、1の土師器杯は竪北側の床面からわずかに浮いた高さから出土し、2の平石は住居南西部の床面に埋め込まれた形で出土した。その

他小破片で掲載できないものには、土師器杯・椀類9点、須恵器杯・椀類6点、同蓋類2点、同甕・壺類3点がある。**時期・所見** 遺物が少ないが、住居の時期は8世紀第2四半期と考えられる。



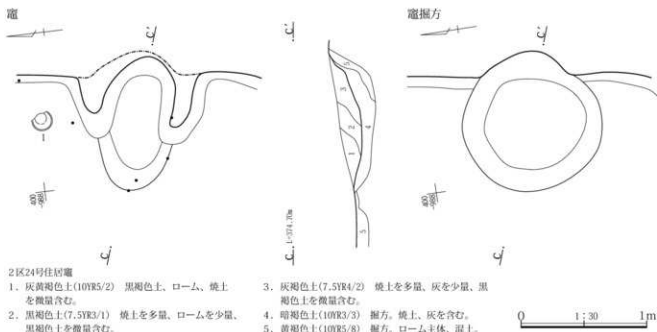
## 2区24号住居

1. 黒褐色土(10YR3/1) 18号住居覆土。焼土粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 24号住居覆土。ロームブロックを多量に含む。
3. 黄褐色土(10YR5/8) 24号住居掘方。ローム主体、混土。



第70図 2区24号住居平面断面図、出土遺物

### 第3章 調査の成果



第71図 2区24号住居平面断面図

#### 2区26号住居(第72・73図、第19・20表、PL.15-5,35)

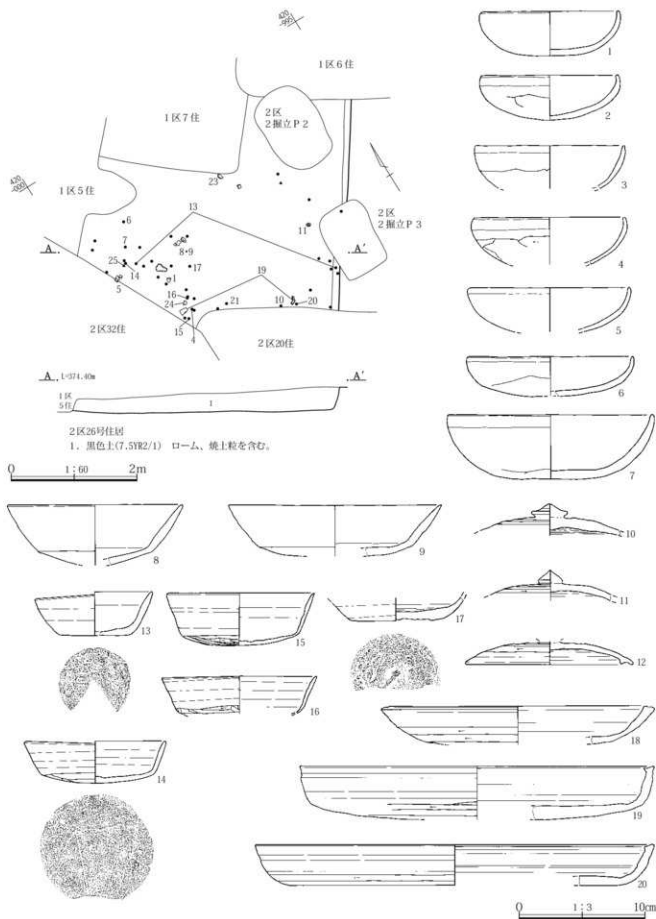
2区北端の東側にある。周囲に多くの新しい住居が重複し、それによって破壊されているため残りは非常に悪い。壁が南東壁の一部しか残っていないからで全形は不明であるが、遺物は数多く出土している。

**位置** X=63415~420, Y=-89994~90000。 **重複**

**遺構** 北側に1区5~7号住居、南側に2区20号住居、東側には2区2号掘立柱建物が重複する。西側は重機によって掘りすぎてしまったが、その部分には2区32号住居が重複している。本住居は1区5~7号、2区20号住居より新しい。 **形状** 残っている壁が南東壁の一部だけなので形状は不明であるが、この壁は直線的にのびている。 **主軸方位** 竈の位置が分からないので特定できないが、南東壁の方位を測定すると、N-35°-Eである。

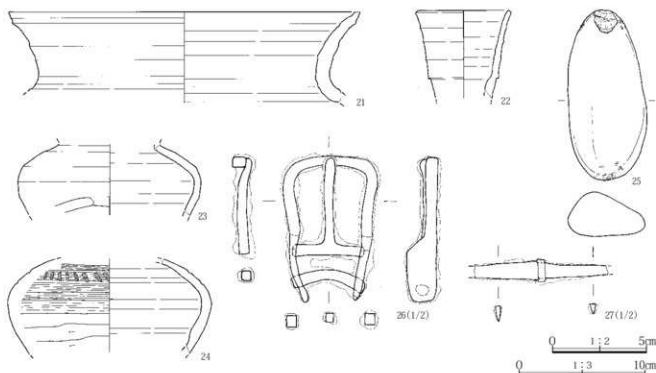
**規模** 3方向の壁が残っていないため計測不能だが、残存する部分を計測すると、北西-南東方向は4.20m以上、それに直交する方向は3.81m以上である。 **床面積** 計測不能である。 **壁高** セクション図を実測した部分では36cm。 **覆土** ローム粒・焼土粒を含む黒色土1層で埋没しており、人為的な埋没である可能性が考えられる。 **床面** ほぼ平坦である。 **柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 確認できなかった。 **遺物** 出土遺物が多い。調

査できた範囲の西部に密度の高い集中が見られるほか、南側にもやや集中している。床面からの出土は少なく、やや浮いた高さから出土しているものが多い。掲載したのは、土師器杯9点、須恵器蓋3点、同杯5点、同盤3点、同壺1点、同壺2点、小型壺2点、敲石1点、鉄製品の鉸貝1点、刀子1点である。その他小破片のため掲載できなかったものには、土師器杯・椀類379点、同高杯類1点、同壺・壺類181点、須恵器杯・椀類46点、同蓋類36点、同高杯・小型壺類13点がある。 **時期・所見** 住居の時期は出土遺物から7世紀第4四半期と思われる。部分的な調査にとどまり、竈をはじめとした諸施設が確認できなかったことなど、不明な点が多い住居である。発掘時の所見では1区5号住居、1区7号住居よりも古いとされているが、遺物からみるとそれぞれの時期は7世紀第4四半期、7世紀代であり、非常に近接した時期の住居であることになる。7号住居はわずか6点の土師器壺・壺類小片しか出土していないので、時期は確実とは言えず、それよりも新しい時期のものである可能性も考えられるが、5号住居は本住居とほぼ同時期と考えられ、とすれば、かなり短期間のうちに建て替えられたということになるだろう。



第72図 2区26号住居断面図、出土遺物(1)





第73図 2区26号住居出土遺物(2)

**2区30号住居**(第74図、Pl.15-6)

2区中央やや南にある。大部分がほかの住居に破壊され、南西壁とその付近の、ごくわずかな面積が残るのみである。

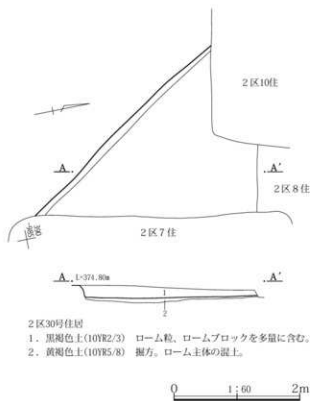
**位置** X=63390～394、Y=89984から988。**重複遺構** 東に2区7号住居、北に2区8号、10号住居が重複する。本住居はそのいずれよりも古い。**形状** 南西壁しか調査できなかつたため不明。その壁は直線的である。

**主軸方位** 不明であるが、南西壁の方向を計測するとN-33°-Wである。**規模** 3辺の壁が不明なので計測不能であるが、現存する長さから計測すると、北西-南東方向は3.91m以上、それに直交する北東-南西方向は2.48m以上の長さがあるはずである。**床面積** 全体は不明だが、前項の規模から単純計算すると9.70m以上のはずである。**壁高** 9～19cm。**覆土** ロームを含む黒褐色土で埋没している。**床面** ほぼ平坦である。

**柱穴・竈・貯蔵穴・周溝** 確認できなかつた。**掘方** 全体に2～8cmあるのみである。底面には細かい凹凸はあるが、ほぼ平坦である。**遺物** 出土遺物は少なく、掲載できるものはない。小破片は土師器杯・椀類1点、同裏・壺類13点、須恵器裏・壺類2点が出土している。

**時期・所見** 出土遺物から6、7世紀の住居だと思わ

れるが、わずかな土器片からの推定なので特定することは困難である。一部分の調査にとどまったので不明な点が多い住居である。



2区30号住居  
1. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒、ロームブロックを多量に含む。  
2. 黄褐色土(10YR5/8) 掘方。ローム主体の混土。

第74図 2区30号住居平面断面図

## 2区32号住居(第75～78図、第20・21表、PL.15-7・8、16、36・37)

2区北端の西側にあり、西側が調査区外となる。

**位置** X=63413～422。Y=-89998～90006。 **重複遺構** 北側に1区1号、5号住居、東から南東にかけて2区26号住居、20号住居が重複する。本住居はそのいずれよりも古い。なお、1区5号住居、2区20号住居の掘方調査の際に下層を深く掘ってしまい、その部分の壁が失われてしまった。平面図はその部分を推定復元してある。 **形状** 調査区内の形状から見て方形と考えられる。

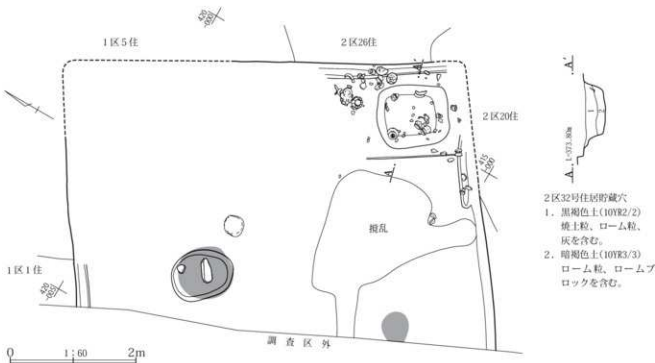
**主軸方位** 調査した範囲からみると、炉が住居の北西部に位置すると考えられるので、北西-南東方向が主軸方位と思われる。その方位を計測するとN-35°-Wである。 **規模** 主軸方向の長さは6.60mである。それと直交する方向の長さは不明であるが、現存する長さから4.52m以上である。 **床面積** 計測不能である。 **壁高** 別々の遺構との重複がない南端部で68～70cmであり、本遺跡の他の住居に比べて非常に深い。 **床面** 表面はほぼ平坦であるが、全体に南から北に向かって緩やかに下がっており、その標高差は19cmに及ぶ。東隅付近では、北東壁際が約130cmの幅で一段低くなっている。段差の高さは9～12cmであるが、この段差が北東壁の全体に存在するかどうかは不明である。 **柱穴** 床面では確認

できなかったが、掘方調査の際に見つかった3基のピットが柱穴である可能性がある。ただしやや浅い点で疑問があり断定はできない。各ピットの規模は以下の通りである(長径×短径×深さ)。長径と短径は掘方断面で計測し、深さは床面から計測した。

P 1 20×17×35 P 2 45×39×28

P 3 38×38×48

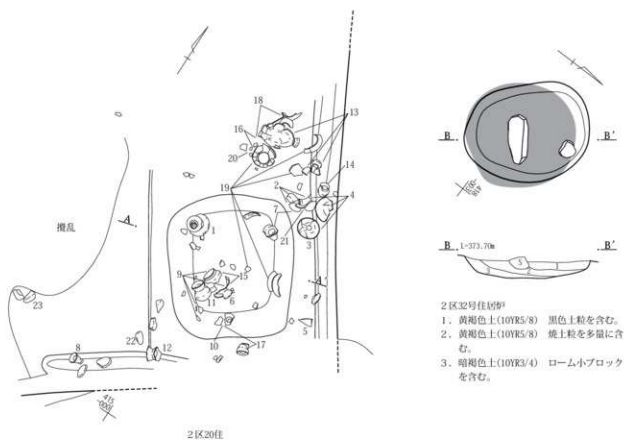
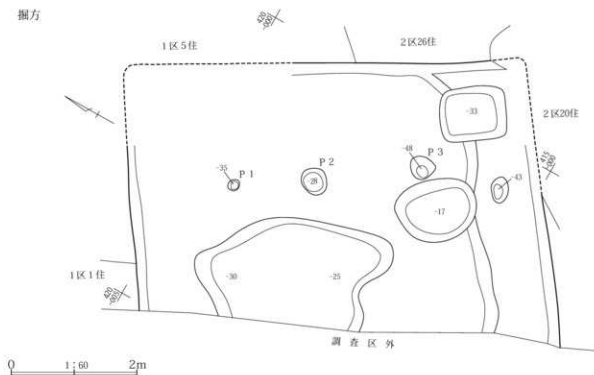
**炉** 調査した範囲の北西部にある。いわゆる地床炉で、浅い掘り込みをもつ。掘り込みの規模は長径101cm、短径78cmの楕円形で、深さは18cmである。炉の表面の中央やや南東側には枕石と思われる石が長軸方向と直交して置かれている。この石は長さ40cm、幅16cmの細長い角礫である。炉の中には焼土が顕著に見られ、よく使用されていたことが分かる。 **貯蔵穴** 東隅にある。長さ114cm、幅100cmの長方形で、深さは33cmである。内部及び周囲からは多量の土器が出土した。 **周溝** 調査できた範囲では、南東壁の東端付近と北西壁、北東壁に存在する。壁が残っていた範囲が狭いので、途切れている間が全周するかどうかは不明だが、調査できた範囲では南東壁の西側を除いて周溝が見られるため、壁の大部分には周溝が巡っていたのではないだろうか。見つかっている周溝は、幅15～20cm、深さ5～12cmである。 **掘方** 全体に床面よりも12～20cm深い。中央部分はさらに



第75図 2区32号住居平面図

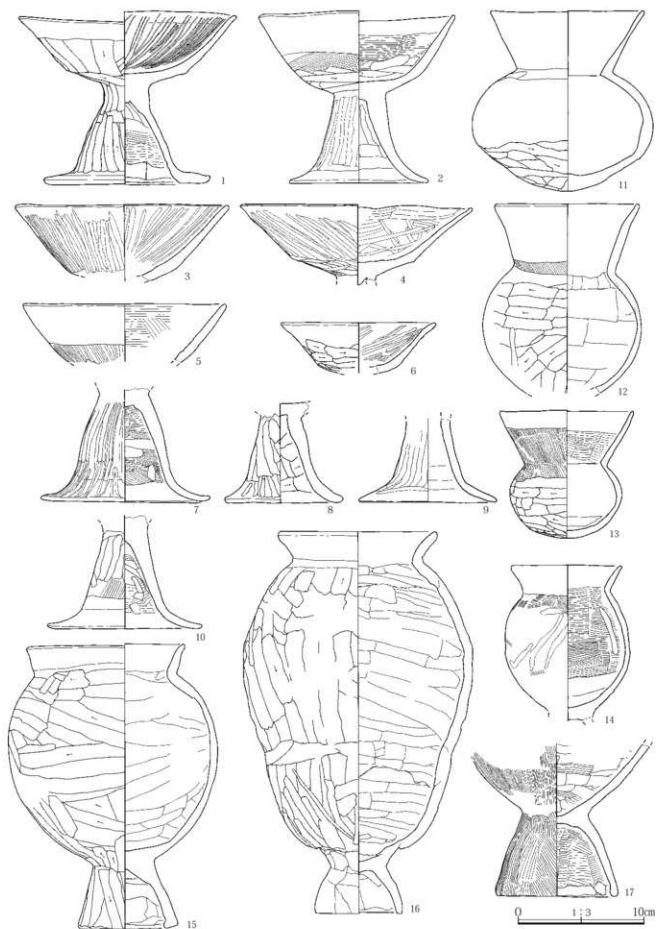
第3章 調査の成果

掘方

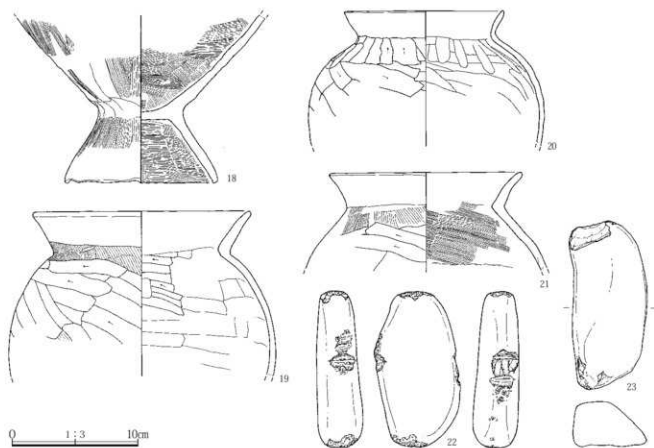


- 2区32号住居跡
1. 黄褐色土(10YR5/8) 黒色土粒を含む。
  2. 黄褐色土(10YR5/8) 焼土粒を多量に含む。
  3. 暗褐色土(10YR3/4) ローム小ブロックを含む。

第76図 2区32号住居掘方平面図、貯蔵穴付近遺物出土状況図、剖面断面図



第77图 2区32号住居出土遗物(1)



第78図 2区32号住居出土遺物(2)

深く、床面から22～35cmの深さがある。逆に南東壁際は80～90cmの幅が高くなっており、この部分は床面から7～15cmの深さである。遺物 遺物は貯蔵穴とその周辺に集中している。ほとんどは床面からわずかに浮いた高さから出土している。掲載したのはいずれも土師器で、高杯10点、埴1点、小型壺2点、台付甕4点、小型台付甕1点、甕3点、敲石2点である。小破片のために掲載できなかったものには、土師器杯・碗類9点、同高杯類24点、同甕・壺類85点、須恵器杯・碗類3点、同蓋類1点、同甕・壺類3点がある。時期・所見 住居の時期は出土遺物から4世紀末～5世紀初めと思われる、今回調査した中では最古の住居である。西側が調査区外となるが、柱穴、炉、貯蔵穴、周溝などを明らかにすることができ、住居の様相をほぼ把握することができた。

### 第3節 掘立柱建物・柱穴列

掘立柱建物は4棟、柱穴列は1条を調査した。いずれも2区にある。

掘立柱建物は2区全域に散在しており、集中箇所はない。それぞれの建物の柱穴には4号掘立柱建物を除いて重複が見られないので、建て替えなどは行われておらず、単時期のものであると思われる。4号掘立柱建物は一部建て替えか修理が行われた可能性があるが、完全に作り替えられたわけではなく、存続期間はさほど長くはなかったと思われる。建物規模・構造は多様で、4棟とも異なっている。特に2棟に見られる礎板石や、間仕切と思われる柱配置など、珍しい構造のものもあり注目される。建物方位は正方位から少し東に傾くものが多いが、3号掘立柱建物のようにやや西に振れるものもあり、完全に統一されてはいない。建物の用途を推測させるようなものはないが、4号掘立柱建物は柱穴列と重なる位置にあり方向も共通するので、門の可能性があると考えられる。それが正しければ、柱穴列は門をもつような区画施設であり、遺構の数が少ない南側が区画外、北側が区画内になるものと思われる。しかし、3号掘立柱建物が区画外に出てしまうなど、疑問な点もあり断定は難しい。建物の時期は出土遺物が少なく詳細な特定は難しい。すべてが同一時期のものとするれば7世紀末から8世紀初頭頃のものである可能性が考えられる。これら時期・建物の性格については、第4章で触れることにする。

#### 2区1号掘立柱建物(第79～81図、第4・21表、Pl.17～19)

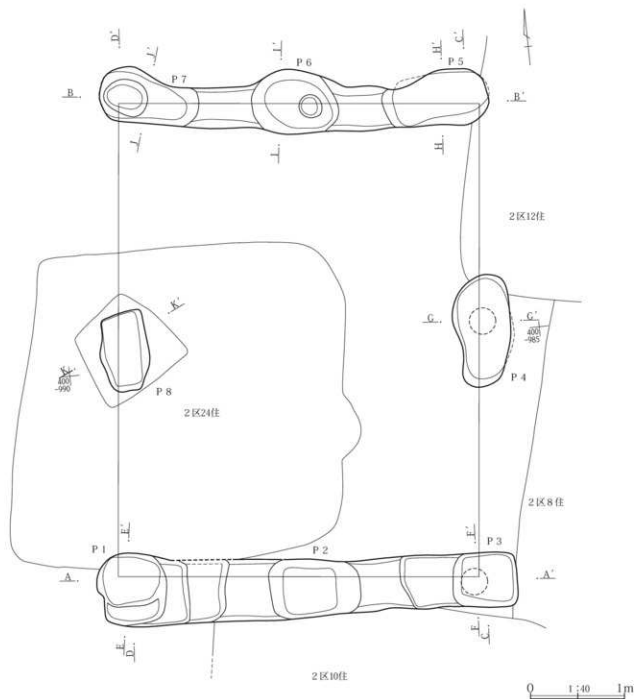
2区中央にある。調査区幅のほぼ中央にあるため、全体を調査することができた。

**位置** X=63397～404、Y=-89985～990。**重複遺構** 2区8号、10号、12号、18号、19号、24号住居と重複する。調査所見によれば、この建物の柱穴はそれらの住居の掘方の下から見つかっているの、そのいずれよりも古いものと判断される。**建て替えの有無** 全ての柱穴には重複の痕跡が見られないので、建て替えは行われなかったものと考えられる。**平面形式** 南北棟で、桁行2間、梁行2間のいわゆる側柱建物である。**規模** 建物の規模は、柱痕跡が明確に確認できた柱穴が少な

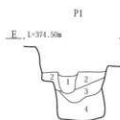
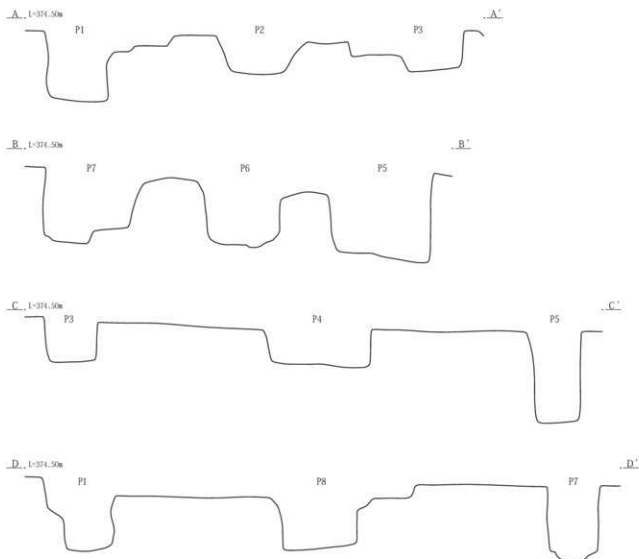
いの復元するのはやや難しい。ここでは1尺=0.295mを用いて平面図に示したような形を復元した。この復元では桁行が8.5尺+8.5尺=17尺(5.02m)であり、梁行が6.5尺+6.5尺=13尺(3.84m)である。ただし、P5の最も端に建物隅がきってしまう点や、確認面・断面で確認できているP3・4の柱痕跡の距離が8.5尺よりもやや長くなってしまふ点など、細かい点は復元に合致しないので、建物には多少の歪みがあったようである。**主軸方位** N-6°-Eで、やや東に傾く方位をとる。**柱掘方の形状・規模** 南北両辺の柱穴は布掘になっているが、各柱の位置をさらに歪振りしている。各柱穴の形状と規模は第4表の通りである。柱穴の平面形は様々であるが、南辺の3基(P1～3)はいずれも長方形なので、その他の柱穴も本来は長方形を意識した形だったのではないかと思われる。断面形や深さも様々であり、作りがあまり丁寧ではないという印象を受ける。特にP2～4の3基は浅く、最も深いP5に比べると、底面の標高が60cmも高い。柱の強度を考えるとやや問題がある作りなのではないだろうか。南北両辺の布掘は浅く、現状の深さは北辺で11～30cm、南辺で10～18cm程度しかない。**柱痕** 確認面・断面ではP3、P4の2基で明確に確認することができた(その柱痕は平面図に破線で記入してある)。それから見ると、柱は円柱で、直径は24～28cmである。それ以外の柱穴では確認面で柱痕を見つけることはできず、断面でも底面まで続く痕跡を見ることはできなかった。断面図の途中まで見えている柱痕状の土層は、柱痕の端の一部が断面に掛かったものと考えられる。**出土遺物** 小破片ばかりではあるが、いくつかの柱穴からは遺物が出土した。掲載したのは土師器甕1点、須恵器甕2点である。それぞれP1～3の掘方から出土している。そのほかに掲載できなかったものとして、土師器杯・椀類3点、同甕・壺類23点、須恵器蓋類1点、同甕・壺類1点が出土している。**時期・所見** 柱掘方から出土している土器は7世紀後半～8世紀前半のものと思われるが、8世紀第1四半期頃とみられる19号住居よりも古いので、この建物の時期は少なくとも8世紀初頭を下限として考えることができる。2間×2間の南北棟であるが、主軸方位はやや東に振れている。また、個々の柱穴形状は不整形のものが多く、しかもかなり浅いものが見られることなど、作りには丁寧ではない点はやや目立つ。

第4表 2区1号掘立柱建物柱穴一覧表

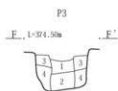
	形状	掘横(cm)	
		長径×短径×深さ	
P 1	長方形か	77×56×77	
P 2	長方形	96×61×50	
P 3	長方形	68×58×45	
P 4	不整形	118×60×38	
P 5	不整形	113×60×99	
P 6	楕円形	93×69×84	
P 7	不整形	107×59×80	
P 8	長方形か	83×52×46	



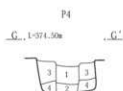
第79図 2区1号掘立柱建物平面図



- P 1
1. 黒褐色土(SYR2/1) 柱痕か。ローム粒を少量含む。
  2. 暗褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。
  3. 黒褐色土(SYR2/1) ロームブロックを多量に含む。
  4. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロックを主体とする。



- P 3
1. 黒褐色土(SYR2/1) 柱痕。ロームブロックを少量含む。
  2. 黒褐色土(SYR2/1) 柱痕。ロームブロックを含む。
  3. 黒褐色土(SYR2/1) ローム粒・ブロックを含む。
  4. 黒褐色土(SYR2/1) ロームブロックを多量に含む。



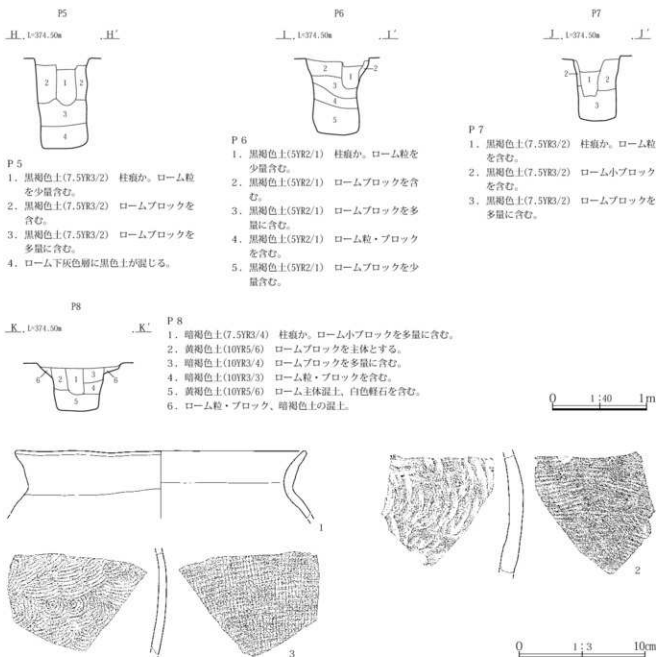
- P 4
1. 黒褐色土(SYR2/1) 柱痕。ローム粒を少量含む。
  2. 黒褐色土(SYR2/1) 柱痕。ローム粒・ブロックを多量に含む。
  3. 黒褐色土(SYR2/2) ロームブロックを少量含む。
  4. 黒褐色土(SYR2/2) ローム粒を含む。

0 1:40 1m

第80図 2区1号掘立柱建物断面図(1)



### 第3章 調査の成果



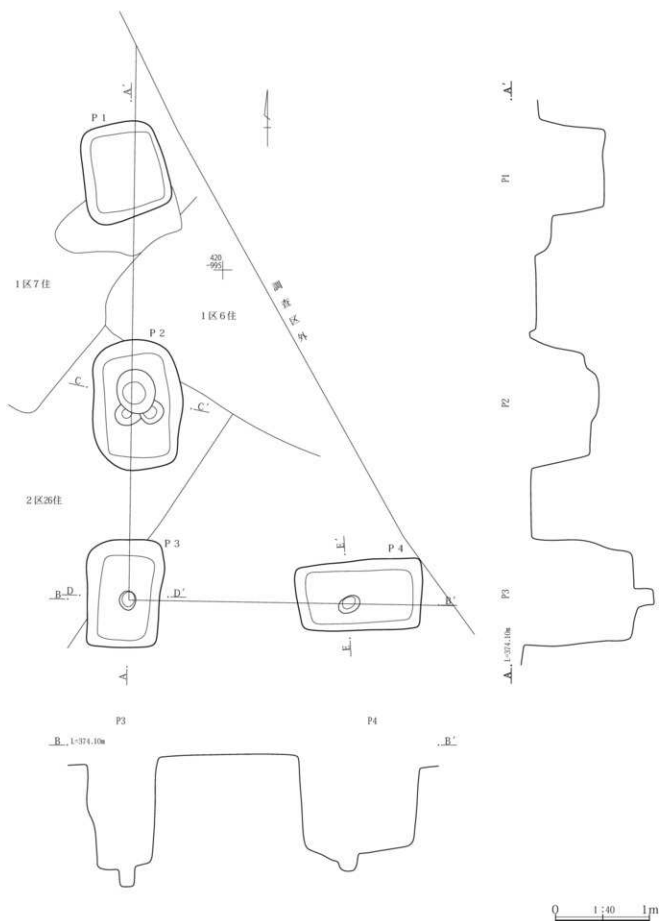
第81図 2区1号掘立柱建物断面図(2)、出土遺物

#### 2区2号掘立柱建物(第82・83図、第5・21表、PL.20・21)

2区北端にある。柱穴の大きさや柱間から見てかなり大型の建物になると思われるが、東側が調査区外となるため全体を調査できなかった。調査できたのは南西隅とその前後の4基の柱穴である。

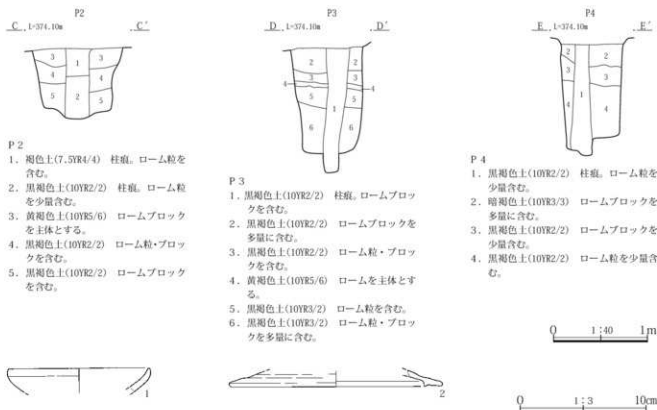
**位置** X=63416～422, Y=-89992～997。 **重複遺構** 1区6号、7号、2区26号住居と重複する。本建物は1区7号、2区26号住居よりも新しく、1区6号住居よりも古い。 **建て替えの有無** 4基の柱穴とも重複が確認できなかったので、建て替えは行われなかったもの

と考えられる。 **平面形式** 4基の柱穴しか見つかっておらず、南北棟か東西棟かは不明である。平面図では建物が調査区外にさらに延びていることを示すため、P1の北側に延びるように表現しているが、実際には北に延びずにここが北西隅となって東側に延びる可能性もある。P4の真北では柱穴が見つかっていないので、総柱である可能性は低く、いわゆる側柱建物になるものと考えられる。 **規模** 前項のような状況から、西辺は2間かそれ以上、南辺は少なくとも2間以上はあるものと考えられる。P2～4の3基の柱穴の柱痕は明瞭に確認で



第82図 2区2号掘立柱建物平面図

### 第3章 調査の成果



第83図 2区2号掘立柱建物断面図、出土遺物

きたためそれによって計測すると、P2-P3は2.2mであるので西辺は4.4mかそれ以上、P3-P4は2.33mであるので南辺は4.66m以上はあったと推定される。

**主軸方位** 西辺の方位を計測すると、N-1°Eであり、正方位からはわずかに東に傾いている。**柱掘方の形状・規模** 各柱穴の形状と規模は第5表の通りである。いずれも長方形で整った形状である。西辺のP1~3の3基は南北方向に長く、南辺のP4のみは東西方向に長い。深さは71~139cmに及び、深くしっかりとした柱穴である。掘方の理土は版築状に水平に埋められ、固く締まっていたので、柱の据え方も丁寧に行われていたことがわかる。**柱痕** P2~4の3基で確認面・断面ともに確認でき、掘方底面には柱の当たりも明確に残されていた。円柱で直径は26~30cmである。**出土遺物** 各柱穴からは小破片ではあるが遺物が出土している。掲載したのはいずれもP3から出土したもので、土師器杯1点、須恵器蓋1点である。その他掲載できなかったものとして、土師器杯・椀類3点、同裏・壺類17点、須恵器杯・椀類1点、同裏・壺類1点、弥生土器と思われる破片1点がある。

**時期・所見** 出土遺物は7世紀末~8世紀初頭のものと思われ、住居との重複関係も7世紀第4四半期の2区26号住居よりも新しく、8世紀後半の1区6号住居よりも古いことから、本建物の時期は7世紀末から8世紀後半の間、すなわち8世紀前半を中心とした時期と思われる。残念ながら一部分の調査にとどまったが、柱穴が方形で大きいこと、柱も丁寧に据えられていることから、かなり規模の大きな建物であると考えられる。しかも方位は今回調査した4棟の中で最も正方位に近い。以上の点からある程度特別な役割をもった建物であると考えられ、その性格が目される建物である。

第5表 2区2号掘立柱建物柱穴一覧表

	形状	規模(cm)
		長径×短径×深さ
P1	長方形	102×87×71
P2	長方形	139×95×76
P3	長方形	115×82×139
P4	長方形	132×74×125

## 2区3号掘立柱建物(第84・85図、第6表、PL.22～24.25-1・2)

2区南端近くにある。各柱穴の底部には礎板石があり、内部の柱間が側柱の柱間と異なるなど、珍しい構造をもった建物である。

**位置** X=6375～381、Y=-38976～982。 **重複遺構** 2区4号住居と重複している。住居の掘方底面で見つかっており、本建物が古い。 **建て替えの有無** 各柱穴とも重複は確認されておらず、建て替えは行われなかったものと思われる。 **平面形式** 南北棟で、桁行2間、梁行2間の建物である。中央の梁行方向の柱が4本(P4～7)あり、南・北辺の柱数と異なっているのが注目される。内部に位置するP5とP6の2基の柱穴は、他の柱穴と大きさなどで異なることはない。これらの柱には間仕切の様な役割が想定されるかもしれないが、全体はわずか2間の建物であり、実際にどのような機能を持っていたのか、今後さらに検討が必要である。柱筋の通りは、礎板石の位置を基準にするとかかなり悪い。東・西辺と南辺の3方向は礎板石の中心をほぼ直線で結ぶことができるが、北辺は中央のP2が南にゆりすぎているし、中央はP4からP6が直線的に配置されるものの、東端のP7が大きく南にずれている。また、全体の配置もかなり歪みが大きく、平行四辺形に近い平面形となる。掲載した平面図では、四隅の礎板石の中心を結ぶだけにどめた。 **規模** 歪みがひどいので4辺の計測値を示す。各隅の礎板石の心一線で計測して、北辺(P1-P3)が3.42m、南辺(P8-P10)が3.33m、東辺(P3-P10)が4.10m、西辺(P1-P8)が3.88mである。誤差が大きいため断定はできないが、あえて切りのいい数値で示せば、北辺は11.5尺、南辺は11尺、東辺は14尺、西辺は13尺程度で設計されていたのではないだろうか。

**主軸方位** N-9°-Wであり、この建物だけ西に振れている。 **柱掘方の形状・規模** 各柱穴の形状と大きさは第6表の通りである。P2、P3のように不整形のものもあるが、その他の大部分は方形ないし長方形であり、本来は全て方形か長方形だったのではないだろうか。P8が現状で歪んだ形状なのは、南西側に別のピットが重複しているためと推定した。各柱穴には礎板石として平たい石が据えられている。据えられた高さは底面が多いが、P4とP8とは底面からやや浮いた高さにあり、そ

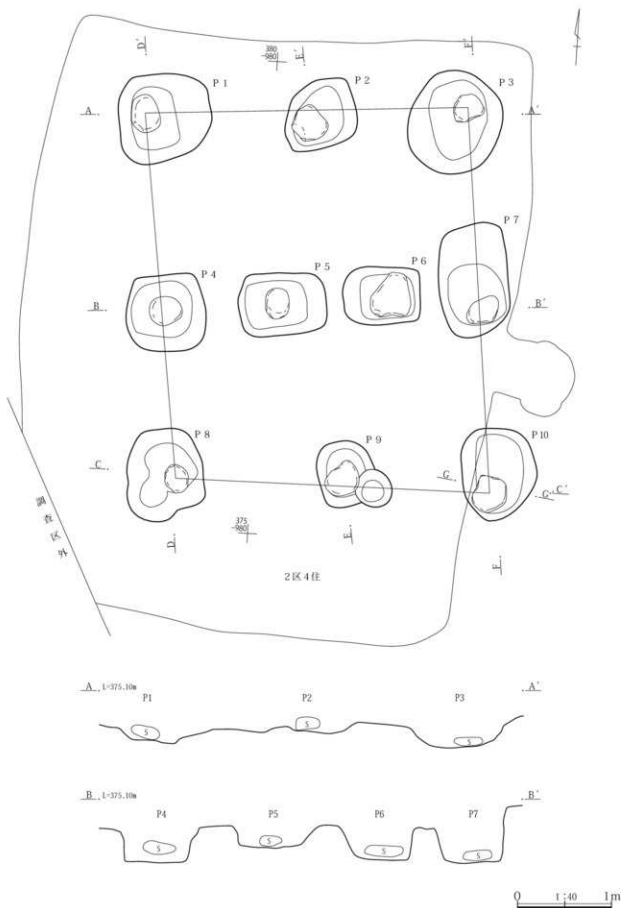
こまで埋め戻した後に据えられたものと思われる。各礎板石の大きさと、礎板石上面中央付近の標高は以下の通りである(長径×短径×中央付近の厚さ、cm。その後に標高)。

P 1	40×30×17	374.73m
P 2	38×32×14	374.81m
P 3	34×28×9	374.60m
P 4	34×31×15	374.66m
P 5	32×25×12	374.72m
P 6	52×41×12	374.61m
P 7	38×26×11	374.56m
P 8	30×26×9	374.55m
P 9	38×30×13	374.76m
P 10	38×34×12	374.67m

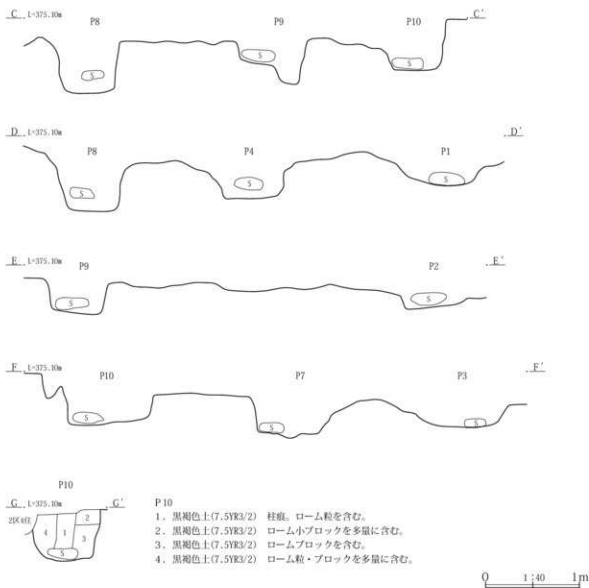
礎板石上面の標高には最高と最低との間に26cmもの差が認められる。厳密にレベルを揃えるようなことはしていないようである。 **柱痕** P10を除く各柱穴は2区4号住居の掘方調査の際に掘り下げてしまったため、柱痕の確認はできなかったが、その住居から外れているP10は、断面で柱痕を確認した。この痕跡は径18cm程度であり、礎板石に正しくのる位置にあった。 **出土遺物** 出土遺物は小破片ばかりで掲載できるものはない。小破片の内訳は、土師器杯・椀類3点、同賈・壺類27点、須恵器杯・椀類2点、同蓋類1点である。 **時期・所見** 出土遺物が小破片ばかりなので時期の特定は困難であるが、2区4号住居は9世紀第1四半期のものなので、それ以前のものであることは確実である。礎板石をもつことや中央の梁行の柱間が南北辺より異なることなど、やや特異な構造の建物である。主軸方位はやや西に振れ、他の建物と異なっている。

第6表 2区3号掘立柱建物柱穴一覧表

	形状	規模(cm)
		長径×短径×深さ
P 1	長方形か	98×94×18
P 2	不整形	80×72×13
P 3	不整形	110×98×25
P 4	方形	85×82×34
P 5	長方形	92×66×28
P 6	長方形	81×62×38
P 7	長方形	116×74×43
P 8	長方形か	88×81×70
P 9	長方形か	70×60×23
P 10	長方形か	99×80×52



第84図 2区3号掘立柱建物平面図



第85図 2区3号掘立柱建物断面図

**2区4号掘立柱建物**(第86・87図、第7表、PL.25-3～5,26-1～3)

2区南端近くの東側にある。すぐ東側に調査区境があるため、建物の東側が調査区外に延びている可能性は否定できない。3号掘立柱建物同様、礎板石をもつ。また、建て替えあるいは修理が行われた可能性があり、その点でも注目される。

**位置** X=63381～386、Y=-89971～975。 **重複遺構** 2区14号、16号住居、13号、14号、22号土坑と重複する。本建物はそのいずれよりも古い。 **建て替えの有無** P1、P2の北側には、それぞれほぼ同じ形態の土坑(13、14号土坑)が重複している。これらの土坑は14号住居の調査の際に同時に発掘してしまったため、詳細

が分からず、本書では土坑として扱ったが、あるいはこれらはP1とP2とを掘り直したもののなのかもしれない。13号土坑には底面に柱の当たりのような凹みが見られるので、その可能性は高いものと思われ、だとすれば南側の柱は礎板石をもつものから、普通の掘立柱式に変わり、柱間もやや短く変更されたことになる。北側の2本については、P4の南に22号土坑があることが注目されるが、この土坑は大きすぎること、位置が南側に偏りすぎること、それに対応する穴がP3に見られないことなどから、掘り直しとは関連が薄いものと思われる。そのため北辺は建て替えなどはなかったものと考えられる。 **平面形式** 調査区内にあるのは1間×1間であるが、東側に調査区境があるので、その方向にさらに延び

ている可能性は否定できない。東辺には中間にピットがあるが、このピットは次項で述べる1号柱穴列の延長線上にあり、その大きさからみても柱穴列の柱穴(1号柱穴列P7)であると思われる。**規模** 礎板石の心一線で計測して、北辺が2.22mで7.4尺、南辺は2.40mで8尺、東西両辺は2.70mで9尺である。北辺が南辺に比べて短いので、全体の形は台形となる。13・14号土坑が南の柱穴だった時期があったとすると、南辺が北に平行移動することになるが、14号土坑には柱の位置を示す痕跡が確認できなかったので、その際の規模がよく分からない。13号土坑の柱痕跡の凹みとP4の礎板石の間の距離は、心一線で計測して2.18mであり、そうすると西辺は北辺とほぼ等しくなる。あるいは建て替えないし修理後の建物は正方形に近い平面形状だったのではないだろうか。

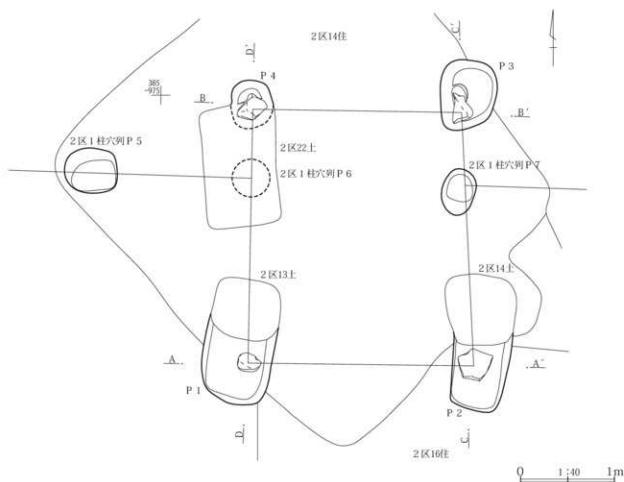
**主軸方位** 東西方向の方位を計測すると、P1とP2との礎板石の心一線を結んだ線がN-89°-Wである。

**柱距方の形状・規模** 各柱穴の形状と規模は第7表の通りである。南辺の2基と北辺の2基とは形状、規模が

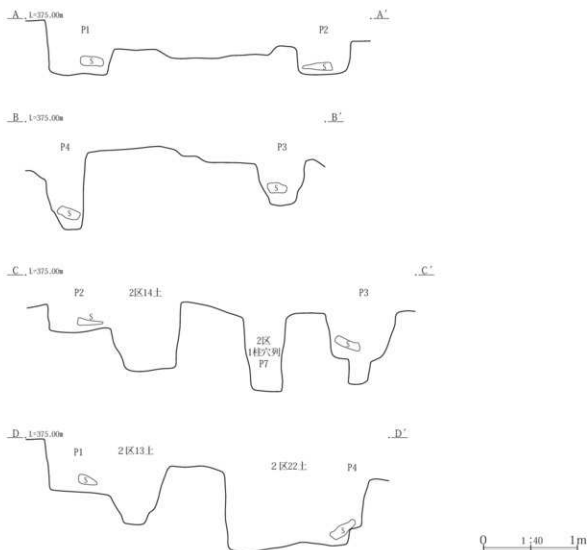
大きく異なり、南辺が長方形で大きいのに対し、北辺は不整形(歪んだ方形?)か円形で小さい。建物の構造にも関わる違いであると思われる。13・14号土坑も同様にやや大きな長方形であり、深さも深いので、変更後も同じ傾向が続いていることになる。各柱穴には礎板石として平石が据えられている。エレベーション図にみるように、いずれも柱穴底面より4~14cm高い位置から出土していることから、底面に土を埋め戻した後石を据えていることが分かる。なお、P4の礎板石が斜めになっているのは、南側に22号土坑が掘られた際にそちらに落ち込むように傾いたためと考えられる。各礎板石の大きさと、礎板石上面中央付近の標高は以下の通りである(長径×短径×中央付近の厚さ、cm。その後には標高)。

P 1	24×20×11	374.61m
P 2	34×32×13	374.57m
P 3	32×24×18	374.37m
P 4	33×30×12	374.08m

**柱痕** 各柱穴と13・14号土坑とは2区14号住居の調査の



第86図 2区4号掘立柱建物平面図



第87図 2区4号掘立柱建物断面図

際などに掘り下げてしまったため、柱痕の確認はできなかった。**出土遺物** 出土遺物はない。**時期・所見** 出土遺物がないので時期の特定は困難であるが、本建物よりも新しい2区14号住居が9世紀後半のものであると考えられるので、少なくともそれを遡る時期のものである。調査できたのが建物の全体であるかどうか確定できないため、どのような建物なのかを推定するのは難しいが、2区1号柱穴列と重複する位置にあること、両者の方位はほぼ同じであること、柱穴列の柱穴と思われる1号柱穴列P7が本建物の東辺に正しく一致する位置にあることなどから、柱穴列と一体となった建物である可能性が高い。とすれば、本建物は柱穴列をまたいだ位置に建てられていることから、門のような建物であると想定することが可能なのではないだろうか。北辺の柱穴に比べ南辺

の柱穴が大きいのは、こちらの方が区画の外側となるのでより立派に見せる必要があり、太い柱を用いたためと考えることができると思われる。また、北側に重複する新しい土坑が柱穴だとする推定が正しいとすれば、本遺跡では建て替えあるいは修理が確認された唯一の掘立柱建物ということになるが、それは南辺だけで確認されているので、本格的な建て替えとは思えず、建物が特に長期間存続したとは言えない。ただし、以上の推定はわずかな根拠に基づくものなので断定することはできない。残念ながら東側はすでに削平されているので、建物の全体を明らかにすることはできないが、これと一体であると思われる1号柱穴列がどのような区画となるかは今後調査できる余地があり、その全体像が明らかになった上でこの建物の性格をさらに考えていく必要がある。



第7表 2区4号掘立柱建物柱穴一覧表

	形状	規模(cm)
		長径×短径×深さ
P 1	長方形か	(70)×75×59
P 2	長方形か	(70)×60×36
P 3	不整形	75×60×52
P 4	ほぼ円形	(50)×44×65

### 2区1号柱穴列(第88・89図、第8・21表、PL.22-1, 26-4・5, 27-1・2)

2区南端近くにある。調査区を東西に横断するようにピットがほぼ等間隔で並んでいたため、柱穴列と判断したものである。ピットは合計6基が見つかったが、その間隔から考えて2区22号土坑に重複する位置にもあったと推定されるので、それを含めて各ピットに西からP 1～P 7という名称を与えた。

**位置** X=63383～385, Y=-89971～986. **重複遺構**

各ピットとの重複が直接確認できるのは2区14号住居だけだが、ピットの間隔から見て、2区22号土坑に1基破壊されている可能性が強い。この柱穴列はその両者よりも古い。また、柱穴列の西延長上には2区3号住居があり、それとも重複しているはずだが、ピットとの重複位置は調査区外となるので、直接の新旧関係は確認できない。**建て替えの有無** 各ピットに重複などは確認できず、建て替えは行われていないものと考えられる。

**規模** 西端のP 1から東端のP 7までの心-心距離は13.40mであるが、両端はさらに調査区外に延びると考えられるので、柱穴列全体の長さは不明である。各ピット間の心-心距離は下記の通りである。なおこれらのピットは完全には一列になっておらず多少南北に振れる位置にあるため、各ピット間の距離を合計しても両端のピットの距離とは一致しない。

P 1-P 2 2.60m P 2-P 3 2.32m

P 3-P 4 2.26m P 4-P 5 2.32m

P 5-推定P 6 1.70m

推定P 6-P 7 2.22m

**方位** N-2°-W. **柱掘方の形状・規模** 各ピットの形状・規模は第8表の通りである。形状は現状では様々であるが、本来は方形かそれに近い形だったのではないと思われる。大きさは他の掘立柱建物に比べてかなり小さい。**柱痕** 明らかな柱痕が確認できたのはP 1のみであり、その他では確認できなかった。柱は円形であり、径は20cmである。**出土遺物** 掲載したのはP 3か

ら出土した須恵器蓋1点である。その他にはP 1から土師器杯・椀類の小破片が1点出土したのみである。

**時期・所見** 出土遺物が少ないので詳細な時期を特定するのは困難だが、8世紀前半に収まるものと思われる。東西に延びる柱穴列であり、塙のような施設であると考えられ、先述の通り4号掘立柱建物と一体となった区画施設である可能性が高い。それが正しいとすれば、遺構の密度は北側が濃いので、北が区画内、南が区画外ということになるであろう。本遺跡の性格を理解する上では重要な遺構であり、今後西側でその延長部分が調査されることを期待したい。

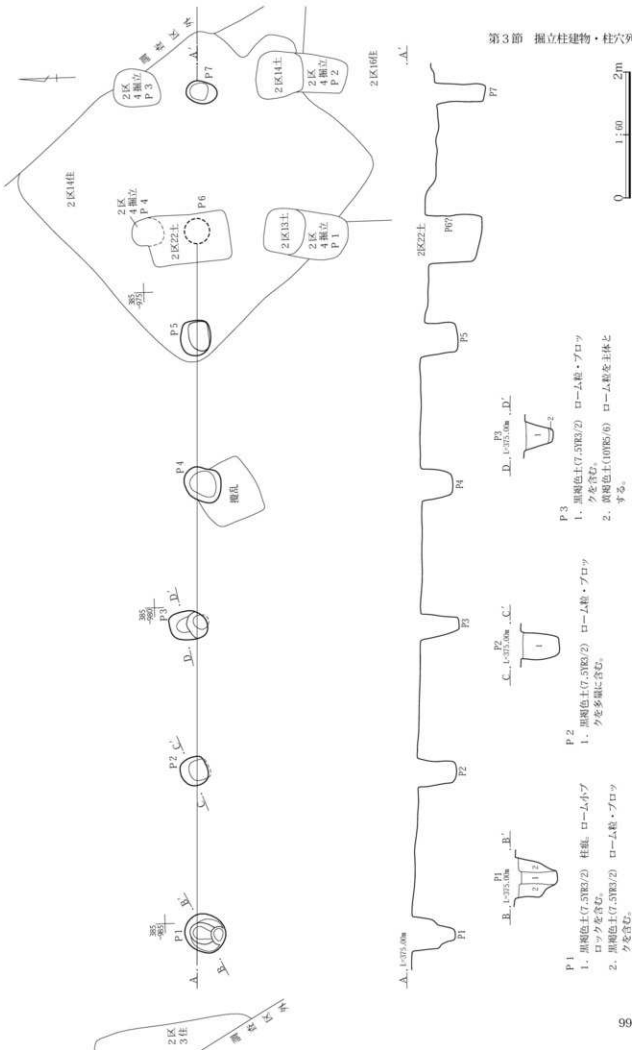
第8表 2区1号柱穴列柱穴一覧表

	形状	規模(cm)
		長径×短径×深さ
P 1	楕円形	66×59×60
P 2	ほぼ円形	45×42×64
P 3	楕円形	60×46×62
P 4	不整形	59×50×53
P 5	方形か	57×48×47
P 6	—	—
P 7	楕円形	49×35×78



0 1:3 10cm

第88図 2区1号柱穴列出土遺物



第889図 2区1号柱穴列断面図

- P 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 柱底、ローム粒・ブロックを含む。  
 1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 柱底、ローム粒・ブロックを含む。  
 2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。
- P 2 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。  
 1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。  
 2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。
- P 3 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。  
 1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ブロックを含む。  
 2. 黒褐色土(10YR5/6) ローム粒を主体とする。

## 第4節 ピット

ピットは1区12基、2区28基の合計40基を報告する。現地における発掘調査では1区で14基、2区で34基をピットとして調査したが、その後整理作業の過程で各遺構の見直しを行い、5基は遺構とは見なせないことから欠番とし、4基は掘立柱建物や柱穴列のピットとして変更し、1基はその大きさ・形状から土坑がふさわしいとして変更することにした。逆に2基の遺構が、柱痕をもつことからピットに変更した。

なお本節で報告する「ピット」と、次節で報告する「土坑」とは、基本的には平面形の大小で決めているが、2区7号ピットのように土坑と呼ぶ方がふさわしいような大きさのものでも、柱痕をもち柱穴の可能性が強い場合は「ピット」として扱うことにしている。

各ピットの位置、形状、大きさ、重複関係、出土遺物などの基本的な情報は第9表にまとめた通りである。

本遺跡の調査では、前節で扱ったように、特徴的な掘立柱建物が4棟見ついているため、ピットの発見には特に注意した。1・2区では竪穴住居が数多く重複し、その部分では明確なピットは確認できなかったが、住居

第9表 ピット一覧表

区	番号	所在グリッド	形状	大きさ(cm)		備考 ( )内は小破片のため未掲載の遺物数
				長さ	幅×深さ	
1区	1	420-000	ほぼ円形	37	34×15	
1区	2	420-000	ほぼ円形	54	49×35	
1区	3	425-000	ほぼ円形	37	33×37	
1区	4	425-000	ほぼ円形	36	29×20	
1区	5	420-000	ほぼ円形	61	57×41	(土師器杯椀類1、同表遺類2)
1区	6	425-000	ほぼ円形	36	29×28	
1区	7	425-000	ほぼ円形	56	50×23	
1区	8	4土坑に変更				
1区	9	欠番				
1区	10	430-000	ほぼ円形	58	55×28	1区1溝より新。(土師器杯椀類4、同表遺類4、須恵器杯椀類3、同表遺類2)
1区	11	435-005	ほぼ円形	44	37×58	1区4住より古。(土師器杯椀類1)
1区	12	430-005	ほぼ円形	(46)	40×33	1区13ピットより新。(土師器杯椀類1)
1区	13	430-005	ほぼ円形	62	58×48	1区12ピットより古。
1区	14	430-005	不整形	31	25×15	
2区	1	380-985	ほぼ円形	38	32×29	
2区	2	385-980	円形	30	29×31	
2区	3	1柱穴列P1				
2区	4	1柱穴列P2				
2区	5	1柱穴列P3				
2区	6	385-975	ほぼ円形	75	66×23	
2区	7	385-980	長方形	112	60×42	
2区	8	385-975	方形	58	54×29	
2区	9	385-975	ほぼ円形	32	27×29	
2区	10	欠番				
2区	11	375-975	長方形	77	55×45	
2区	12	3掘立P10				
2区	13	欠番				
2区	14	415-990	ほぼ円形	39	37×19	2区16ピットより新。(土師器杯椀類3、同表遺類2)
2区	15	370-975	楕円形	49	36×24	(須恵器蓋類1)
2区	16	415-995	楕円形	49	31×46	2区14ピットより古。(土師器杯椀類2、同表遺類1)
2区	17	欠番				
2区	18	370-970	ほぼ円形	40	37×14	
2区	19	410-995	不整形	42	34×17	2区20住とわずかに重複。新旧不明。
2区	20	欠番				
2区	21	370-965	ほぼ円形	37	35×25	
2区	22	370-965	円形	33	33×19	
2区	23	375-965	不整形	61	42×30	
2区	24	390-975	不整形	69	62×54	(土師器杯椀類2)
2区	25	390-985	ほぼ円形	61	52×30	(土師器杯椀類1、同表遺類1、須恵器杯椀類1)
2区	26	375-970	ほぼ円形	30	27×59	2区16住と重複。新旧不明。
2区	27	375-970	不整形楕円形	49	27×57	2区16住と重複。新旧不明。
2区	28	380-970	ほぼ円形	31	26×37	2区16住より古。
2区	29	380-970	ほぼ円形	28	25×38	2区16住より古。
2区	30	375-970	ほぼ円形	41	36×63	2区16住より古。
2区	31	375-970	不整形	39	29×45	2区21土坑と重複。新旧不明。(須恵器杯椀類1)
2区	32	375-970	楕円形	57	38×37	(須恵器杯椀類1)
2区	33	380-965	楕円形	(27)	25×21	2区16住より古。2区34ピットより新。
2区	34	380-965	ほぼ円形	35	29×39	2区16住、33ピットより古。
2区	35	370-980	方形	84	83×43	
2区	36	410-985	長方形	63	53×44	(土師器杯椀類1、同表遺類5、須恵器杯椀類1)

1区1号ビット



1区1号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土を多量に含む。

1区2号ビット



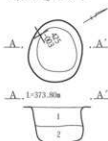
1区2号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土、褐色土を微量含む。

1区3号ビット



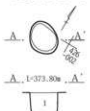
1区3号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土を多量、焼土を微量含む。

1区5号ビット



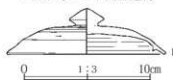
1区5号ビット  
1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を含む。  
2. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土、炭化物、ローム粒を微量含む。

1区6号ビット



1区6号ビット  
1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ロームブロック粒を含む。

1区2号ビット出土遺物

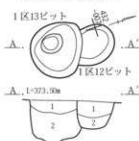


1区4号ビット



1区4号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい褐色土を多量、焼土、白色軽石を微量含む。

1区12・13号ビット



1区12号ビット  
1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ロームブロックを含む。  
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを多量に含む。  
1区13号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を含む。  
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

1区7号ビット



1区7号ビット  
1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒を多量に含む。

1区10号ビット



1区10号ビット  
1. 褐色土(7.5YR4/3) 焼土、炭化物、白色軽石を微量含む。

1区11号ビット



1区11号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土、炭化物、ローム粒を微量含む。  
2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を少量含む。

1区10号ビット出土遺物



1区14号ビット



1区14号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を含む。

2区1号ビット



2区1号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

2区2号ビット



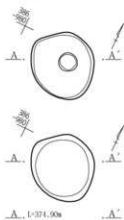
2区2号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。



第90図 ビット平断面図(1)、出土遺物

2区6号ビット

柱痕確認面

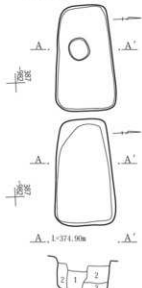


2区6号ビット

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) 柱痕、ローム粒を含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ブロックを多量に含む。

2区7号ビット

柱痕確認面



2区7号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 柱痕、ローム粒を含む。
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム小ブロックを含む。
3. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを多量に含む。

2区8号ビット



2区8号ビット

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を多量に含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6) ロームブロックを主体とする。

2区9号ビット



2区9号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を含む。
2. 黄褐色土(10YR5/8) ロームを主体とする。

2区11号ビット



2区11号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

2区14・16号ビット



2区14・16号ビット

1. 黒褐色土(10YR3/2) 16号ビット、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) 14号ビット、ローム粒を多量に含む。

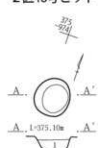
2区15号ビット



2区15号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

2区18号ビット



2区18号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

2区19号ビット



2区19号ビット

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色軽石、ローム粒を含む。

2区22号ビット



2区22号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム小ブロックを含む。

2区23号ビット



2区23号ビット

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ブロックを含む。

2区21号ビット



2区21号ビット

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を含む。



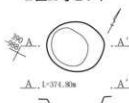
第91図 ビット平面断面図(2)

2区24号ビット



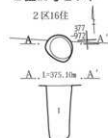
2区24号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を含む。

2区25号ビット



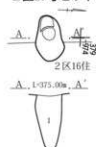
2区25号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 柱痕。ローム粒・小ブロックを含む。  
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

2区26号ビット



2区26号ビット  
1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を多量を含む。

2区27号ビット



2区27号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多量を含む。

2区28号ビット



2区28号ビット  
1. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒を多量を含む。  
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・ブロックを多量を含む。

2区29号ビット



2区29号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多量を含む。

2区30号ビット



2区30号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多量を含む。

2区31号ビット



2区31号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多量を含む。

2区32号ビット



2区32号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多量を含む。

2区33・34号ビット



2区33号・34号ビット  
1. 黒褐色土(10YR3/2) 33号ビット。ローム粒を含む。  
2. 黒褐色土(10YR3/2) 34号ビット。ローム粒・ブロックを多量を含む。

2区35号ビット



2区35号ビット  
1. 黒褐色土(7.5YR2/2) 柱痕か。ローム粒を含む。  
2. 黄褐色土(10YR5/6) ロームを主体とする。

2区36号ビット



2区36号ビット  
1. 暗褐色土(7.5YR3/4) 柱痕。ローム粒を含む。  
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・ブロックを多量を含む。



第92図 ビット平面図(3)

が見られない部分では、1区と2区北端近くと、2区南部の2カ所に分かれて数多くのピットが集中して見つかっている。その中には明瞭な柱痕をもつものがあり、それらは柱穴であることが確定であると思われた。しかし、そのようなピットであっても、周囲を精査しても建物を構成するようなピットが見つかることはなく、掘立柱建物は報告した4棟以外見つからなかった。もちろん、発掘区の外側に建物が延びていること、新しい時期の竪穴住居によって大部分の柱穴が破壊されていることは十分考えられるので、これらのピットのうちのいくつかが建物の柱穴である可能性は否定できない。たとえば2区の35号ピットと36号ピットは明瞭な柱痕をもっているので建物の柱穴である可能性が強いと思われるものの、調査区内ではそれと組み合うピットを見いだせていない。これらはいずれも調査区の端にあるので、組み合う柱穴がその外側にある可能性が考えられ、そのため今後も特に注意が必要な存在であると思われる。

遺物が出土するピットは少なく、出土する場合でもそのほとんどは小破片である。掲載した遺物は、1区2号ピットの須恵器蓋1点、1区10号ピットの土師器杯1点だけである。その他、小破片の内訳は第9表に記した。

## 第5節 土坑・陥し穴

土坑は1区3基、2区15基、陥し穴は2区1基を報告する。

現地における発掘調査では、1区3基、2区22基を土坑として調査したが、整理作業において検討した結果、上記のような数を土坑として認定することにした。

土坑の分布は大きく3カ所に分かれる。すなわち、1区と2区の北部と2区の南部とである。竪穴住居の重複が多い部分では、土坑は見つかっていない。

各土坑の位置、形状、主軸方位、大きさ、重複関係、出土遺物などの基本的な情報は第10表にまとめた通りである。

土坑の形状で多いのは長方形である。楕円形としたものの中にも、角があるように見えるものがあるので、かなり多くの数が長方形であると思われる。埋土は暗褐色土ないし黒褐色土であるものが多いが、特別な痕跡を残すようなものではなく、土坑の用途を特定することはでき

ない。

以下、いくつかの土坑について解説を加える。

### 1区1号土坑(第93図、PL.28-2)

1区北部にある。1区4号住居と重複し、本土坑が新しい。長さ1.50m、幅0.87mで、深さは0.22mである。形状は楕円形ではあるが、中央部がわずかにくびれている。断面は箱形で、底面は平坦である。須恵器小型壺の小破片1点が出土した。

### 1区3号土坑(第93図、PL.28-3)

1区中央付近にある。楕円形の土坑で、長さ1.16m、幅0.72m、深さ0.32mである。覆土の中層に長さ28cm、幅25cmの石が入っていた。遺物はいずれも小破片であるが、土師器甕・壺類2点、須恵器杯・椀類1点、同蓋類1点が出土している。

### 2区2号土坑(第93図、PL.28-5)

2区南部にある。整った長方形の土坑である。長さ0.84m、幅0.60m、深さ0.56mであり、深くしっかりとした形態である。底面の中央に柱の当たりのような凹みがあるが、土層断面では柱痕を確認できなかった。この付近には1号土坑、3号土坑や7号ピットが東西に一列に並び、特に7号ピットには柱痕が明瞭に残っており注目されるが、本土坑には柱痕が見られなかったので関連はないものと判断した。出土遺物には土師器杯・椀類1点、弥生土器1点が出土している。このうち弥生土器は第9節中に取り上げた。

### 2区4号土坑(第93図)

2区南部にある大きな土坑であるが、西側が調査区外となり全体の形状と長さは不明である。調査区内の長さは1.68m、幅は1.32m、深さは0.50mである。土師器杯・椀類2点、同甕・壺類2点、須恵器杯・椀類1点が出土したがいずれも小破片である。

### 2区13号土坑(第94図、PL.25-4)

2区南部の東側にある。95ページで述べたように、次の14号土坑と共に2区4号掘立柱建物の変更後の柱穴である可能性がある。2区14号住居と重複し本土坑が古い

が、住居の掘方調査の際にこの土坑も掘り下げてしまったため埋土は不明である。比較的整った長方形で、長さ0.72m、幅0.64mであり、深さは0.63mと深い。東側に柱の当たりのような凹みがあり、これも根拠として掘立柱建物の掘り直しの可能性を考えた。出土遺物はない。

## 2区14号土坑(第94図、PL.25-5)

2区南部の東側にある。13号土坑で述べた通り、2区4号掘立柱建物の変更後の柱穴である可能性がある。この土坑も2区14号住居と重複し本土坑が古い。住居の掘方調査の際に掘り下げてしまったため埋土は不明である。やや歪んだ長方形で、長さ0.75m、幅0.70mであり、深さは0.80mと深い。13号土坑と異なり柱のあたりなどは見られず、柱穴であったとしても柱の位置などは不明である。出土遺物はない。

## 2区22号土坑(第94図、PL.26-3)

2区南部にある。13・14号土坑と同様、4号掘立柱建物の柱穴(P4)と重複し、本土坑が新しい。この土坑は大きく、南に偏っていることなどから、13・14号土坑と

は異なって、柱穴の掘り直しとは考えられない。整った長方形で、長さ1.30m、幅0.77mであり、深さは0.69mと深い。底面は南西側が一段深くなっている以外平坦であり、柱のあたりなどは確認されていない。出土遺物はない。

## 2区23号土坑(第94図、第22表、PL.29-3)

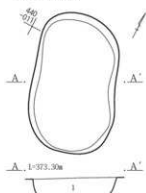
2区北部にある。2区23号住居と重複し、それよりも古い。南辺が破壊されているが、東西にやや長い整った長方形と思われる、長さ1.12m、幅は残存値で0.94mであり、その内部中央に長さ0.77m、幅0.67mの長方形の土坑が掘られる形となっている。深さは0.80mと深い。埋土は暗褐色土1層であり、人為的に埋められた可能性がある。遺物は西側の肩の部分から6世紀後半のものと思われる土師器杯(1)が出土しているほか、土師器杯・椀類1点、同糞・壺類4点の小破片が出土している。掲載できるような遺物が出土しているのは、本土坑が唯一であり、これによって本土坑の時期は少なくとも6世紀後半以降のものであることが判明する。整った形態であり、同形に二段に掘られていることから見て特定の意図を

第10表 土坑・陥し穴一覧表

区	番号	所在グリッド	形状	土軸方位	大きさ(m)		備考 ( )内は小破片のため掲載の遺物数
					長さ×幅×深さ		
1区	1	435-010	楕円形	N-20°-W	1.50×0.87×0.22	1区4号住居より新しい。(須恵器小型壺類1)	
1区	2	欠番					
1区	3	430-000	楕円形	N-20°-E	1.16×0.72×0.32	(土師器費壺類2、須恵器杯椀類1、同蓋類1)	
1区	4	425-000	ほぼ長方形	N-43°-W	0.96×0.80×0.39		
2区	1	385-985	楕円形	N-0°	0.71×0.59×0.27	(土師器費壺類1)	
2区	2	385-985	長方形	N-3°-W	0.84×0.60×0.56	弥生土器1出土。(土師器杯椀類1)	
2区	3	385-980	不整形	—	1.19×1.12×0.47		
2区	4	380-980	不整形	N-90°-E	(1.68)×1.32×0.50	(土師器杯椀類2、同費壺類2、須恵器杯椀類1)	
2区	5	380-980	楕円形	N-64°-E	0.64×0.47×0.21		
2区	6	380-980	長方形	N-68°-E	1.09×0.82×0.41		
2区	7	375-980	不整形	N-73°-E	1.28×0.90×0.39		
2区	8	385-975	長方形	N-51°-E	1.62×1.16×0.28		
2区	9	欠番					
2区	10	2区35号ピットに変更。					
2区	11	欠番					
2区	12	欠番					
2区	13	380-970	長方形	N-79°-W	0.72×0.64×0.63	2区4号掘立柱建物より新しく、2区14号住居より古い。	
2区	14	380-970	長方形	N-1°-W	0.75×0.70×0.80	2区4号掘立柱建物より新しく、2区14号住居より古い。	
2区	15	2区4号掘立P2に変更。					
2区	16	2区4号掘立P3に変更。					
2区	17	欠番					
2区	18	欠番					
2区	19	欠番					
2区	20	欠番					
2区	21	375-970	ほぼ円形	N-78°-E	1.13×1.03×0.56		
2区	22	380-970	長方形	N-6°-W	1.30×0.77×0.69	2区4号掘立柱建物より新しく、2区14号住居より古い。	
2区	23	410-990	方形	N-62°-E	1.12×(0.94)×0.80	2区23号住居より古い。土師器杯1出土。(土師器杯椀類1、同費壺類4)	
2区	24	410-990	長方形	N-3°-E	0.97×0.56×0.35	2区23号住居よりも古い。	
2区	25	410-990	不整形	N-89°-E	0.70×0.55×0.33	(土師器費壺類1)	
2区	1陥	385-690	楕円形	N-57°-E	1.46×1.00×1.06	陥し穴。	



1区1号土坑



1区1号土坑

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを含む。

1区3号土坑



1区3号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ブロックを含む。

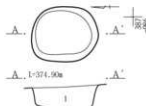
1区4号土坑



1区4号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2)

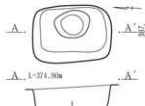
2区1号土坑



2区1号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを少量含む。

2区2号土坑



2区2号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを少量含む。

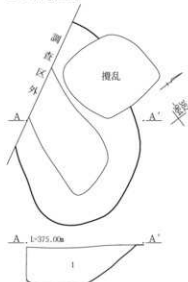
2区3号土坑



2区3号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを微量含む。  
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを多量に含む。

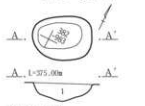
2区4号土坑



2区4号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を少量、  
塊土を微量含む。

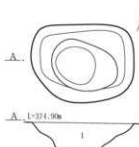
2区5号土坑



2区5号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を含む。

2区6号土坑



2区6号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含む。



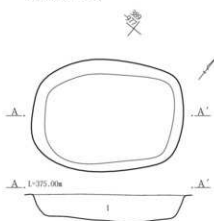
2区7号土坑



2区7号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含む。

2区8号土坑



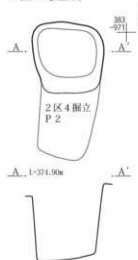
2区8号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR4/3) As-BかAs-Eを含む。

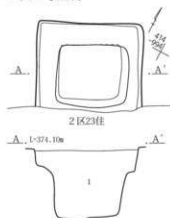
2区13号土坑



2区14号土坑



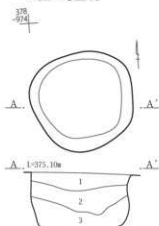
2区23号土坑



2区23号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・小ブロック、灰、焼土を含む。

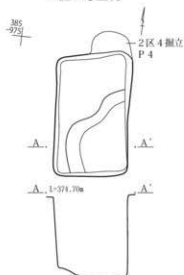
2区21号土坑



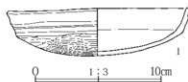
2区21号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・炭化物を含む。  
2. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を含む。  
3. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・ブロックを含む。

2区22号土坑



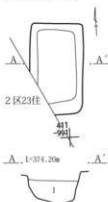
2区23号土坑出土遺物



0 1:40 1m

第94図 土坑平面図(2)、出土遺物

2区24号土坑

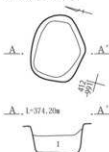


2区24号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2) 白色軽石、ローム粒を含む。



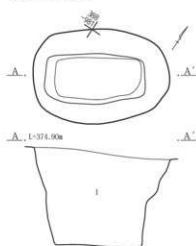
2区25号土坑



2区25号土坑

1. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒を含む。

2区1号陥し穴



2区1号陥し穴

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-BかAs-Kkを含む。

第95図 土坑平面図(3)、陥し穴平面断面図

もって掘られた土坑であると思われるが、用途を特定できるような痕跡はなかった。

2区1号陥し穴(第95図、Pl. 29-4)

2区南部の中央にある。重複する遺構はない。埋土にAs-BあるいはAs-Kk軽石を多量に含むので、平安後期以降のものである。長さは1.46m、幅は1.00m、深さは1.06mである。全体に楕円形で壁は急角度に掘られており、深さは深い。その形態から調査時に陥し穴と推定したものである。遺物の出土はない。

直線的に延びているが、西端近くで方向を大きく変えてN-7°-Wとなり、そのすぐ南で1区9号住居と重複する。断面は逆台形で、底面は平坦であり、比較的明瞭な溝である。底面の標高は南西端で373.26m、北東端で373.28mであるが、その間には凹凸があり、現地地表は南から北に向かって低くなる地形なので、この標高差の通りに水が流れていたとは思えない。

出土遺物はなく、その点から年代を絞ることはできないが、1区9号住居は7世紀第4四半期のものなので、それ以前に滿るものである。わずかな長さの調査に留まったので、溝の性格は不明である。

第6節 溝

本遺跡においては溝はきわめて少なく、溝として調査したのは1区、2区各1条の、合計2条のみである。いずれもきわめて短いものであり、その役割を含めて不明な点が多い。

1区1号溝(第96図、Pl. 29-5)

1区中央東側にある。1区9号住居と重複し、本溝が古い。

南西端は1区9号住居と重複して破壊され、その南側には確認できないのでこの付近で途切れてしまうらしい。東端は調査区外となるので、調査区に掛かって調査できたのはわずか2.9m分である。幅は0.50～0.60m、深さは0.20～0.27mである。走行方向はN-61°-Eで

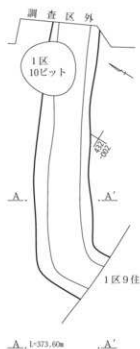
2区1号溝(第96図、第22表)

2区中央西側にある。北西端が2区2号住居の陥先端と重複している。本溝が古い。

2区2号住居の陥先端から南東端まではわずか2.62mであり、溝はそこで途切れている。ほぼ直線的に延び、南東の先端部は土坑状に深くなっている。幅は0.65～0.88m、深さは土坑状の部分か0.37m、それ以外の部分は0.25cm前後である。走行方向はN-42°-Wである。

出土遺物は掲載した土師器類以外は小破片ばかりであるが、数は少なくない。小破片で掲載できなかったものは、土師器杯・椀類45点、同高環類1点、同裏・壺類160点、須恵器杯・椀類37点、同蓋類3点、同裏・壺類3点である。この溝もわずかな長さのみの調査なので、その性格は不明である。

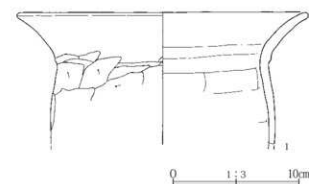
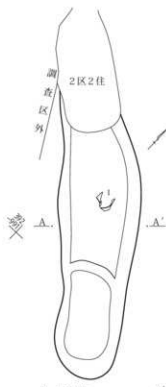
## 1区1号溝



## 1区1号溝

1. 暗褐色土(7.5YR3/4) 黒褐色土  
ブロック、ロームブロックを含む。

## 2区1号溝



## 2区1号溝

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロックを含む。



第96図 溝平断面図、出土遺物

## 第7節 畝

2区では部分的にAs-BあるいはAs-Kkと思われる軽石が残っていたので、その堆積が良好な部分ではその高さで掘り広げて遺構の確認を行った。その結果2区北部から、南部の東半分の範囲で軽石に直接埋もれた畝跡が見つかり、それを2区1号畝と名付けて調査した。

## 2区1号畝(第97～99図、第22表、PL.29-6・7)

畝は畝間の溝に軽石が詰まった状態で見つかった。畝の高まりは既に削平されていて平坦になっている。

この畝には、畝の方向に注目すると、少なくとも3面の畝がある。調査した範囲の最も北西側には、南東-北西方向の湾曲した畝間をもつ畝(1-1号畝)があり、最も南にも同じ方向の畝間の畝(1-3号畝)がある。これら2カ所の畝はごく狭い範囲しか調査できなかったが、その間には北東-南西方向の畝をもつ畝が広く広がっている(1-2号畝)。

1-1号畝は調査範囲の西端に位置するため、3本の畝間しか見つかっていない。しかも東側の2本は途中で交差しているので、あるいは畝間がまだ埋まりきっていない古い時期の畝が重複している可能性もある。畝間は直線的ではなく大きく湾曲している。中央の畝間が最も長く残るが、長さ6.6mで南側は範囲外になってしまう。西側の2本の畝間はほぼ平行しており、その間隔は畝間の心-心距離で72～90cmであり、これがこの畝の畝の幅である。

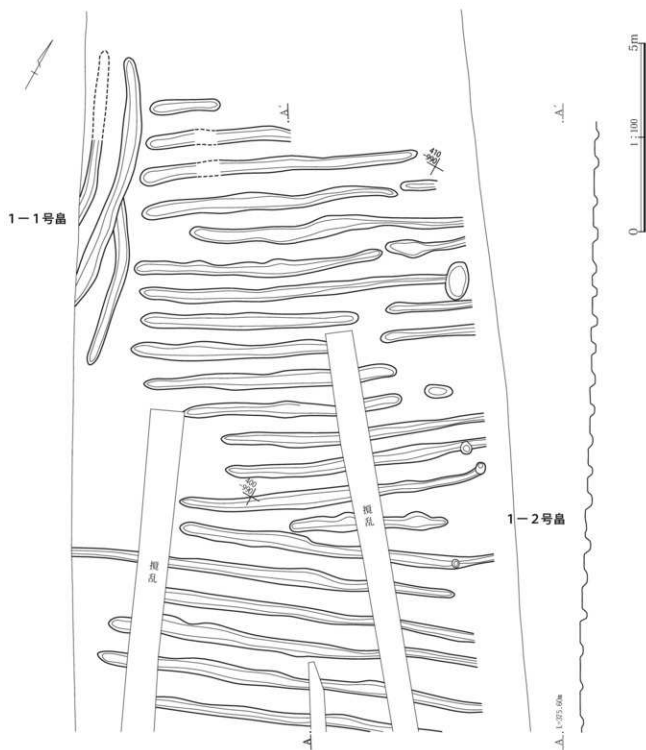
1-2号畝は長さ28.2mの間にほぼ直線の畝間が33本並んでいる。畝間の方向は1-1号畝とはほぼ直交している。ただし、北から16目のところで畝の方向と畝間の間隔が変わるので、ここで畝面が違わずとすべきかもしれない。畝間の長さは最長で9mあるが、両端はさらに調査区外へ伸びているので、この畝の範囲がどの程度なのかは確認できていない。畝の幅は、北側は両端の畝間の心-心距離が11.30mであり、その間に14本の畝があるので81cmである。南側は同じく両端の畝間の心-心距離が15.90m、その間にある畝は17本なので94cmとなる。

### 第3章 調査の成果

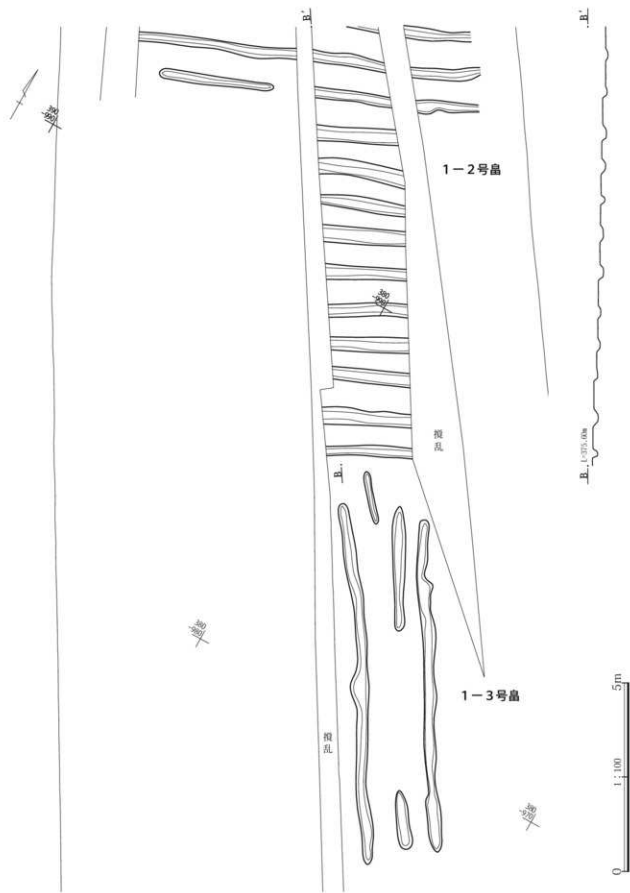
1-3号畠はまた1-2号畠と直交する方向の畝間となる。わずか3ないし4本分の畝間が見えるだけであり、残りが悪い。最長の畝間は9.6mである。畝の幅は東側の2本の畝間の心-心で計測して70~82cmである。

畠面から出土した遺物は小破片が多い。掲載したのは

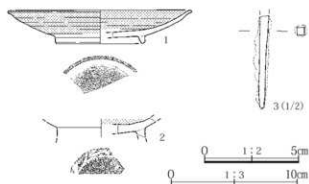
灰釉陶器皿1点、中国産白磁椀1点、釘1点である。その他小破片で掲載できなかったものには土師器杯・椀類6点、同甕・壺類69点、須恵器杯・椀類31点、同蓋類2点、同小型壺類2点、同甕・壺類16点である。近現代の陶器片も3点含まれていたが、これは混入品であろう。



第97図 2区1号畠北半部平面図



第98图 2区1号畠南部平面断面图



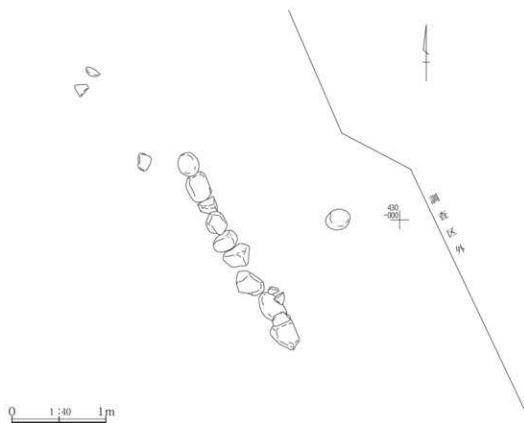
第99図 2区1号品出土遺物

## 第8節 その他の遺構

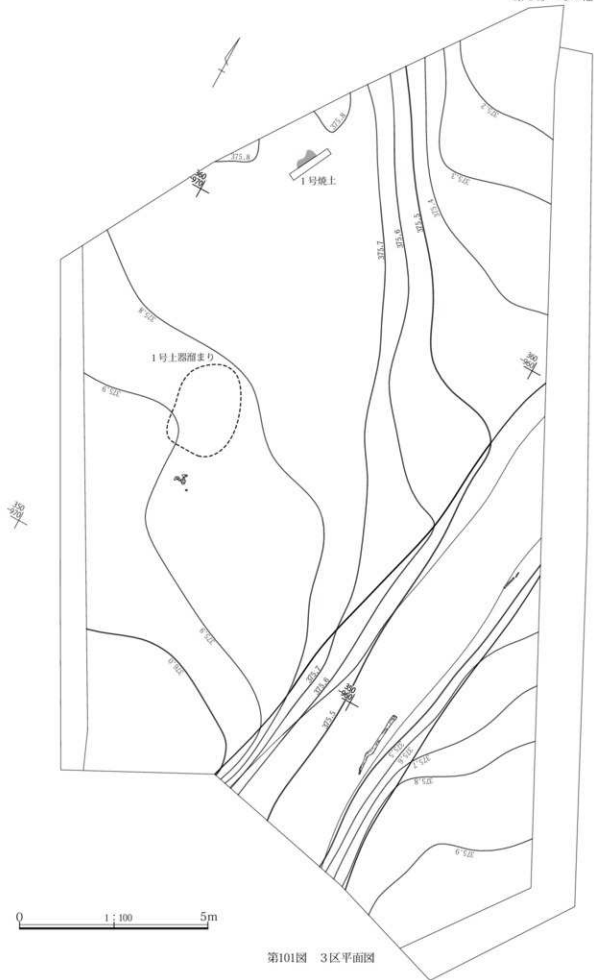
その他調査した遺構には石列、焼土、土器溜まりがある。それ以外に今回の調査範囲の南端には、自然流路と思われる溝が1条存在する。

### 1区1号石列(第100図、PL.29-8)

1区中央の東側にある。礫が1列に並んでいたことから、石櫛などの底部の一部分が残った可能性があるものと判断し、「古墳」として調査したものである。ただし、周辺の精査の結果、見つかっているのは一列の石列だけであり、他に古墳であることを示すものは何も確認できなかった。周囲にも古墳の周堀などは見つかっていない。そのため、これが古墳の施設であるかどうかは不明といわざるをえない。礫の大きさは長さ20～35cm程度であり、それが長さ2.4mの間に10個並んでいる。礫は密に隙間なく並んでおり、その点では丁寧な作りと言える。周囲からは土師器や須恵器の小破片が出土しているが、埴輪の出土はない。近現代の土管の破片も出土するので、



第100図 1区1号石列平面図



第101図 3区平面図



### 第3章 調査の成果

この直上まで攪乱が及んでいるらしく、出土した土器片もこの遺構に伴うものと断定することはできないであろう。なお、本遺跡は「下郷古墳群」として登録されている遺跡であるが、今回の調査区からはこれ以外に明確な古墳は見つかっていない。

#### 3区1号焼土(第101・102図)

3区の北端部に焼土の集中部が見つかった。径60cmの範囲に焼土が集中していたので調査したものである。断ち割ったところわずかな凹みが確認された。凹みの断面形は不整形形で、特に人為的な掘り込みがなされているようには思えない。人為的な施設とすれば何らかの窠のようなものにも見えるが、出土遺物などはなく、性格は不明である。

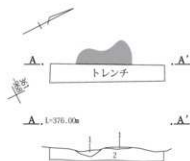
#### 3区1号土器溜まり(第101・103図、第22表)

3区の西側にある。土器片が南北2.5m、東西1.7mの範囲に散っていたため、土器溜まりとして調査したものである。出土した土器は縄文土器が多く、中には6・7のように大きく復元できた土器もある。しかし、出土するのは縄文土器に限らず古代の土器も含まれるので、その形成時期は古代以降であると思われる。断ち割り調査も実施したが、土器片が散っている範囲には掘り込みなどは認められず、何らかの攪乱によって土器片がこの範囲の土中に働き込まれたものと思われる。出土した縄文土器は第9節で遺構外出土の土器とともに掲載した。いずれも加曾利E3式のものである。古代の土器は2点を掲載した。須恵器碗と灰釉陶器皿が各1点である。そのほか古代の土器で小破片のために掲載できなかったものは、土師器甕・壺類1点、須恵器杯・椀類1点、同蓋類1点、同甕・壺類1点、灰釉陶器杯・椀類1点である。

#### 自然流路(第101図)

3区の南部には浅い谷が南北に入っているが、その底面に浅い溝状の自然流路が見つかった。平面図では直線的に描かれているので人為的な溝のように見えてしまうが、斜面は緩やかで人為的な掘り下げではないと判断できるため、自然流路としてその位置・規模を記録した。調査できた長さは13.5m、幅は3.05～4.40m、深さは最も深い南端部で0.53m程度である。底面の標高は

南端が375.48m、北端が375.44mである。把握できた傾斜はごくわずかだが、周囲の地形同様、南から北へと流れていたものと考えられる。付近は現在も地下水が豊富であり、調査時にも水が湧き出していた。底面からは2本の細長い丸木が出土したが、加工の痕跡はなく自然木であると思われる。流路の埋土からは遺物は全く出土していない。

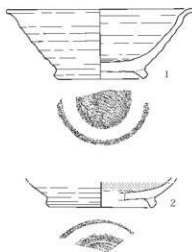


3区1号焼土

1. 焼土
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒、ローム小ブロックを含む。

0 1:40 1m

第102図 3区1号焼土平面断面図



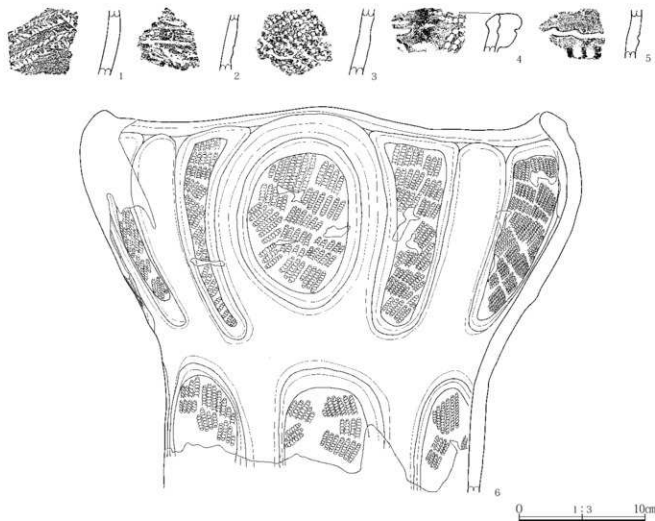
第103図 3区1号土器溜まり出土遺物  
(縄文土器は第9節に掲載)

## 第9節 縄文時代・弥生時代の遺物

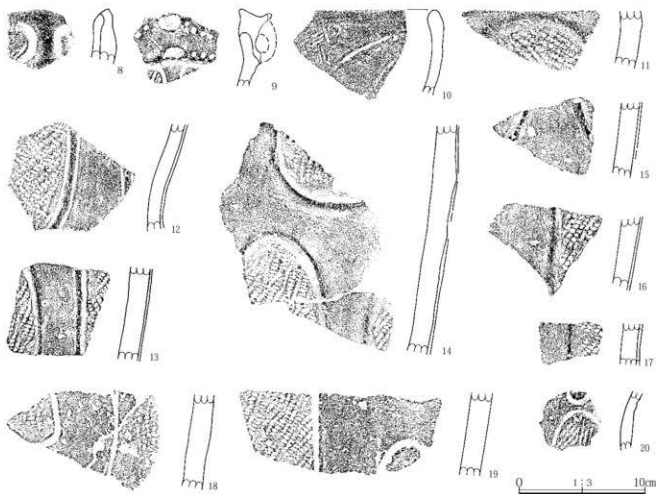
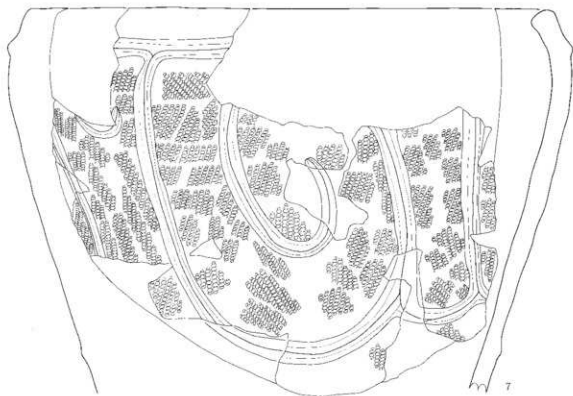
調査区内からは縄文時代、弥生時代の遺物も出土している。この時期の遺物は3区1号土器溜まりで縄文土器が集中して出土している以外には集中箇所がなく、多くはより新しい時期の遺構に混入する形で出土しており、同時期の遺構は全く確認できていない。3区1号土器溜まりも縄文土器を中心とはするもの、調査では土師器・須恵器が混在して出土していることから、古代以降に形成されたものと考えられる。すなわち、この時期の遺物は時期の異なる遺構に混入して出土しているか、全くの遺構外から出土しているかのどちらかなのである。そのため、各遺構からの出土遺物と扱って掲載してもさほど意味がないと考えられるので、本節でまとめて報告することにした。

まず縄文土器は合計28点を掲載した(第104～106図、第22・23表、PL.37・38)。前期の有尾式から中期の加曾利E3式までの土器片が見られる。数が多いのは3区の1号土器溜まりから出土したもので、全部で22点あるが、それらは中期加曾利E3式の土器片に限られる。中には6、7のようにかなり大きく復元できたものもある。この土器溜まりは、もともと加曾利E3式の単一時期の土器片が数多く集まっていたのであろうが、古代以降に攪乱を受けて土器が混在したものと思われる。それ以外の時期の土器は数も少なく、いずれも小破片であり、遺跡内に散在している状況である。

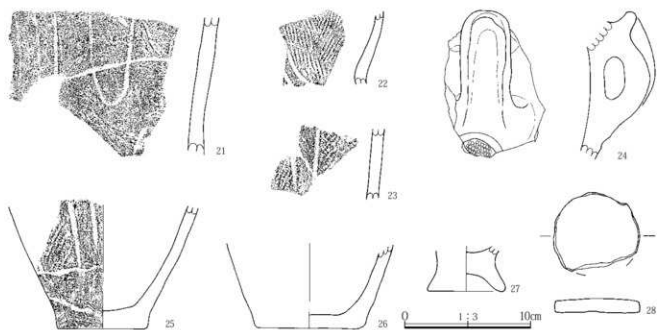
弥生土器は合計29点を掲載した(第107図、第23・24表、PL.38)。1の1点を除いて小破片ばかりであり、弥生中期前半～中葉の土器から、後期樽式の土器まで、やや多様な遺物が出土している。出土遺構も様々で遺跡内に散在している。



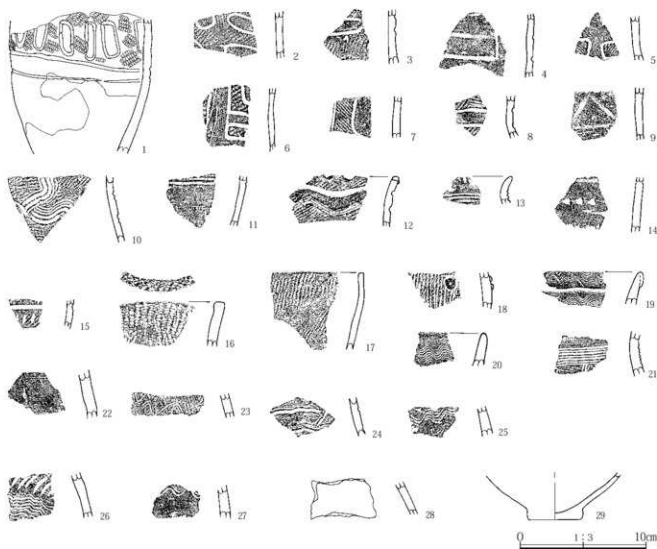
第104図 出土した縄文土器(1)



第105図 出土した縄文土器(2)

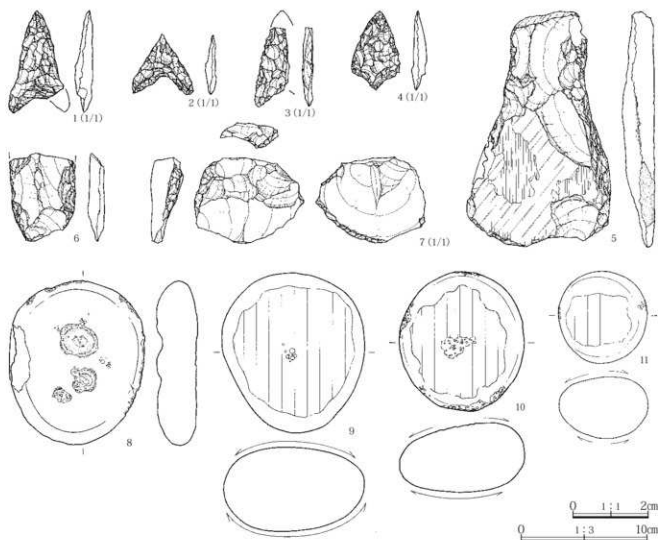


第106図 出土した縄文土器(3)



第107図 出土した弥生土器

第3章 調査の成果



第108図 出土した縄文時代・弥生時代の石器・石製品

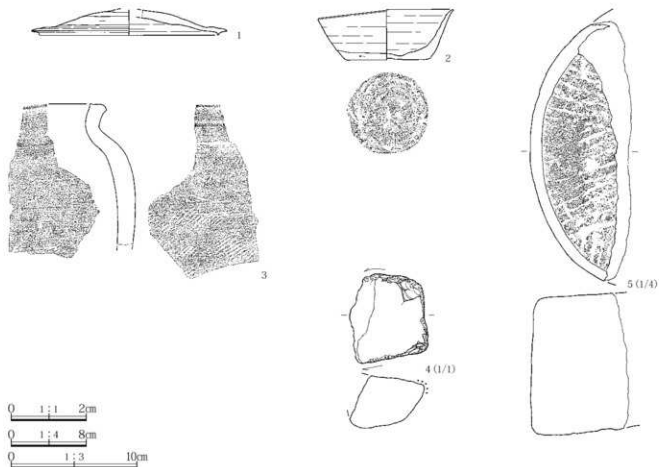
石器石製品は11点を掲載した(第108図、第24表、PL.38・39)。石鏃4点、石鎌1点、打製石斧1点、加工痕ある剥片1点、凹石1点、磨石3点である。これらも遺跡内に散在して出土している。小破片で掲載できないものには、削器3点、打製石斧と思われる破片1点、石核1点、加工痕ある剥片3点がある。なお他に剥片類が出土しているが、それらを石材別を集計すると、黒色頁岩11点、黒色安山岩2点、黒曜石3点、細粒輝石安山岩3点となる。

## 第10節 遺構外出土の遺物

調査では遺構外からも多くの遺物が出土しているが、そのうち、縄文時代・弥生時代の遺物については前節で報告した通りである。本節ではそれ以外の時代、すなわち古墳時代以降の遺物について報告する。

古墳時代から奈良・平安時代の土器は3点を掲載した。いずれも須恵器で、蓋1点、杯1点、甕1点である。その他に小破片のために掲載できないものには、土師器杯・椀類116点、同高杯類6点、同甕・壺類562点、須恵器杯・椀類115点、同蓋類45点、同高杯・小型壺類2点、同甕・壺類71点、灰軸陶器杯・椀類1点がある。中世と思われる土器はいずれも小破片で、遺構に混入していたものを含めても3点しか出土していない。

石製品は2点を掲載したが、いずれも近世以降のものであろう。火打ち石1点、石臼1点である。



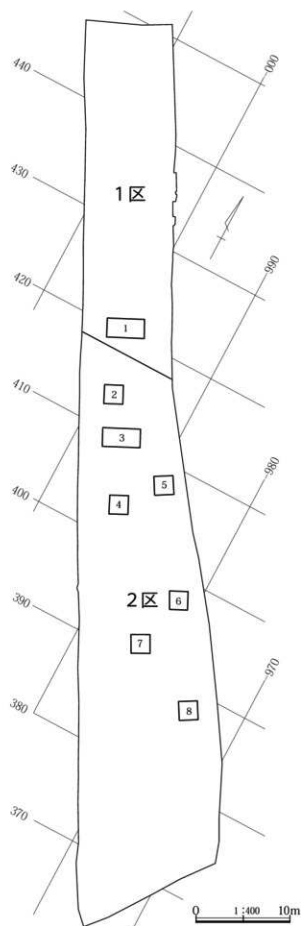
第109図 遺構外出土の遺物(古墳時代以降)

## 第11節 旧石器時代の調査

今回の調査範囲では、標高が低くなる北側の調査区ほど安定したロームが残っていることが試掘調査の際から指摘されていた。実際1区、2区においては、状態はあまり良好とは思えないもののロームの堆積が確認された。そのためこれらの区については、遺構の調査が終了したところから旧石器時代の確認調査を実施した。

調査は第110図に示したような位置に、2m×2mないし2m×4mの調査坑を設けて行った。設定した調査坑は合計で8カ所であり、面積は合わせて40㎡である。これは今回の調査対象面積の1.8%にあたるが、比率が低いのは調査区南部(3区など)を中心としてロームの残りが悪い部分があり、この部分は旧石器の調査を行わなかったからである。

調査ではローム層を掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認したが、すべての調査坑で遺構・遺物とも確認されなかった。ローム層は上位から黄褐色土、その下位に明黄褐色土が堆積する。明黄褐色土は下層ほど亜角礫が混在し、漸移的に応桑泥流(平野部での前橋泥流)に移行するものと考えられる。調査はこの明褐色土層をさらに掘り下げ、亜角礫が大量に現れたところで終了した。



第110図 旧石器時代調査坑配置図

## 第4章 総 括

本遺跡の調査成果は前章までに述べたとおりである。比較的狭い調査区にも関わらず、多くの遺構を調査することができたが、その中でも特に注目されるのは掘立柱建物と柱穴列がどのような性格の施設を構成していたかということであろう。ここではその問題を中心にして成果の意義について検討し、総括としたい。

### 掘立柱建物と柱穴列の特徴と時期

本遺跡の遺構の中心は竪穴住居である。それらは4世紀後半～10世紀第1四半期のものが見られ、存続期間のかなり長い集落遺跡であった。掘立柱建物と柱穴列とはその存続期間中のある一時期に見られ、その規模から、本遺跡を特徴付ける遺構であることは間違いなく、それがどのような施設を構成するのか注目されるものである。

それらの配置は第111図に示したとおりである。掘立柱建物は4棟、柱穴列は1条見つかっているだけなので数は多くない。しかもそれらは散在しており、各建物の間はかなり離れている。それぞれの建物は、第3章第3節で述べているように、単一時期か、あるいは一部建て替えが行われている程度で、存続期間は短いと推定されるものばかりである。

既に述べたように、掘立柱建物の構造には珍しいものがある。まず3・4号掘立柱建物に見られる礎板石である。礎板石は類例の少ないものではあるが、全国各地の遺跡に見ることができ、県内では太田市天良七堂遺跡の郡庁を囲む長屋状建物で確認されている(太田市教育委員会『天良七堂遺跡』2008)。

3号掘立柱建物では、側柱の柱数と建物内部の柱数が異なっている。この建物は側柱だけを見ると桁行2間、梁行2間の建物であるが、中央の梁行にも柱穴が並び、そこは3間になっているのである。このような柱配置は、他の遺跡の例などを見ると建物内部の間仕切と解されており(山中敏史「間仕切り・棚状施設」『古代の官衙遺跡1遺構編』奈良文化財研究所2003)、本建物も同様に考えられるが、この建物はわずか2間×2間の建物であるので、単純にそれらと同列に考えてよいのかは疑問がある。

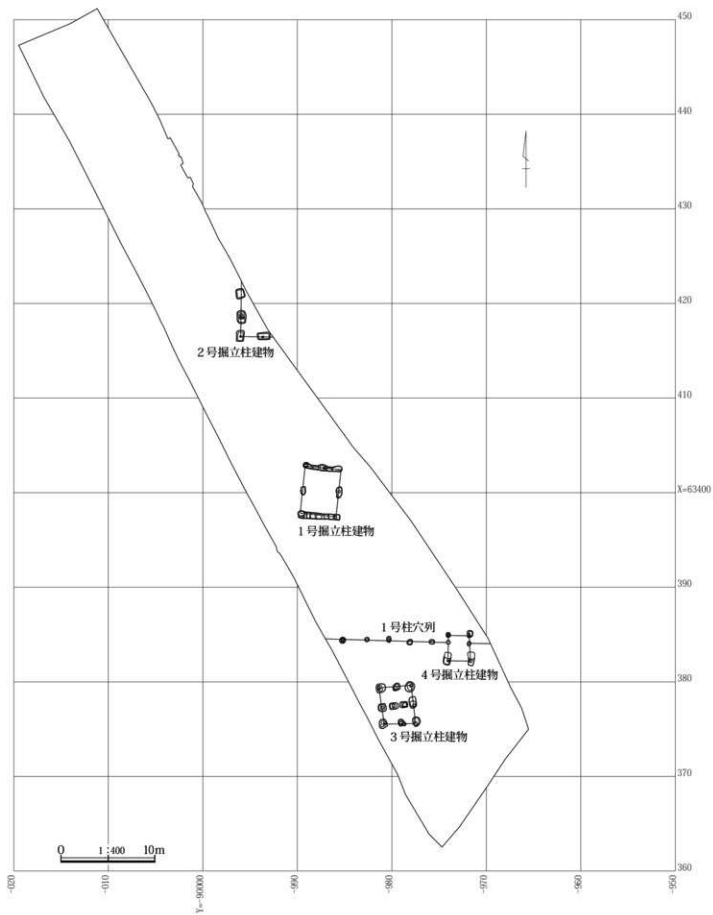
同じような規模の建物で類型を広く探すと、神社建築の大鳥造(大阪府大鳥大社)が、2間×2間の建物内部に内陣・外陣を区切る柱が2本あるので本例と似ている。ただし、入り口は妻側の中央に設けているので、その点では本建物と異なっている。もちろん、似ているからといって本建物が神社だという根拠になるわけではなく、この建物の性格は不明と言わざるを得ない。

建物の中でその用途が推定できるのは、柱穴列とそれをまたぐような位置にある4号掘立柱建物である。この建物については95～98ページで述べたように、両者が一体となって、堀と門という区画施設をなしていたと考えられる。区画の内外は、遺構の多い北が内側、南が外側であろう。

これらの掘立柱建物と柱穴列の存続時期は、以下のよう考えられる。まず1号掘立柱建物は、柱穴の掘方から出土している土器が7世紀後半～8世紀前半のものであり、なおかつ8世紀第1四半期頃の住居よりも古いので、建物が存在していた期間は7世紀後半～8世紀初頭の中に収まるものと思われる。2号掘立柱建物は柱穴から出土した土器が7世紀末～8世紀初頭のものであり、なおかつ8世紀後半の住居よりも古いので、同じく7世紀末～8世紀中頃と思われる。3号掘立柱建物は出土遺物からは時期の特定が難しいが、9世紀第1四半期の住居よりも古い。4号掘立柱建物は9世紀後半の住居よりも古く、1号柱穴列は住居との直接の重複は確認されていないが、出土遺物は8世紀代に収まる。

以上のように掘立柱建物の存在していた時期はある程度狭い範囲に限定できる。しかし、それではこれらがすべて同時に存在していたかということ、その判断はかなり難しい。第3章第3節で個別に述べたように、これらの建物はいずれも異なる構造をもって共通点が少なく、建物の主軸方位もそれぞれで微妙に異なっているからである。ただ、先述したように柱穴列が門をもつ区画施設であると考えられるので、それを踏まえればこれらの建物が有機的な関係をもってひとつの施設を形作っていた可能性は高いと考えられる。門をもつような区画施設の中に竪穴住居のみが存在するとは考えにくく、掘立





第111图 掘立柱建物・柱穴列配置图

柱建物群がその中に存在してそれらが一体となってひとつの施設を構成していたと考えた方が自然だからである。現状では確実な根拠は示すことができないが、ここではそのように考えておきたい。その推定が正しいとすれば、この施設の存続時期はすべての掘立柱建物の推定存続時期が重なる7世紀末から8世紀初頭ごろと推定される。竪穴住居には7世紀第4四半期あるいは8世紀第1四半期のものもあるので、あるいはこれらの竪穴住居のうちのいくつかも、同時に存在したかもしれない。

以上のように考えると、最大の問題は3号掘立柱建物が区画の外側になってしまうことである。この建物は礎板石、間仕切をもつという特徴的なものであるが、主軸方向が他の建物と異なり西に振れている。その点で時期が異なる可能性があり、とすれば区画の外にあっても問題は生じないが、現状ではその点の判断は付かない。このように時期の異なる建物が含まれている可能性については、今後も検討を続けていく必要がある。

これら建物群の性格としては、2号掘立柱建物のように大型のものがあがり、門をもつ区画施設があることから、一般集落の一部であるとは思えない。そのためその候補としては、吾妻郡家をはじめとした公的な施設、何らかの宗教施設、有力者の居宅などをあげることができよう。とはいえ、結論を述べてしまえば、今回の調査区からは遺跡の性格を明瞭に示すようなものは何も見つかっておらず、現状ではその性格を明らかにすることは不可能であると言わざるを得ない。今回の調査区はわずかな面積であり、そのため施設のごく一部が調査できたにすぎないと考えられ、現状で性格を確定するのは時期尚早だと思う。しかし、今後その性格を考える上では、いくつか考えておくべきことがある。

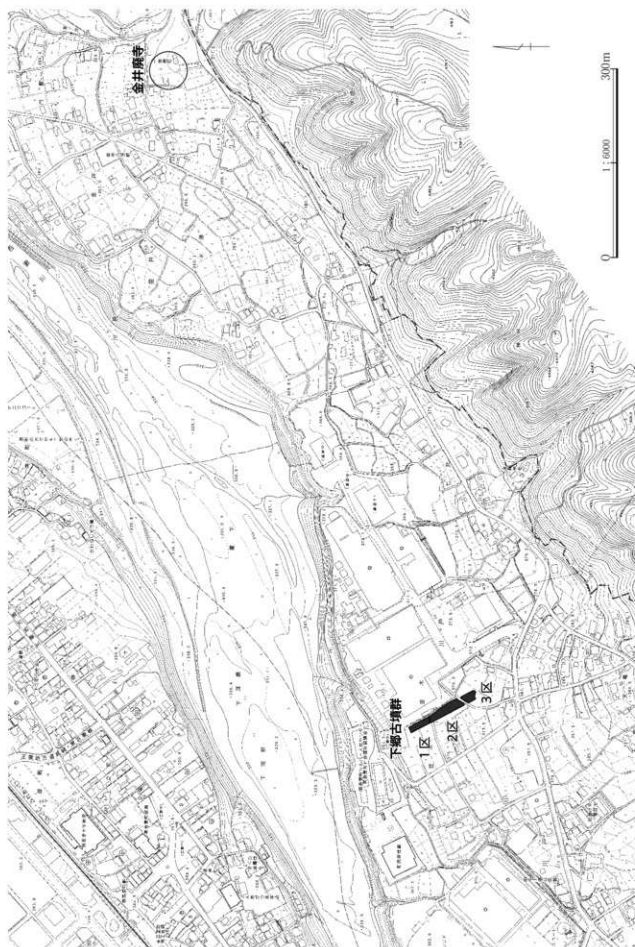
### 周囲の関連遺跡と本遺跡の性格

以上の建物群の性格を考える上で重要な遺跡としては、北東約1kmにある金井廃寺があげられる。この寺院跡は、発掘調査はまだ行われていないものの、多数の礎石が遺跡内に残され、瓦も数多く表採されていることから、かなり大規模な伽藍をもっていたことは確実である。この寺院の創建時期は、最古の軒先瓦が伊勢崎市上植木廃寺と同范であることから、7世紀後半といわれてきた。この瓦は古くから上植木廃寺創建期を代表する瓦として

有名であったが、創建期中では初期のものではないので、その年代は7世紀後半のなかでも末に近い頃のものと考えられる。つまり金井廃寺は上植木廃寺の造営がかなり進んだ頃に建立が開始されたことになるわけであるが、それでも県内では初期に建てられた寺院の一つであることに間違いはない。本遺跡はこの寺院と1kmしか離れていないのであり、しかも掘立柱建物の存続時期と金井廃寺の創建時期が近いので、何らかの関係があったものと思われる。この事実はまずおさえておく必要がある。

吾妻郡家(郡衙)の位置はまだ確定していない。その推定地には、これまで吾妻川左岸の東吾妻町大宮滝神社付近(原町小中学校付近)という説(尾崎喜左衛門「群馬の地名 上巻」上毛新聞社 1976)や、やはり吾妻川左岸の中之条町天代瓦窯の南側に考える説(大江正行・川原喜久治「天代瓦窯存在の意義をめぐって」『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会 1982、大江正行「古代利根郡の歴史的背景について」『群馬文化』21 4 1988)があった。しかし、前者の周辺ではこれまで奈良時代の遺構はほとんど見つかっておらず、主体は平安時代であるということであり、「郡家の移動等を考慮しない限り、原町付近に吾妻郡家を想定することは難しい」(東吾妻町教育委員会『諏訪前遺跡 I』2003)とされている。これに対して後者は、JR中之条駅南側一帯の発掘調査(上原遺跡、川端遺跡、天神遺跡など)で多数の掘立柱建物が見つかり、奈良三彩や銅印などの特殊な遺物も出土したことから、官衙が存在した可能性も指摘されている。しかし、それらの遺跡内では郡家を想定できるほどの遺構は見られないようであり、『上野国交替実録帳』に記載されている郡家別院の「伊参院」ではないかとも見られている。それらの遺跡と天代瓦窯との間には広い平坦地が広がっているが、そこは現在中之条市街地になっていて発掘調査がほとんど行われていない状態である。あるいはこの市街地内に郡家の施設があったかもしれないが、それは現状では可能性の範囲内にとどまると言わざるを得ない。

以上の説に対して、近年吾妻川の対岸(右岸)を推定する説もある。本遺跡の東4～5kmにある小泉宮戸遺跡、小泉天神遺跡、新巻膝原遺跡などでは四面庇建物をはじめとした多数の掘立柱建物が調査され、金井廃寺も右岸にあることから、吾妻郡家の位置をその周辺に想定するのである(吾妻町教育委員会『諏訪前遺跡 I』2003)。



第112図 金井権寺の位置と周辺の地形 (東京測図場発行2,500分の1 千葉県市川市計画図87-3-4(平成24年2月調査)使用)

川原秀夫氏も「白鳳期寺院である金井廃寺が郡家隣接寺院であるとすればその近辺ではないか」と延べ、金井廃寺周辺に想定されている(川原秀夫「古代上野国の国府及び郡・郷に関する基礎的考察」『ぐんま史料研究23』2005)。とすれば、本遺跡もその候補の中に当然入ってくるものと思われる。

いずれにしても、金井廃寺という県内でも数少ない白鳳寺院があるこの地は、古代吾妻郡の中心地のひとつであったことは間違いない。その造営氏族はこの周辺を勢力基盤にしていたものと思われ、郡家(評家)も近くに設置された可能性が高い。本遺跡はそのような環境の中にあるのであり、その性格はそれを踏まえて検討しなければならない。ただし、どのような役割の施設を想定するにしろ、存続期間がきわめて短いということを考慮に入れる必要がある。本遺跡は基本的には集落であり、区画施設をもつ掘立柱建物群があった時期はその間のごく短期間であると考えられる。遺跡の性格のそのような劇的な変化がなぜ起こったのか、その謎の解明も今後重要になってくるだろう。

#### 中空円面硯について

中空円面硯は2区7号住居から出土したもので、形状などは43ページで述べたとおりである。中空円面硯の県内における出土例については、今回悉皆的な調査はできなかったが、熊野堂遺跡第Ⅲ地区13号住居(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・兩壺遺跡』1984)、前橋市上野国分僧寺・尼寺中間地域B区第79号住居(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』1991)から出土していることを確認した(第113図)。ただし、この2例は下郷古墳群出土品とは形態が異なる。特に大きな違いは中空の部分であり、この2例が硯面の下全体が中空となっているのに対し、下郷古墳群のものではドーナツ状になっている。その他の部分は国分僧寺・尼寺中間地域の出土品と似ているといえよう。中間地域のものには口の部分に小椀状のものが残っていた。同様なものも下郷古墳群のものにも付いていたと思われる、これによって全体の形が大体推測できる。

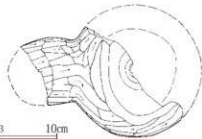
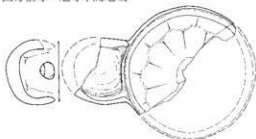
硯が出土することは識字層の存在を示すものであり、その点で本遺跡の性格を推定する上でひとつの根拠とな

る遺物ではある。東吾妻町内では、諏訪前遺跡や小泉宮戸遺跡でも円面硯の破片が出土しているが、その両遺跡とも前述の郡家推定地の周辺に位置していることは興味深い。やはり近傍に官衙の存在を感じさせるような遺跡から出土していると言えるが、県内の例を見るとごく普通の集落跡からも出土する場合があり、硯が出土したからといってその遺跡の性格がすぐ確定するわけではないことには留意すべきであろう。

熊野堂遺跡  
第Ⅲ地区



上野国分僧寺・尼寺中間地域



0 1:3 10cm

第113図 県内出土の中空円面硯

## 遺物観察表 凡例

遺物観察表(第11表～第24表)の記述では略号などを多く用いた。そのうち注意が必要なものについて、以下にその凡例を掲げる。

**出土位置** 竪穴住居から出土している遺物のうち出土位置を挿図にドットで示してあるものについては、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に床面とのレベル差を+○(cm)と示す。cmは略。±0や床面にわずかにめり込んでいる場合は「床面」と記述する。

**計測値** 土器・陶磁器は基本的に口径・底径・器高を計測し、古墳時代～古代の土器の場合はそれぞれ「口」・「底」・「高」と略している。その他、「台」=高台径、「摘」=摘み径などを用いた場合がある。ただし縄文土器・弥生土器はほとんどが小破片であるため、計測値は示していない。石製品・金属製品などでは長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なるので表中に計測項目を明示した。単位はすべてcmである。重さを計測した場合もあり、その場合の単位はgである。なお○は残存値を表す。

**胎土** 土器は夾雑物を記述する。古墳時代～古代の土器では、砂粒の場合は2mm以下を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とする。その他、白色・黒色鉱物粒、赤黒色・赤色・灰黒色・灰白色粘土粒、雲母、石英粒などの混入を記述する。夾雑物の少ない精良な胎土は「精選」と記した。弥生土器・縄文土器は、細砂粒、粗砂粒、砂粒、雲母、小礫などの混入を記述し、縄文時代前期の土器の場合は繊維の混入を明示した。

**焼成** 古墳時代～古代の土器については、土師器の場合は「良好」か「やや不良」かを区別する。須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別し、酸化焰に近い還元焰の場合は、「還元焰・酸化焰ぞみ」と記入する。同時に「やや軟質」「軟質」と記入する場合もある。縄文土器・弥生土器は記入していない。

**色調** 古墳時代～古代の土器について記述した。色調の名称は、『新版標準土色帖2005年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。

第11表 出土遺物観察表(1)

1区1号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第7図 PL.31	1	土師器 杯	中央床面 3/4	口	10.8	高	3.3	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	底部外面の一部に炭素吸着。
第7図 PL.31	2	須恵器 盤	中央+8 1/3	口	19.0			粗砂粒多/還元焼/灰白	口縁部(右回転)。底部は回転へら削り。内面はナデ。	
第7図 PL.31	3	土師器 高杯	北東壁際掘方 杯部のみ	口	15.6			粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。外面上半はへらナデ後、斜位にへら磨き。下半は縦位にへらナデ。内面上半は横位、下半は斜縦位のへらナデ。	
第7図	4	須恵器 盤	中央掘方 口縁部～胴部片	口	17.0			粗砂粒多/還元焼・やや軟質/黄灰	細作り整形。口縁部は口縁部による横ナデ。胴部は回転を伴う横ナデ。内面は当り具腹の上へ回転を伴うカキ目磨を施す。	
第7図	5	須恵器 壺	北東壁際床面 胴部1/2					細砂粒/還元焼/灰	細作り後、口縁部は口縁部による横ナデ。胴部は回転を伴う横ナデ。外面は等間隔に比較がめぐる。4条確認できる。残存最下位には文様が配されるか。	
1区2号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第8図 PL.31	1	土師器 高杯	北西壁際掘方 胴部のみ	底	12.5			粗砂粒/良好/橙	外面はナデ後、柱部・胴部とわけて縦位にへら磨き。内面の柱部は絞るような指ナデ。胴部は横ナデ。	瓶部の一部、炭素吸着。
第8図 PL.31	2	土師器 高杯	北西壁際床面 胴部片	底	12.8			粗砂粒・白色鉱物 粒/良好/明赤黄	外面は横ナデ後、縦位にへら磨き。内面は横ナデ。	
第8図 PL.31	3	石製品 勾玉	東壁+10 完形	長	2.6	厚	0.7	滑石	瓶部に当たる部分を除いて全面研ぎされ、光沢が著しい。孔(径2mm)は両側穿孔されたものとみられるが、孔は差んでおり、穿孔位置を変えて穿たれている可能性がある。透明感があり、暗緑色に近い。	
1区3号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第10図	1	土師器 破片	掘方 破片	口	12.8			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	
第10図	2	須恵器 杯	覆土 底部1/4	底	11.4	台	11.4	黒色鉱物粒/還元 焼/灰	口縁部(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	
1区4号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第11図	1	須恵器 瓶か	掘方 口縁部片	口	10.2			白色鉱物粒少/還 元焼/灰	口縁部(右回転か)。	小破片のため形状、法相変更の可能性あり。
1区5号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第13図 PL.31	1	土師器 杯	壺内 1/2	口	12.4	高	3.8	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	器面磨滅。
第13図	2	土師器 杯	壺内 口縁部片	口	11.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	
第13図	3	須恵器 蓋	壺内 破片	口	9.6	高	2.3	粗砂粒/還元焼/黄 灰	口縁部(右回転)。天井部切り離し後、宝珠形の輪を貼付。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第13図 PL.31	4	須恵器 蓋	壺内前7 3/4	口	11.8	高	3.2	粗砂粒・白色鉱物 粒/還元焼/灰	口縁部(右回転)。天井部切り離し後、宝珠形の輪部貼付。天井部中心寄りに回転へら削り。	内面やや厚残。
第13図 PL.31	5	須恵器 蓋	掘方 天井部～口縁部 1/3	口	10.8			粗砂粒・白色鉱物 粒/還元焼/灰白	口縁部(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第13図	6	須恵器 盤	壺内 1/4	口	31.0			粗砂粒・白色鉱物 粒多/還元焼/灰	口縁部(右回転)。口縁部下位から底部にかけて回転へら削り。底部内面はナデ。	脚台部の有無は不明。
1区8号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第17図	1	須恵器 杯	南壁際+13 1/4	口	12.6	高	4.6	赤黒色粘土粒/還 元焼/灰白	口縁部(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面磨滅。
第17図	2	須恵器 杯	南西隅掘方 口縁部片	口	15.8			赤黒色粘土粒/還 元焼/黄灰	口縁部(右回転)。	器面磨滅。
第17図	3	須恵器 羽釜	口縁部～胴部上 位片	口	17.0			粗砂粒・白色鉱物 粒多/還元焼・酸化 増気味/にぶい黄 橙	口縁部(右回転)。口縁部は横ナデ。胴部は縦位のへら削り。	焼痕、炭素吸着。
1区9号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考	
第18図	1	土師器 破片	中央+11	口	17.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削りと考えられるが、器面磨滅のため観察不可。	
第18図	2	土師器 破片	覆土 破片	口	18.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削りと考えられるが、器面磨滅のため観察不可。	

遺物観察表

第12表 出土遺物観察表(2)

1区9号住居出土遺物

種 図 Pl.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第188図	3	須恵器 蓋	覆上 口縁部片	口	13.8		白色鉱物粒/還元 釉/黄灰	器形やゆなむ。天井部の焼きはもっと低い。ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第188図	4	須恵器 蓋	南東中央+23 口縁部片	口	12.0		黒色鉱物粒少/還 元釉/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第188図	5	須恵器 蓋	覆上 1/4	口	17.0	高 3.4	白色鉱物粒/還元 釉/灰	器形は大きく歪み変形している。ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、換部を貼付。天井部中心寄りに回転へら削り。	外面に自然釉 付着。
第188図 Pl.31	6	須恵器 蓋	北東隅+4、北西部 床面 口縁部1/3	口	33.0		粗砂粒・白色・黒色 鉱物粒/還元釉/灰 黄	紐作り後、ロクロ整形。	内面自然釉 付着。
第188図	7	須恵器 蓋	覆上 口縁部片	口	26.8		白色・黒色鉱物粒/ 還元釉/灰	紐作り後、ロクロ整形。	内面に自然釉 付着。
第188図	8	須恵器 蓋	南東隅+11 底部片				白色鉱物粒・黒色 粘土粒/還元釉/灰	紐作り後、叩き整形。外面は平行叩き目をナデ済す。内面は同心円文状の当て具痕。	
第188図 Pl.31	9	礎石器 台石か	北西部+7	長 幅	15.8 14.9	厚 重 6.0 2314.3	砂岩	背面側面に強い打痕があるほか、小口部両端に最打痕がある。覆サイズから台石として捉えた。	扁平楕円

1区10号住居出土遺物

種 図 Pl.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第198図 Pl.31	1	須恵器 蓋	西隅+7 1/3	口	15.6		黒色鉱物粒少/還 元釉/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第198図	2	須恵器 蓋	西隅+12、覆上 口縁部～体部片	口	19.0		細砂粒/還元釉・や や軟質/灰白	ロクロ整形(左回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第198図	3	須恵器 蓋	西隅+4 口縁部～体部 位1/4	口 底	25.2 22.6	高 2.5	白色鉱物粒・赤黒 色粘土粒/還元釉/ にぶい釉	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部を除く外面は回転へら削り。内面の底部はナデ。胴部が付く可能性あり。	傾きももっと 起きあがるか。
第198図	4	土師器 小型甕	西隅+8 口縁部～胴部 上位1/4	口	13.2		粗砂粒/良好/にぶ い釉	口縁部は横ナデ。内面は中に凹めがめく。胴部は横位のへら削り。	被熱か、外面 炭素吸着。
第198図 Pl.31	5	土師器 小型甕	西隅+8、+7 口縁部～胴部 中位片	口	14.0		粗砂粒/良好/にぶ い釉	口縁部先端は、わずかに厚厚。横ナデ。胴部の最上位は横位の、それ以下は斜位のへら削り。内面は横位のへらナデ。	
第198図 Pl.31	6	土師器 甕	西隅床面 口縁部～胴部 上位片	口	23.0		粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/釉	口縁部は横ナデ。内面口唇部直下は弱くくぼむ。胴部は横位のへら削り。内面は横位のへらナデ。	器面やや摩 滅。
第200図	7	須恵器 蓋	西隅+10 胴部片				細砂粒/還元釉/灰	ロクロ整形(左回転)。外面は沈積による区画内にカキ目を施し、この上に刺状工具による刺突文を配す。	
第200図	8	須恵器 蓋	西隅+6 胴部上位片				白色鉱物粒少/還 元釉/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部に2条の沈積めがめり。その区画内に9本1単位のカキ目工具による刺突文が連続する。その上下にはカキ目がめくり、胴部下位には回転へら削りが施される。	
第200図 Pl.31	9	須恵器 蓋	西隅+2、床面 口縁部～胴部上 半	口	14.4		粗砂粒・黒色鉱物 粒/還元釉/褐灰	紐作り後、ロクロ整形。胴部に回転へら削り。口縁部先端は縦かく破損している。	
第200図	10	鉄製品 角釘	覆上	長 幅	10.0 0.8	厚 重 14.28		頭付近の断面は長方形(0.8×0.5cm)で先に向かい正方形(0.8×0.8)になりが端部向が破損する。先に向かい途中2か所での字に曲がり先端近くで細くなり尖る。折れを伸ばした状態での長さは11cm程になる。木質等の残存は確認できず使用形態は不明。	

2区1号住居出土遺物

種 図 Pl.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第228図 Pl.31	1	須恵器 蓋	西、覆上、甕方 1/4	口	16.0		粗砂粒・灰黒色粘 土粒少/還元釉/灰 白	ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第228図 Pl.31	2	須恵器 杯	南東隅+7、+3	口 底	11.4 6.3	高 3.4	黒色鉱物粒/還元 釉/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。焼 成時、別個体 片か。
第228図 Pl.31	3	須恵器 杯	甕方 3/4	口 底	12.8 7.5	高 3.7	黒色鉱物粒/還元 釉/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。
第228図	4	須恵器 杯	南東隅+6 1/2	口 底	13.4 8.0	高 4.0	細砂粒/還元釉・や や軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第228図	5	須恵器 杯	中央+4 1/4	口 底	13.2 8.4	高 3.8	白色鉱物粒少/還 元釉/灰	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、手持ちでへらナデ。	内面やや摩 耗。
第228図	6	須恵器 杯	南東隅床面 1/4	口 底	11.8 7.4	高 3.7	黒色鉱物粒/還元 釉/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。
第228図	7	須恵器 椀	甕右+25 口縁部下位～高 台部	底	8.0	台 7.2	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/還元釉・やや 軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	外面やや炭素 吸着。
第228図 Pl.31	8	土師器 甕	甕前床面、覆上 口縁部～胴部 中位片	口	21.4		粗砂粒/良好/にぶ い赤釉	口縁部は横ナデ。胴部上位は横位の、中位は斜位のへら削り。内面は横位のへらナデ。	被熱。

第13表 出土遺物観察表(3)

2区1号住居出土遺物									
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第23図 PL.31	9	土師器 器	南東隅+8、+14 口縁部～胴部上 位	口	20.4		粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部は横位のへら削りに縦位のナデを重ねる。内面は右傾している。	
第23図	10	土師器 器	甕前床面、甕上 口縁部～胴部上 位	口	19.4		粗砂・細砂粒/良好/ /ぶい/橙	口縁部は横ナデ。胴部は斜横位のへら削り。内面は横位のナデ。	
第23図 PL.31	11	鉄製品 角釘	甕上	長 幅	6.9 0.9	厚 重	0.8 7.5	断面長方形の角釘と見られるが、頭部分は劣化後破損し不明	

2区2号住居出土遺物									
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第25図 PL.31	1	土師器 杯	甕左壁際床面 1/4	口	11.0	高 揃	3.8 4.4	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削りと考えられる。器面は厚減顯著。
第25図 PL.31	2	土師器 杯	甕前床面 完形	口	13.9	高	4.2	細砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部、底部はへら削りと考えられる。内面はナデ。
第25図 PL.31	3	土師器 杯	甕左前床面 口縁部一部欠	口	15.9	高	5.3	赤黒色粘土粒/良 好/橙	口縁部は横ナデ。体部と底部は手持ちへら削り。内面は口縁部から体部に丁寧なナデの上に放射状にへら磨きを重ねている。
第25図 PL.31	4	石製品 砥石	甕上 破片	長 幅	(4.0) (3.2)	厚 重	1.7 21.6	砥石	背面側と右側面に著しく研ぎ減った底面が残る。左側の小口部は砥面が荒れ、使用状態にあるのか不明。

2区4号住居出土遺物									
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第29図 PL.31	1	土師器 杯	甕内、側方 1/2	口	12.8			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部はナデ。底部は手持ちへら削り。内面はナデ。
第29図 PL.31	2	須恵器 器	西壁際中央床面 1/2	口	17.4	高 揃	4.4 4.4	黒色気物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、輪部貼付。天井部中心寄りに回転へら削り。
第29図 PL.31	3	須恵器 器	中央床面、側方 3/4	口	13.0	高	3.4	黒色気物粒/還元 焼/灰	底部の器内厚い。ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。
第29図 PL.32	4	須恵器 杯	甕前北床面 3/4	口	12.4	高	3.4	黒色気物粒/還元 焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転へら切り後、へらナデ。
第29図 PL.32	5	須恵器 杯	中央西+1、床面 口縁部1/4	口	12.4			黒色気物粒少/還 元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。
第29図 PL.32	6	須恵器 杯	南東隅付蓋+13 口縁部下位～底部 片	底	7.2			赤黒色粘土粒少/ 還元焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。
第29図 PL.32	7	須恵器 杯	東壁際南半床面 1/3	口	11.4	高	5.4	粗砂粒少/酸化焼 にぶい/黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付け高台。
第29図 PL.32	8	須恵器 杯	東壁際北半床面 1/3	口	15.4	高	6.0	ぶい/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付け高台。
第29図 PL.32	9	土師器 器	甕石1北側+6 口縁部～胴部中 位片	口	21.2			粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部上位は斜横の、中位は斜縦位のへら削り。内面は横位のへらナデ。
第29図 PL.32	10	土師器 器	中央床面、側方 口縁部～胴部片	口	17.8			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部は横位のへら削り。内面は横位のへら削り。
第29図 PL.32	11	土師器 器	甕石2北側+5 胴部下位～底部 片	底	4.1			粗砂・細砂粒/良好/ /灰黄褐	胴部外面は縦位のへら削り。内面はへらナデ。底部外面はへら削り。
第29図 PL.32	12	鉄製品 鎌	南部中央+16 刃先欠	長 幅	7.0 2.9	厚 重	0.3 15.91		柄手の鎌破片で柄装着部にはほぼ直角に曲げられている。柄の木質等は見られない。刃先は鋧化前に破損し下側に曲がっている。

2区6号住居出土遺物									
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第30図	1	土師器 器	甕内 口縁部片	口	18.0			粗砂・細砂粒/良好/ /橙	口縁部は横ナデ。外面に指頭圧痕を残す。

2区7号住居出土遺物									
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備考
第33図 PL.32	1	土師器 杯	南西部+4 3/4	口	14.6	高	4.8	赤黒色粘土粒少/ 良好/明黄褐	口縁部は横ナデ。体部と底部は手持ちへら削り。内面はナデ後、口縁部と体部に放射状の、底部に螺旋状のへら磨きを施している。
第33図	2	土師器 杯	甕上 1/2	口	13.4	高	3.3	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。底部は手持ちへら削り。内面はナデ。
第33図	3	土師器 杯	甕内 1/3	口	20.0	高	12.8	赤黒色粘土粒多/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は横位の手持ちへら削り。底部も手持ちへら削り。内面はナデ。
第33図 PL.32	4	須恵器 器	北東部床面、甕 上	口	13.8	高 揃	2.4 3.6	黒色気物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、輪部貼付。天井部中心寄りに左回転の回転へら削り。
第33図 PL.32	5	須恵器 器	南東隅+9、+12 1/2	口	16.6			黒色気物粒少/還 元焼/灰	器形歪んでいるか、天井部中央は筒縁部より低い。ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転へら削り。
第33図 PL.32	6	須恵器 杯	南東隅+7 1/3	口	13.4	高	3.3	白色・黒色気物粒/ 還元焼/灰	ロクロ整形(左回転)。底部切り離し後、手持ちへら削り。



遺物観察表

第14表 出土遺物観察表(4)

2区7号住居出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第33図 PL.32	7	須恵器 杯	南東部+9、覆上 1/2	口 底	13.8 9.2	高 3.7	黒色鉱物粒/還元 焼/灰	器形の歪み顕著。ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、回転ヘラ削り。ナデ。	内面やや摩耗。
第33図	8	須恵器 杯	榎方 破片	口 底	11.8 8.8	高 2.5	黒色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ削り。	器面自然焼付着。
第33図	9	土師器 甕	中央東+14、覆上、 榎方口縁部～胴部 中位	口	20.6		粗砂・細砂粒/良好 /橙	口縁部は横ナデ。胴部最上部位は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第33図 PL.32	10	土師器 甕	竜前+3、+8、中央 東+10、+11、 +11、+14、覆上 口縁部～胴部上 半	口	22.2		粗砂粒/良好/橙	軽量。口縁部は横ナデ。胴部上位は横位の、中位は斜位のヘラ削り。内面は斜横位のヘラナデ。	破熟。
第33図	11	土師器 台付甕	北西側+4 胴部下位～台部 3/4	底	10.0		粗砂・細砂粒/良好 /にぶい濁	胴部は斜横位のヘラ削り、内面はヘラナデ。基部から脚台部には横ナデ。	器面炭素吸着。
第33図	12	須恵器 壺	榎方 口縁部片	口	16.6		細砂粒/還元焼/や や軟質/灰白	ロクロ整形。	
第33図	13	須恵器 壺	南西部+14 胴部中位片	口	12.4		白色鉱物粒少/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部に2条の沈線をめぐるし、その区画内に8本1単位のクシ状工具による刻文が連続する。	
第33図 PL.32	14	須恵器 壺	南西部+12、+4 胴部下位～底部	底	12.4		粗砂粒/還元焼/や や軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。外面最下位は横位のヘラ削り。	
第34図 PL.32	15	須恵器 甕	竜前、中央～東、 覆上1/3	口	24.2		白色鉱物粒/還元 焼/灰	削り後、ロクロ整形、叩き整形。口縁部は横ナデ。胴部は平行叩き目。内面は青海波文状の当て具痕。	
第34図 PL.33	16	須恵器 甕	竜前、中央～東、 覆上 胴部中位～底部 3/4	口	24.2		粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焼/灰	削り後、叩き整形。残存部中位から底部まで斜横位のヘラナデ。それより上位には平行叩き目。内面は青海波文状の当て具痕。底部寄りは消されている。	
第34図	17	須恵器 転用甕	覆上 天井部～口縁部 片	口	12.8		粗砂粒/還元焼/灰	蓋の内面をすり面として使用している。蓋の整形はロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転ヘラ削り。	内面摩耗。墨付着。
第35図 PL.32	18	須恵器 内面甕	南壁際中央+8 一部欠損	口 底	14.3 13.3	高 4.1	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焼/灰白	碗面は平面内面を呈する。断面形はわずかに中央部が高くなる凸面状を呈し、外縁部は断面三角形。内面に沿って凹線がめぐる。表面は摩耗し平滑となっており、墨の痕が確認できる。この碗面は厚さ7mm程度の粘土板からなり、下にドーナツ状の台が付けられている。台は中空になっていると考えられる。口の部分は欠損している。台の断面は上位1/4程がナデ。それ以下はヘラ削り、内面は白。内側面・底面はヘラ削り。	
第34図 PL.33	19	石製品 砥石	南東部床面 略正方形	長 幅	14.8 4.9	厚 重 545.2	砥石	各面ともよく使い込まれ研ぎ減る。上端小口部・裏面側に縦位・斜位の刃ならしげが残る。	切り砥石
第34図 PL.33	20	鉄製品 鎌	南東部床面 半月欠	長 幅	4.5 3.4	厚 重 20.46		鎌破片柄装部は100°程に曲げられている。刃は劣化後破損で柄の本質等も見られない。	

2区8号住居出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第36図	1	須恵器 杯	覆上 底部1/2	底	8.0		黒色鉱物粒/還元 焼/軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第36図	2	須恵器 壺	榎方 胴部下位～底部 片	底	15.2		精選/還元焼/にぶ い赤濁	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面台形。底部切り離し後の付け高台。	器面自然焼付着。

2区9号住居出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第37図 PL.33	1	須恵器 杯	南東部+19、覆上 2/3	口 底	13.2 8.2	高 3.8	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/還元焼/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ削り。	内面摩耗。
第37図	2	土師器 甕	南部+2 口縁部～胴部上 位片	口	12.8		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部は斜横位のヘラ削り。内面は横位のナデ。	器面炭素吸着。

2区11号住居出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第41図	1	須恵器 杯	榎方 底部片	底	7.2		粗砂粒少/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第41図	2	土師器 甕	覆上 口縁部1/2	口	8.0		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部はハケ目の上に横ナデ。胴部はハケ状工具によるヘラ削り。内面は横位のナデ。	器面炭素吸着。

2区12号住居出土遺物

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第42図	1	須恵器 杯	覆上 底部片	底	6.2		粗砂粒少/還元焼/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面炭素吸着。

第15表 出土遺物観察表(5)

2区13号住居出土遺物

種目 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第43図 Pl.33	1	須恵器 杯	南西隅+12、覆上 1/2	口 13.0	底 5.2	高 4.3	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/酸化塩/ ぶい黄緑	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。
第43図	2	須恵器 碗	西壁際+7、覆上 口縁部下位～底部	底 6.2	台 6.2	高 5.7	粗砂粒/還元塩・軟 質/ぶい黄緑	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部回転糸切り後の付け 高台。	器面摩耗。
第43図	3	黒色土器 鉢	南西隅床面 底部1/2	底 8.0	台 8.0	高 8.2	粗砂粒/酸化塩/粗 赤黒色粘土粒/還元 塩/褐灰	ロクロ整形か。高台部は付け高台。内面は黒色処理後ヘラ 磨きを施すが、器面磨滅のため単位は把握できない。 破作り後、口縁部はロクロ整形。胴部は縦位のヘラ削り、 内面は横位のナデ。	
第43図	4	須恵器 羽釜	西壁際+10 口縁部～胴部片	口 18.2					

2区14号住居出土遺物

種目 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	須恵器 杯	覆上 口縁部～体部片	口 16.0			粗砂粒/還元塩・軟 質/ぶい黄緑	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第45図	2	須恵器 甕	掘方 胴部下位～底部 片	底 20.0			白色・黒色鉱物粒/ 還元塩/灰黄	破作り後、叩き整形。外面は平行叩き目、内面は当て貝肌。	内面摩耗。二 次利用か。
第46図 Pl.33	3	礫石器 砥石	掘方 完形	長 7.9	厚 6.4	重 332.4	粗粒輝石安山岩	背面側が著しく研ぎ減り、平坦面が形成されている。底面 には縦位稜角が残る。	横口獲

2区15号住居出土遺物

種目 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第48図	1	土師器 杯	掘方 1/4	口 12.8	底 8.2		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部はナデ。型眼を残す。底部は手持ち ヘラ削り。内面はナデ。	
第48図 Pl.33	2	須恵器 杯	竈前+4、+10 2/3	口 12.2	底 6.4	高 3.8	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元塩・軟質/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第48図 Pl.33	3	須恵器 杯	竈前+8 2/3	口 14.1	底 6.5	高 3.7	粗砂粒・灰黒色粘 土粒・雲母/還元塩・ 酸化塩/ぶい黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	底部周辺に炭 素吸着。
第48図 Pl.33	4	須恵器 杯	掘方 口縁部一部欠	口 12.3	底 5.8	高 3.9	粗砂粒・灰黒色粘 土粒・雲母/還元塩・ 酸化塩/ぶい黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸 着。
第48図	5	須恵器 杯	覆上 1/4	口 12.8	底 6.6	高 3.9	細砂粒少/還元塩/ 灰	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩耗。外 面に炭素吸着。
第48図	6	須恵器 杯	覆上 1/4	口 13.6	底 7.0	高 3.6	白色鉱物粒多/還元 塩/黄灰	口縁部先端は大きく外反する。ロクロ整形(右回転)。底部 回転糸切り後、無調整。	
第48図	7	須恵器 杯	覆上 1/4	口 14.6	底 7.8	高 3.6	白色鉱物粒/還元 塩/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第48図	8	須恵器 杯	掘方 1/4	口 13.0	底 6.0	高 4.0	赤黒色粘土粒/還元 塩/灰	口縁部先端は大きく外反する。ロクロ整形(右回転)。底部 回転糸切り後、無調整。	
第48図	9	須恵器 杯	覆上、掘方 口縁部1/3	口 13.8			細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形(左回転か)。	内面摩耗。
第48図	10	須恵器 杯	覆上 口縁部下位～底 部1/2	底 8.0			黒色鉱物粒/還元 塩/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第48図	11	須恵器 杯	掘方 口縁部下位～底 部	底 5.9			赤黒色粘土粒少/ 還元塩/灰	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面に炭素吸 着。
第49図 Pl.33	12	須恵器 甕	覆上 3/4	口 12.8	底 6.4	高台 3.4 6.2	粗砂粒・灰黒色粘 土粒多/還元塩・酸 化塩/ぶい黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	器面摩滅。
第49図	13	須恵器 碗	南西部+12 口縁部下位～底 部	底 6.9	台 6.9	高 6.7	白色鉱物粒/還元 塩・酸化塩/灰味/黄 灰	ロクロ整形。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	器面炭素吸 着。
第49図	14	土師器 甕	覆上 口縁部～胴部上 位片	口 22.0			細砂粒/良好/ぶい 橙	口縁部先端には目割がめぐる。横ナデ。胴部は横位のヘラ 削り。内面は横位のヘラナデ。	
第49図	15	須恵器 甕	覆上 口縁部片	口 24.0			黒色・白色鉱物粒/ 還元塩/灰	破作り整形後、ロクロ整形により内外面とも横ナデ。	
第49図	16	須恵器 甕	覆上 口縁部片	口 22.0			白色鉱物粒/還元 塩/灰	破作り整形後、ロクロ整形により内外面とも横ナデ。	内面に自然釉 付着。
第49図 Pl.33	17	土製品 円板	覆上 破片	長 9.3	厚 4.6	重 61.29	粗砂粒/良好/橙	平面形は長円形に近い形状に仕上げている。小破片の割れ 口を再調整し、平滑にしている。中央に直径6mmの小孔を 穿っている。	
第49図 Pl.33	18	鉄製品 破片	覆上 破片	長 4.3	厚 2.1	重 29.1	砥石	鎌破片で柄装首部は角の一部を面だけで小さい。片先 側は劣化後破損で柄の本質等も見られない。	切り砥石
第49図 Pl.33	19	石製品 砥石	覆上 西端欠損	長 15.9	厚 6.5	重 805.6	粗粒輝石安山岩	小口部両端に著しい最打痕が残る。被熱して復ける。	棒状獲

遺物観察表

第16表 出土遺物観察表(6)

2区15号住居出土遺物							胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		計測値			
第49回 PL.33	21	礫石器 磨石	北東壁際+5 完形	長 12.5 幅 12.2	厚 4.7 重 110.0	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。特に、背面側の摩耗面は強く光沢を帯びる。被熱して部分的に燻ける。	扁平楕円	
2区16号住居出土遺物							胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		計測値			
第52回 PL.33	1	須恵器 杯	南東隅 3/4	口 13.0 底 6.7	高 3.8	粗砂粒/還元焰/灰 オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に火傷状。	
第52回 PL.33	2	須恵器 杯	北西隅床面 完形	口 13.2 底 6.1	高 4.1	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。	
第52回 PL.33	3	須恵器 杯	中央西床面、覆 上 3/4	口 12.6 底 6.1	高 4.4	粗砂粒少/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に黒色の 付着物。やや 摩耗。	
第52回 PL.33	4	須恵器 杯	北西部床面、覆 上 2/3	口 12.8 底 5.8	高 4.4	粗砂粒少/還元焰/ にぶい黄	口縁部の先端は強く外反。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。鉄 分固着。	
第52回 PL.33	5	須恵器 杯	南東隅+1、覆上、 掘方 3/4	口 13.6 底 6.0	高 4.2	粗砂粒少/還元焰/ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。	
第52回 PL.33	6	須恵器 杯	壺内+2 1/2	口 12.4 底 5.8	高 3.8	白色底物粒少・赤 黒色粘土粒少/酸 化焰/軟質/灰黄	口縁部は外方に屈曲気味に立ち上がる。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩耗。摩 滅。一部に炭 素吸着。	
第52回 PL.33	7	須恵器 杯	南西部床面 2/3	口 12.3 底 5.1	高 3.8	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/還元焰/ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。口縁部 下位の一部に底部の切り離し時にできたと考えられるナデ 状の痕あり。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。	
第52回 PL.33	8	須恵器 杯	西部掘方 1/3	口 13.0 底 5.4	高 3.5	粗砂粒少/還元焰/ にぶい黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。	
第52回 PL.33	9	須恵器 杯	覆上 1/3	口 12.6 底 4.9	高 4.0	粗砂粒少/灰白色 粘土粒少/還元焰/ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部炭素吸着。	
第52回 PL.33	10	須恵器 杯	南部+7 1/2	口 13.6 底 6.5	高 3.8	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面、鉄分固 着。	
第52回 PL.33	11	須恵器 杯	中央南隅方 2/3	口 12.4 底 5.6	高 3.8	粗砂粒/還元焰/軟 質/灰	口縁部の先端は大きく外反。ロクロ整形(右回転)。底部回 転糸切り後、無調整。	器面摩耗。摩 滅。一部に炭 素吸着。	
第52回 PL.33	12	須恵器 杯	壺北床面 1/4	口 13.4 底 5.8	高 4.3	粗砂粒少/還元焰/ 酸化焰気味/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部は粗雑な回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。器 面鉄分固着。	
第52回 PL.33	13	須恵器 杯	壺内 1/4	口 11.7 底 5.0	高 4.2	粗砂粒/還元焰/軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部炭素吸着。	
第52回 PL.33	14	須恵器 杯	北西隅床面 2/3	口 13.3 底 6.1	高 4.7	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/還元焰/ やや軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。器 面の一部に炭 素吸着。	
第52回 PL.33	15	須恵器 杯	壺北掘方 1/3	口 12.6 底 6.6	高 4.8	粗砂粒少/還元焰/ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の 切り離しが粗雑なため底面は凸レンズ状を呈する。	器面やや摩滅 大半に炭素吸 着。	
第52回 PL.33	16	須恵器 杯	中央南+7 1/4	口 11.4 底 5.4	高 4.2	粗砂粒少・赤黒色 粘土粒/還元焰/灰 白	底部は回転糸切り後、無調整。		
第52回 PL.33	17	須恵器 杯	中央南床面 口縁部片	口 15.4		粗砂・細砂粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。	
第52回 PL.33	18	須恵器 杯	覆上 口縁部～底部 2/3	口 底 4.8		粗砂粒少/還元焰/ 軟質/灰白	器内厚い。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。	
第53回 PL.33	19	須恵器 杯	壺南床面 口縁部下半～底 部	口 底 5.8		粗砂粒少/還元焰/ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。鉄 分固着。	
第53回 PL.33	20	須恵器 杯	覆上 口縁部中位～底 部3/4	口 底 6.2		赤黒色粘土粒/還 元焰・やや軟質/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り、周縁部はナデを加 えているか。	器面摩耗。黒 色の付着物。	
第53回 PL.33	21	須恵器 杯	掘方 口縁部下半～底 部1/2	口 底 5.8		粗砂粒少・赤黒色 粘土粒少/還元焰/ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩耗。	
第53回 PL.33	22	須恵器 杯	壺内 口縁部下半～底 部1/3	口 底 6.6		粗砂粒/還元焰/軟 質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面、炭素吸 着。摩耗。	
第53回 PL.33	23	須恵器 杯	掘方 口縁部下半～底 部2/3	口 底 5.6		粗砂粒少/還元焰/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面、炭素吸 着。やや摩滅。	
第53回 PL.33	24	須恵器 杯	壺北前床面 口縁部下半～底 部1/3	口 底 5.4		粗砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面、鉄分固 着。	
第53回 PL.33	25	須恵器 杯	壺北掘方 口縁部中位～底 部2/3	口 底 5.6		粗砂粒/還元焰/軟 質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。	

第17表 出土遺物観察表(7)

2区16号住居出土遺物

種 図 Pl. No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口径	高			
第53図 Pl. 33	26	須恵器 杯	榎方 口縁部中位～底部	底	4.9	粗砂粒少/還元焰・ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第53図 Pl. 33	27	須恵器 杯	南東隅榎方 1/2	口	16.6 底 8.6	高 5.4 粗砂粒少/還元焰・ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。炭 素吸着。
第53図 Pl. 34	28	須恵器 杯	南東部榎方 1/2	口	15.6 底 7.0	高 6.6 粗砂粒/還元焰・酸 化焰きみ/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。 鉄分固着。
第53図	29	須恵器 杯か	覆上・榎方 1/3	口	15.4	高 5.7 赤黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転か)。	器面摩滅。
第53図 Pl. 34	30	須恵器 杯か	南西部+10、中 央南+9、甕前+7 底部のみ	底	10.0	粗砂粒・黒色鉱物 粒/還元焰・軟質/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。外面は 板目状の圧痕。	器面炭素吸着。 黒色筈 痕か。
第53図	31	須恵器 杯か	南壁際+16 口縁部中位～底部 1/4	口	6.4	粗砂粒少/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面とも炭 素吸着。器面 やや摩滅。
第53図 Pl. 34	32	須恵器 椀	貯蔵穴・中央壁 3/4、覆上	口	15.3 底 7.0	高 6.1 粗砂粒少/還元焰・ 軟質/浅黄	高 6.7 ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩滅。鉄 分固着。
第53図 Pl. 34	33	須恵器 椀	北西部+1、南東 隅床面 1/3	口	14.4 底 7.1	高 5.9 粗砂粒少/還元焰・ 軟質/酸化焰きみ/浅黄	高 6.6 ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩滅。炭 素吸着。鉄分 固着。
第53図	34	須恵器 椀	榎方 1/2	口	14.3 底 6.2	高 5.3 黒色鉱物粒/還元 焰・軟質/灰	高 5.8 ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部回転糸切り後の付け 高台。	器面摩滅。炭 素吸着。
第53図	35	須恵器 椀	南東隅榎方、覆 上、甕内 1/2	口	14.2 底 5.2	高 5.1 粗細砂粒少/還元 焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転か)。高台部は剥落しているが、底部回 転糸切り後の付け高台。	器面摩耗。高 台部剥落後も 二次利用した と考えられる。
第54図	36	須恵器 椀	北壁際榎方 1/4	口	14.5 底 6.8	高 5.4 粗砂粒少/酸化焰/ 灰黄	高 6.4 ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	器面、鉄分固 着。
第54図	37	須恵器 椀	覆上	口	18.0 底 7.5	高 5.9 粗砂粒少/酸化焰 にぶい黄橙	高 7.4 ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	器面摩滅。炭 素吸着。鉄分 固着。
第54図 Pl. 34	38	須恵器 椀	南壁際床面 1/2	底	6.4	台 6.6 粗砂粒少/還元 焰・軟質/酸化焰きみ/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。端部形状は崩れている。	外面摩滅。鉄 分固着。内面 摩耗。
第54図	39	須恵器 椀	甕内 口縁部下位～底部 1/2	底	6.5	台 6.3 粗砂粒少/還元 焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	器面摩滅。
第54図	40	須恵器 椀	榎方 口縁部下位～底部	底	6.2	台 5.8 粗砂粒少/還元 焰・軟質/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩耗。
第54図	41	須恵器 椀	中央床面 口縁部下位～底部	底	7.4	台 6.7 粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰・軟質/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。底部はクシ状工具により円形に刺突列あり。	
第54図	42	須恵器 椀	南西部床面、覆 上 口縁部下位～底部 1/2	底	6.7	台 6.0 粗砂粒少/還元 焰・軟質/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。高台部は底部切り離し後の付 け高台。	器面摩滅。
第54図	43	須恵器 椀	甕北前榎方 口縁部下位～底部 1/2	底	6.0	台 5.7 粗砂粒少/還元 焰・軟質/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩滅。
第54図	44	須恵器 椀	北東部+5 口縁部下位～底部 1/2	底	6.0	台 5.4 赤黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩滅。
第54図	45	須恵器 椀	南壁際榎方 口縁部下位～底部	底	6.0	台 5.8 白色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。	器面摩耗。
第54図	46	須恵器 椀	中央南榎方 2/3	口	15.3	白色鉱物粒/還元 焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高 台。高台部破損後も利用したか。	
第54図 Pl. 34	47	灰輪陶器 耳皿	榎方 1/2	底	5.4	黒色鉱物粒/還元 焰/灰オリーブ	ロクロ整形(左回転)。底部は回転が複雑な糸切り後、無調 整。	内外面の耳部 分に施釉。
第54図	48	灰輪陶器 長頸壺	榎方 頸部	口	19.8	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削りと考えられる。内面は横 位のヘラナデ。	
第54図	49	土師器 土師	榎方 口縁部片	口	19.8	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削りと考えられる。内面は横 位のヘラナデ。	
第54図	50	須恵器 羽釜	甕北前榎方 口縁部～胴部上 位	口	15.3	粗砂粒多・石英粒 還元焰・酸化焰き み/灰黄	紐作り後ロクロ整形。口縁部は横ナデ。頸部を貼付後、胴 部に縦位のヘラ削り、内面は横位のナデ。	
第54図 Pl. 34	51	須恵器 甕	貯蔵穴、覆上 口縁部～胴部下 位片	口	19.4	粗砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形。胴部は2回に分けて縦位のヘラ削り。内面は 頸部が強いヘラナデ。胴部上位が縦位のハケ目、中位以下 は縦位のヘラナデ。	

遺物観察表

第18表 出土遺物観察表(8)

2区16号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第55図 PL.34	52	須恵器 甕	甕内、甕側方、 南東部側方 口縁部～胴部上 位片	口	50.0		粗砂粒少・灰黒色 粘土粒/還元焰/灰	紐作り後、ロクロ整形、甲き整形。口縁部は横ナデ。胴部はナデ、内面は当て貝具。		
第55図 PL.34	53	須恵器 甕	甕南前+2、北東 部末面+3、甕上 口縁部片	口	50.0		黒色鉱物粒/還元 焰/灰	紐作り後、ロクロ整形。		
第55図 PL.34	54	土製品 竹+支脚	甕上 上半部	上 端	3.1		粗砂粒・軟質/酸化 焰か。軟質/にぶ い黄褐色	截円錐形を呈する。下端は欠損する。上端面は凹レンズ状を呈し中央がくぼむ。	脆弱。	
第55図 PL.34	55	石製品 砥石	中央南床面 4/5	長 幅	20.0 14.4	厚 重	10.2 233.9	粗粒輝石安山岩	両側面に砥面を有するほか、背面側に長軸7cm・短軸8cm・深さ1.5cmの孔を穿つ。	切り砥石
第55図 PL.34	56	礫石器 磨石	中央+4 完形	長 幅	13.2 4.2	厚 重	2.7 226.4	変質安山岩	小口部両端に敲打痕、右辺エッジに敲打に伴う衝撃的隆起がある。このほか、背面側に工具痕に似た凹痕がある。	棒状礫

2区18号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第57図 PL.34	1	須恵器 杯	南西隅+14 1/2	口	12.4 5.4	高	4.1	黒色鉱物粒少/還元 焰/やや軟質/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。切り難しは粗雑で底部に粘土塊を残す。	内面摩耗、炭素吸着。
第57図 PL.34	2	須恵器 杯	甕前+3、甕内、 甕方 1/3	口	12.8 7.2	高	4.2	赤黒色粘土粒少/ 酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切りと考えられるが観察不可能。	器面摩滅、一部に炭素吸着。
第57図 PL.34	3	須恵器 杯	甕内 破片	口	13.3 5.6	高	4.0	粗砂粒少/還元焰・ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅、内面摩耗。
第58図 PL.34	4	須恵器 杯	甕内 1/4	口	14.4 7.0	高	4.9	粗砂粒少/還元焰・ 軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅、炭素吸着。
第58図 PL.34	5	須恵器 碗	甕内 2/3	口	13.3 6.6	高	5.4 6.5	粗砂粒・赤黒色粘 土粒少/酸化焰/灰 黄	口縁部の先端は強く外反。ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	器面摩滅。
第58図 PL.34	6	須恵器 碗	甕前+6 口縁部下位～底部 1/2	底	7.0	台	6.4	粗砂粒少/還元焰・ 酸化焰/ぎみ/灰黄 褐色	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	内面摩耗。器面の一部に炭素吸着。
第58図 PL.34	7	須恵器 羽釜	甕前+2、甕内 口縁部～底部 1/2	口	17.6 6.2	高	27.3	粗砂粒・白色軽石 多/還元焰・酸化焰 ぎみ/灰黄	口縁部はロクロ整形。胴部貼付後、胴部に縦位のへら削り。内面は縦位、傾位に指ナデ。底部はへらナデ。	
第58図 PL.34	8	石製品 砥石	甕上 完形	長 幅	10.9 4.1	厚 重	3.6 169.6	砥沢石	四面使用?裏面側を除いて、各面ともよく研ぎ減る。上下両端は粗く磨き整形される程度だが、裏面側は破損後に磨き整形されたものか、砥面として継続使用された可能性が高い。各面ともよく研ぎ減る。	切り砥石

2区20号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第60図 PL.34	1	須恵器 蓋	北西壁際+3 横部～体部中位					粗砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転か)。天井部切り離し後、横部貼付。天井部中心寄りに回転へら削り。	
第60図 PL.34	2	須恵器 甕か	北東壁際+12 胴部下位～高台 部1/3	底	11.2	台	11.6	黒色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。胴部は回転へら削り。	
第60図 PL.34	3	須恵器 鉢	甕上 口縁部～体部 1/3	口	14.0			白色鉱物粒/還元 焰/暗灰黄	ロクロ整形(左回転か)。体部下位に回転へら削り。	

2区21号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第62図 PL.35	1	土師器 瓿	甕上 1/4	口	14.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部、底部は手持ちへら削り。内面は口縁部、体部とも放射状に、底部は螺旋文状にへら磨き。	
第62図 PL.35	2	土師器 瓿	南西隅+4 1/2	口	11.8	高	3.8	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部、底部は手持ちへら削り。内面はナデ。	
第62図 PL.35	3	須恵器 杯	西部中央+31 3/4	口	11.7	高	3.8	黒色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転へら削り。	内面やや摩耗。
第63図 PL.35	4	須恵器 杯	甕前北+26、甕上 1/2	口	12.4 8.0	高	4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転へら削り後、肩縁部に手持ちへら削り。	内面摩耗。
第63図 PL.35	5	須恵器 杯	中央北+25 1/3	口	12.8 7.4	高	4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転へら削り。	器面摩耗。炭素吸着。
第63図 PL.35	6	須恵器 杯	南部中央+17 1/3	口	13.4 7.8	高	4.7	黒色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、手持ちでへらナデ。	
第63図 PL.35	7	須恵器 杯	甕上 1/4	口	11.2 6.2	高	3.8	細砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形(右回転)。底部は切り離し後、肩縁部に回転へら削り。	内面やや摩耗。
第63図 PL.35	8	須恵器 杯	甕上 口縁部～底部片	底	12.2 8.2	高	3.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、手持ちでへらナデ。	

第19表 出土遺物観察表(9)

2区21号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第63図 PL.35	9	須臾器 機	南東隅床面 3/4	口 底	15.1 8.7	高 台	7.3 9.2	粗砂粒・黒色鉱物 粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ削り。高台部は底部 切り離し後の付け高台。	内面摩耗。
第63図 PL.35	10	土師器 小	甕内、覆上、甕 方 口縁部1/2	口	19.8			粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。一部に筋頭圧入が見られる。胴部は横位 のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第63図 PL.35	11	土師器 小型甕	南東隅床面 口縁部→胴部上 位1/4	口	12.8			粗砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ。胴部最上位は横位のナデ。肩部は斜縦位 のナデに近いヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱か。炭素吸着。
第63図 PL.35	12	石製品 砥石	石製品 1/2	長 幅	10.0 (4.6)	厚 重	3.2 206.4	砥沢石	四面使用。右側面には浅く凹状を呈する幅2mmの工具痕 が残る。裏面側は被熱剥落して凹凸が激しい。	切り砥石
第63図 PL.35	13	石製品 不明石製品	覆上 ほぼ完了	長 幅	6.3 3.8	厚 重	1.9 29.6	雲母石英片岩	背面側を平坦に研磨するほか凹縁を面取り様に研磨。全体 として長方形に形状を整える。断面D字状を呈す。	
第63図 PL.35	14	礎石器 砥石か	南東隅中央床面 完形	長 幅	42.8 40.8	厚 重	12.6	粗粒輝石安山岩	背面側が研磨され著しい光沢面が生じているほか、その下 手には研磨作業に伴う線索痕が残る。	大形扁平砥
2区22号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第65図 PL.35	1	須臾器 杯	南東隅付近床 面、15住居内、 甕方 口縁一部欠	口 底	13.5 7.8	高 台	3.9	粗砂粒少/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	内面摩耗。
第65図	2	須臾器 杯	南東隅中央床面 1/5	口	11.9	高	3.9	白色鉱物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	
第65図	3	須臾器 杯	覆上 破片	口	14.6			白色鉱物粒・赤色 粘土粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	
第65図	4	須臾器 瓶	貯蔵穴部+15、 1住居内 1/2	底	7.0	台	7.2	粗砂粒/還元焰+軟 質/黄灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	器面摩滅。
第65図 PL.35	5	土師器 小型甕	南東隅付近+5、 覆上 口縁部→胴部上 位1/3	口	13.2			粗砂・細砂粒/良 好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部は斜縦位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	内外面とも被熱の 為か炭素吸着。
第65図 PL.35	6	鉄製品 不詳	貯蔵穴 破片	長 幅	3.9 3.5	厚 重	0.3 7.19		厚さ約1.5mm現存形状三角形で、端面は楕円形にカーブす る。刀装具破片にも似るが断定にはいたらない。	
2区23号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第68図 PL.35	1	土師器 甕	中央東床面～ +7 口縁部→胴部上 位片	口	19.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部先端は強い変換点を有し、直立みに立ち上がる。 横ナデ。胴部は斜縦位にヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	
第69図	2	土師器 甕	南部+3、東部 +18、15住 居 口縁部→胴部上 位片	口	22.0	高	5.1	粗砂・細砂粒/良 好/浅黄	口縁部の先端は強い凹面をなす。横ナデ。胴部は丁寧な ナデ。整形の単位を識別することはできない。内面は横位 のヘラナデ。	
第69図 PL.35	3	礎石器 台石	南部床面 完形	長 幅	24.8 20.2	厚 重	7.4 5700.4	粗粒輝石安山岩	背面側面が摩耗するほか、中央付近に敲打痕がある。	扁平楕円砥
2区24号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第70図 PL.35	1	土師器 杯	東北隅+1 2/3	口	15.4	高	4.1	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。間にナデの部分 を残す。	
第70図 PL.35	2	礎石器 砥石か	南西部床面 完形	長 幅	39.8 33.6	厚 重	11.4	石英閃緑岩	背面側に弱い摩耗面。敲打痕がある。	大形扁平砥
2区26号住居出土遺物										
種目 PL.No.	No.	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第72図	1	土師器 杯	西部+16 1/3	口	10.8	高	3.5	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削りと考えられる。	器面摩滅。
第72図	2	土師器 杯	覆上 1/4	口	10.8	高	3.5	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。間にナデの部分 を残す。内面はナデ。	
第72図	3	土師器 杯	覆上 1/3	口	11.7			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。間にナデの部分 を残す。内面はナデ。	
第72図	4	土師器 杯	西部+14、覆上 1/4	口	12.0			粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。間にナデの部分 を残す。内面はナデ。	
第72図	5	土師器 杯	西部+18 1/4	口	12.6			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。その他は観察不可能。	器面摩滅。
第72図	6	土師器 杯	西部+6 1/4	口	13.0	高	3.1	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削りと考えられ、口縁 部との間にはナデの部分が残されていたと考えられる。内 面はナデ。	器面摩滅。
第72図	7	土師器 杯	西部+5、覆上 1/4	口	16.0	高	5.1	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。底部は手持ちヘラ削り と考えられる。内面はナデ。	器面摩滅。

遺物観察表

第20表 出土遺物観察表 (10)

2区26号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第727図	8	土師器 杯	西部・12 1/4	口	13.9		口縁部は横ナデ。内部はヘラ削りと考えられる。内面はナデ。	外面摩滅。	
第727図	9	土師器 杯	西部・12、覆土 1/4	口	16.8		口縁部は横ナデ。内部はヘラ削りと考えられる。内面はナデ。No.8と同一個体の可能性もあるが、復元径、深さが大きく異なることから別個体として扱った。	外面に自然釉付着。	
第727図	10	須恵器 蓋	南部・10 土井部片			幅 2.8	白色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、宝珠形の桶部を貼付。	外面に自然釉付着。
第727図	11	須恵器 蓋	東部・26 桶部小片			幅 1.9	黒色鉱物粒/還元 焼/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、宝珠形の桶部を貼付。天井部中心寄りに回転ヘラ削り。	外面に自然釉付着。
第727図	12	須恵器 蓋	覆土 口縁部片	口	13.2		粗砂粒・黒色鉱物 粒少/還元焼/灰白	ロクロ整形(左回転)。天井部切り離し後、桶部貼付。天井部中心寄りに回転ヘラ削り。	外面に自然釉付着。
第727図 PL.35	13	須恵器 杯	南東壁際・12、 西部・13、覆土 2/3	口	9.1	高 3.5	白色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は切り離し後、ヘラ削り、ヘラナデ。	内面に自然釉付着。
第727図 PL.35	14	須恵器 杯	西部床面、覆土 3/4	口	11.0	高 3.3	白色・黒色鉱物粒/ 還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部手持ちヘラ削り。	内面摩耗。
第727図 PL.35	15	須恵器 杯	西部・9 3/4	口	11.6	高 4.2	白色鉱物粒/還元 焼/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は手持ちヘラ削り。	
第727図	16	須恵器 杯	西部・14、覆土 口縁1/2	口	12.0		白色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は手持ちヘラ削り。	
第727図	17	須恵器 杯	西部・22、覆土 1/2			底 7.0	粗砂粒/還元焼/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ削り。	
第727図	18	須恵器 盤	覆土 口縁部片	口	20.0		赤黒色粘土粒/還 元焼・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。外面は下平に回転ヘラ削り。残存最下位はナデ。	
第727図	19	須恵器 盤	南部・20、西部 +15 口縁部一底部片	口	27.8		白色鉱物粒/還元 焼/灰	脚台部が付くと考えられる。形影は歪んでいる。組作り後、ロクロ整形(右回転)。受け部は回転ヘラ削り。中心よりはナデに近い。内面はナデ。	内面摩耗。
第727図	20	須恵器 盤	南部・19、20住 口縁部片	口	31.3		白色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(右回転)。外面は下位に回転ヘラ削りが見られる。	内面自然釉付着。
第737図	21	須恵器 甕	西部・18、覆土 口縁部片	口	27.6		粗砂粒・白色・黒色 鉱物粒/還元焼/灰 白	組作り後、ロクロ整形。	
第737図	22	須恵器 甕	覆土 口縁部1/3	口	7.2		粗砂粒・白色鉱物 粒/還元焼/灰少	ロクロ整形(右回転)。中に弱い段をなす。	
第737図	23	須恵器 小型壺	北部・18 割部上半片				黒色鉱物粒少/還 元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。残存外面下位はヘラ削り。	
第737図	24	須恵器 甕	西部・17、覆土、 20住 口縁部片				白色鉱物粒少/還 元焼/灰	胴部に2本の沈線めぐらし、その区画内に9本1単位のクシ状工具による刺突文を連続して配している。その上下にはホキ目が見られる。割部下位には回転ヘラ削り。	
第737図 PL.35	25	礫石 磨石	西部・13 完形	長	13.5	厚 3.5 幅 6.2	粗粒輝石安山岩	胴部に2本の沈線めぐらし、その区画内に9本1単位のクシ状工具による刺突文を連続して配している。その上下にはホキ目が見られる。割部下位には回転ヘラ削り。 小口部両端が磨打されるほか、上側部には磨打された際の 磨痕が観察される。	扁平磨石
第737図 PL.35	26	鉄製品 鍔具	覆土 完形	長	7.7	厚 1.5 重 57.47		丁字状の刺金をもつ鍔具。輪金は逆丁字状で下部に棒状の金具がつく。劣化が著しく錆化・癒合し詳細形状は不明。	
第737図 PL.35	27	鉄製品 刀子	覆土 至灰・刃先欠	長	7.0	厚 0.8 幅 1.2		某灰および刃先欠く刀子でいずれも劣化後破損である。鍔・羽ともに関を持ち片面にはほきが遺存する。刃先に僅か研ぎ減りと見られるカーブがある。	

2区32号住居出土遺物

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第777図 PL.36	1	土師器 高杯	貯蔵穴内+9 完形	口	16.8	高 13.7	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/ぶい 橙	ラッパ状を呈する。胴部は裾部が水平方向に大きく外反する。杯部は斜位への削り、内面はハゲ目の上に放射状にヘラ磨きを施す。胴部は斜位に縦位のヘラ削り、下位には横ナデ。内面は上位に絞りの痕がヘラ削り、下位はヘラ削りが行われている。	外面全てと杯部内面に炭素吸着。
第777図 PL.36	2	土師器 高杯	貯蔵穴北+2・4・6 口縁一部欠	口	15.3	高 13.7	粗砂粒/良好/明赤 褐	杯部口縁部は幅広く横ナデ。以下は斜横位のハゲ目とナデ状のヘラ削り。胴部の柱部は縦位のヘラ磨き。裾部は横ナデ。内面の杯部は上位から横ナデ、横位のハゲ目、ヘラナデ。胴部は上半部が絞りの目、下半部が横ナデ。	
第777図 PL.36	3	土師器 高杯	貯蔵穴北+4 杯部のみ	口	16.7		粗砂粒/良好/橙	外面ナデ後、縦位にヘラ磨き。胴部よりの変換点より下位にも施されるのが磨滅のため斜位不明。内面は放射状にヘラ磨き。	器面摩滅。
第777図 PL.36	4	土師器 高杯	貯蔵穴北+4・4・4 杯部のみ・口縁 一部欠	口	18.2		粗砂粒/良好/ぶい 黄褐	外面は丁寧なナデの上に斜位のヘラ磨き。下半には一部ヘラ削り。内面は不定方向にヘラ磨き。	器面炭素吸着。
第777図	5	土師器 高杯	貯蔵穴東+4 杯部片	口	15.8		粗砂粒/良好/明赤 褐	外面は縦位にハゲ目を施した後、口縁部に幅広く横ナデを施すが、ハゲ目を消し残している。内面は縦位にハゲ目を充填する。	
第777図	6	土師器 高杯	貯蔵穴内+5 杯部1/4	口	12.0		粗砂粒/良好/明黄 褐	口縁部は横ナデ後、下位に斜横位のヘラ削り。底部もヘラ削り。杯部内面は横ナデ、ハゲ目後、斜位に粗磨なヘラ磨き。	
第777図 PL.36	7	土師器 高杯	貯蔵穴内+10、 北+2 脚部のみ・裾部 一部欠	底	12.0		粗砂粒/良好/ぶい 褐	杯部外面は縦位のハゲ目を消しヘラナデ。一部は横ナデの上に縦位のヘラ磨き。内面は横位のハゲ目。下部その上に指ナデ。裾部は横ナデ。	

第21表 出土遺物観察表(11)

2区32号住居出土遺物		計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等		成形・整形の特徴		備考		
種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値		胎 土 / 焼 成 / 色 調 石 材 ・ 素 材 等		成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第777図	8	土師器 高杯	南東壁際+5 脚部	底	9.0			粗砂粒・赤黒色粘土 粒/良好/明赤褐色	外面柱部はハケ目の上にヘラナデ。頸部は横ナデの上に磨き状のヘラナデ。内面は柱部がヘラナデ。頸部は横ナデ。	
第777図	9	土師器 高杯	貯蔵穴内 +5・6-15+21 脚部	底	10.6			粗砂粒・白色鉱物 粒/良好/明赤褐色	外面上位の柱部から頸部にかけて、ハケ目の上にヘラナデを重ねている。一部ハケ目を消しきれていない。内面の柱部には横位のヘラナデ。頸部は横ナデ。	
第777図	10	土師器 高杯	貯蔵穴内+27、 覆土 脚部3/4	底	11.7			粗砂粒/良好/橙	柱部は縦位のナデ。一部にハケ目を残す。頸部は横ナデ。内面は粗雑なハケ目の上にナデ。頸部は横ナデ。	
第777図 PL.36	11	土師器 小型壺	貯蔵穴内+8 口縁部一部欠	底	7.1	高	14.3	粗砂粒/良好/橙	丸底の底部の成形は粗雑。口縁部はハケ目を消して横ナデ。頸部直下は横ナデ。胴部上半は丁寧なナデ。下半は横位のヘラナデ。内面は口縁部は横ナデ。胴部は横位のナデと考えられる。下位はハケ目の上にナデを重ねていると考えられる。	被熱か。
第777図 PL.36	12	土師器 小型壺	貯蔵穴南床面 1/2	口	11.1			粗砂粒/良好/赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は頸部直下ハケ目、ナデの部分を残す。以下は上半部が横位のヘラナデ。内面は口縁部のヘラナデ。内面は頸部直下に指頭を削る。以下は横位のヘラナデ。	
第777図 PL.36	13	土師器 壺	貯蔵穴北+4・+6 口縁部一部欠	口	10.5	高	10.1	粗砂粒/良好/橙	口縁部先端は横ナデ。以下は斜縦位のハケ目。胴部は頸部直下ハケ目、それ以下は横位のヘラナデ。内面は口縁部先端が横ナデ。中位以下は横位のハケ目。胴部は横位のナデ。	器面炭素吸着。
第777図 PL.36	14	土師器 小型台付甕	貯蔵穴北+4 口縁部一部欠・脚部 欠	口	8.6			粗砂粒/良好/にぶ い赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は頸部直下ハケ目、以下は丁寧なナデ。単位を区分することは困難。この上に一部へら磨き。内面は上位〜中位に横位のハケ目。下位に横位のナデ。	
第777図 PL.36	15	土師器 台付甕	貯蔵穴内+5・6 完形	口	12.2	高	22.5	粗砂粒・白色軽石 粒/良好/赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部は最上位が横位、胴部は斜縦位。中位は横位。下位は斜縦位・縦位と細かく方向を変えてヘラナデ。台部は斜縦位のヘラナデ。内面は胴部が斜縦位のヘラナデ。胴台部は縦位のヘラナデ・ヘラナデ。	外面やや炭素吸着。
第777図 PL.36	16	土師器 台付甕	貯蔵穴北+2・6 口縁部〜脚部 1/2	口	12.2	高	30.1	粗砂粒/良好/にぶ い黄褐色	器高に比して胴の細い、全体のバランスを欠いた形状を呈する。胴部下位と台部上部の接合が粗雑で器面が見えている。口縁部は横ナデ。胴部は縦位のナデに近いヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。台部外面はナデ。内面はヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第777図 PL.36	17	土師器 台付甕	貯蔵穴内+27、 南1 胴下部〜脚部	底	9.4			粗砂粒・細砂粒多 良好/橙	胴部は縦位にハケ目(7・1 cm)。一部にナデ部分を残す。内面は横位のナデ。一部ハケ目。胴台部は縦位のハケ目。内面は横位のハケ目。下端はナデ。	
第787図 PL.36	18	土師器 台付甕	貯蔵穴北+2・3 胴部下半〜台部	底	11.8			粗砂粒/良好/明赤 褐色	胴部は縦位のハケ目(8〜10・1 cm)。整形は粗雑で、ナデの地肌を残す。台部上半部に縦位のハケ目。胴部と脚部の内面は横位のハケ目。	
第787図 PL.36	19	土師器 甕	貯蔵穴内+4+13、 北1+2・7 口縁部〜胴部上 位3/4	口	17.0			粗砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部はハケ目を消して横ナデ。頸部はハケ目を残す。胴部は強いタッチのヘラナデ。内面は横位のヘラナデとヘラナデ。	外面の一部に炭素吸着。黒平。
第787図 PL.37	20	土師器 甕	貯蔵穴北+2 口縁部〜胴部 中位	口	12.4			粗砂粒/良好/にぶ い黄褐色	軽量。口縁部は横ナデ。胴部は頸部直下が斜縦位。それ以下は斜縦位のヘラナデ。内面は斜縦位のナデ。胴部直下は指ナデ。	器面炭素吸着。
第787図 PL.37	21	土師器 甕	貯蔵穴北+10 口縁部〜肩部片	口	15.0			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面、頸部直下には強いタッチのハケ目。以下はナデに近いヘラナデ。内面は横位のハケ目。	
第787図 PL.37	22	礫石器 磨石	貯蔵穴南+1 完形	長	12.3	厚	3.7	粗粒輝石安山岩	両側縁にノミ状ノミ工具より縦位整形されるほか、小口部の両端に著しい磨打痕が残る。	扁平棒状礫
第787図 PL.37	23	礫石器 磨石	南東壁付近+7 完形	長	13.4	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	小口部両端が磨打されている。上端側には磨打された際、衝撃割離痕が生じている。	柱状礫
2区1号独立柱建物出土遺物										
種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値		胎 土 / 焼 成 / 色 調 石 材 ・ 素 材 等		成形・整形の特徴		備考
第818図	1	土師器 甕	P 2 個方 口縁部〜頸部 1/4	口	22.6			粗砂粒・赤黒色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。外面に歯状の工具痕。胴部は横位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩滅。
第818図	2	須恵器 甕	P 3 個方 胴部片					白色鉱物粒/還元 焼/灰白	磨作り後、叩き整形。外面は平行叩き目。内面は同心円文の当て具痕。	天地左右不明。
第818図	3	須恵器 甕	P 1 個方 胴部片					黒色鉱物粒少/還元 焼/灰白	磨作り後、叩き整形。外面は疑似格子目状の叩き目。内面は同心円文の当て具痕。	
2区2号独立柱建物出土遺物										
種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値		胎 土 / 焼 成 / 色 調 石 材 ・ 素 材 等		成形・整形の特徴		備考
第838図	1	土師器 杯	P 3 破片	口	11.2			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラナデと考えられ、間にナデの部分を残す。内面はナデ。	
第838図	2	須恵器 蓋	P 3 口縁部片	口	16.6			白色鉱物粒/還元 焼/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	被熱か。
2区1号柱穴列出土遺物										
種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値		胎 土 / 焼 成 / 色 調 石 材 ・ 素 材 等		成形・整形の特徴		備考
第888図	1	須恵器 蓋	P 3 胴部〜体部中位 1/2			幅	5.6	白色鉱物粒・黒色 鉱物粒少/還元焼/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、円板状の胴部を磨打。天井部中心寄りに回転ヘラナデ。	内面摩耗。



遺物観察表

第22表 出土遺物観察表(12)

1区2号ビット出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第908B	1	須臾器 蓋	埋土 1/4	口12.4 高3.6 幅2.8		白色・黒色鉱物粒/還元焼/灰 口口整形(右回転)。天井部切り離し後、宝珠形の輪を貼付。天井部中心溝りに回転ヘラ削り。	胴部摩耗。

2区10号ビット出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第908C	1	土師器 杯	埋土 破片	口12.2		粗砂粒/良好/橙 口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。間にはナデの部分を残すと考えられる。内面はナデ。	

2区23号土坑出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第948C	1	土師器 杯	埋土 3/4	口14.1 高3.7		粗砂粒/良好/にぶい 口縁部、底部との間に稜を有する。中位にも段を持つ。横ナデ。底部はヘラ削り後へう磨き。	横外面黒色処理か。

2区1号溝出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第968C	1	土師器 甕	埋土 口縁部~胴部上 部片	口22.6		粗砂粒/良好/にぶい 口縁部は横ナデ。胴部最上位は縦位の、その下位には横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。

2区1号品出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第998C	1	灰釉陶器 皿	覆土 口縁部~高台部 片	口14.2 高2.6 底7.0 台6.8		黒色鉱物粒少/還元 焼/灰白 口口整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。口縁部の内外面に施釉。刷毛掛けか。	内面摩耗。 光ヶ丘1号窯式。	
第998C	2	中国白磁 鉢	覆土 口縁部下位~底 部片			黒色鉱物粒/還元 焼/灰白 口口整形。高台部内はヘラ削り。内面白磁釉。外面無釉。	11世紀後半~ 12世紀前半。	
第998C	3	鉄製品 角釘	2区1号品	長4.9 厚0.4 幅0.4 重4.41			断面はほぼ正方形の角釘で胴部側は劣化後破損し形状不明。	

3区1号土器溜まり出土遺物

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1031C	1	須臾器 杯	3区1号土器溜 まり 1/4	口14.5 高5.5 底7.0 台6.7		粗砂粒少/還元 焼/軟灰/灰黄 口口整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付け高台。器面、高台部 端部、摩耗。	
第1031C	2	灰釉陶器 皿	3区1号土器溜 まり 口縁部下位~底 部片	底8.4 台8.0		精選・細砂粒少/還元 焼/灰白 口口整形(左回転)。高台部の断面は三日月形。底部は切り 離し後の付け高台。内面無釉。内面に重むきのお煎跡。	光ヶ丘1号窯 式。

縄文土器

種別 Pl.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1041C	1	縄文土器 深鉢	2区3号住居 胴部片			縄織 口縁部文様に幅広い連続爪形刺突で大型の菱形文様を描く。	有尾式
第1041C	2	縄文土器 深鉢	2区1号住居 胴部片			縄織 胴部に幅様な平行沈線を描らせる。	有尾・黒浜式
第1041C	3	縄文土器 深鉢	1区確認面 胴部片			縄織 胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	有尾・黒浜式
第1041C	4	縄文土器 深鉢	2区4号住居 口縁部片			粗砂 平口縁の口縁直下に突起をもち、口縁下に押し引き沈線を描らせる。柄内等の文様を描く。	阿玉台式
第1041C	5	縄文土器 深鉢	2区32号住居 胴部片			砂粒、雲母 胴部に沈線で縦位波状および指頭圧痕を施す。	阿玉台式
第1041C	6	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 口~胴上1/1/2			砂粒、小礫 内反する波状口縁で、口縁下を幅状無文帯とし、胴部下半に沈線と隆帯で楕円字状等の文様を描き、胴部上半には沈線と隆帯で楕円字状の文様を描く。さらに、文様内にR Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E 3式
第1051C	7	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 口縁部片			砂粒 内反する平口縁で、口縁下を幅状無文帯とし、胴部上半に沈線と隆帯で楕円状の文様を描き、文様内にR Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E 3式
第1051C	8	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 口縁部片			砂粒 小波状口縁で、口縁部文様に沈線と隆帯で渦巻等の文様を描く。	加曾利E 3式
第1051C	9	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 口縁部片			砂粒 内反する波状口縁の波頂部に突起と把手を有し、口縁下の無文帯上下に刺突を施す。胴部上半には沈線で文様を描き、区画内に縄文を施す。	加曾利E 3式
第1051C	10	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 口縁部片			砂粒 摩滅が著しい。内反する平口縁で、口縁部文様に沈線で曲線的な文様を描く。	加曾利E 3式
第1051C	11	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 胴部片			砂粒 胴部に沈線と隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 3式
第1051C	12	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 胴部片			砂粒 胴部上半に沈線と隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 3式
第1051C	13	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 胴部片			粗砂 13~17は同一個体。胴部に沈線と隆帯で曲線的な文様を描き、文様内にR Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E 3式

第23表 出土遺物観察表(13)

縄文土器			計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
種 別 Pl.No.	No.	種 類 器 種					出 土 位 置 残 存 率
第105図 Pl.38	14	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	粗砂	13～17は同一個体。胴部上半に沈線と隆帯で楕円等の曲線的な文様。胴部下半に逆U字状の文様を描き、文様内にR.Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	15	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	粗砂	13～17は同一個体。胴部に沈線と隆帯で曲線的な文様を描く。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	16	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	粗砂	13～17は同一個体。胴部に沈線と隆帯で文様を描き、文様内にR.Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	17	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	砂粒	13～17は同一個体。胴部に沈線と隆帯で文様を描き、文様内にR.Lの縄文を縦位基調に充填する。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	18	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	砂粒	胴部に沈線と曲線的な文様を描き、文様内にR.Lの縄文を施す。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	19	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	砂粒	胴部に沈線と直線的な懸垂文と長楕円の文様を描き、懸垂文の区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第105図 Pl.38	20	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	粗砂	胴部上半に沈線と隆帯で楕円等の曲線的な文様。胴部下半に逆U字状の文様を描き、文様内にR.Lの縄文を縦位に充填する。	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	21	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	砂粒	胴部上半に沈線で長楕円。胴部下半に縦長な逆U字状の文様を描き、文様内にL.Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	22	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	細砂	胴部下半に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にR.Lの縄文を充填する。	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	23	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 製部片	砂粒	胴部に沈線と直線的な懸垂文を描き、懸垂文の区画内にR.Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	24	縄文土器 内耳壺	3区土器溜まり 把手	砂粒	内耳壺の楕状把手部で、把手下に沈線で曲線的な文様を描き、文様内にL.Rの縄文を施す。	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	25	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 底部	砂粒	胴部に沈線と直線的な懸垂文を描き、懸垂文の区画内にR.Lの縄文を縦位に施した平底。底径：7.0cm	加曾利E3式	
第106図 Pl.38	26	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 底部	砂粒	胴部下端が無文となる平底。底径：8.3cm	加曾利E式	
第106図 Pl.38	27	縄文土器 深鉢	3区土器溜まり 底部	砂粒	高台付きの底部。高台径：6.1cm	加曾利E式	
第106図 Pl.38	28	土製品 円盤	2区As-B下 一部欠損	砂粒	製部片を利用した土製円盤で、周囲を研磨する。	縄文中期	
弥生土器							
種 別 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第107図 Pl.38	1	弥生土器 筒形	2区確認面 製部		砂粒	胴部上半に沈線で長方形の楕円文様を縦位に配し、その間にR.Lの縄文を充填し、その下に2条の沈線を横位に巡らせて文様部区画し、胴部下半は無文とする。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	2	弥生土器 筒形	1区3号住居 胴部片		砂粒	胴部に沈線と円形および楕円形の文様を横位に描き、文様間にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	3	弥生土器 筒形	2区23号住居 胴部片		砂粒	胴部に沈線と楕円形の文様を横位に描き、文様間にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	4	弥生土器 筒形	1区As-B下 頸～胴部片		砂粒	胴部に沈線と方形の文様を横位に描く。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	5	弥生土器 筒形	1区2号住居 胴部片		砂粒	胴部に沈線と方形の文様を横位に描き、文様内にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	6	弥生土器 筒形	1区2号住居 胴部片		細砂	頸部から胴部にかけて沈線と方形ないし鉤の手状の文様を描き、文様内にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	7	弥生土器 筒形	2区確認面 頸部片		細砂	頸部に沈線とL字に屈曲する文様を描き、文様内にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	8	弥生土器 壺	1区9号住居 頸部片		細砂	頸部に2条の沈線と横帯区画文様を描き、上下にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	9	弥生土器 壺	1区9号住居 頸部片		細砂	頸部に沈線と三角文を描く。下位に縄文を施す。	弥生中期中葉
第107図 Pl.38	10	弥生土器 壺	1区As-B下 胴部片		砂粒	胴部に5条の太い楕状帯で縦位および横位の波状文を描き、文様間にL.Rの縄文を充填する。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	11	弥生土器 壺	1区2号住居 製部片		細砂、小礫	胴部に数条の細沈線を巡らせて文様部を区画し、胴部下半は無文。	弥生中期中葉 か
第107図 Pl.38	12	弥生土器 甕	2区2号掘立柱 建物P3 製部片		砂粒	外反する平口縁の口唇部に棒状具による刻みを有し、口縁下に2条の沈線と波状文を描き、地文にL.Rの縄文を施す。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	13	弥生土器 甕	2区2号住居 製部片		細砂	外反する平口縁の口唇部に刻みを有し、頸部に数条の細い沈線を施す。	弥生
第107図 Pl.38	14	弥生土器 甕	2区確認面 製部片		細砂	上位に沈線、中位と下位に太めの工具端による刺突列点文を施す。	弥生中期中葉 か
第107図 Pl.38	15	弥生土器 甕	2区21号住居 製部片		細砂	胴部に沈線と木口状工具による刺突列点を横位に施し、L.Rの縄文を施す。	弥生中期中葉 か
第107図 Pl.38	16	弥生土器 甕	2区10号住居 口縁部片		砂粒	平口縁となる口唇部に縄文、口縁以下にL.Rの縄文を施す。	弥生中前期半 ～中葉
第107図 Pl.38	17	弥生土器 深鉢	2区1号掘立柱 建物P1 口縁部片		細砂	僅かに内湾ぎみの平口縁で、口縁以下にL.Rの縄文を施す。	弥生中前期半 ～中葉

遺物観察表

第24表 出土遺物観察表(14)

弥生土器									
種 図 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴		備 考
第10709 Pl.38	18	弥生土器 甕	2区4号住居 胴部片			砂粒	胴部に沈線でコの字重文を描き、中心に刺突をもつ円形 貼付文を配する。地に縄文を施す。内面ナデ。		弥生中期後半
第10709 Pl.38	19	弥生土器 甕	2区2号住居 口縁部片			砂粒	折り返し口縁の口縁部および頸部に縞線状文を施し てを施す。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	20	弥生土器 甕	1区As-8下 口縁部片			砂粒	口縁部に縞線状文を施す。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	21	弥生土器 甕	2区8号住居 胴部片			砂粒	頸部に縞線状文を施す。肩に若狭しき縞線文が みえる。内面ナデ。施文は7箇、1.3cm。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	22	弥生土器 甕	1区As-8下 胴部片			砂粒	頸部に縞線状文、胴部に縞線状文1帯を施す。内面ミ ガキ。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	23	弥生土器 甕	2区30号住居 胴部片			砂粒	胴部に縞線状文を重畳して施す。内面ミガキ。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	24	弥生土器 甕	2区1号掘立柱 建物P 8 胴部片			砂粒	胴部に乱れた縞線状文を施す。内面ミガキ。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	25	弥生土器 甕	1区 胴部片			砂粒	胴部上半に縞線状文を施す。内面ミガキ。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	26	弥生土器 甕	2区1号掘立柱 建物 胴部片			砂粒	胴部上半に爪形刺突と縞線状文を施す。内面ナデ。		弥生後期、東 関東系か。
第10709 Pl.38	27	弥生土器 甕	1区7号住居 胴部片			砂粒	胴部上半に縞線状文を施す。下半はナデ。内面ミガキ。		弥生後期樽式
第10709 Pl.38	28	弥生土器 甕	2区2号土坑 胴部片			砂粒	胴部表面は赤彩後ミガキ。内面は木口工具によるハケメ、		弥生中期中葉 ～後期
第10709 Pl.38	29	弥生土器 浅鉢	1区2号住居 底部			砂粒	内外面ナデ。底径：4.3cm		弥生

縄文・弥生時代の石器・石製品

種 図 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴		備 考	
第10809 Pl.38	1	剥片石器 石鏃	1区確認面 略完形	長 幅	2.7 (1.5)	0.5 1.3	チャート	完成状態？右辺縁は石材内に内包した層によるもので、 破損後に再加工されているようにみえる。返し部の破損は鋼 線の破損後。		凹基無茎鏃
第10809 Pl.38	2	剥片石器 石鏃	2区14号住居 完形	長 幅	1.6 1.7	0.3 0.4	黒曜石	完成状態。表面とも加工は丁寧だが、周辺加工して形状 を整えている。		凹基無茎鏃
第10809 Pl.38	3	剥片石器 石鏃	2区4号住居 1/2	長 幅	(2.1) (0.9)	0.3 0.5	黒曜石	完成状態？器体先端・中央から破損する。破損理由は不明。		凹基無茎鏃
第10809 Pl.38	4	剥片石器 石鏃	2区6号住居 完形	長 幅	2.1 1.2	0.4 0.7	黒曜石	完成状態。表面とも加工は丁寧で、押圧跡が全面を覆 う。		凹基有茎鏃
第10809 Pl.38	5	剥片石器 石鏃	2区26号住居 完形	長 幅	18.6 11.4	厚 重 2.5 525.6	粗粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗あり。側縁は直線的に「ハ」字状に開く。 節理面で割れた大形板状剥片を用いているが、節理面には 鉄分が付着。表裏面とも摩耗面が顕に広がる。この摩耗 面は石鏃の使用に伴い生じたものと思われる。		
第10809 Pl.38	6	剥片石器 打製石斧	2区1号高 上半部欠損	長 幅	(7.0) (5.2)	厚 重 1.3 53.3	黒色頁岩	完成状態。幅広い剥片を楕円に用い、側縁を加工作す。刃部は 斜対称で、未加工。両側縁とも弱く摩耗する。		短冊形
第10809 Pl.38	7	剥片石器 加工痕ある 剥片	2区26号住居 完形	長 幅	2.3 2.9	厚 重 0.8 4.6	黒色頁岩	小形幅広い剥片を用い、左辺・剥片端部を加工作す。左辺の 加工は繊細で、blunting様を呈する。機能部は剥片端部に あり、強く摩耗する。		
第10809 Pl.39	8	礫石器 凹石	2区21号住居 略完形	長 幅	12.9 (0.0)	厚 重 3.3 616.9	粗粒輝石安山岩	背面側に漏斗状の孔2を穿つ。裏面側・両側縁に敲打痕が ある。左辺は節理で破損する。		扁平楕円鏃
第10809 Pl.39	9	礫石器 磨石	2区21号住居 完形	長 幅	12.7 11.3	厚 重 6.7 1427.7	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗するほか、背面側中央付近に敲打痕が残る。		楕円鏃
第10809 Pl.39	10	礫石器 磨石	2区1号掘立柱 建物P 6 完形	長 幅	10.9 9.9	厚 重 5.5 856.7	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗するほか、背面側中央付近・側縁に敲打痕 が残る。被熱して輝ける。		扁平楕円鏃
第10809 Pl.39	11	礫石器 磨石	3区確認面 完形	長 幅	7.3 7.0	厚 重 4.9 348.1	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗するほか、側縁に強い敲打痕が残る。		楕円鏃

遺構外出土の遺物

種 図 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴		備 考	
第10909 Pl.39	1	須臾器 蓋	2区 破片	口	14.1		黒色鉱物粒/還元 焼/オリーブ灰	ロクロ整形(右回転)。天井部中心寄りに回転ヘラ削り。 外面に自然釉、黒外産か。		
第10909 Pl.39	2	須臾器 杯	試験用トンチ 3/4	口 底	10.6 6.6	高 4.0	白色鉱物粒少/還 元焼/灰	ロクロ整形。底部は回転ヘラ削り後、ヘラナデ。口縁部 内面に自然釉 付着。		
第10909 Pl.39	3	須臾器 甕	1区確認面 口縁部～胴部片				粗砂粒・白色鉱物 粒/還元焼/黄灰	紐作り後、ロクロ整形。明き整形。胴部はカキ目上に横 位のヘラナデ。一部に平行叩き目を重ねている。		
第10909 Pl.39	4	石製品 火打石	1区確認面 2/3	長 幅	2.8 2.1	厚 重 1.4 9.0	石英	剥片のエッジが著しく敲打されている。裏面側に礫面を残 す。		小形剥片
第10909 Pl.39	5	石製品 石臼(下)	3区表採 1/4	径 高	(9.0) 15.1	重 6700.0	粗粒輝石安山岩	八分画？すり合わせ部は摩耗、よく使い込まれている。		

# 写真図版





1 調査区と北側の地形(南東から)



2 1・2区全景(上空から・上が北東)



1 1・2区全景(南東から)



2 1区1号住居全景(南東から)



3 1区1号住居掘方全景(南東から)



1 1区1号住居全景(北東から)



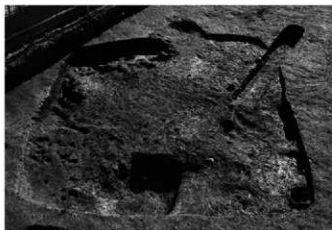
2 1区2号住居全景(南東から)



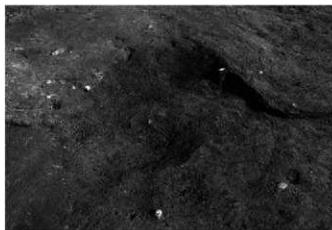
3 1区2号住居遺物№3 出土状態(南東から)



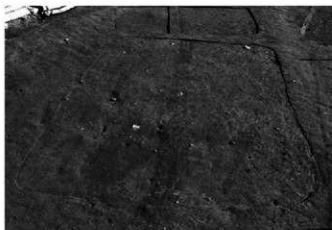
4 1区3号住居全景(北西から)



5 1区3号住居掘方全景(北西から)



6 1区3号住居竈全景(北西から)



7 1区4号住居全景(北西から)



8 1区4号住居掘方全景(北西から)





1 1区5号住居全景(北西から)



2 1区5号住居遺物No.4出土状態(北から)



3 1区6号住居全景(西から)



4 1区6号住居掘方全景(西から)



5 1区7号住居全景(北西から)



6 1区7号住居掘方全景(北西から)



7 1区8号住居全景(西から)



8 1区8号住居掘方全景(西から)



1 1区9号住居全景(西から)



2 1区9号住居掘方全景(西から)



3 1区9号住居焼土(東から)



4 1区10号住居全景(西から)



5 1区10号住居掘方全景(西から)



6 1区10号住居遺物№3出土状態(南から)



7 2区1号住居全景(北西から)



8 2区1号住居遺物出土状態(東から)



1 2区2号住居掘方全景(北西から)



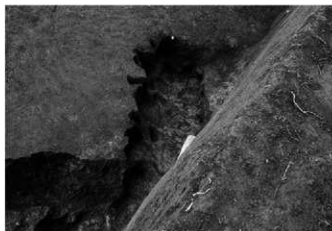
2 2区2号住居竈検出状態(南東から)



3 2区2号住居竈全景(南西から)



4 2区2号住居遺物№2・3出土状態(南東から)



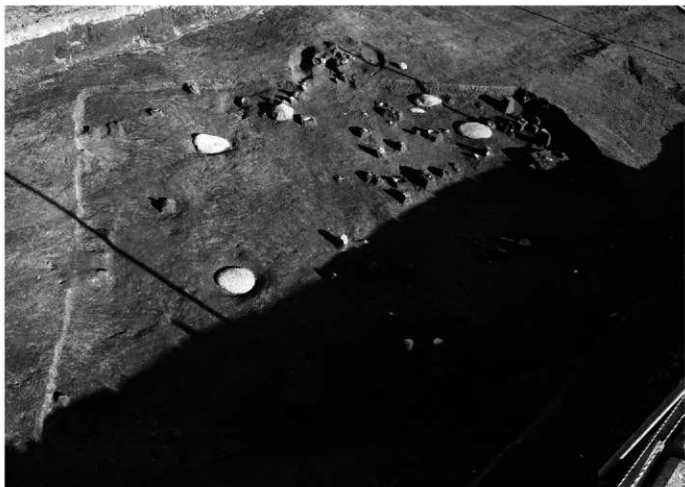
5 2区2号住居竈掘方全景(北西から)



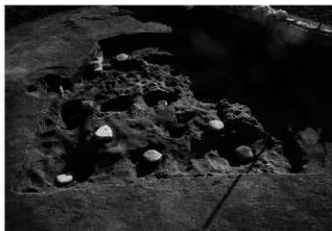
6 2区3号住居全景(東から)



7 2区3号住居掘方全景(南東から)



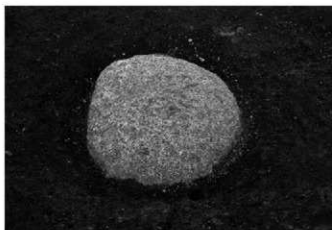
1 2区4号住居全景(西から)



2 2区4号住居掘方全景(北から)



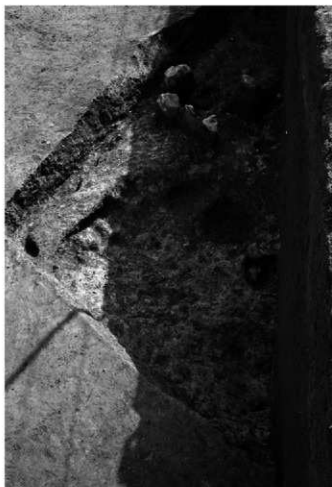
3 2区4号住居竈全景(西から)



4 2区4号住居礎石3(南から)



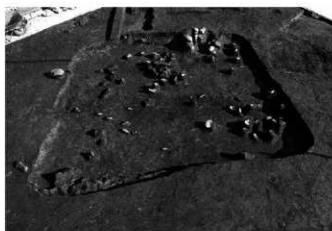
5 2区4号住居礎石4(南から)



1 2区6号住居掘方全景(北西から)



2 2区6号住居掘方全景(西から)



3 2区7号住居全景(北西から)



4 2区7号住居掘方全景(北西から)



5 2区7号住居掘方全景(北西から)



6 2区8号住居全景(北西から)



7 2区9号住居全景(北西から)



1 2区10号住居全景(北西から)



2 2区10号住居掘方全景(北西から)



3 2区10号住居掘方全景(北西から)



4 2区11号住居全景(北西から)



5 2区11号住居掘方全景(南西から)



6 2区12号住居全景(北西から)



7 2区12号住居掘方全景(北西から)



8 2区13号住居掘方全景(南西から)



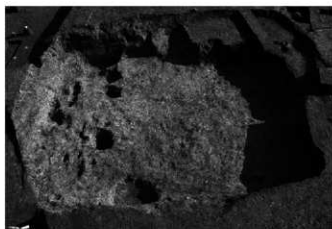
1 2区14号住居掘方全景(北西から)



2 2区14号住居竈掘方全景(北西から)



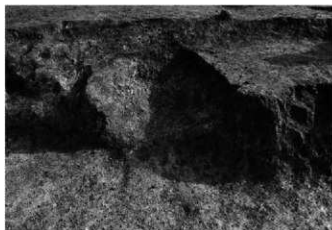
3 2区15号住居全景(西から)



4 2区15号住居掘方全景(西から)



5 2区15号住居竈全景(西から)



6 2区15号住居竈掘方全景(西から)



7 2区16号住居遺物出土状態(西から)



8 2区16号住居竈全景(西から)



1 2区16号住居全景(西から)



2 2区16号住居竈掘方全景(西から)



3 2区16号住居遺物No.2出土状態(北から)



4 2区16号住居遺物No.14出土状態(西から)



5 2区16号住居礎石1(北西から)





1 2区16号住居礎石2(東から)



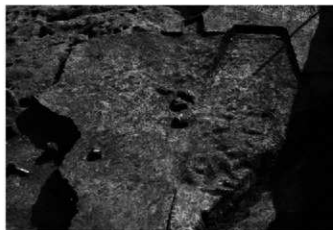
2 2区16号住居礎石3(南東から)



3 2区16号住居礎石4(東から)



4 2区16号住居礎石5(南東から)



5 2区17号住居全景(北西から)



6 2区18号住居全景(北西から)



7 2区18号住居礎全景(北西から)



8 2区20号住居全景(北西から)



1 2区20号住居跡全景(北西から)



2 2区21号住居掘方全景(西から)



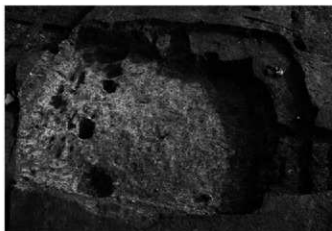
3 2区21号住居全景(西から)



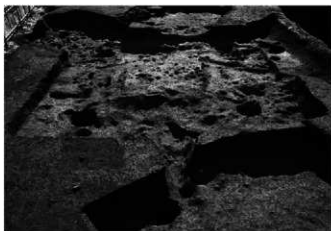
4 2区21号住居跡全景(西から)



5 2区21号住居掘方全景(西から)



1 2区22号住居全景(西から)



2 2区23号住居掘方全景(北西から)



3 2区23号住居全景(南東から)



4 2区23号住居竈全景(南東から)



5 2区23号住居竈掘方全景(南東から)



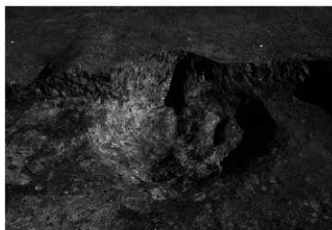
1 2区24号住居全景(西から)



2 2区24号住居掘方全景(西から)



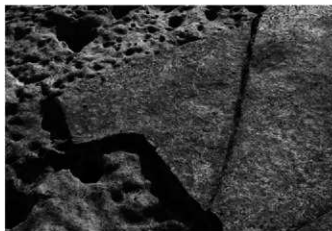
3 2区24号住居竪断全景(西から)



4 2区24号住居電掘方全景(西から)



5 2区26号住居全景(北西から)



6 2区30号住居全景(北西から)



7 2区32号住居全景(北西から)



8 2区32号住居掘方全景(北西から)



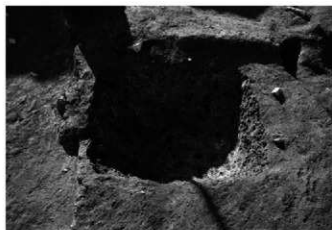
1 2区32号住居貯蔵穴遺物出土状態(北東から)



2 2区32号住居貯蔵穴遺物出土状態(南西から)



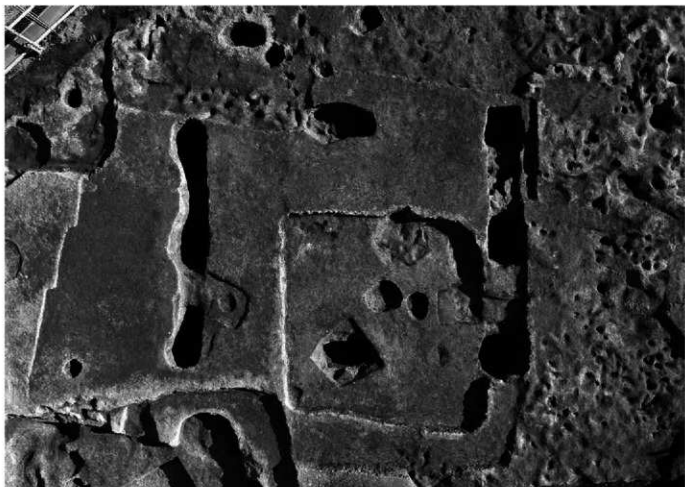
3 2区32号住居貯蔵穴遺物№11・15出土状態(東から)



4 2区32号住居貯蔵穴全景(北東から)



5 2区32号住居貯蔵穴全景(北西から)



1 2区1号掘立柱建物全景(上空から・上が東)



2 2区1号掘立柱建物全景(西から)



1 2区1号掘立柱建物全景(東から)



2 2区1号掘立柱建物P 1～3全景(西から)



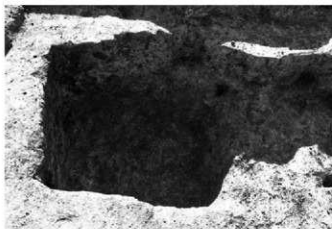
3 2区1号掘立柱建物P 5～7全景(東から)



1 2区1号掘立柱建物P 1全景(北から)



2 2区1号掘立柱建物P 2全景(北から)



3 2区1号掘立柱建物P 3全景(北から)



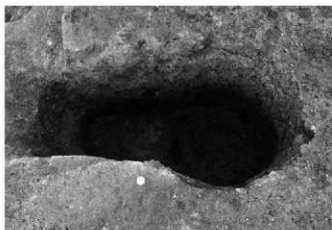
4 2区1号掘立柱建物P 4全景(西から)



5 2区1号掘立柱建物P 5全景(北から)



6 2区1号掘立柱建物P 6全景(北から)

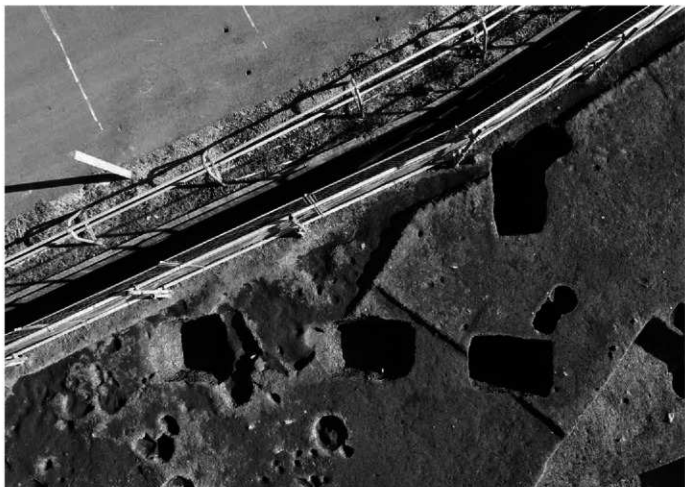


7 2区1号掘立柱建物P 7全景(北から)



8 2区1号掘立柱建物P 8全景(西から)





1 2区2号掘立柱建物全景(上空から・上が東)



2 2区2号掘立柱建物全景(南から)



1 2区2号掘立柱建物全景(西から)



2 2区2号掘立柱建物P 1全景(南から)



3 2区2号掘立柱建物P 2全景(南西から)



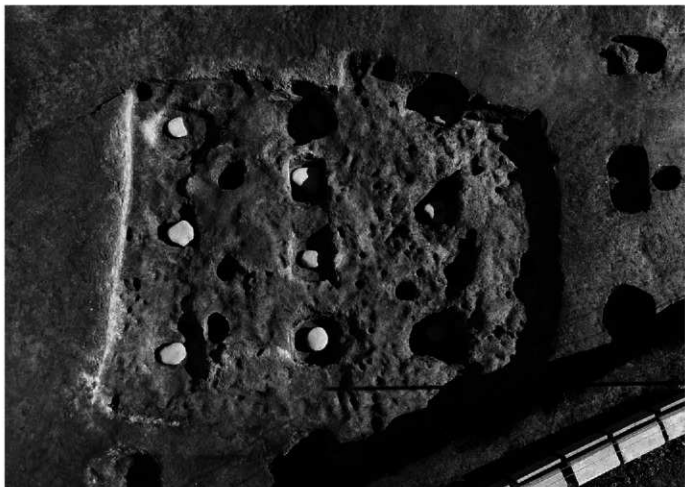
4 2区2号掘立柱建物P 3全景(東から)



5 2区2号掘立柱建物P 4全景(西から)



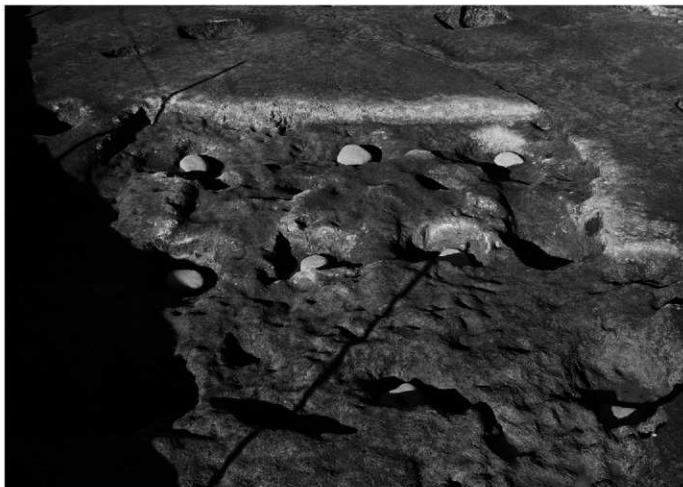
1 2区3・4号掘立柱建物、1号柱穴列全景(上空から・上が北)



2 2区3号掘立柱建物全景(上空から・上が東)



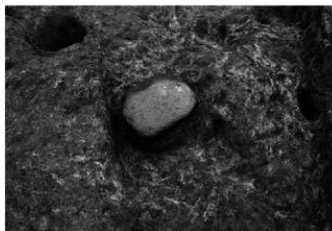
1 2区3号掘立柱建物全景(東から)



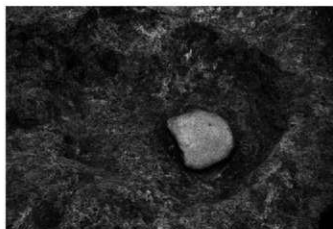
2 2区3号掘立柱建物全景(南から)



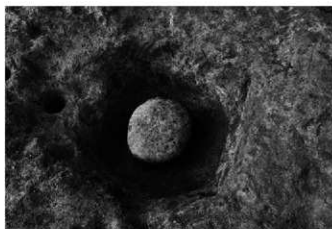
1 2区3号掘立柱建物P 1全景(東から)



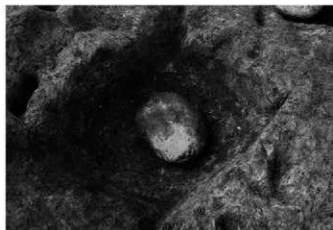
2 2区3号掘立柱建物P 2全景(東から)



3 2区3号掘立柱建物P 3全景(東から)



4 2区3号掘立柱建物P 4全景(北東から)



5 2区3号掘立柱建物P 5全景(北東から)



6 2区3号掘立柱建物P 6全景(東から)



7 2区3号掘立柱建物P 7全景(東から)



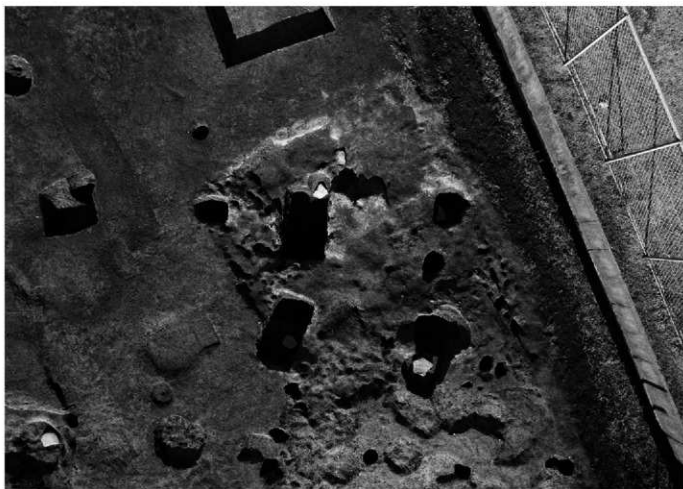
8 2区3号掘立柱建物P 8全景(東から)



1 2区3号掘立柱建物P.9全景(東から)



2 2区3号掘立柱建物P.10全景(北から)



3 2区4号掘立柱建物全景(上空から・上が北)



4 2区4号掘立柱建物P.1、13号土坑全景(南から)



5 2区4号掘立柱建物P.2、14号土坑全景(東から)



1 2区4号掘立柱建物全景(西から)



2 2区4号掘立柱建物P3全景(東から)



3 2区4号掘立柱建物P4、22号土坑全景(南から)



4 2区1号柱穴列P1全景(南から)



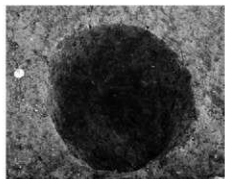
5 2区1号柱穴列P2全景(南から)



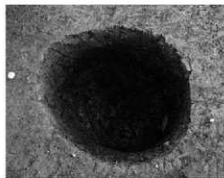
1 2区1号柱穴列P3全景(南から)



2 2区1号柱穴列P5全景(西から)



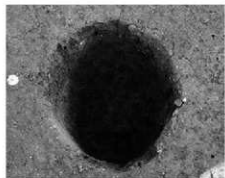
3 1区1号ビット全景(南東から)



4 1区2号ビット全景(南東から)



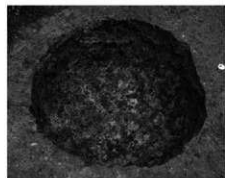
5 1区3号ビット全景(南から)



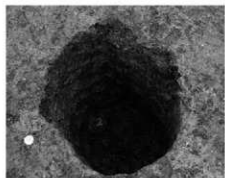
6 1区4号ビット全景(南東から)



7 1区6号ビット全景(南から)



8 1区10号ビット全景(西から)



9 1区11号ビット全景(南東から)



10 1区14号ビット全景(南東から)



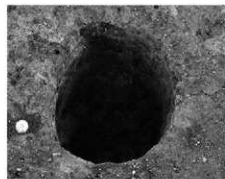
11 2区1号ビット全景(南から)



12 2区2号ビット全景(南から)



13 2区6号ビット全景(東から)

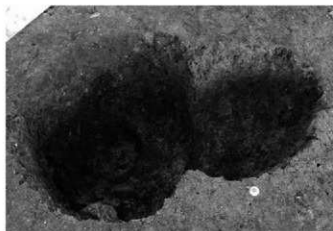


14 2区9号ビット全景(南から)

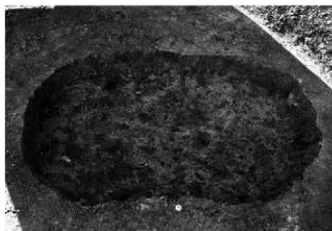


15 2区26号ビット全景(南から)





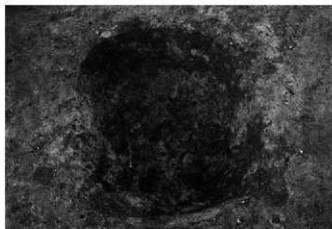
1 2区12・13号ピット全景(南東から)



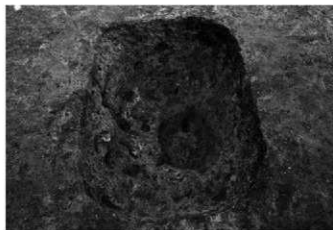
2 1区1号土坑全景(北東から)



3 1区3号土坑全景(南から)



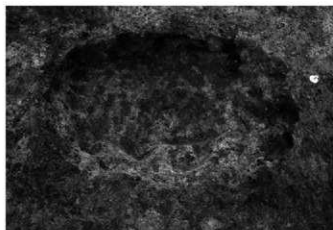
4 2区1号土坑全景(南から)



5 2区2号土坑全景(南から)



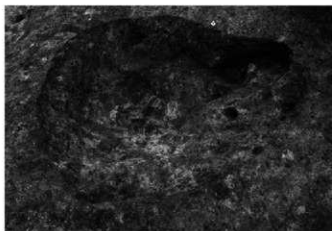
6 2区3号土坑全景(南から)



7 2区5号土坑全景(南東から)



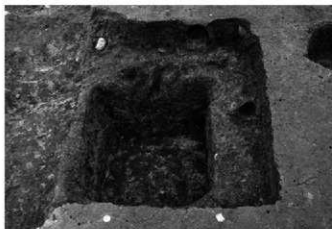
8 2区6号土坑全景(南東から)



1 2区7号土坑全景(北から)



2 2区8号土坑全景(南東から)



3 2区23号土坑全景(北東から)



4 2区1号隔し穴全景(北東から)



5 1区1号溝全景(西から)



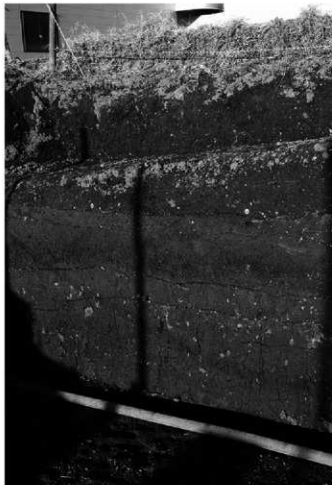
6 2区1号溝全景(南から)



7 2区1号溝全景(北から)



8 1区1号石列全景(南西から)



1 基本土層(3区北東部・南から)



2 旧石器2号調査坑全景(東から)



3 旧石器1号調査坑北の深掘り断面(北から)

1区1号住居



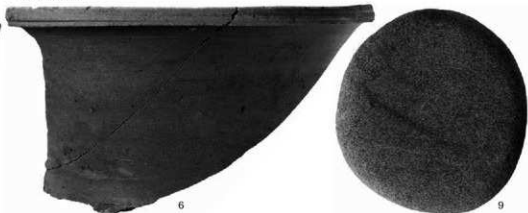
1区2号住居



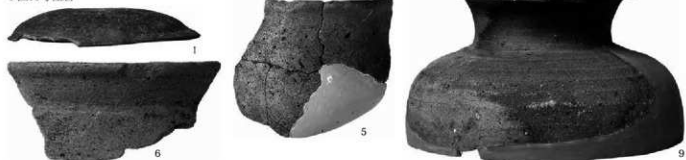
1区5号住居



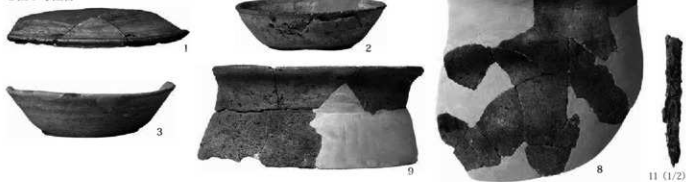
1区9号住居



1区10号住居



2区1号住居



2区2号住居

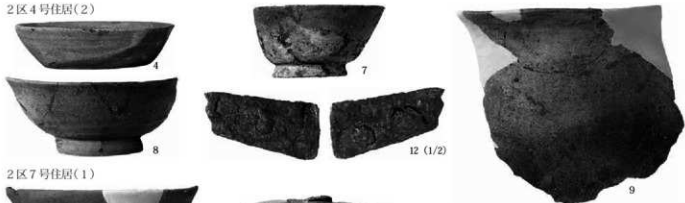


2区4号住居(1)

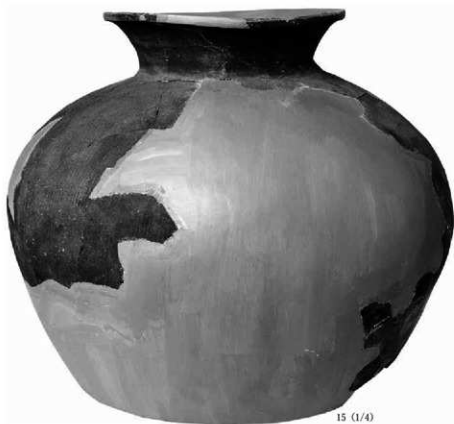


PL.32

2区4号住居(2)



2区7号住居(1)



2区7号住居(2)



16 (1/4)

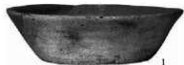


19



20 (1/2)

2区9号住居



1

2区13号住居



1

2区14号住居



3 (1/2)

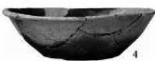
2区15号住居



2



3



4



12



17



18 (1/2)



19 (1/2)



20



21

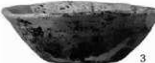
2区16号住居(1)



1



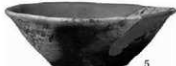
2



3



4



5



6



7



8



14



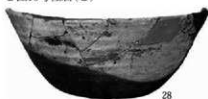
15



27

# PL.34

2区16号住居(2)



28



30



32



33



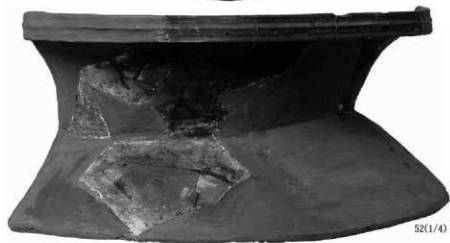
38



47



51



52(1/4)



53(1/4)



54



55



56

2区18号住居



1



2



5



7

2区20号住居



2



3



8

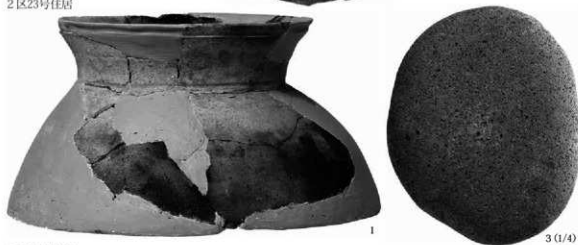
2区21号住居



2区22号住居



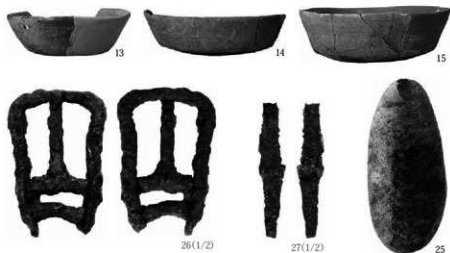
2区23号住居



2区24号住居



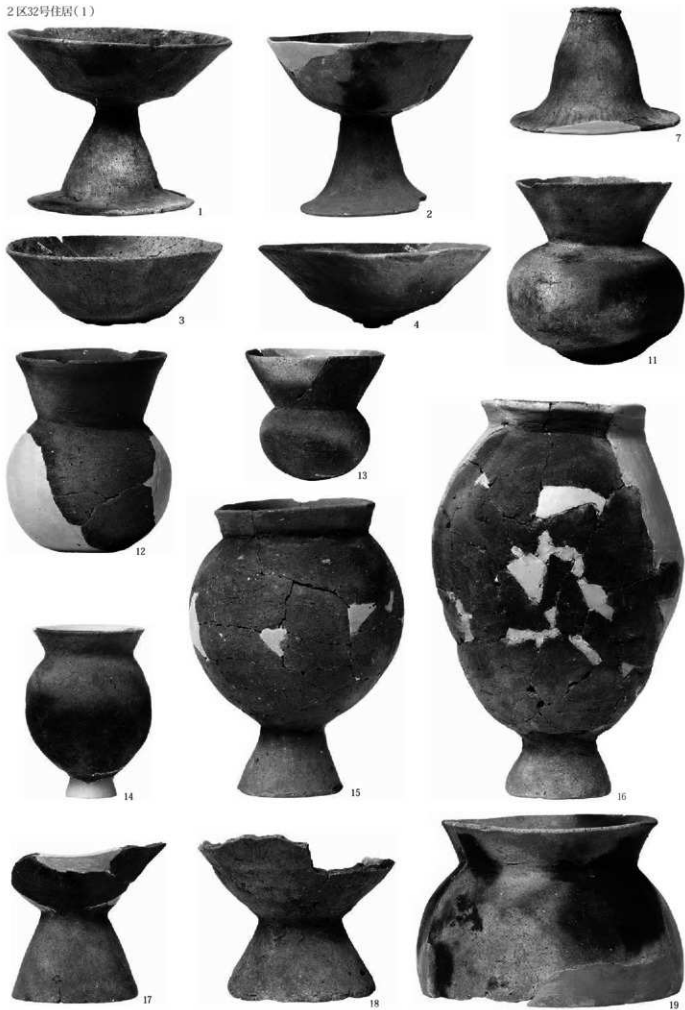
2区26号住居





PL.36

2区32号住居(1)



2区32号住居(2)

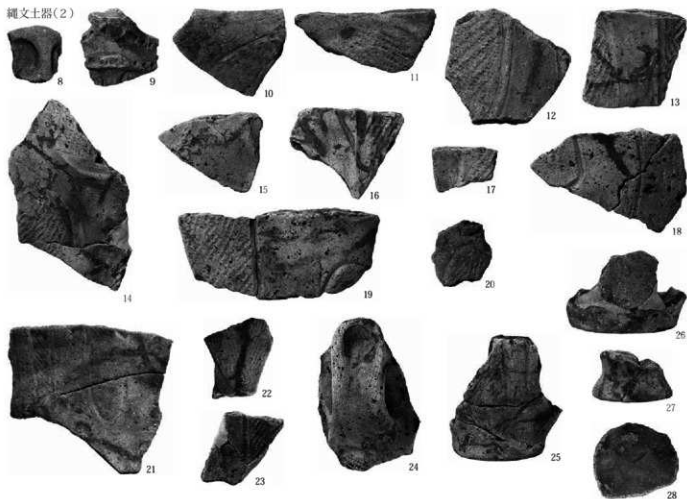


縄文土器(1)

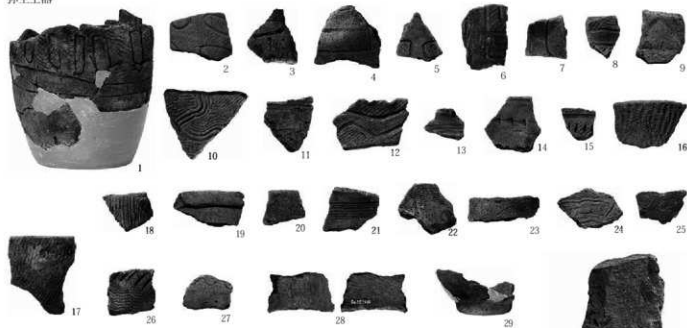


# PL.38

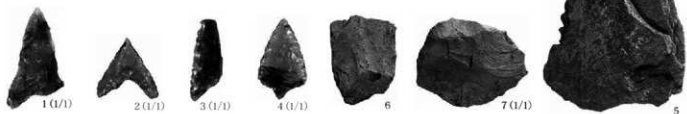
## 縄文土器(2)



## 弥生土器



## 縄文時代・弥生時代の石器・石製品(1)



## 縄文時代・弥生時代の石器・石製品(2)



8



9



10



11

## 遺構外出土の遺物



2



4 (1/1)



5 (1/4)

## 抄 録

書名ふりがな	しもごうこふんぐん
書名	下郷古墳群
副書名	(郡) 3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	588
編著者名	高井佳弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20140815
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しもごうこふんぐん
遺跡名	下郷古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけけんあがつまぐんひがしあがつままちおおあざかわど
遺跡所在地	群馬県吾妻郡吾妻町大字川戸
市町村コード	10423
遺跡番号	0006
北緯(世界測地系)	363402
東経(世界測地系)	1384941
調査期間	20121101-20121231
調査面積	2180
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	縄文/弥生/古墳/奈良/平安
遺跡概要	包蔵地-縄文+弥生-土器+石器/集落-古墳+奈良+平安-竪穴住居36+掘立柱建物4+柱穴列1+土坑18+溝2+畠1-土器+鉄器
特記事項	古代の柱穴列と掘立柱建物
要約	吾妻川右岸の河岸段丘上にある遺跡である。調査では明確な古墳は見られず、古墳時代～平安時代の竪穴住居と掘立柱建物が見つかった。竪穴住居は濃密に分布し、礎石をもつもの、石組みの竈をもつものなど、構造的に注目されるものがある。掘立柱建物にも礎板石をもつものや間仕切と思われるような柱配置のものなど、構造的に珍しいものがある。大型の建物も1棟あり、南側には厩と思われる柱穴列と、門と思われる建物もあるなど、一般の集落にはふさわしくないものを含んでいる。遺物には中空円面硯など、識字層の存在を窺わせるものもある。これら建物群の性格としては、吾妻郡家や豪族の居宅などが考えられるが、今回は小面積の調査なので断定は難しい。ただし、ほとんどの建物に建て替えの痕跡はなく、存続期間は短い。なお、遺跡の約1キロ東には、7世紀後半創建の金井庵寺があり、関連が注目される。

公益財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第588集

## 下郷古墳群

(郡) 3.4.5原町駅南口線外1線社会資本整備総合交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財調査報告書

---

平成26(2014)年8月 8日 印刷

平成26(2014)年8月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所

---



# 下郷古墳群全体図 (1/200)

